1 on 1

カモシカ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１ｏｎ１

【Ｎコード】
Ｎ７８２０Ａ

【作者名】
カモシカ太郎

【あらすじ】
高校をサボり、毎日ストリートバスケをしている少年『石川純也』がある男との１ＯＮ１での敗北をきっかけに高校バスケ部に強制入部させられてしまう。１３２話「届け…！」更新しました！物語の一部を修正中です。

Ｎｏ．１　謎の男（前書き）

突然、純也の前に現れた謎の人物。その正体とは…。

No．1　謎の男

とある町の商店街。

そこは発展しているわけでもなく、さびれているわけでもない、どこの県でも見られるような商店街だ。
普段は主に夕食の材料を求める主婦達の世間話でにぎわっている。

その商店街から、更に奥の裏路地に入ると、さっきまでの商店街のにぎわいが嘘のように急に静まりかえる。
廃墟になったビルや壁に描かれたスプレーの落書き……。
そう、ここは不良達の巣窟となっているのだ。

この裏路地をさらに奥へと進んでいくと、裏路地の不気味な静けさとは正反対に、若者達でにぎわっている場所がある。
平日にもかかわらず、なかなかの人数である。
おそらく、二十人くらいはいるであろう。
年齢はさまざまで、十六歳くらいから二十歳くらいまで。
学校へ行かずにほぼ毎日ここに来るやつだっている。
もちろん休日はもっと沢山の人が集まる。

俺はそこで、神だった…。

ヤツと出会うまでは…。

＊＊＊

――ガーンッ！！

激しい音が周囲に鳴り響く。

それと同時に観客の声援も大きくなる。

『すっ、すげー！！またジュンが決めたぞ！？』

『どんだけジャンプ力があるんだよ！』

ここは、商店街の裏路地にあるストリートバスケのコートだ。

とは言っても、ただの空き地にリングを置いているだけの粗末なものだが……。

そして今、このコートでは俺が試合をしている真っ最中なのだ。

さっきの大きな音は、俺がバスケットリングにダンクシュートをぶちこんだときの音。

俺をディフェンスしていたヤツは吹っ飛び、情けない格好で地面に大の字になっている。

この瞬間がたまらなく気持ちいいんだ。

ん？　ファールじゃないかって？

そんなものはない。ここのストリートバスケはルールなどほとんどない。

たとえ、殴ったり頭つきしたりしてもいいんだ。弱いヤツが負ける……ここではそれがルール。

みんなもそれを承知してきているし、俺も大賛成だ。

「おっしゃあ！！　俺の勝ちだ！　約束どおり金もらうぜ」

「ううう……お前やっぱり強ぇな。バスケのウデもだが力がハンパねぇ」

「おう！　自慢じゃねぇが、喧嘩は負けたことがねぇ」

そう言って俺は勝った相手から金をもらう。

ここの名物の賭けバスケだ。

まあ、学生がメインなのでせいぜいジュース代程度、多くて千円くらいだが……。

おっと……自己紹介を忘れてた。

俺の名前は『石川純也』。高校一年生だ。

親は俺が純粋に育ってほしいと思いこの名前をつけたらしいが、今ではこの通りだ。

しかし、俺は親と仲が悪いわけではない。

むしろ仲はいい。

俺はすこしグレてはいるが、特に親には反抗しない。それは、俺が『ある意味』家族を恐れているからだ。

まあ、それは後ほど……。

身長は１７０センチくらい。
ん？　小さくね～よ！
普通だろ普通。

実際に俺は小学三年生のときからここにいるが、バスケで負けたのは小さいときだけで今はほとんど負けない。
むしろ今年は無敗だ。
だから小さくてもバスケはできる。
ジャンプ力には自身がありこの身長でもダンクができる。
腕力にも自身がある。

先程も言ったが、喧嘩も常勝無敗だ。

髪型はちなみにボーズ。
ま、長い自己紹介はこれくらいにしておくか。

そろそろ次の試合にするとしよう。

「よし、次。俺と試合するヤツいねぇ？」

……反応なし。

――今日はたくさん戦ったし、もういいかな？

と、思っていたときだった。その時、静まり返った観客の中から、少し鼻に掛かった、聞き取りやすい声が聞こえてきた。

「俺に勝負させてくれないか？」

「おっ、誰だ？　でてこいよ」

そして、人ゴミをかきわけてながら、現れたヤツは身長は１８５くらいで、青いヘットバンドをしている。

きっと女の子にモテてそうな、いかにもスポーツマンというヤツだった。

はじめてみる顔なので、初めてこのコートにきたんだろう。

「初めて見る顔だな」

「ああ、ここにくるのは初めてだ」

「ここのルールは知っているのか？」

俺は不気味な笑みを浮かべながら問い掛ける。

「見ていてだいたいわかったよ。俺には頭つきは通用しないがな」

謎の男の自信に満ちた答えに、周りのギャラリーは罵声をあびせる。

『ジュン！やっちまえ！お前のバスケが通用しないわけがねぇ』

『ついでに殺してしまえ！！』

『てめーみてぇなスポーツマンがくるところじゃね～んだよ』

「ギャハハ、ひどい言われようだな。大丈夫かよ？」

「問題ない。はやくこいよ」

「いくぜ……ここに来たことを後悔させてやるよ」

そう言って俺はボールを懐に引き込み、持つ手に力をいれた。

＊＊＊

トントントン……

静寂の中、地面に音をたて転がるボール。

そして地面に膝をつく俺。

スコアボードに目をやると２０対０で完封されてしまった。

「ば……ばかな、なっ、なぜだ？」

――くそっ、これじゃあまるでアニメにでてくる悪役のセリフじゃねぇか。俺、主人公なのに。

「言ったろ？　俺には頭つきは通用しない。

お前がバスケでえばれるのはここだけだ。」

くそっ……負けるのは初めてじゃねぇ。
しかし、完封負けは初めてだ……くそっ。
俺の攻撃（パンチ、頭つき、その他）も全部かわされた。
こんな屈辱は初めてだ。

「お前、何者だ……」

「ん？　俺は朱雀高校バスケ部主将三年、木ノ下薫（きのしたかおる）だ。」

木ノ下薫か……覚えておくぜ。

「じゃあ俺は自主練にもどる。ここはたまたまランニングで立ち寄っただけだからな」

その言葉を残し、薫は走り去っていった。

「ちくしょう……朱雀高校木ノ下薫か…」

いつか、必ず倒してやる！

いつか……ん？

なにかが引っ掛かる。

なんだろう？

朱雀高校？

……

う～ん？

……

同じ高校じゃねえか！！

Ｎｏ．１　謎の男（後書き）

１ｏｎ１に目を通していただき、まことにありがとうございます。
最後まで完結させるように頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。

No.2　初敗北

チリリリリン

「……」

チリリリリン

「……ん」

チリリリリン

「……」

チリリ……ゴンッ！！

「さっきからうるせぇんだよ！　機械のクセに人間様をなめんなっつーの！」

俺は朝自分の睡眠を邪魔した目覚まし時計に向かって叫んでいた。
朝自分を起こす目覚まし時計の音ほど不快なものはない。
今までに何個の目覚ましを粉砕してきたことか……。

今日、俺を起こしやがった目覚ましは見るも無残な姿になっていた。

「ったくよぉ」

そして俺は顔を洗うために洗面所へ向かう。
この家は全部で家族四人だ。父、母、俺、そして……妹だ。
俺の家族は変り者が多い。
一階にある洗面所で運悪く変り者一人目、妹に遭遇してしまった。

はぁ……めんどくせぇ

「あ……お兄ちゃん。おはよう」

「……ああ」

「今日は起きるの早いね」

「……ああ」
「お兄ちゃん、どうしたの？眠い？」

「……ああ」

普通の人から見ればどこの家にもありそうな会話だ。
しかし、俺にとっては苦痛なんだ。

それは……

「おい、絵梨佳……」

「なぁに？　お兄ちゃん」

「いい加減その『お兄ちゃん』っていう呼び方やめてくれないか？」

「なんで～？　別にいいじゃん。兄弟なんだし」

「兄弟だからじゃねぇ～！！　だいたいお前、中学三年じゃねぇか」

こいつの名前は絵梨佳（えりか）。

困ったことにコイツはまだ俺のことをお兄ちゃんと呼ぶ。

家の中だけならまだいいんだ。

でも、コイツの場合はタチの悪いことに町中で俺を見かけても『おにいちゃーん』と笑顔で駆け寄ってくる。

当然周りにいる人々の視線は俺に集中する。

すごく恥ずかしいんだ。

妹との会話が終わり、顔を洗って目が覚めたところで台所へ向かう。

「あら？　ジュン、どうしたの？　今日はずいぶんと早いのね」

そこには朝飯を作っている母と椅子に腰をかけて新聞を呼んでいる親父がいる。

どこの家庭でもありそうな風景だ。

「ああ、今日は学校に行こうと思ってな」

パリィィン！

その時、母の手から野菜炒めを盛り付けようとしていた皿が落ちた。

「そ、そんな……アナタ！　ちょっとアナタ！！」

「どうしたぁ！？」

ち……近！！

親父、いつのまに俺の背後に？

「ジュンが……ジュンが学校に行くそうよ！！」

「なぁにぃぃ！？　それは本当かい！？」

「ええ……本当よ！！　入学式から一ヵ月……もう行かないと思っていたのに」

「おい！　ジュン！　学校で何があった！？　まさか、恋人かぁ！？」

「え！？　本当なの！？　悪い娘に引っ掛かったらダメよ？」

「そうだぞ！　ママみたいな人を見つけるんだぞ？」

「いや～ん、アナタったら……」

「愛してるよ……」

「私も……」

イチャイチャ

――なんでいつもこうなるんだろうか？

仲がいいのはいいことだがな。

毎日こんな感じだ。

「母さん、朝飯は？」

イチャイチャ

「お～い…ご飯は？」

イチャイチャ

「……」

イチャイチャ

イチャイチャ

「だぁぁぁぁぁあっっ！！　めんどくせぇ！　俺はもう学校に行くからな。栄養失調で倒れてもお前のせいだからな！」

イチャイチャ

「……」

ここまで無視されるのも辛いね。
ははは、良い家庭ですね我が家は。
本当にオマエら最高だぜ。

はいはい、邪魔者息子は出ていきますよ。

そして俺は家を出ようと玄関に向かう。

その途中、

「ママ～、朝ご飯は～？」

という妹の言葉に対し、

「はいは～い、今作りますからね～」

という会話が聞こえてきた。
振り替えるのはやめておこう。

生きるのが辛くなるから。

そして俺は家を出た。

「学校か……久しぶりだな」

学校まで歩いて十五分の道を歩きながらそんなことを考えていた。

今は五月の始めだ。

四月の半ばからもう学校へ行かなくなったので二週間くらい行かなかったことになる。

「ほぉ～んと～に、久しぶりね！！」

「！？」

いきなり後ろから聞こえた声に驚き振り替える。

そこに立っていたのは、俺と同じ朱雀高校の制服を着た女の子だった。

スラっとのびた髪は肩くらい。

背は１６０ｃｍくらいで目はパッチリとしている……と、初めて見た人物を説明するように言ってみたが、実は俺はコイツを知っている。

知ってるというか家が隣だ。

もっと詳しく説明すると幼なじみというやつだ。

よし、コイツの説明は終わったし、そろそろ学校に向かうかな？

と思い目的地へと向かおうとする。

当然、俺はその女に肩をつかまれる。

「ちょっとぉ！！　こんな美女を無視してどこに行く気！？」

「……」

「ちょっ……何よその馬鹿を見る目は！？　つっこんでくれなきゃ私がナルシストみたいで馬鹿みたいじゃん！！」

「久留美……俺が『え！？美女？どこどこ（周りをキョロキョロ見渡す）』みたいなありきたりなリアクションをするとでも思ったのか？」

「う～、思ってないけどぉ……」

「大体なぁ、美女っていうのはオマエの姉さんみたい人をいうんだぞ？　顔は綺麗だし、大学のミスコンに選ばれてるし、性格もいいし、胸はそれなりにあるし……オマエのその性格はなんだ？　クラスの男子を騙せても俺は騙されないぜ！？」

コイツの名前は春風久留美（はるかぜくるみ）。

二人姉妹で妹にあたる。姉さんはかなりの美人だ。

俺は久留美と幼なじみで実感がわかないが、クラスでコイツは可愛いらしく人気者だ。

性格は俺以外のヤツにはいい。

俺と話すときは急に性格が一変するという困ったやつだ。

そんな久留美の外見と性格に騙されて告白し、撃沈したヤツは軽く二桁はいるだろう。

「……」

当然久留美は黙り込んでしまった。
すこし言いすぎたかな？　と思い、謝ろうとしたときだった。

「久留美、スマ――」

「……言わせておけば」

「ん？」

「だまって言わせておけばぁぁ！！」

そう言って久留美は俺の背中に飛び掛かってくる。
丁度オンブのような形になる。
しっかりと首をしめるのを忘れない。

「コイツめぇ！！死ねぇ～！！」

――死ねってなんだよ！？　喧嘩は今まで無敗なのにこんなヤツに殺されたら死んでも死にきれねぇ！！

「胸だって……胸だってそのうち大きくなるんだから！！」

――なるほど、胸のことが感に触ったのね。別に、久留美が小さいとは言ってないんだが……。つーかマジで死ぬ！！

その時だった。

「お兄ちゃ～ん」

普段はこのセリフ聞くのはたまらなく嫌なのだが、この状況では神様の声のようだ。

「絵梨佳……助け……」

「あら！　お兄ちゃん。それに久留美お姉ちゃん。朝から仲がいいのね！」

――馬鹿野郎！　これが仲がいいように見えるか！？

「それじゃあね、お兄ちゃん。私、お邪魔みたいだから」

「絵梨……ぐぉっ！」

「ふにぁあっ！！」

――ふにぁあっ、って猫かよ！！　マジやめろって！

「や……やめて…ふははい（ください）」

「誰がペチャパイですってぇ！！？」

――そんなこと誰も言ってねぇっ！！　誤解だ！！　お前の聞き間違えだろうが！！

この日、純也は１６歳の少女に初敗北する。

Ｎｏ．３　弁当争奪作戦

「あ～疲れた……」

「なによ？アンタが悪いんでしょう！？」

俺と久留美は学校に辿り着き、このような会話をしていた。
登校中、久留美に首を絞められ危うく殺害されてしまうところだったが、向こうから朱雀高校の生徒が来るのに気付き、

『ジュンく～ん、足が痛いの。オンブして？』

などと言って誤魔化していた。
この猫被り野郎！！
まあ別にいいけど……そんなことより、

「久留美、オマエ何部に入ったんだ？」

「え？私は――」

『久留美～、おはよ～』

丁度いいタイミングで久留美の友達があらわれてしまった。

「あ、おはよ～！　ジュン、また後でね」

「あ、ああ」

そう言って久留美は女の子が集まって話をしている中へまじってしまった。
俺はそのまま自分の席に座る。

『おう！　純也。久しぶりの登校か？』

「ん？　ああ、優か。久しぶりだな」

目の前にいるヤツの名前は柿崎優（かきざきゆう）。
身長は１７８センチでショートヘア、全体的に軽くワックスを揉みこんでいて、若干ハネた髪が特徴的な人物だ。コイツもストリートバスケをやっている。　俺との戦績は俺のほうが多く勝ってる。
でもコイツは今、とあるバンドのギターを担当しているので、最近はなかなかバスケにこない。

「優、たまにはストバスこいよな」

「時間があったら行くよ。最近バイトが忙しいんでね。バンドは色々とお金がかかるんだよ。」

コイツのバンドは地元では圧倒的人気を誇っている。
このまま続ければいいところまで行くだろう。

「そういえばジュン。なんでいきなり登校してきたんだ？　俺はもうやめると思っていたぞ」

「ああ、それはな……」

あれ？

木……

木ノ下……

がんばれ俺…もうちょい。

「木ノ下……薫！！　そうだ、木ノ下薫だ！！　優、オマエ知ってるか？」

「ずいぶんと悩んでたな。木ノ下薫さんだろ？　知ってるぜ。バスケ部のキャプテンだよ。クラスの女子が騒いでたぜ。それがどうした？」

「……負けた」

「負けたって何が？　喧嘩か？」

「喧嘩は負けねーよ。バスケだバスケ。バスケットボール」

「何！？　お前が！？　お前がバスケで負けた話は久しぶりに聞いたぞ。それで、何点差だ？」

「……２０対０」

「完封かよ!!　すごいな。まあ、あの人だからしょうがないか……」

「そんなにアイツは凄いのか？」

「ああ、中学のときに全中制覇したチームのキャプテンらしい」

「何ぃっ!?　全国大会!?　なんでそんなヤツがこの学校に？」

「そこまではわからない。何か理由があるんだろうな」

アイツがそんな規模の野郎だったとは……

よし！　やる気がでてきた！

「優、ありがとな」

「ああ。でもお前が登校してきた理由と木ノ下薫が何の繋がりが？」

「いつか倒す！　バスケでだ。必ず！」

「本気かよ！　お前の負けず嫌いはわかるけど今回は厳しいぜ？」

「俺はやると言ったらやる」

「ふっ、そうか。ただ喧嘩はするなよ」

「おう！」

会話が終わり、優は席に戻る。席に戻る間も、二人の女子に挨拶をされ、軽く返していた。

――木ノ下薫か……手強いらしいな。どうするべきか？

その後、昼休みになるまでにひたすら作戦を考えていた。

授業中にこんなに集中したのはおそらく初めてだろう。

それで、その作戦とは……。

――――――――

――――――

――――

「わかんねぇ！！　よく考えたら作戦もクソもねぇ！！」

「おいおい、いきなり叫んでどうしたんだよ？」

優が昼休みになり、俺に話し掛けてきた。クラスの奴らも弁当を食べたり購買に行ったりとさまざまだ。

「木ノ下薫をどうやったらバスケで倒せるか考えていたんだ」

「ん？　お前が考えるなんて珍しいな。考えるより行動だろ？　お前のスタイルは」

――考えるより行動か……たしかにそうだったな。

「よっしゃあ！　今日、部活中に殴り込んでやるぜ！」

「……本当に殴るなよ」

「わかってるって」

よし。今日木ノ下薫にリベンジしてやるぜ！！

「よしジュン。弁当にするか」

「よ～し、弁当弁当っと」

あれ？

アイツ（母）に弁当もらってねぇ！！　よく考えたら、朝ご飯も食ってねぇよ！！

「くそ～、そう考えたら急に腹が減ってきた……」

「どうするんだよ？」

「いや、大丈夫だ」

優にそう言って俺は久留美の近くに歩み寄る。

「久留美ぃ……」

「え？　な…何よ？　そんなゾンビみたいな声で話し掛けないでよ」

「おい、久留美！」

「だから何よ？」

よし、いい感じ？　だぞ。後は言うだけだ。

『弁当くれ』……と。

「弁――」

「やだ」

「弁当――」

「やだ」

……

……

「便器！！」

「……」

「弁――」

「やだ」

くそ～……なかなか手強いな。
こうなったら奥の手だ！！

「久留美さ～ん」
「なによ？」

「今日もとっても可愛いですね。まるでお花畑の上に舞う妖精みたいですね」
「ありがとぉ」

そういって久留美は百万ドルの笑顔を見せる。
いや、百円でいいや。
俺にとっては何でもないがクラスの野郎共だったらこの笑顔で一発で撃沈してしまうんだろうなぁ。
よし、作戦は成功に近いぞ！！

「今日も君のために世界中が全面戦争をするくらい可愛いね」
「ありがとぉ」

「弁――」
「やだ」

……

「なぁ久留美？　考えてみろよ？目の前にガリガリでお腹をすかした猫がいたらどう思う？」
「かわいそうね」

「自分の手には弁当。猫は助けを求める目でお前にすがりついてくる。お前はどうする？」
「それは……お弁当を分けてあげるわ」

「そうだろ！？　そうだよな！？」
「猫、可愛いもんねぇ」

「だからよ。俺に弁――」
「いやだ」

……

「ニャー」
「ゴキブリにあげるお弁当は無いわ」

グサッ！！

あれれ？　なぜか心にグサッときたぞ？
なんでだろう？　よく考えてみよう。

久留美が猫に弁当をあげるって言って俺が猫の真似をしてみて……

つまり、話の流れからして……

「俺がゴキブリっていうことになるじゃねえか！！」

「気付くのが遅いわね！！」

「て……てめ～！！　ゴキブリはあまりにもひどすぎると思うぞ！？」

「じゃあネズミかしらね？」

「ネ、ネズミ！　ネズミは嫌いなんだよ！　うがぁぁぁぁっ！」

こんな争いが数分続いたのだった。

――――――

――

「……ジュン」

優が俺に話し掛けてきた。

「あ？　優か。悪いが邪魔をしないでくれ。俺はこの猫被り女に――」

「だ～れが猫被り女ですってぇ！？」

俺たちの争いは激化していた。

「あのな…ジュン」

優がまた話し掛けてくる。

「なんだよ！？」

「もう昼休み終わって授業始まってるぞ？」

「え？」

俺と久留美は同時に石のように固まった。
よく見てみると先生も、もうすでに来ているようだ。
クラスの注目の的になってしまった。

「まったく、久留美が弁当をよこさないから――」
「どう考えてもアンタが悪いでしょうが！」

また争いが始まってしまった。

『うるさい！！』

その後先生の逆鱗に触れ、二人とも廊下に出されてしまったのは言うまでもない……

Ｎｏ．４　対決（前書き）

やっとバスケです。

No.4　対決

「ふわぁ～……終わった終わった」

学校が終わり俺は欠伸しながら背伸びをする。

思い返せば今日は最悪な一日だったなぁ。

朝っぱらから久留美に殺害されそうになったり、朝食、昼飯を食べられなかったり先生に怒られて廊下に立たされたり……まあ、授業をサボれたからいいか。

久留美はその後一日中機嫌が悪かった。

学校が終わるとすぐに教室を出ていってしまった。

何処へ行くんだろうか？

「優、お前これからどうするんだ？」

「ん？　俺はバイトがあるから。じゃ～な」

そう言って優は教室を出ていってしまった。

「……」

――よし、薫の野郎を倒しに行くか……

そして俺は体育館へと走りだした。

＊＊＊

ここは朱雀高校の体育館。バスケ部が放課後、いつものように練習していた。部員たちの掛け声が聞こえる。

そんな中、キャプテンの薫の声が体育館全体に響き渡る。

「もっと声をだせ!!　そんなことではいつまでたっても白川第一高校に勝てないぞ!!」

――オッス!!

キャプテンの声により、さらに部員の声が大きくなる。

彼の名前は木ノ下薫〈きのしたかおる〉。

一年生のときからこの朱雀高校のエースの座に君臨している。

弱小だったこの朱雀高校を中堅まで強くした立役者でもある。

ちなみに白川第一高校〈しらかわだいいちこうこう〉とは、ここ12年連続全国出場をはたしている歴史ある名門校だ。

そんな彼だが、ある悩みがあった。

――白川に勝つにはどうしたらいいのか?たしかに朱雀高校はある

程度名前を知られるところまできた。
しかし強豪となるには何かが物足りない……。

そんな時だった。

体育館の扉が勢い良く開かれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バァン！！

俺は体育館をようやく見つけだし勢い良く扉を開いた。

「木ノ下薫はどこだぁ！！？」

俺が叫んだ瞬間、バスケ部は練習を中断して、驚いた顔で俺に注目する。

「ジュ…ジュン！？」

誰かが突然、俺の名前を呼んだ。
俺はその方向に目を向ける。

「久留美！？」

そこには驚いた顔をしている久留美がいた。

「ちょっと……ジュン、なんでここにいるの!?」

「それはこっちのセリフだ!!」

「わ……私はこのバスケ部の――」

『マネージャーだ』

俺たちの会話に薫が入ってきた。さらに話を続ける。

「春風はこのバスケ部のマネージャーだ。お前は昨日、ストリートバスケで俺と戦ったヤツだな? いったい何のようだ?」

「俺の名前は純也だ!! まあいい。木ノ下薫、俺ともう一回勝負しろ!!」

「昨日勝負してみて技術も素質も光るものがあったな」

薫は周りに聞こえない声でそう呟いてから、純也に話し掛ける。

「いいだろう。ただし条件がある」

「あ? 何だよ?」

「うちの一年と勝負してみて勝つことができたならいつでも勝負してやる。ただし、負けてしまったら……」

「負けたら?」

俺は薫の言葉を待ち、唾を飲み込む。

「バスケ部に入部しろ」

！！！！！

「はぁぁ？　何で俺が部活なんか――」

「どうした？　負けるのが恐いのか？」

その言葉を聞いて俺はかなり激怒した。

「別に恐くねぇよ！！　ただめんどくせぇだけだ。それで、誰と勝負すればいいんだ？　一年だろ？　圧勝してやるぜ」

「よし、決まりだな。おい、亮（りょう）。ちょっとこい」

『はい』

そして、亮と呼ばれたやつがでてくる。

背は俺よりすこし低い。おそらく１６８センチくらいだ。

「ははは、コイツと勝負すればいいのか？　薫は冗談がうまいな」

俺の台詞に対し亮と呼ばれた奴が反論してきた。

「おいお前！　いい加減にしろよ！？　俺を馬鹿にするのはいいが薫さんを馬鹿にするのはやめろよ！」

「亮、別にいいって。そんなことより純也。亮はなかなか強いぞ。

県で白川第一高校の次に名門校の黒沢高校（くろさわこうこう）からきたスカウトを蹴ってまでこの朱雀高校にきたほどの実力だ。どうするんだ？」

「へっ、誰が相手でもかわらねぇよ。」

＊＊＊

「さて、どうなるのか」

薫は一人つぶやいた。

バスケットコートの上にいるのは二人。

純也と亮だ。

その二人を薫とマネージャー、他の部員全員が見ている。

「よっしゃあ！　いくぜ！！」

先に口を開いたのは純也だった。

「こいよ、わざわざ薫さんがでるまでもないからな」

やがて、試合が始まった。

純也がオフェンスをして、亮がディフェンスをする。

純也がドリブルでボールを左右に振り、亮をかわそうとする。

「おっと」

亮はそれを体をはって止めた。

亮がスティール（相手のボールを奪い取ること）を狙う。

亮の指先がボールに触れ、純也がボールをとられそうになるが、うまく純也は体勢を立て直す。

「おい、純也とやら。いつでもスティールできそうだぜ？」

「あ？　うるせぇチビだな」

さらにお互い一歩も譲らない、激しい攻防が続く。

また亮がスティールを狙った。

――よしっ！　今度こそ盗った！！

「逆だ」

亮が手をだした所にはボールはなかった。

亮は体勢が崩れていた。

その隙に純也はバックターンで一気に抜き去る。

そのままゴール近くで踏み切り、思い切りジャンプした。

「おりゃああ！！」

ドォォン！！

純也がリングにダンクシュートを叩きつけた。

『オオォォ！！スゲー！』

それを見ていた薫と久留美、意外の観衆は驚いていた。

「はは、ますます面白い奴だな。だが、亮はここからが強いぞ」

薫はこの二人の対決を見ながら、そう呟いた。

「おい薫！　次にコイツのオフェンスを止めたら俺と勝負してくれんだろうな？」

「ああ、止めることができたらな」

純也の言葉に薫ははっきりと、そう答えた。

「いくぜ？」

「ああ、こいよ」

亮がボールを持ち、純也を睨み付けながら言葉を言い放つ。

亮の攻撃が始まった。

Ｎｏ．５　ゲーム終了？

「純也、いくぜ？」

「ああ、こいよ」

今度は亮がオフェンスだ。
亮がドリブルをして純也を抜き去ろうとする。

「……はえぇっ！！？」

！！

純也は苦し紛れにもなんとか止める。

「おい純也。俺からボールがとれるか？」

「へっ、楽勝だぜ！」

そう言って純也はスティールを狙う。
しかし、亮のボールキープ力が凄まじくボールに触れることすらできなかった。
「くそっ！！コイツ、なんちゅう低いドリブルなんだよ！」

そんな二人の勝負をみながら久留美は薫に話し掛ける。

「凄いですね。亮さんは」

「ああ、よく朱雀に来てくれたものだ。間違いなくレギュラーだろう」

「やはりレギュラーですか……。そういえばなぜジュンにあの条件を？」

薫はかるく微笑んでから答える。

「ああ、ヤツは朱雀に足りない何かをもっている気がするんだ。アイツは何か凄いことをやってくれそうな気がする……そう思わないか？」

「そうですかぁ？　私はチームワークを乱しそうな気がするんですが」

「ははは、そうかもな。まあ見ててくれ。今にきっと何かをやってくれるさ」

そんな薫の台詞に疑問を感じながらも久留美は二人の試合を見る。

「どうしたぁ！？　ドリブルが遅くなってきたぜ？」

「ふ、これは止められるか」

亮がドリブルでつっこんできた。「クロスオーバー（ドリブルする手を左右切り替える動作）か！？　速ぇ！！」

亮は純也を抜いた。そしてゴールに向かって行く。

――しまった！　抜かれた！これでは薫との勝負が…

薫は久留美に向かって言った。

「見ていろ。ここできっとヤツは何かをやってくれる」

「……」

久留美は薫の言葉を信じて二人の試合を見つめる。

――くそ！　ブロックに飛んでも間に合わねぇ！こうなったら……

亮はシュートフォームに入っていた。

「これで終わりだ！！」

そのときだった。

「シャイニングウィーザード！！」

ドス！！

「ぐおっ！」

純也の放ったヒザげりが亮にクリーンヒットする。
亮はそのまま床に倒れてしまった。

……

「や……やらかしてくれたわね」

久留美はそう言い薫のほうを見る。

『プシュー～パショー』

明後日の方向を見ながら口笛を吹いていた。

――吹けてないし！！　キャプテン、実はこんなキャラなのかしら？

純也が薫に駆け寄ってくる。

「おい薫！　亮っていうヤツを倒したぞ！」

「……」

薫はこのときこう思っていただろう。

――どこからつっこめば良いのかわからん……

「どうした薫？　約束だろ？　勝負しろ」

薫は純也の顔を見る。
純粋な少年のように目をキラキラ輝かせていた。
きっと薫が勝負してくれると思っているのだろう。

「純也……」

「あ？　何だよ？　早くしてくれよ」

薫は本当に言いずらそうだが、なんとか純也の言葉に答える。

「……反則負けだ」

「はぁ！？　なんでだよ！　亮に勝ったじゃねえか！」

その純也の言葉を聞いて亮は怒りながら純也に向かって走って行く。

「勝ってねぇよ！！　俺は負けてねぇ」

「うるせぇ負け犬チビ」

「お前とたいして身長かわらねーよ」

純也と亮が喧嘩を始めてしまった。

その喧嘩を止めるように薫が言った。

「純也、バスケットはパンチやキック、頭つきはもちろん、シャイニングウィーザードもやってはいけないんだ」

「はぁ？　なんでだよ！？　ストバスでは普通によかったぞ」

「それはお前達のルールだぞ。とにかくお前は反則負けだ」

「はぁ？　納得いか――」

グゥゥゥゥッッ！

突然、純也の腹が鳴る。

「ぐおぉっ……今日一日なにも食ってなかった」

――そう考えると急に力が抜けて意識が……

バタッ

そして純也は倒れてしまった。

「ジュン！！」

「純也！！　どうした！？」

体育館に久留美と薫の声が響き渡った。

No.6　空腹

「うう……」

「ジュン、気がついた？」

目が覚めると久留美がこっちを見ながら話し掛けてくる。

俺は何とかバスケ部に殴り込んで試合をしたことを思い出した。

「ここは？」

「バスケ部の部室よ。ジュンがいきなり倒れて大変だったんだから。どうして倒れたのよ？」

――あれ？　何でだっけ？

その時だった。

『グゥゥゥゥッッ』

俺の腹が鳴った。そうだ！　思い出したぞ！思い出したら余計に腹が減って…

「朝から何も食ってなかったから空腹で倒れた。久留美が弁当をくれないからだぞ？」

「なっ…何よぉ？　私だってジュンのせいで弁当食べる時間がなかったうえに先生に廊下に出されたんだから！」

――よく考えたら俺が悪いかな？

「ああ、悪かったな。スマン」

突然の俺の謝罪が意外だったらしく久留美は驚いた顔をしている。

「え？　……も、もう別にいいわよ。過ぎたことだし」

そして部屋にいる二人は沈黙する。

「……」

……

「お弁当食べていいわよ」

先に沈黙を破ったのは久留美のほうだった。

「え？」

――何言ってんだコイツ？

「だからぁ、私のお弁当食べていいわよ」

「え？　お前はどうするんだよ？　昼飯食ってねぇだろ？」

「私は朝食べたから大丈夫。どうするの!?　いる？　いらない？」

「いただきます」

即決だった。

とりあえず今は緊急事態だ。ありがたくもらっておこう。

そして、久留美から渡された弁当をあけてみるとおいしそうな匂いがしてきた。

腹が減っていた俺は一気にそれを口に運ぶ。

「う……うまい！」

「……本当？」

「ああ、母さんとは大違いだ」

「……そう」

そして俺はまた食べるのを再開する。

久留美が俺の顔を微笑みながら見ていたので顔に何かついていると思い、手をやってみるが何もない。

「なんだよ？　ニヤニヤして気持ち悪いな」

「ち…違うわよバカ！　早く食べなさいよ。早く学校を出ないと閉められるんだから」

「閉められる？　今何時だ？」

久留美は携帯を見る。

「……8時55分、大変！後5分で学校が閉まるわ」

「他のバスケ部員はどうしたんだよ！？」

「とっくに部活が終わって帰ったわよ」

「お前は？　まさか俺を待って――」

「馬鹿なこと言ってると置いてくわよ！！」

そう言って久留美は部室を出ていってしまった。

「お、お～い！　弁当弁当！」

残っていた弁当をしっかり食べてから俺は久留美の後を追い掛けた。

――――――

――――

――

「弁当ありがとうな」

「うん」

学校から自宅へ十五分の道を俺と久留美は歩いて帰っていた。

「なんでバスケはシャイニングウィーザードやっちゃあいけねぇんだよ？」

「当たり前でしょ？　退場になっちゃうわよ……あ！」

そこで久留美は急に何かを思い出したように声をあげた。

「え～、石川純也くん」

「あ？　何急に改まってんだよ」

久留美はフフフと笑って話を続ける。

「今日はアナタに重大な発表があります！」

「ん？　何だ？」

「バスケ部入部おめでとうございまぁ～す！！　わぁ～パチパチパチ」

「……」

「パチパチパチぃ～」

――ん？　ナニコレ？

「わぁ～！　ほら、ジュンもわぁ～！」

――わぁ～～！！

……って

「何だよソレ!?　聞いてないぞ!?」

「ジュン、亮君に負けたじゃない？」

「負けてねぇ！　それに入部届けだしてねぇし」

「それなら大丈夫。キャプテンがジュンが寝ている間にだしておいたから」

――あのキャプテン、やること早ぇ……

そうな話をしているうちに家の前についてしまった。

「あ、久留美、弁当返すよ。うまかったぞ」

俺は久留美に弁当箱を返した。

「……ありがとう」

「いいな久留美は。毎日こんな弁当を食うことができて。家は弁当無しだからなぁ」

「どうして？」

「そりゃあ俺、あまり学校に行かないだろ？　だから母さんも妹の分しかつくらねぇんだよ」

まったく、困った話だ。

「私、持ってきてあげようか？　お弁当」

「え？　お前の……」

――母さんに悪い

そう言おうとしたときに、あることを思い出した。

久留美は母さんがいなかった。小さい頃に亡くなってしまったのだ。

父親はいるが仕事の都合で海外にいるのでほとんど家にいない。

久留美は姉と二人暮しなのだ。

「誰が弁当を作ってんだ？」

「私……姉さんは料理まったくダメだもの」

「お、お前！？」

意外だった。久留美にこんな才能があったんだなぁ。

「でも三人分作るのは大変じゃないのか？」

「大丈夫よ。量を多く作るだけだから。それに料理好きだし」

「じゃあお願いしますわ。毎日パンじゃなくてすむぜ」

「そんなもの食べる気だったの！？　部活中に倒れたらどうするのよ？」

「え～？　本当に入部するのかよ？」

「あたりまえでしょ？　条件は条件よ」

めんどくせぇ…まあ、コイツには恩があるしな。

「わかったよ。弁当のこともあるしよ」

「わかればよ～し」

そう言って久留美は家の玄関に向かって歩きだす。
そして一言、

「じゃあね」

と言って家の中に入っていった。

「じゃあな」

俺も家の中に入ろうとする。そのときに何処からか声が聞こえてきた。
お兄ちゃん！

「絵梨佳！」

そこにはニヤニヤしながらこっちをみている妹の絵梨佳がいた。

「ニヤァ……」

「……」

「ママ～！！　お兄ちゃんが久留美お姉ちゃんに――」

そう叫びながら家の中へ走って入っていく。

「こら絵梨佳！　まちやがれ！」

すると今度は母さんが出てきた。

「本当なの！！？　純也！！ねぇ、アナタ、アナタァ！！」

「どうしたぁ？　ママ！？」

ち…近！！　いつのまに親父、こんなに近くに？

「ねえ純也！　どうなの？　久留美ちゃんとはどうなの？」

「ママみたいな人じゃなきゃだめだぞ！」

「アナタ……」

「愛してるよ……」

イチャイチャ…

また始まったよ、コイツら。

はぁ、長い一日だったなぁ。明日から部活かよ。

俺が部活ねぇ……

No.6　空腹（後書き）

やっと1日が終わりです。テンポが悪くてすみません。

No.7 ルール

朝目覚める。

「ふわぁ～…ねみ」

外からは小鳥の鳴き声が聞こえる。天気はムカつくくらいの快晴だ。

俺は何代目になるかわからない目覚まし時計を見て時間を確認する。

「よし、学校に遅刻しないな」

そして俺は階段をおりる。そのまま洗面所に行き顔を洗う。

次に朝飯を食べるための居間に移動する。

もう俺以外の家族はそろっていた。俺的には早く起きたつもりだったんだが……

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

「……ああ」

妹に挨拶してからテーブルに並んだ朝飯をもくもくと口に運ぶ。ちなみに親父はいつものように新聞を読んでいる。

「ごちそうさま」

そう言って俺は制服に着替えようとしたときだった。

「あら、純也。お弁当はいらないの？」

と、母さんが言ってきた。明らかにわざとらしい口調で顔はニヤニヤしている。その隣にいる妹の絵梨佳も顔をニヤニヤさせながら俺を見ている。父親は新聞を見ているが明らかに俺たちの会話に耳を傾けている。だって、新聞を見ているハズの目が動いてないんだもの。

――ちくしょう、親子そろって俺をイジメかよ……いつもは『弁当は？』なんて聞かねぇくせに。

「……ああ」

俺は渋々答えた。

こんな受け身の俺をこの野次馬親子が見逃すはずがない。

「どうしてなの？」

「なの？」

母さんに続くようにして絵梨佳が質問をしてくる。

「そりゃあ…」

「そりゃあ何？もっとはっきり言いなさい」

「なさい」

二人の顔はあいかわらずニヤニヤしている。とてもブン殴ってやり

たい。しかしそんなことをしたら毎日イジメられそうだ。そのままイジメ殺されるかもしれない。

実際に俺が中学一年の反抗期のときに母さんに暴言を吐いてしまったときがあった。

そのときは本当に大変だった。朝起きたら隣にネズミの着ぐるみを着たヤツがいたり、夜俺が寝ていると突然ネズミの着ぐるみを着たヤツがやってきて俺の隣で怪談話をしはじめたり、俺の学校の授業参観にもネズミの着ぐるみを着たヤツがきたり、しまいにそいつは授業中に『なんでわからないの?』と、いきなり説教をしてきたり……

結局そのとき俺は母に泣く泣く土下座をしてなんとか許してもらった。それ以来俺はネズミがとても苦手なんだ。ディ〇ニーの人気キャラなんてもっての他だ。二十二世紀からきた猫型野郎にはかなり同情してしまう。

そんなことを考えていたら玄関の方から声が聞こえてきた。

『ごめんくださ〜い』

俺はその声を聞いて玄関に向かう。

「おはよう」

「ああ」

そこには久留美がいた。そして俺は昨日久留美がメールで俺が学校をサボらないように向かえにくると言っていたことを思い出した。

「さ、いきましょう」

「ああ」

俺はカバンを持ち家を出ようとした。

「じゃあねジュン、いってらっしゃい」

「いってらっしゃい」

またまた母さんと絵梨佳がわざとらしくニヤニヤした顔で言ってきた。

「ああ」

無視をすると後が恐いので一応返事をしてから俺は家を出た。

――――――――

――――――

――

『さようなら』

学校の最後の授業が終わり、みんなが挨拶をして教室をでていく。

「はぁ」

俺は自然とため息がでてきた。

「なに暗い顔してんだよ？」

そんな俺をみて優が話し掛けてきた。

「部活めんどくせぇな」

「何！？ジュン、お前部活に入ったのか？」

「ああ」

「何部なんだ？」

「……バスケ」

「お前が部活ねぇ……急にどうしてだ？今まで一度も部活なんてやったことないだろ」

「まあ、色々と事情があるんだよ…」

優はそんな俺の言葉に微笑し、

「そうか……わかった。がんばれよ。じゃあな、俺バイトあるから」

と言って教室を出ていってしまった。

「はぁ…」

「なぁにため息なんかついてるのよ」

今度は久留美が話し掛けてきた。どうやら今日は俺がため息をするたびに何かがおこるらしい。

「ああ、久留美か。悪いが話し掛けないでくれ。俺は今から人生についてーー」

「はいはい、わかったから。部活いくわよ」

あっさりと流されてしまった。

「ほら、急ぎなさいよ」

「ううー……」

こうして俺は体育館へとつれていかれたのだった。

ーーーーーーーーーー

ーーーーー

ーー

「え〜、仮入部期間は終わってるが、今日からこの朱雀高校バスケ部に新しい部員をむかえることになった。よし、自己紹介をたのむ」

ここは朱雀高校体育館。キャプテンの木ノ下薫がバスケ部全員に集合をかけ話をしているところだ。

俺は木ノ下薫に自己紹介しろと言われたのでみんなの前にでる。バスケ部員全員の視線が俺に集まる。

「……俺の名前は石川純也だ。俺が来たからにはこのチームを全国優勝に導いてやる」

オー

一気にバスケ部員たちから歓声があがる。
突然亮が俺に飛び蹴をしてきた。

ドカッ

「ぐおっ！」

「なにが『全国優勝に導いてやる』だ！調子にのるんじゃねぇ」

「あ～？なんだ負け犬チビ、文句あるなら黙って吠えてろ」

「なんだとぉ～」

喧嘩が始まった。どうやら俺はコイツと犬猿の仲ならしい。
ん？ってことは俺が猿か？まあたしかによく跳ぶし。って

「誰が猿だコラァ！！」

「んなこといってねぇよ！！」
「やめろやめろ」

キャプテンの薫が喧嘩を止める。そして部員達に話し掛けた。

「というわけだ。みんな仲良くやってほしい。よし練習再開」

オッス

キャプテンの掛け声により練習が再開され、部員達はコートにむかって走りだす。

「おっしゃあ！　やってやるか！」

俺は何となく気合いを入れてみると

「おい純也」

キャプテンの木ノ下薫に呼び止められてしまった。

「なんだよ!?」

「お前は特別メニューだ」

「は?」

何言ってんだコイツ?

「お前にはまずしっかりとバスケットボールというスポーツのルールを覚えてもらう必要がある」

「なんで!?もう知ってるっつーの」

「試合でシャイニングウィーザードをやられては困るのでな」

「あれはだな……神の声が聞こえたんだよ」

「試合で神の声が聞こえてシャイニングウィーザードをやられても困る。え～と、お前にルールを覚えさせるにはどうしたらいいか」

『キャプテン、僕が教えます』

キャプテンの言葉に自分から石川純也教育係を名乗り出たヤツがいた。

メガネをかけていてかなり細身だ。背は俺より高い。１７５?くらいかな。

「おお、我利勉(がりべん)か」

――我利勉!?

「キャプテン、僕がルールを教えます」

「しかし……お前には試合があるんだ。練習はどうするんだ?」

「練習なら居残りをしてでもやります。それより僕にやらせてください。昨日、亮との１　ＯＮ　１　を見て絶対に将来朱雀を引っ張る選手になると思ったんです。キャプテンが引退したときのことを考えるといてもたってもいられないんです」

「そうか……お前のバスケットに対する情熱にはやられたよ。ぜひお前にたのむ」

「ありがとうございます」

キャプテンの木ノ下薫はそう言ってコートに走っていった。
我利勉と呼ばれたヤツが俺に話し掛けてきた。

「純也くん、よろしく。僕の名前は我利勉翔太（がりべんしょうた）。二年生だ。かと言って別に敬語は使わなくていいからね」

まあ使う気はねぇけど。

「昨日の一対一を見て君に無限の可能性を感じたんだ」

「お？我利勉はわかってるなぁ。キャプテンとは大違いだ」

「ははは、あれでもキャプテンは君に期待しているのさ」

「ふーん。そうなのか」

「よし、じゃあ基本ルールからいくよ」

「おっしゃあ！こい、ルールなんてすぐに覚えてやるぜ！！」

こうして俺は毎日ルールを覚えることになったとさ。

Ｎｏ．８　デカ男

ここは朱雀高校体育館。

放課後、バスケ部が練習に励んでいた。
キャプテンの木ノ下薫を中心に体育館中に掛け声が響き渡る。
そんな部員達とは別に、二年生のメガネ小僧『我利勉翔太』に一年生の猿跳び野郎『石川純也』がバスケットのルールを教えこまれていた。

―――――――

―――

―

「じゃあ純也くん、ディフェンスで抜かれそうなときはどこを使って止めるんだっけ？」

「いやぁ～、体で止めるのはわかってるんだけど、男ならやっぱりパンチだろ！！百歩譲って足掛けだね！！」

「わかっているなら体で止めようよ！！男はとかじゃなく！！それに百歩譲らなくていいから。いい？パンチは使ってはダメなんだ。腰を下ろして体で止める」

「なるほどねぇ～」

なかなか奥が深いなぁ。知ってるけど。

「よし、今日はそれじゃあこれぐらいにしようか」

「ウッス」

その時、キャプテン『木ノ下薫』の声が響き渡る。

「それじゃあ次は5対5だ。フォーメーションの確認をするぞ。チームはレギュラー陣対Bチームだ」

「よっしゃあ！やってやるぜ！！」

と言って、俺はさり気なくコートに出てみる。すると

「おい純也」

と、キャプテンの木ノ下薫に見事に呼び止められてしまった。

「ああ？　なんだよ？」

「お前は試合を見てフォーメーションを覚えろ。大会も近いし一つ一つ教えている暇はない。そのかわり俺たちは繰り返しフォーメーション練習をするからそれを見て覚えるんだ」

「フォーメーションなんて我利勉メガネ君に教えてもらえばいいだろ！？」

「我利勉はシューティングガードで大事なレギュラーなんだ」

「ええ！？」

まじかよ！？あんなヒョロヒョロしたヤツが？体が当たってしまっただけで骨が折れそうなメガネ君が！？

「ま、そんなとこだ」

そう言って木ノ下薫はコートに向かっていった。

「ふぅ～……ん？」

俺はコートの方に目をやる。
さり気なく亮もコートに向かっているような気がした。
俺は目をこすってからもう一度コートに目をやる。

やはり、亮がレギュラー陣に混ざっていた。

「コノヤロォ！！」

ドカ！！

俺の跳び蹴りは見事、亮に命中した。
当然亮は怒る。

「痛ってぇな！！いきなり何すんだよ！」

「うるせー！なんでお前がレギュラーで俺が無料観戦チケットなん

だよ!!?」

「無料観戦チケット!!?そんな理不尽なことが通用するか!!」

くっそぉ、薫の野郎に聞いてみるべし。

「おい薫、どういうことだ?」

俺のことばに薫が答える。

「ん?亮は朱雀のレギュラーだ。」

「なんで!?」

「それは、うまいからな」

「全然うまくないですよ!!俺のほうが凄いッス」

さり気なく敬語になる俺。

「どこがだ!?俺の方が強いって!」

亮が俺に反論してくる。

「うるせぇ負け犬チビ助!!黙って引っ込んでろ!」

「なんだとこの日光猿軍団の隊長!!俺が猿まわししてやろうか??」

ドコ!

ボカ！

ガス！

そんな二人の争いを見ていた木ノ下薫が朱雀高校マネージャーの春風久留美を呼ぶ。

「春風」

それを聞いて久留美は返事をする。

「はい？なんでしょうか？」

「純也をなんとかしてくれ」

久留美はため息をついてから

「……はい、わかりました」

と言った。

そしてトコトコと俺と亮が争っている現場へ直行する。

「ねぇ？ジュン」

「ああ？久留美か？悪いが邪魔をしないでくれ。今から俺はこの犬被り男に――」

「だれが犬被りだ！つぅか犬被りってなんだよ！！」

ここで久留美は爆弾を投下した。

「もうお弁当作ってあげないよ」

「え？」

……

――まじかよ！？ここで亮の野郎に口喧嘩で負けるのは嫌だが久留美の弁当を食えないのはもっと嫌だ。コイツの弁当うまいし。また昼飯がパンの生活に戻ってしまう。

「ちっ……しょうがねぇな」

「わかればよ～し」

俺がコートに戻ろうとしたときだった。

「え？久留美ちゃん、純也に弁当作っているの？」

亮だった。亮が食い付いてきた。

「ええ、そうよ」

ガーン

「そんなぁ～」

そして亮はガックリしてしまった。
ふっ、ザマみやがれ。ん？これは亮を負かすチャンスじゃないのか？

「いやぁ～、久留美の弁当は本当に美味くてよ、口に含んだ瞬間――」

「うわぁぁぁ」

亮はおたけびをあげながら頭を抱えている。まったく、いい眺めだなぁ。

「よし、久留美。一緒にレギュラー陣のフォーメーションを見て勉強しようか。」

そう言って俺は久留美の肩に手をまわす。

「え？……うん」

久留美はコクりとうなずいた。

「それじゃあレギュラーの亮くん。頑張ってくれたまえ。応援しているぞ」

俺は亮にクルリと背をむけコートから出ていく。
この時俺の頭の中を、

『圧勝』

の二文字が支配していた。

俺はしばらくレギュラー陣のフォーメーションを見ていた。亮はやはりミスを連発していた。いい眺めだなぁ。ふふふ、圧勝。

そんなことを考えていたときだった。

『キミ、凄いね。気が強いしキャプテンに敬語じゃないし』

突然横から話かけられた。

「ふふふ、俺は無敵だからな」

と言って話し掛けられた方に目をやる。

「で、デカ～！！」

俺の横にいたのは身長が2メートルもあろうかと言う男だった。

Ｎｏ．９　対抗心

でかすぎる…。

話し掛けられたときの声が弱々しかったのでひ弱なヤツかと思ったんだが……

「お前でかいな！！何年だよ？」

「え？キミと同じ一年だけど」

「一年！？」

ま、まじかよ！？でかすぎるぞ！

「一応聞いておくが身長は何センチだ？」

「う～ん……たしか１９８センチくらいだったかな？」

「ドカーン！！」

ひゃ…１９８センチ？俺と約３０センチ差じゃないかよ！！いや、まだ２８センチ差だ。３０センチ差ではない。ってことは亮は３０センチ差か？ふふふ…圧勝。

「そっ…そうか、がんばれよ」

とりあえず言っておく。

さらに隣のデカ野郎が話し掛けてきた。

「バスケットって難しいね」

まあな……ん？

「お前、バスケットは初めてなのか？」

「うん。今まで部活やったことがなかったからね。小学校、中学校のときは親は別にいいって言ってたんだけど家の農業を手伝ってたし。高校になって親に高校生活を悔いのないものにしないように部活動にでも入りなさいって言われたんだ」

「へぇ～、なんで急にバスケ部に？」

「キャプテンの薫さんに誘われたんだよ。『バスケットに興味があるかい？キミのその身長はとても戦力になる』ってね。僕はそのとき何部に入ろうか迷っていたからバスケ部に入ったんだ」

――あの野郎……俺のほかにもスカウトしたヤツがいたとは……まあ、俺はスカウトされてないけど。

「お前の名前は？まだ聞いてなかったな」

「え？僕の名前は大山博司〈おおやまひろし〉だよ。」

「じゃあさ、『ヒロ』って呼ばれるのと『ウドの大木』って呼ばれるのはどっちがいい？」

「ええっ！？そ、そりゃあヒロのほうがいいけど……」

「それじゃあ、よろしくな『ウド』」

ふぅ、いい使い捨てキャラだったぜ。

「ち、ちょっと僕の話聞いてるの？それに、たぶん使い捨てじゃないと思うよ」

「あ、声に出てたか。悪い悪い。」

「しっかりしてよぉ、ウドはさすがに嫌だよ」

「ウド」

「ええ！？」

俺の隣で驚いているウドを無視して俺はレギュラー陣の試合をみる。

このチームはやはり薫が中心となっているようだ。

薫がフォワードで点をとる。スリーポイントもかなり入るようだ。

むしろ、インサイドよりアウトサイドからのシュートが多いようだ。

おそらく入学した高校が朱雀ではなく白川第一（県でナンバーワンの高校）に入学していたらシューティングガードを任されていただろう。

我利勉はシューティングガードでスリーポイントで点を稼いでいる。

それなりに入るようだ。しかし、あの細身ではあたり負けしている。

物足りなさを感じる。

亮は……ダメ。

もう一人目にとまる選手がいた。
身長は１８５くらい。
薫と同じくらいだ。
顔は男のクセに綺麗、サラサラした髪が長くもなく短くもないぐらいに伸びていた。ポジションはセンターかな？上手いのだが少々あたり負けしている。コイツも背が高くて仕方がなくこのポジションをやっている感じだ。ゴール下を支配するに何かがもの足りない。きっともっとむいているポジションがあるだろう。

「おいヒロ、あの髪がサラサラのヤツは誰だ？」

俺はウドに聞いてみた。

「ん？ああ、あの人は副キャプテンの永瀬勇希〈ながせゆうき〉先輩だよ。この学校にファンクラブが存在するくらいなんだよ」

「そんなことまで聞いてねぇよ」

「ご、ごめん」

永瀬勇希ね……

このチームにも薫以外にもできるヤツがいたんだな。おもしれぇ…

―――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは朱雀高校バスケットボール部の部室。

ほとんどの部員が帰った後、キャプテンの木ノ下薫と副キャプテンの永瀬勇希が会話をしていた。

「薫、お前が連れてきた一年二人はどうするつもりだ？」

一年二人とはおそらく石川純也と大山博司のことだろう。

「純也は……基本的なことを覚えるとすぐにでも使える。あの身長からは考えられない力とジャンプ力とストリート仕込みのドリブル技術があるからな」

その言葉に永瀬勇希はうなずく。

「それじゃあデカイヤツは？大山っていう」

「ああ、アイツは今スグは無理でも、いずれはセンターとして使いたい」

「やめたほうがいいぜ！？確かに身長はあるかもしれないけどボールの扱いにもなれてないし」

「大丈夫だ。俺の理想のメンバーを作ることができたならきっとあの白川に対抗できるはず」

「白川第一か……お前は異常なまでに白川に対抗心を燃やしてるな」

「ああ、白川第一にはどうしても勝ちたいんだ」

そしてさらに薫は勇希に聞こえない声で呟いた。

「かならず倒す、白川……いや、五十嵐拓磨（いがらしたくま）。まってろよ……」

No．10　年上の魅力

キーンコーンカーンコーン

『さようなら』

学校の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「ふわぁ～」

俺は欠伸をしながら背伸びをする。学校が終わったことはうれしいのだが、これから始まる部活のことを思い出してしまう。

「何で俺が部活……」

「よう、ジュン。どうした？」

いつものように優が俺に話し掛けてくる。

「見りゃあわかんだろ？」

「あ、悪い悪い。部活だったな」

「ああ」

そう言って俺は自分の席から立ち上がる。このまま席に座っていても久留美に強制的に体育館へ連行されてしまうからだ。

「じゃあな優。バイトがんばれよ」

そして俺は久留美に声を掛けようとしたときだった。

「あ、ジュン」

優に呼び止められた。

「なんだ？」

「いや、俺今日はバイトは休みなんだ。だからお前の部活を見学に行こうと思ってな」

はぁ？いきなり何言ってんだ？

「言っとくがあんなもん見てもなんも面白くねぇぞ」

「かまわね～よ。どうせ暇つぶしだ」

「……そうか」

カランカラン

「ん？」

話をしている途中、突然優の足元に一本のシャープペンシルが転がってきた。

一人の女子生徒がこちらを見ているのでソイツが落としたものだろう。

優はそのシャープペンシルを拾い、その女子生徒に手渡す。

「はい、落とし物」

『あ、ありがとう』

その女子生徒はお礼を言ってから女子が会話をしている集団にまじる。

『キャー！優君としゃべっちゃったぁ』

『ええ！？いいなぁ』

『それでね、優君って優しいんだよ』

『へぇ』

そんな会話が聞こえてくる。

ちっ気に入らねぇ……

まあ、優だから別にいいんだが……

そういえばコイツは結構モテるんだよな。顔も結構かっこいいし。

「優君はどこかの誰かさんと違って優しいもんねぇ～」

突然久留美が俺に向かってわざとらしく言ってきた。ちくしょう、負けてたまるか！

「ほんとだな。どこかの誰か『ちゃん』と違ってなぁ」

俺はわざとらしく久留美をみながらそう言った。

「ちょっとぉ！誰かちゃんって誰よ！！」

「久留美ちゃんだよぉ」

ふふふ、まだまだだな久留美。

「なんですって！？」

「まあまあまあ」

優が俺たちの口喧嘩の仲裁に入る。
さらに久留美に言った。

「そういえば久留美ちゃん、バスケ部のマネージャーなんだって？
がんばるねぇ」

「うん。楽しいから大丈夫。そっちのバンドの調子はどう？」

「いい感じだよ」

久留美は昔、俺と優ががストリートバスケットをやっている所にたまに見学に来ていたので優とは昔からの知り合いだ。

「じゃあ私、他に用事があるから先に行くね。ジュン、サボらずにちゃんと部活にきなさいよ？」

「へいへい」

久留美はその言葉を残して教室をでていってしまった。

「はぁ、めんどくせぇ」

「ははは、がんばれよな。ジュン、早く体育館にいこーぜ」

「……見学組は気楽でいいな」

「……まあな」

そんな会話をしながら俺たちは体育館へと向かった。

――――――

――

「集合！」

練習中に突然キャプテンの木ノ下薫の集合がかかった。

部員全員、体育館の入り口に集まる。

「え～、マネージャーのほうから話がある」

薫は突然そんなことを言い始めた。

『はい』

呼ばれたマネージャーが前にでてくる。
前にでてきたのは久留美ではなく知らない女だった。

「ん?亮、あの人誰だ?」

俺は長谷川亮に聞いてみた。

「ん?ああ、そういえば最近あの人部活にきてなかったからな」

亮はそういって話を続ける。

「あの人は三年のマネージャー、赤川純麗〈あかがわすみれ〉先輩だ。ここ何日かは家の花屋が忙しいから部活に来てなかったんだ。可愛いし性格は良いし結構モテるぞ。まさにバスケ部の天使ってヤツさ。まあ、俺は久留美ちゃんのほうがいいがな」

ふ~ん。最後の言葉は納得いかないが……。
身長は久留美より少し大きいかな?サラサラとしたショートヘアーがいい感じ。顔は大人っぽく綺麗だ。
と言うか……

俺のタイプじゃん!!

三年マネージャーの赤川純麗は話しをはじめる。

「今週の日曜に練習試合があります。相手は池山工業。場所は池山工業の体育館です」

おー

突然のことに大半の人は驚いている。

赤川純麗の言葉に木ノ下薫が続く。

「まあそんなところだ。池山工業は最近力をつけてきているチームだ。県でもベスト１６には入っている。戦力は朱雀と同じくらいだと思うので、うちの走るバスケをしっかりとやっていこう」

オス

「それじゃあ、練習再開」

キャプテンの指示により練習が再開された。

「練習試合か……よし！！やってやるぜ！」

今週の日曜っていったらあと三日後だな。

俺がなんとなく気合いを入れていると

「ねぇ、キミが新しい部員の純也くんだよね？」

三年生マネージャーの赤川純麗さんに声をかけられた。近くで見るとさらに可愛いなぁ。

「え！？あ、はい！！私が新入部員の期待の星、石川純也でありまっす！！」

赤川純麗さんは俺の言葉を聞いて、口元に手をあててクスクスと笑った。

「そう、期待の星なの。頼もしい新人さんね」

「はい！でもキャプテンは基礎練習しかやらせてくれませんであります！ヒドイであります！」

「あら、薫君はアナタに期待していたわよ。ついこのあいだも『いい新人が入ったんだ！』って私に――」

「オホン！」

純麗さんの話を隣で聞いていた薫が咳払いをして止める。

「クスクス」

純麗さんはそんな薫を見て微笑していた。
俺は薫のほうをじっと見てみる。

じ～

「……」

じ～

「オホン！純也、お前はさっさと特別メニューだ。いそげ」

そう言って薫はコートに向かって走っていった。

「ちっ、シャイなキャプテンにも困ったものだぜ」

「ふふふ、おもしろい人ね。じゃあ純也くん。練習頑張って」

「はっ、はい！」

可愛いなぁ……

そう言って赤川純麗さんは仕事があるのか体育館の入り口へと向かっていった。

俺がじ～っと後ろ姿に見惚れていたらたまたま後ろを振り返った純麗さんと目が合ってしまった。

始めはすこし驚いた表情を見せたがすぐに

『バイバ～イ』

といった感じで笑顔で手を振ってくれた。

そして体育館から姿を消す。

「はぁ、いいねぇ」

大人の魅力があっていい感じだなぁ…

そんなことを考えていたときだった。

「ねぇジュン」

「ん？」

声のした方を振り返ってみるとそこには今度は久留美がいた。

「う～む……」

俺は久留美の全体を見渡してみる。

「ちょっ、な、何見てるのよ」

「久留美はまだまだ子供よのぉ」

「悪かったわね！！」

あ～怒った。あ～恐い。純麗さんとは大違いだ。これだからガキは困る。

「ねえ、ジュン。純麗先輩と何を話していたの？」

突然久留美が俺に聞いてきた。

「ん？あなたがいれば全国優勝は間違いなしね！期待してるわ！……みたいな話し」

「……ウソね」

久留美がポツリとつぶやいた。まあ、ウソだからしょうがないか。

「しっかし、純麗先輩はいいよなぁ」

「……え？」

「性格も優しいしな。そう思わないか久留美？」

「……うん」

「おまけに可愛いし」

「……」

久留美は下を向いて黙り込んでしまった。

「どっかの誰かちゃんと違って大人っぽいしな」

その言葉を聞いて久留美は顔をあげた。

「悪かったわね！！私が純麗先輩と違って可愛くなくてガキくさくてペチャパイで！！」

――そこまでいってねぇよ……

そう言って久留美はマネージャーの仕事をしにコートの近くに行ってしまった。

「……なんだアイツ？」

――よくわからんヤツだなぁ。さっ、練習練習っと。

「お～い我利勉！練習するぞ！」

「わかった。今行く」

そして俺は我利勉を呼び基礎練習を始めたのだった。

Ｎｏ．１１　純也ＶＳ亮　前編（前書き）

３千文字をオーバーしましたのでとりあえずここで切って後半へ続きます。

No．11　純也VS亮　前編

『ありがとうございました』

練習が終わり部員全員があいさつをする。

亮に聞いたのだがこのバスケ部の顧問はいるにはいるらしいが初心者でバスケのルールも知らないらしい。練習にもあまり来ないらしいし、形だけの顧問といったところだ。
だから木ノ下薫が選手兼監督みたいな形のようだ。

練習が終わったら一年生は面倒臭いことにモップがけやボール磨きなどをしなければならない。

俺はさりげに帰るふりをしたのだが、亮に呼び止められてしかたがなく掃除をすることになった。

「かっ、薫さん!!」

亮が突然叫んだ。

俺は亮が叫んだ方向を見てみると薫がモップがけをしていたのだった。
亮はあわてて薫に駆け寄る。

「またですか薫さん!!掃除は自分がやりますからもうあがってください」

「ん？別にいいって。好きでやってるし」

「しかし……自分達は一年なので僕達が掃除をやります」

「いいって。モップがけは俺の日課になってるしな。体育館に感謝しないとな」

「そうですか……すみません」

「じゃあ、ボール磨きをやってくれるかな？」

「わかりました！」

自分から掃除をするとは、木ノ下薫はなかなかのバカだな。

そして俺と亮と博司はボールがしまってある倉庫に向かう。

「お疲れさん」

優が俺に話し掛けてきた。そういえばコイツ見学してたんだっけ？

「あ、優。先に帰っててくれないか？俺ボールを磨かなければならないらしいからな」

「ん？手伝ってやるよ。暇つぶしに」

「本当か！？ありがとよ」

ん～……優は女にモテるわけだよな。

お？今度は向こうがわに久留美と純麗さんが一緒に歩いてるぞ？

「お～い、久留美！」

俺は久留美を呼んでみた。久留美はこっちを向く。

「ボール磨き俺のかわりにやってくれ」

「ふん」

プンといった感じで俺を無視して純麗さんとどこかへ行ってしまった。

「なんだアイツ？まだ怒ってるのか？」

「なんだジュン？また久留美ちゃんになにかしたのか？」

「そんなわけねぇだろ優。なんで怒ってるのかわからねぇ」

「……そうか。まあ、早いとこボール磨き終わらせて帰ろうぜ」

「ああ」

そして俺たちは倉庫へ向かった。

―――――――

―――――

―――

「へぇ〜、そうなんだ」

ウドの大木こと博司が関心をしていた。
ここは体育館の倉庫。
現在ここにいるのは四人。
俺、優、亮、そしてウドだ。
今、みんなで亮の話を聞いていたところだ。

「じゃあ亮くんは薫先輩を尊敬してるんだね」

「まあな」

博司と亮が話をしていた。会話の内容は亮が県でナンバー2の黒沢（くろさわ）高校のスカウトを蹴ってまでこの朱雀高校に来た理由だ。
中学二年のときにたまたま見た朱雀高校の試合で一年生ながらも活躍する木ノ下薫を見てから一緒にバスケをしたいと思うようになったという。

「あんな野郎がそんなに凄いかねぇ……」

俺は亮をからかうように言ってみた。

「おい！薫さんをバカにするなよ？前から気になってたんだが敬語くらい使えよ」

「いやだね！あんな弱ぇヤツに敬語なんて使うはずねえだろ」

「お前よりはるかにつえーよ」

そんな俺と亮の会話に優がはいってくる。

「薫さんに２０対０でボロ負けしたくせによく言うぜ」

「なっ、優！それは言うなって！」

コイツ、たまに悪いヤツになるんだよなぁ。

「え！？完封？クスクス」

ほら、亮が調子にのるじゃないの。

「……さっさと磨いて帰るぞ」

それしか言えない自分が情けない。

「クスクス」

「うるせー！いつか倒すっつってるだろうが！」

争いがはじまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「純也くんと喧嘩したの？」

バスケ部の部室に向かう途中、純麗が久留美にそう話し掛けた。

「え？急にどうしたんですか？」

「だって、さっき無視してたじゃない」

「それわぁ……ジュンが悪いんですよ」

「どうして？」

「久留美は純麗先輩と違って、ガキくさくて、胸が小さいねって言ったんですよ？ひどいですよね」

その言葉を聞き純麗は軽く微笑する。

「クスクス」

「な……おかしいですか！」

「ごめんね、そうじゃないの。ただ純也くんもそこまで悪意があって言ったわけじゃないと思うわよ。今まで純也君がそんな冗談を言ったときはなかったの？」

「そりゃあ、沢山ありますよ！あのときだって……あ！あのときも！」

「そうでしょう。じゃあなぜ今回はそんなに怒っているの？」

そう言って純麗は久留美に微笑む。久留美の心を見透かしているような笑顔だった。

「……それは」

――あれ？私なんで怒ってるんだろう？別にガキくさいとか胸が小さいとかジュンに初めて言われたわけじゃないのに。

「わかりません！！今日は機嫌が悪かったんですよ」

「そう……それじゃあ早く仲直りしてあげてね」

そして純麗と久留美は部室へと入っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所はまたまた体育館。

「よっしゃあ！優、頑張るぜ！」

「ああ」

体育館では試合が行なわれていた。

純也、優チーム対亮、博司チームである。

純也と亮の口喧嘩の末、バスケで勝負することになった。

「ルールは先に１０点先取したほうが勝ちだ」

「わかった。やってやろうじゃねぇか」

亮の言葉に純也が答えた。ちなみにオフェンスは純也チームである。
純也がドリブルをする。
それに亮が腰を落としてついていく。
「ジュン！こっちだ！」
純也は中に切り込んで行った優にパスをだした。
シュッ！
バスケ初心者の博司はいとも簡単に抜かれてしまい、優がシュートをきめる。
「おらおらどうした亮」
「うるせぇ！いまに決めてやるよ」
今度は亮チームがオフェンスだ。亮が得意のドリブルをみせる。
「もらった！！」
亮は純也のスティールをうまくかわして抜き去る。
そして亮はシュートをした。
バァン！！

「何!?」

亮のシュートはあらかじめ待ち構えていた優に見事にブロックされてしまった。

「ふ、残念だったな亮。俺は優にブロックさせるためにわざと抜かれたのさ」

「くっ……」

亮は悔しそうな顔をする。

「嘘つけ!そんな作戦なかったぞ」

「ゆ、優……また余計なことを……」

そしてまた純也たちのオフェンス。

純也が右側へ素早くドリブルで移動する。亮も負けじと食らい付く。

ゴン!

「なっ!スクリーン!?」

亮は優のスクリーン（味方がもう一人の味方についているディフェンスの壁となる）によって純也に抜かれてしまった。

そして博司（うど）が待ち構えているところへドリブルで突っ込む。

「う……うわぁぁ」

ダァァン！

純也はうまく博司をかわしてダンクをきめる。

「どうした亮。４対０だぜ？」

その後の亮の攻撃もミドルシュートを放つが失敗に終わる。
そしてまた純也たちのオフェンス。

シュッ！

パスッ！

優の放ったスリーポイントが綺麗にリングへ吸い込まれる。

「相変わらず綺麗なサウスポー（左利きシュート）だな。お前、実はバスケやってるだろ？」

純也が優に問い掛ける。

「まあな、バンドメンバーで気分転換にちょくちょくな」

「ストバスにも来いよな」

「そのうちな」

これで7対0となった。

はやり初心者同然の博司がいるぶん、亮は不利だろう。

「タイム！作戦タイム」

亮はたまらずに作戦タイムをとった。

純也たちから遠く離れ、亮と博司は会議をしていた。

そしてしばらくすると戻ってきた。

「さあ、またせて悪かったな」

亮が言った。その顔にはどこか笑みが浮かべられている。

「へっ、話し合いをしたところで何もかわりゃあしねぇよ」

亮たちのオフェンスが始まった。

亮と純也がお互いに睨み合う。

No．12　純也VS亮　後編（前書き）

１０話です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます

m（＿）m

No．12　純也VS亮　後編

亮はステップでフェイントをいれ純也を撹乱する。
そして得意のクロスオーバーで一気に抜き去る。
キュッ！
「しまっ――。優！カバーを頼む！！」
「まかせろ！」
亮がドリブルで向かってくるのを優は腰を落として待ち構える。
レイアップシュートの体勢にはいった亮を止めるべく優も跳ぶ。
優のジャンプはドンピシャリのタイミングだった。
「よし！止める！」
「あまいな」
亮はそう言って一度シュートをしかけていた手をひっこめて優をかわし、空中で体勢を建て直し再びシュートをした。
スパッ！
見事に亮のダブルクラッチが決まった。

「う……うまいなぁ。今は完璧にやられたよ。さすがは黒沢からスカウトが来た人だ」

「優！なに感心してるんだよ！はやくせめるぞ」

優が亮に感心しているのを純也が注意をする。

再び純也ボール。

亮は純也をいつも以上に厳しくマークする。

「ちっ…こざかしいぜ」

純也はひとまず中に入った優へとパスをだす。

そして博司とマッチアップとなった優はドリブルで博司をかわしシュートをするため跳んだ。

「これで9点――」

優がボールを手放そうとした時だった。

「今だ！！」

突然亮が叫んだ。

それに合わせて博司が跳ぶ。

「うわぁぁぁ！！」

「何!?」

バァン!

優の放ったボールは博司の腕によってブロックされてしまった。

「よしっ!!よくやったぞ博司」

亮は博司に駆け寄る。

「亮くん……なにがなんだかさっぱり…」

「いいブロックショットだったぞ」

「ブロックショット?」

「ああ、そうだ。相手のシュートを阻止する……お前のその身長でブロックショットは武器になる。これからもっと磨いていくといい」

「う……うん」

その二人の会話を純也が止める。

「おい!たかがマグレのブロックがきまったくれぇで喜んでんじゃねぇよ!!今に負かしてやるからよ」

「ふ、今にみてろよ」

亮たちのオフェンス。

「博司！行くぞ」

「うわぁ」

亮のパスを博司が受け取る。
ボールをもった博司を優が厳しくマークする。

「届かねぇ！」

博司はボールを高い位置でキープをしているため、優はそのボールに触れることができなかった。

「り、亮くん。どうすればいいの！？」

優のプレッシャーが厳しく博司は亮に助けを求める。

「こっちだ！！」

亮は博司からボールを受けとる。純也からそのボールをカットされそうになるが必死にこらえ、なんとかボールを受け取った亮はそのままシュートをする。

ボールは一度ボードにあたり、その後リングに吸い込まれた。

「よっしゃあ！！４対７だ！！」

「ちくしょう！もうすこしでパスカットできたのによ」

純也たちの攻撃。

今度は優がガードになり、それに亮がディフェンスをする。

「優！こっちだ！」

優は純也へとパスを出す。純也は背中で博司を押すようにしてリングにジリジリと近づいていく。

「おらおらどうした博司！？お前の力はそんなもんか？」

「だ、だって、純也くんの力が強すぎ……」

純也の力により、博司は次第に後退していく。
それを見ていた亮は叫んだ。

「博司！負けるな！お前も決して力なら負けてないハズだ。教えたとおりにやってみろ！」

「教えたとおり……」

すると博司は腰を低くしてがっしりと構えた。足腰に力を入れる。

「な？」

このとき博司の後退がとまった。
純也は驚いた顔をしている。おそらく力で止められたのは初めてだろう。

純也はいったんボールを優にかえした。

「もらったっ！！」

それを狙っていた亮はすぐさまボールに飛び付き、スティールする。

「博司、お前なかなかつえ～な」

純也がめずらしく博司をほめる。

「そ、そう？」

「ああ、お前小さい頃から農業手伝ってたろ？」

「うん。そうだけど……それがどうかしたの？」

「ば～か。それが知らないうちにお前の足腰を鍛えてたんだよ」

「そ、そうなんだ。知らなかったよ」

「よし！お前に『畑のボス』の称号を与えよう」

「畑のボス！？」

「まあ、意味は特にないんだがとりあえず喜べ」

「え？なんで？」

「喜べ」

「や、やった～」

ゴン！

「痛！なにするんだよ純也くん！？」

「喜んでねぇではやく試合を再開するぞ！空気読めよ」

「ええ！？」

その後波にのった亮チームはすぐに追加点を決めて、６対７と純也チームにせまる。

更に博司のマグレのブロックなどで相手のオフェンスを阻止し、亮が点をきめる。

これで８対７と亮チームが逆転した。

「純也、逆転したぜ？」

「ちっ、調子に乗らせすぎたか……」

優がボールを持ち、純也たちのオフェンスが始まった。

「優」

純也が真面目な顔で優にパスを求めた。

「ふ、なるほどな」

優はそうつぶやき、パスを呼んでいる純也にパスをだす。

そして、博司を睨み付けて一言、

「わりぃな。黙って負けてやるほど俺は優しく無いんでね」

そう言って先程のように背中で博司を押すようにしてリングにむかう。
それを博司は体をはって止めるのだが、

「え！？」

全力をだしているにもかかわらず博司はズルズルと後退してしまう。

「純也くん！！さっきとは全然違うじゃないか！？」

「まあな。お前程度ならわざわざこんな力で勝負しなくても抜いて普通にシュートは決めれるんだが……俺は負けず嫌いなんでね」

そのまま純也はゴール下まで行き、思いっきりジャンプする。

「う、うわぁぁ」

そのままびびる博司の上からダンクをかました。

ダァン！！！

リングが揺れ、キシキシとした音が鳴り響いた。

「ま、これが俺とお前の違いってヤツだ」
唖然とする博司。これで、９対８となった。

「あと一本決めたほうが勝ちだな」

亮が口を開いたときだった。
体育館の入り口付近である人が試合を見物していることに亮は気付

く。

その人物が近づいてきた。

「か、薫さん！」

その人物の正体は薫だった。亮は驚いた顔をしている。

「いつから見てたんですか？」

「ん？最初から見てたよ。いい試合だったね」

「薫さんはどうしてここに？」

「いや、バッシュを忘れてとりにきたらたまたま試合をしてたんだ」

「そうだったんですか……すみません。ボール磨きの最中に……」

「いいって。それより君たちはなかなか凄いものを持っているな。純也や亮はわかっていたが、正直博司も練習次第ではうまくなりそうだ。それと……そこのキミ」

薫は優を指差した。

「ええ！？俺ですか？」

「そうそう。君はうまくなる。バスケをやってみないか？」

その言葉に優はすこし悩んでから答える。

「すみません……俺、バンドが忙しいんで……」

「そうか別に無理はしなくていいが……残念だ。しかし今年の一年生は凄いヤツが集まったものだ」

そして薫はボールを拾う。

「俺もすこし練習していこうかな？」

そう言ってリングにむかってシュートする。

パスッ！！

ボールはリングの淵にはあたらずに綺麗に吸い込まれた。

「木下薫！！俺と勝負しろ！！」

と純也。

「薫さん！シュートフォームを見てくれませんか！？」

と亮。

「せ、先輩！！ぼ、僕にその……ディフェンスを教えてください！！」

と、更に博司。

薫は一瞬驚いた顔をしてから、

「あ、ああ。一度に全員は無理だから一人ずつな」

その言葉に一年生三人（純也、亮、博司）は……

「うるせぇ！！黙って俺と勝負しやがれ！！」

「薫さん！！教えてください！！」

「ぼ、僕にディフェンス……」

純也・亮『うるせぇ！博司は黙ってろ！！』

「うぅ……」

こうして練習は学校が閉まるギリギリの時間まで行なわれた。

ちなみに純也の戦績は……１１戦１勝１０敗だった。

そのうちの１勝は先にゴールしたほうが勝ちと言うルールを純也がつくり、試合開始早々てきとうに放り投げたシュートがマグレで決まったものだ。

Ｎｏ．１３　桜とタコ

朝目覚める。

またムカつくくらいに小鳥の野郎共がチュンチュンと鳴いている。
自分がもし飛行能力をもっていたのなら、すぐさま追跡して捕獲して更に焼き鳥にしてやるのに……。

「命拾いしたな…」

特に意味のない言葉を呟いてから、俺はいつものように時間を確認して洗面所に向かう。

「あ、お兄ちゃん。オハヨー」

「ああ」

洗面所からでてきた妹とあいさつをかわし、俺は顔を洗う。

パシャパシャ

「う～、冷てぇ」

冷たい水は俺の眠気を一瞬で覚ましてくれる。さっきまで寝ていたのがウソのようになる。

「あら、純也。おはよう」

「ああ」

居間に行くと母さんがあいさつをしてきたので一応返す。
テーブルには朝食が並んでいる。親父はあいかわらず新聞を読むことに夢中だ。

「いただきます」

俺は勢い良く朝食を口に運ぶ。
5分とかからずにかたずけることができた。

「ごちそ～さま」

そう言って俺は制服に着替え、そのまま久留美がむかえにくるのをテレビを見ながら待つ。
丁度よく『お目覚めテレビ』という番組で占いがやっていた。
ちなみに俺は乙女座だ。

『次は乙女座のアナタ！！』

「お？きたきた！」

『乙女座のアナタ！今日はまったくよいことがありません～。喧嘩をしている人がいたら早く仲直りするなり～。特に身長１７０センチ、坊主頭、気性が荒い性格の人は気を付けるなり～』

……。

……うん。

「占いのクセに具体的すぎるだろ！！！なめんなよコラ！おいコラ！コアラ！！でてこいよコアラ！！びびってんのかコラ！？テレビから引きずりだすぞ、このコアラ！！」

※『お目覚めテレビ』の占いのキャラクターはどうやらコアラのようです。

『それじゃあ気を付けるなり～。僕は知らんなり～』

「なにが『しらんなり～』だコラァ！！ナリ？さてはてめぇキ○○ツんとこのコ○○ケだろ！？チョンマゲひっこぬくぞ！！」

「純也！！朝からうるさい！」

「あ？ああ、すまんね」

母さんに注意されてしまった。

しかし何なんだこの占いは？まあ、占いなどこれっぽっちも信じちゃいないんだが、このコアラ野郎は気にいらねぇ……。

そのままニュースでも眺めて久留美を待つことにした。

――――――

――――

――

「なんでむかえにこねぇんだよ！！」

さっきののんびりムードとは一変して今俺は急いで走っている。
久留美がむかえに来るのを待っていたのだが久留美は何故か来なかったため、こんな状況になっている。

久留美の家の前で止まり、インターホンを押した。

ピンポーン

……

ピンポーン

……

相変わらず反応なし。

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン！

『ふわぁ～い、どなたぁ？』

しばらくして返事とともに中から出てきたのは眠そうな女性だった。
いかにも寝起きといい感じの頭で目をこすっている。茶色の髪は肩くらい。身長は１６０くらいだ。

「どなたですかぁ～？」

「ど、どなたですかって……俺です、純也ですよ」

「あら？純也くん？」

そう言って目をぱっちりさせながら俺に顔を近付けてきた。綺麗な顔で思わずドキッとしてしまう。

この女性は久留美の姉の『春風桜（はるかぜさくら）』さんだ。今は寝起きだが、普段は超がつくほどの美人だ。前にも言ったが大学のミスコンに選ばれるくらいだ。

「あらあら、純也くん。そんなに急いでどうしたの？」

「久留美が今日、むかえに来なかったんで……」

「純也くん」

「……はい？」

突然桜さんが俺の名前を呼んだ。

「プリン食べる？」

どかーん！！

思わずコケそうになる。

この緊迫とした雰囲気で相変わらずおっとりとした口調だ。

とゆうか、どっからプリン出した！？マジックか！？

「い、いいえ、別にいらないっす……」

「あらそう…残念ねぇ。プリンおいしいのに」

そして桜はプリンを食べようとフタを開けたところであることに気付いた。

「ああ！！」

「どうしました！？」

俺は桜の言葉を待ち、唾を飲む。

「大変！スプーンがない！！」

ドッカーン！

コケてしまった。

つ～か、プリンをいきなり出すことができたならスプーンも出せよ！！セットで出しなさい。たやすいでしょう？

「ちょっとまっててね～」

そう言って桜さんはスプーンを取りに家の中に入ってしまった。

しばらくして戻ってくる。

「ごめんなさいねぇ～」

そう言ってプリンと一緒にもってきたものを取り出す。
だが言っておく。桜さんのもってきたものはスプーンではない。決してスプーンなんかではない。
すごいツッコミにくいのだが一応聞いてみる。

「あの……ソレ何？」

「え！？何ってスプーンじゃないの」

「違います。よく目をこすって見てみなさい。明らかに丸いでしょう」

そして桜さんは自分の持ってきたものをまじまじと見る。

「あらいけない！！これ、『石』だわ」

ストーン！！

この人、スプーンとストーンを間違えてるよ！！
スゲーよ！なんかすげぇ！すごい知的なボケだよ！

「じゃあこっちね」

そう言って桜さんはどこからともなくスプーンを取り出した。

スプーンだせるのかよ！！だったら初めからだせよ！

「あ～おいしい」

パクパク

桜さんはプリンを食べ初めてしまった。

パクパク

「あの～、桜さん？」

「あら、純也くん」

『あら』って……。

「久留美はいますか？」

「ふ？ふるひはらはっほふひひっへふほ～」

「プリンしっかりと食べてからしゃべってくださいよ！！」

ゴクンとプリンを飲み込んでから桜さんは答えた。

「久留美なら学校に行ってるよ～」

「失礼しました」

その言葉を聞き、俺は速攻学校へ向かう。

「純也くん」

桜に呼び止められた。

「今度は何ですか？」

「はい」

そう言って桜さんが投げたものを俺はキャッチする。

「……これは？」

「タコよ。知らないの？」

タコは生きたまま俺の手に絡み付いてくる。

うねうね

「……」

どうしよう、この状況。

ツッコミどころ満載なんだが……。

「一緒に泳いでね」

「ええ、がんばります」

とりあえずつっこんでいると遅刻してしまいそうなので話を合わせておく。

「それじゃあ純也くん、いってらっしゃ～い」

「はい、それでは」

俺は学校に向かって走りだした。

No．14　反省

「おっしゃあ！間に合ったぁ～！！」

教室に入り時計を確認してみたらどうやら間に合ったようだ。

「ふぅ～」

「どうしたんだ？かなり疲れているな」

いつものように優が話し掛けてくる。

「朝から色々あってな」

「そうか……」

俺たちが話していると久留美が近づいてきた。顔はどこかニコニコしている。

「あら、純也くん」

「くっ、久留美！お前を待っていたら遅刻しそうになったぞ」

「あら、ごめんねぇ～。忘れちゃったの～」

ごめんとは言っているが謝る気はあまり無さそうだ。

「はぁ～……忘れるなんて久留美は幼稚だな。ホラ、タコでも食う

か？」

そう言って俺はタコを取り出す。

「いらないわよ！って、このタコ生きてるじゃない！！」

「君の姉さんからさ。素敵なプレゼントだね」

「お姉ちゃん？まったくもう……」

「え？久留美、タコいらないのか？」

「だからいらないわよ！！」

そう言って久留美は立ち去ってしまった。

「なぁ優」

「……食わないぞ」

「……そうか」

――――――

――――

――

時は昼休み。

その場で弁当を食べるもの、購買へと向かうものさまざまだ。

俺は弁当を手に入れるべく久留美に向かう。

「久留美」

「ん？何、純也くん？」

久留美はとてもニコニコしている。

「弁当も忘れたわけじゃないだろうな？」

「忘れるわけないじゃな～い。ハイ、お弁当」

俺は弁当を受け取り中身を見る。

「……」

「どぉしたの？純也くん」

「久留美、これはなんだ？」

「何って、お弁当じゃない」

俺はもう一度弁当を見る。

ごはんの上に梅干しが一つ乗っかっている。

まさしく絶滅種の『日の丸弁当』というヤツだ。

「久留美、この手のギャグはやめてくれないか？洒落にならん」

「ギャグなんかじゃないわよぉ～。たんと召し上がれ～」

「久留美、昨日から様子が変だが怒っているのか？」

「別に怒ってなんかないわよおぉ」

「そうかそうか、腹が減っているんだな。よしよし、このタコを――」

「食べないわよ」

「……そうか」

オカズをもらう作戦が無いわけではない。

俺は叫んだ。

「お～い、クラスのみんな！聞いてくれ！」

クラスメイトたちの視線が俺に集まる。

「久留美が俺にこんなもん食わせようとするんだ。助けてくれ！」

そう言ってタコを取り出す。

うねうね

タコは相変わらずタコ踊りを続けている。

『おい！あれ生きてるんじゃねえ？』

『まじかよ！春風！いくらなんでも可愛そうだろ！』

『いくら純也だってそりゃないだろ！』

『火星人みてぇだ！！』

中にはよくわからない声も聞こえてきたが、とりあえずうまくいったようだ。

『ほら、純也！そんなもん食ってないでコレでも食え』

『俺もやるよ！！』

ごはんをかたずけるのに必要なオカズは集まった。

「ううん、みんなありがとうな」

そう言って俺は久留美に言った。

「ふふ、どうだ？」

「もう知らない！！」

久留美は教室を出ていってしまった。

「……なに怒ってるんだアイツ？」

「いや、純也。今のはひどいだろ」
優が突然話し掛けてきた。
「なんで？」
「久留美ちゃんだってがんばって弁当つくってきてるんだぜ？」
「日の丸はないだろ」
「はは、たしかにな。でも謝ったほうがいいぞ」
「そうか？」
「ああ」
――確かに俺が悪い気がするなぁ。
「ま、そのうちな」
そう言って俺は弁当を食べた。

Ｎｏ．１５　天才児（前書き）

どうしても僕は長々と書いてしまうクセがあるようです。

No．15　天才児

朱雀高校体育館では日曜の池山工業との練習試合にむけ、より一層部員たちは練習にはげんでいた。

俺はレギュラーたちがフォーメーションやら何やらを練習しているときに、コートのすみっこでひたすら基礎練習をしていた。

俺は木ノ下薫に言われたことを思い出す。

『お前はレイアップシュートというものを練習してくれ。このシュートはもっとも成功率の高いシュートだ。どうやらお前はゴールしたのシュートはダンクだけのようだからな。試合でダンクだけだと厳しい』

「まったく……なにが『もっとも成功率の高いシュートだ』だよ」

レイアップシュートなんか知ってるっつ～の。

できないんじゃなくてやらないんだっつ～の。

そう思いながら俺はリングに向かって走りだす。

ある程度ゴールに近づいたとき俺は思いっきり地面を蹴る。

俺の体はリングに向かってゆく。

ダァン！！

そのままリングにボールを叩きつけた。

「石川トマホーク！！決まったぜ～！やっぱりダンクだろ！」

※石川トマホーク
左肩で相手を押し退け右手でダンクを決める純也の必殺技?

そのとき薫が俺に向かって叫んだ。

「おい純也!まじめにやれよ。基礎も大事だぞ」

「へいへい」

まったく……いちいちうるせぇ野郎だぜ。

そしてまた俺の基礎練習が始まった。
ロボットのように何度もレイアップシュートを繰り返す。
すると突然博司が話し掛けてきた。

「純也くん、がんばってる?」

「ああ?みりゃあわかんだろ。お前のほうは?」

「ドリブル練習をしているんだけど難しくて……」

「そうか……がんばれよ」

特に興味がないので軽く流し、また反復練習を再開する。

シュートが決まり、俺は博司のほうを見た。
相変わらずヘタクソなドリブルをしている。

「お、おっとっと」

敵もいいねぇのにミスるなよ……

俺は博司に近寄った。

「へったくそだな」

そう言って俺はストリート仕込みのドリブルを披露する。

「うわぁ～、すごいね。純也くん」

「まあな。俺のバスケスタイルはドリブルで相手を抜いてからシュートだからな」

「よかったら教えてくれないかなぁ？」

「しょうがねぇな、いいぜ」

俺は博司を見る。

「じゃあ言われた通りにしろよ」

「う、うん」

「まず、腰を落として低く構える」

「こう？」

俺の言葉に従い、博司は低く構えた。

「よし、次は目線だ。ボールばかりを見るな！！相手を睨み付けろ！睨み付けたら決してはなすな！！」

「こっ、こう？」

博司は俺を睨み付ける。

「よしいいぞ！！そして空いているほうの手は……」

「空いているほうの手は？」

「相手を挑発する！！ヘーイヘーイ！！」

「え！？へ、へ～い…」

「違う！もっとだ！ヘーイヘーイ！！恥を捨てろ！ヘーイ！！」

「ヘーイ！」

「よしいいぞ！」

「ヘーイヘーイ！！」

「い～ねぇ！！その調子だ！！」

「ヘーイヘーイヘーイ！！」

ゴン！！

「痛！！純也くん、いきなり何するんだよ！」

「調子にのるんじゃねえ！」

「ええ！？」

「じゃあ次のレッスンに入るぞ」

「う、うん」

そう言って俺は休憩中の亮を呼ぶ。

「お～い亮」

「ん？」

亮が俺たちに近づいてきた。

「亮、悪いが俺のディフェンスをしてくれないか？博司にドリブルを教えてるんだよ」

「ああ、いいぜ」

亮は低く構えた。

「いいか博司！亮みたいにヘットバンドをしているヤツがいたらチャンスだ」

俺は亮のヘットバンドを手でつかみ目の位置まで下げる。

「み、見えねぇ！」

目が見えなくてもがいている亮の顔面に俺はボールをあてる。

「痛!!」

そして跳ね返ってきたボールをつかみ一気に亮を抜き去る。

「どうだ博司。わかったか?」

「う、うん」

「わかったか?じゃね~よ!全部ストリートの技じゃねぇか!!」

亮の飛び蹴りが純也に炸裂する。

「ぐおっ!!いてぇなコノヤロー」

このような感じで時間が過ぎていった。

No．16　パフェ

『ありがとうございました！』

部員たちのあいさつとともに練習が終わる。みんなバラバラに散っていく中、キャプテンの木ノ下薫はマネージャーの赤川純麗に話し掛けた。

「純麗、ちょっといいか？」

「ん？なあに？」

純麗は不思議そうな顔をしている。

「そろそろ試合があるから治療道具や飲み物を部費で買い揃えてくれないか？」

その言葉に純麗は、

「ごめんね！今日はお家の手伝いがあって……。本当はマネージャーの仕事だからやらなくちゃいけないんだけど、ごめんね！」

「いや、無理にとは言わないんだ。俺も予定が入っていてな……」

『あの、私がいきましょうか？』

久留美が突然二人に言った。

「本当？じゃあお願いできるかしら」

「はい」

その会話にさらに純也が加わる。

「お～い、久留美ぃ～。タコ食わしてやるから機嫌なおせよ」

そう言ってタコを取り出す。

うねうね

衰えることを知らないタコは元気よくおどる。

「フン」

「おい！無視はないだろ無視は！」

純麗が二人に言った。

「あらあら、まだ仲直りしてなかったの？」

そして純麗は何かを思いついたような顔をしてから純也に話し掛ける。

「ねぇ、純也くん？」

「はい！？何でありましょうか！？」

「お買い物の荷物重そうだから久留美ちゃんと一緒に行ってくれる？」

「ち、ちょっと先輩！」

当然久留美は反論する。

「はい！わかったであります！無事に荷物を届けるであります」

「こら～！わかるな純也！私一人でも大丈夫だから！！」

薫が純也に言う。

「そうだな。純也、手伝ってやってくれ。よかったな春風」

「薫先輩まで！？よくないです！」

「おい木ノ下薫！！テメーの命令なんかききたくね～よ！！これは純麗さんの命令だからな！お前の命令ではない！」

変な所にこだわる純也だった。

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「こないで！」

「そんなこと言ったって純麗さんからお願いされたんだからしかた

ね～だろ？」

「私一人で大丈夫だから！」

早足でトコトコ歩く久留美に俺はついていく。
まだ怒っているようだ。
タコも食わないし変なヤツだなぁ……

俺たちはストリートバスケットのコートの近くにある商店街へと向かった。
俺たちのすんでいるところは、一応県内で一番発展しているところなので店なんかは結構ある。

――そういえば最近ストバスに行ってないよなぁ…

そんなことを思いながら歩いている時だった。

『純也？純也じゃないのか？』

不意に話し掛けられた方に俺は振り向く。

「ん？カズ！！久しぶりだな！」

そこに立っていたのは身長は俺と同じくらい、ドレットヘアーの男だった。

「カズくん？久しぶり！」

久留美も森村に気付いたようで、あいさつをしている。
この男の名前は森村一輝（もりむらかずき）。

俺の二つ年上で今は高校3年生のハズだ。
昔は毎日のようにストバスをしていたのだが、高校に入学と共に部活をやるという理由でこなくなってしまった。まさしく今の俺だな……
当時ストバスにいたときは『コートができて以来の天才児』などと呼ばれていた。

「おっ、久留美ちゃん。懐かしいなぁ」

「そうね。カズ君はどう？部活は今年で最後なんでしょう？」

久留美が一輝に問い掛ける。

「ああ、もう早いところで引退だな……。純也はしっりと高校に行ってるか？」

「ん？まあな」

「ジュンもカズ君と同じでバスケ部に入ってるのよ？」

久留美が笑顔で一輝に言った。一輝はとても驚いた様子だった。

「へぇ～、純也が部活をやっているとはね」
「別に好きでやってんじゃねぇよ」

「そうなのか？まあお前なら結構いいところまでいけそうだな。俺もキャプテンとしてがんばらないとな」

「なに！？お前がキャプテン！？」

これは驚いた。久留美も俺と同じで驚いていた。

「個性派がそろいすぎてまとめるのが大変だがうまくやっている。純也もいずれ戦うときがくるかもな」

「へっ、そんときはボコボコにしてやるぜ」

「楽しみだな。じゃあまたいつか会おう！実は今、部活の最中に抜け出してきたんだよ……早く行かないと監督に怒られてしまうんだ」

そう言って一輝は俺たちにあいさつをした後走ってどこかへ行ってしまった。

――練習中に抜け出すキャプテンがどこにいるんだよ……

「変わってないね、カズ君は」

「まあな、不真面目なところも昔とそっくりだ。アイツがキャプテンとは…」

「ホントね。ジュンもいつか対戦するときがくるんじゃない？」

「そんときはボコボコにするぜ！！そういえば久留美」

「ん？なあに？」

「機嫌なおったのか？」

「あ……」

思い出した久留美は都合の悪そうな顔をしてから、

「フン」

と言って速歩きで商店街に向かってしまった。

――まったく…かわいくねぇヤツだな。

――――――

――――

――

買い物を全部終えて俺たちは学校に向かっていた。

「あっ！」

重い荷物をもった久留美がバランスを崩してコケそうになるがなんとか持ちこたえる。

「久留美、俺が持ってやろうか？」

「別にいいわよ。それよりもう帰ったら？」

――本当にかわいくねぇ…

久留美は相変わらずフラフラしながら歩いている。

ジュースも粉のヤツを買えばいいのにわざわざペットボトルなんか

買うからこうなるんだよ……

「あっ！」

久留美が転ぶと思った俺は素早く久留美の荷物を持ってないほうの腕を掴む。

なんとか転ばなくてすんだようだった。

「ほら、あぶねぇだろ？」

そう言って俺は久留美の荷物をもつ。

「……」

「……」

「重くない？」

「あたりめーだ。お前と一緒にすんじゃねえよ」

「力だけなら利用価値があるわね」

――ほっ、本当にかわいくねえヤツだな……

そして俺たちは歩きだす。

学校につき部室に荷物を置いた後（ジュースは冷蔵庫へ）俺たちは歩いて１５分の帰路を移動していた。

「……」

「……」

沈黙は続いたままだった。

「久留美」

「なに？」

俺は弁当（日の丸）を取り出す。

「ほら、うまかったぞ。またよろしくな」

「……うん」

久留美はうなずいてそれを受け取る。

「パフェ」

「あ？」

――いきなり何言ってんだこいつ？

「パフェおごってくれたら許してあげる」

「はぁ？今からか？」

「そう、今から。じゃあ行くわよ」

「おい、ちょっと待てって！」

。

こうして一日は過ぎていった。

純也、出費２３００円。

――まったく食い過ぎなんだよ……

No．17　タコVS妹

朝起きて時計を確認する。

時刻はちょうど１０時をまわった所だ。
ちなみに今日は土曜日で学校が休みなためこんな時間まで寝ていた。
うちの学校は一応進学校で土曜日は普通、補習があるのだがメンドーなので行かないことにした。

ん？誰だ今『貴様バカじゃなかったのか』と思ったヤツは？
確かに俺は頭がいいわけじゃないが馬鹿なわけじゃないぞ？母が母なため、勉強はある程度やっていた。
まあ、最近は真面目にやってなかったから成績は急降下中なのだが……

ど～でもい～や

「部活だりぃな」

今日は午後から部活があるらしい。
果てしなくめんどくさい。

そんなことを考えながら部屋からでて一階へとおりる。
またいつものように顔を洗い居間へとむかう。

「あら、おはよう」

「ああ」

母さんがあいさつをしてきたので返す。
妹は受験が控えているため学校だな。
そして昨日から飼い始めたタコの水槽に向かう。

タコは相変わらず元気に泳いでいる。ちなみに名前は『タコス』だ。
『そりゃあどっかの国の食いモンの名前だろうが！！』と思った人はどうか抑えてほしい。
実際俺もそう思ったのだが母さんが決めたことなのでしょうがない。
反抗するとめんどくさいことになりそうなのでやめておいた。

そんなことを考えながらも俺は昨日のことを思い出していた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時は昨日。

久留美にパフェをおごって、自宅についたときだった。

「ただいま」

「あ、お兄ちゃんお帰り～」

妹が奥の部屋からでてきた。そして目線は俺の手に持っているものに集中する。

「お、お兄ちゃんそれは！？」

「ん？ああこれか。タコだよタコ」

「タコ！？」

じゅる

「ん？絵梨佳、今変な音がしたんだが……」

「な、なんでもないよ。それよりお兄ちゃん、お風呂入ったら？」

「ああ、そうだな」

俺は風呂へと向かった。
体を流し湯槽につかる。

「まったく……久留美はパフェ食い過ぎなんだよ…」

ストバスの賭けバスケは俺の大事な収入原だったのだが最近はまったく行っていないため金欠だ。

十分リラックスした後、風呂からあがり台所へと向かった。
そのとき台所で繰り広げられていた光景に俺は言葉を失った。

「こら～！このタコ！かんねんしなさ～い」

テーブルにくっついたタコを必死に引き剥がそうとする妹、絵梨佳。
絵梨佳に剥がされまいと必死に抵抗しているタコ。

鍋でお湯をわかしていることから妹の動機は見え見えだ。

――あの野郎！ユデダコにするつもりだな。

「こら絵梨佳、やめろって！」

「私、タコ、食う。ＯＫ？」

「ノーだノー。何でカタコトなんだよ！」

「お兄ちゃん、邪魔しないで！私はタコを食うのよ」

「言ってる意味がわからん！あとでスーパーで買ってやるから！」

「うふふ、お兄ちゃん。邪魔するのね？」

不気味な笑みを浮かべながら妹は包丁を握り締めて俺に向かってきた。

「絵梨佳、やめろって！！リアルに恐いから！！冗談にならないって！」

「ウフフ、冗談なんかじゃないわよぉ～。ウフフ、タコタコタコス、足はたまに八ぽ～ん♪」

――いかん！完全に目が逝っている！！

妹は恐ろしい目付きでジワリジワリと近づいてくる。

「うふふ、なんでイカは十本なんでしょうね♪」

――知らねぇよ！！つ～かマジでやばい！このままでは殺られてしまう！

そのピンチを救うのが以外にも母さんだった。

「あらあら、絵梨佳。ダメじゃないの。お兄ちゃん刺しちゃ」

笑顔で語りかけてきた母に妹は謝った。

「ご、ごめんなさい」

――母さ～ん、言ってることはおかしいが助かったぜ！

「いい？絵梨佳。タコというものはね……」

――うんうん

俺はうなずきながら母の説教を聞いていた。

妹よ、母に叱られるのもいい経験だぞ？

「こうやって料理するものなのよ！！」

――マッ、マザ～！！

そこには先程の笑顔の面影もない母がいた。

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「助かってよかったな」

俺は水槽で元気よく泳いでいるタコに話し掛ける。
昨日は俺が説得しなかったら間違いなくこのタコスは変わり果てた姿で夕食に並んでいたことだろう。
その後もこっそりとタコスを料理しようとする妹を阻止するのがとても大変だった。

「まったく、のんきに泳ぎやがって……」

そんなタコスを見ていたときだった。
タコスは突然水面から顔をひょっこりだした。

「ん？どうした？エサか？」

ピュ～

タコの口からスミがだされ、俺の顔に一直線に向かってきた。
俺の顔は一瞬で真っ黒になる。

……。

……ニコ。

「てめ～！優しくしてやりゃあ調子にのりやがって！大阪名物すんぞこの野郎！？」

相変わらずタコスは能天気に泳いでいる。
そんなタコスを見ていたら怒っているのも馬鹿馬鹿しくなってきた。

「暇だなあ……」

時計を見ていたら十一時を過ぎていた。

「……」

――早く部活に行くのもいいかもな。薫を倒すために秘密特訓だ！

そして俺はタコスのスミを洗い流してから学校へと向かった。

No．18　バリエーション

学校につき、体育館の入り口前に立つ。

「よっしゃあ！一番乗りだぜ！」

と、思っていたのだが体育館の中からドリブルの音が聞こえる。
いやな予感がしつつも扉を開ける。
そこにいたのは最悪なことに木ノ下薫だった。

「カオル～！！なんでお前がいるんだよ～！」

薫も俺の存在に気がついたようだ。

「お？純也か。ずいぶん早いな」

「早いな、じゃねぇよ！！オメーこそいつからいたんだ？」

「十時くらいだ。今日は補習もないしシューティングくらいやっておこうと思ってな」

――俺が起きた時間じゃねえかよ！！これでは秘密特訓が台無しじゃん。

「純也こそどうしたんだ？こんなに早くきて」

「べ、別に……補習の帰りに寄っただけだよ」

その時だった。

『お？純也じゃね～か』

『おはよう、純也くん』

亮と博司も来てしまった。

「お前ら！どうしてここに？」

俺の質問に亮が答えた。

「博司と一緒に自主トレしようと思ってな」

――クソ～、秘密特訓をするならもっと早く来るべきだったか……

その後も我利勉も来てしまい、さらには永瀬勇希まで来てしまった。

『おねがいします』

『ん？みんなずいぶんと早いな』

結局俺の計画は台無しになり早くから六人で練習が開始されることになった。

木ノ下薫と我利勉翔太、永瀬勇希はシュート練習。お互いに確認しあったりしているようだ。

長谷川亮と大山博司は1対1をしている。博司はひたすらディフェ

ンスのようだ。

そして俺は……

「こら～！薫！なんで俺はジャンプシュート練習なんだよ！」

俺は薫に駆け寄る。

「言ったろ？お前はシュートのバリエーションが少なすぎる」

「ジャンプシュートくらいできるっつ～の！やらないだけだっつ～の！薫のクセに生意気だぞ！？」

なぜか俺の口調が猫型野郎と暮らしているメガネの少年をイジメているガキ大将みたいになっているが気にしない。

薫はため息を吐きながら言った。

「純也、ためしにここからシュートをうってみろ」

リングからすこし離れたところを指定してきた。

「へっ、軽く決めてやるぜ」

そう言って俺はボールを構えてジャンプする。

そのままリングに向かってボールを放った。

ご～ん

ボールは見事にリングとは程遠いバックボードにあたってしまった。

「……」

「い、今のはたまたまだ！！次こそ決めてやるぜ！」

そう言って俺はシュートをするが失敗に終わる。
その後もシュートを試みるが決めることができなかった。

「あれ？何で？ジャンプシュートは昔から……」

――練習してねぇじゃん！よく考えたらストリートのときもほとんどダンクかレイアップだった！！

「ほらな、わかったか純也」

「そのうち決まるっつ～の」

薫はやれやれといった感じでリングを向く。

「いいか純也。ジャンプは真上に跳ぶんだ。横に流れたりしてもだめだ」

「……」

肯定すると照れ臭いので黙って見ていることにする。

「リングをよく見るのは当たり前だな。シュートは手首ではなく肘で打つように心がけろ。」

そう言って薫はフォームを構える。

「シュートをうつ場所によってボールの構える高さも変えるんだ。リングに近いときはボールを高く構える。離れているときは少しさげる」

そして薫はシュートを放つ。

そのシュートフォームは認めたくはないが綺麗で見ている間はまるでスローモーションのようだった。

パスッ！

高い打点、低い弾道のシュートはリングの淵にはあたらずに綺麗にリングに吸い込まれた。

「へ、汚ねぇシュート」

「ふ、しっかりと練習をするんだぞ」

薫は微笑から自分の練習に戻ってしまった。

――肘でうつように心がけろ……か。

とりあえず今は練習しないことにする。

こっそり秘密特訓をして驚かせてやるぜ！

Ｎｏ．１９　課題

――日曜日

朝、バスケ部員たちは朱雀高校の校門前に集合していた。
天気は快晴で普段は俺の嫌いな小鳥共のさえずりも心地よく聞こえる。
そんな中キャプテンの薫が部員たちに言った。

「よし、みんな集まったな。じゃあ行くぞ」

そう言って薫は市のレンタルバスに乗り込む。それに俺たちも続く。
今日は池山工業と練習試合ならしい。
池山工業は俺たちと同じ市にあるのでバスで２、３０分くらいだ。
「うわぁ～…純也くん。練習試合だよ、緊張するね」

俺の隣に座った博司が俺に緊張した様子で話し掛けてきた。

「ん？オメ～は試合にでないんだから普通、緊張しないだろ」

「確かにそうだね。初めてだから緊張するんだ。純也くんは緊張しないの？」

「あ？誰に言ってんだよ。俺は無敵だからな」

「ははは、ごめんごめん」

俺の言葉に対し亮がわざわざ後ろの席から言ってきた。

「ま、純也も試合にでないから緊張しないのも当然だな」

「あ～？俺はキャプテンでエースだぞ？でないわけあるかっての」

「キャプテンでエースは薫さんだろうが！」

シート越しの口喧嘩が始まった。

「あ、あのぉ……二人とも喧嘩はやめようよ」

純也・亮『うるせぇ！博司は黙ってろ！』

「ううう……」

俺たちの口喧嘩は熱くなるばかりだ。

俺が丁度『お前の母ちゃんデベソ！』と言い放ったときだった。

「おい、おまえら、うるさいぞ。試合前に変なことで体力を使ってどうする？」

木ノ下薫に怒られてしまった。

「す、すみません」

亮はとても申し訳なさそうな顔をしている。

「まったく……静かにするんだぞ？」

そう言って薫は席に座ってしまった。

「亮、お前のせいでうるせぇ説教（約八秒）聞くはめになっちまっただろうが！」

「お前が薫さんを差し置いてキャプテンだのエースだのほざくからだ！」

またまた口喧嘩が始まってしまった。

「まったく…アイツら二人ときたら……」

その二人の口喧嘩を薫はやれやれといった様子で聞いていたのだった。

――――――

――――

――

俺たちは池山工業につき、控え室へと案内された。

校舎は新しくも古くもなくどこにでもありそうな感じだった。

「それでは今から番号を渡す。呼ばれたら返事をして前にでるように。純麗、たのむ」

「はい」

薫に呼ばれたマネージャー純麗さんはみんなの前へとでる。今日も相変わらず可愛いなぁ。つ～か薫！純麗さんを気やすく呼び捨てに

するんじゃねぇ！

「４番、木ノ下薫君」

「はい」

薫は返事をしてユニフォームをもらう。つ～かコイツが４番とは気に入らねぇ……

「５番、永瀬勇希君」

「はい」

そういえばコイツ副キャプテンだったな。あまりしゃべったことねぇしよくわからねぇヤツだな。

「６番、小田原君」

「……はい」

たしかコイツは三年だったな。パワーフォワードで俺と同じポジションだ。あんまり目立たないしおとなしいヤツだ。

「７番、長谷川亮くん」

「はい」

ん？

「なんでお前が７番なんだよ！！」

「お前が入部する前から7だったよ！！」

――なにぃ！？これはなにかの間違いだ！俺が亮よりしたの番号なんてありえん……

「８番、我利勉翔太君」

「はい」

我利勉まで俺より上かよ！！ヒョロヒョロのクセに！

その後も純麗さんによる番号の発表が続く。

「１８番、石川純也くん」

「え～！？俺が最後かよ！薫！どういうことだ！？」

「いや、当たり前だろ。お前はまだ入部して間もないし。もらえないヤツもいるんだしもらえるだけありがたいと思え」

「頼む～！！亮より下の番号はいやだ～」

ダダをこねてみる。それに対し薫はしかたがなさそうに言った。

「……聞くだけ無駄だがお前は何番がいいんだ？」

「４番！！」

俺はきっぱりと言い放った。

「ダメだ……まあ我慢するんだな」

マジかよ!?じゃあ4番以外の番号……

石川……

石……岩?

岩、岩、岩……ロック…

6!!

「じゃあ6番は!?」

「いきなりどうした?」

「いや、『ロック石川』なんつって」

「くだらん……いいわけないだろ」

そのときだった。3年の無口で気の弱そうな小田原が俺たちに言った。

「あのぉ……僕6番じゃなくていいからみんな1番ずつズレるのはどう?みんながよかったらだけど」

小田原に薫は、

「小田原、別に純也の言うことなんて気にしなくていいんだぞ」

「別に番号がすべてじゃないし、純也はうまいからね。いいんじゃない？」

「俺はあまり気が進まないが……」

その後、俺は奇跡的に6番を勝ち取る？ことができた。普通の学校ならダメだと思うが朱雀はおとなしい人が多いからできたことだろう。実際、亮以外は反対する様子は見られなかった。番号のほうは亮が8番、我利勉が9番となった。

部員のみんなはそれぞれもらったユニフォームに着替える。言わなくてもわかると思うがマネージャー（純麗さん、久留美）は部屋の外にいる。

「ふふふ」

俺は笑みを浮かべながら亮に向かって『6』の番号を見せる。

「……」

「ププッ……8番。プププッ……俺より下……プププ」

「だぁ～！！やっぱり気に入らねぇ！何でお前が6なんだよ！！」

「ジツリキだよジツリキ（実力）。チミとはデキがちがうからなぁ～」

「どこが実力だ！！九割は情けじゃねぇかよ！！」

「……ププ」

「なんだよ？」

「……負け犬はよく吠える。な～んてね、エヘ♪」

「こ…殺す！！なにが『エヘ♪』だよ！！いつか殺してやる～！！」

『ち、ちょっと亮くん落ちつきなよ』

暴走する亮を博司が止める。

「あ、博司か。スマンスマン熱くなりすぎた」

亮は博司の言葉によって落ち着いた様子だった。
俺も言いすぎたな、と思い亮に話し掛ける。

「なあ、亮。すまなかった。元気だしてくれよ」

「……あ、ああ」

ニヤ

「今日はがんばろうな。『負け犬』」

「うがぁ～！！」

「亮くん、落ち着いてよ！！」

「とめるな博司！！アイツは絶対に殺す！！」

亮は博司に後ろから両腕をつかまれて身動きがとれない状況だ。博司が手をはなしてしまったら狂犬のごとく俺に襲い掛かってくることだろう。

さらに俺は亮を激怒させるべく手のひらをピンと伸ばし、口をとがらせてペンギンの真似をしながらダンスをする。

ヘラヘラ～

ドカッ！

俺はよちよち歩き、わざとらしくコケてみる。

「転んじゃった……エヘ♪」

「ぬぉ～！！ぶっ殺す！！！」

「亮くん！！落ち着いて！」

「博司！とめるな！俺はアイツを殺す！殺る！殺める！！アイツを殺して俺も死ぬんだぁ！！！」

「り、亮く～ん！！」

その後俺たちは暴れる亮を落ち着かせようと必死だった。

No．20　悩み

『おねがいします！』

両チームが向き合いお互いにあいさつをする。
コートの上には１０人。
まさに試合の始まる寸前である。
ちなみに朱雀高校のスターティングメンバーは、

４番　木ノ下薫　　ＳＦ
５番　永瀬勇希　Ｃ
７番　小田原君　　ＰＦ
８番　負け犬亮　　ＰＧ
９番　我利勉翔太　ＳＧ

俺がベンチなのは気に入らないが、まあ、高みの好物といこうか……

※見物です。

試合が始まる。

朱雀は得意のパス＆ランで走るバスケをみせる。
さらに木ノ下薫の活躍などもあり大量に得点する。
前半終了時点で
４２―３３とリードすることができた。

しかし、黙って負けている池山工業ではなかった。
相手の攻撃が木ノ下薫中心とみて、薫に二人ディフェンスをつける。

そして肝心なノーマークとなった我利勉翔太だったが、スタミナが続かずいつもなら決まるスリーポイントもはいらない。

しかたがなく我利勉翔太は同じ二年生の背番号１０番吉原（よしはら）さんと途中交替となる。

「おい久留美、薫にマークが二人ついたぞ？大丈夫か？」

俺はベンチで隣に座っている久留美に話し掛ける。

「きっと大丈夫よ。薫さんにマークを二人ついたのは別に初めてじゃないもの」

久留美の言葉どおりだった。二人のマークなど気にせず次々に点数を決める。

後半になってみんなのペースが落ちているのだが木ノ下薫は逆にペースがあがっているようにも見える。

薫につられてメンバーも必死についていってるようだった。

『試合終了！』

『ありがとうございました！』

終わってみれば

８６―５８で勝利した。

―――――――

―――――

――

――体育館

部員たちもみんな帰った後木ノ下薫は一人シューティングをしていた。

「どうしたらいいものか……」

――たしかに試合には勝った。しかし、我利勉のスタミナ、永瀬のリバウンド、他にもインサイド強化など課題は残った試合だった。たまたま、戦った相手が池山工業だからよかったものの、もしも白川だったら……

そう思いながら薫はリングに向かってシュートをする。

そのボールはリングの淵にあたり、リングの外へと弾きとばされてしまった。

「くそっ……」

――こうなったら……少々問題ありだがアイツらを使うか……

薫のシューティングは夜遅くまで続いた。

Ｎｏ．２１　我が目標に狂いなし　前編（前書き）

すこし遅れ気味の更新ですみませんｍ（＿）ｍしかも、またまた前編と後編にわかれます。

Ｎｏ．２１　我が目標に狂いなし　前編

朱雀高校体育館。

またいつものようにバスケ部員たちが練習に励んでいる。
チーム全体で基礎練習をした後レギュラーたちは実践向き練習、レギュラー以外の一年はまた引き続き基礎練習をしている。

俺は薫にあたえられた課題をこなしていた。
主にルールの確認やレイアップシュートだ。
ジャンプシュートは秘密特訓して驚かせてやるつもりなので今は練習しない。
ちなみに博司はヘタクソなドリブルを繰り返している。

「デラックス石川シャイニングシュート零式！！」

※ただのレイアップシュートです。

さすがにノーマークでは外すことはなく簡単に決めることができる。

毎回毎回基礎ばかりではさすがに嫌気がさしてくる。
――まったく……俺はシュートロボかっつ～の
気晴らしに博司（ウド）でもからかいにでもいくか。

懸命にドリブル練習をしている博司に背後から近づく。あいかわらずドリブルはヘタクソ茄子（↑意味不）でドリブルをしている間はボールから目を離すことができないようだ。
そのスキを見逃す俺ではなかった。

「スキ有りぃ～！！」

「うわっ！？」

素早く博司からボールを奪い取る。

「へへ～」

「ちょっ、ちょっと純也くん！何するのさ！かえしてよぉ」

「ボールがほしかったら私から奪い取ってみろ！もし取ることができなかったら……」

「取ることができなかったら？」

「貴様の命は無い」

「ええ！！なんでそうなるのさ！？」

「つ～かもう死んでるし」

「え～！？」

「つべこべ言わずにかかってこい」

「う、うん」

博司は返事をしてからドリブルをしている俺に向かってくる。
まるで牛が向かってくるようだ。
それを俺はいとも簡単にかわす。

「よっと」

「あれ？」

自分ではスティールしたつもりだろうか？博司は不思議そうな顔をしている。

「おらおら！どうした？」

「よ、よぉ～し」

気合いを入れた博司が再びスティールを狙い向かってくる。
博司はボールに触れることすらできなかった。

俺はわざとらしくミスしたフリをして地面にボールを転がすようにする。

チャンスとばかりに思った博司はそのボールに飛び付く。

俺はそのタイミングを見計らって地面に転がったボールを足のつまさきですくい上げる。

当然、急に目標を見失った博司は豪快に転ぶ。

ズドォン！！

博司の巨体にピッタリな鈍い音が響いた。

「ひっ、ひどいよぉ純也くん！」

「あまったれるな!!」

「!?」

「これがもし戦場だったら貴様の命は無いぞ!!」

「意味がわからないよぉ」

こんな感じで俺たちはひたすら1ON1を繰り返した。
博司がボールをとることができず、すでに泣きがはいってきたときだった。

『よし!集合だ』

突然、キャプテン木ノ下薫の声が鳴り響いた。
部員たちは薫のまわりに集合する。

「みんな集まったな?今から5対5をはじめる。と言ってもいつもの5対5とは違う」

部員たちは薫の言葉を待ち息をのんだ。

「インサイド強化などの朱雀にはまだまだ課題が多い。そこでだ、2、3年生合同チーム対1年生チームの試合をはじめる。1年生も結果次第ではどんどん試合で使っていくつもりだ。」

『おお~』

完成が沸き起こる。

さらに薫の話はつづく。

「それと2、3年生は相手が1年生だからといって手を抜かないでほしい。これは試合で即戦力になる1年生を発掘するテストだと思ってもらっていい。徹底的にやってくれ。もちろん俺や永瀬勇希、小田原くんも参加する」

『え～!?』

『まじかよ!!』

『薫さんや勇希さんがでてくるなんて洒落にならないぞ!?』

『勝てるわけが無い……』

1年生たちはみんな弱気になっている。それもそうだろう。朱雀高校を1年生のときから引っ張ってきたエース、木ノ下薫や現朱雀高校副キャプテンの永瀬勇希などがいるのだから1年生たちが弱気になるのも無理はない。ただし、約2名を除いては……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おい薫!俺を敵にまわしたことを後悔させてやるぜ!!」

「薫さん!日頃の練習の成果、見てもらいますよ!!今日は思いっきりやらせてもらいます」

弱気になってびびっている1年生の中に2名、燃えている奴らがいた。

純也と亮である。

薫はそんな二人に言った。

「ははは、その勢いだ。遠慮せずにかかってこい。俺も手加減はしないつもりだ。よし、勇希。はじめるか」

「ああ」

永瀬勇希が答えると同時に部員たちが散らばっていく。
お互いにコートの端っこに別れ、作戦会議をする。

1年生たち8名は亮の周りに集まっていた。

『どうする？亮くん？』

心配になった1年生の渡辺が亮に問い掛ける。

「相手は薫さんや勇希さんがいるからどこからでも点数を取られるだろう。しっかりとディフェンスをすればなんとかチャンスが見えてくるかもしれない。ただしそれは簡単にできることじゃないがな……」

亮がそう話しているときだった。

「思いついたぞ！！」

突然純也が叫んだ。

「どうした？」

亮が問い掛ける。

「チーム名なんだけどさ、『石ちゃんズ』って言う名前と『ストーンリバーオールスターズ』って言う名前どっちがいいと思う？」

ドカーン！

緊迫した空気が一瞬にして消し去られ、メンバーたちはずっこける。

「純也！勝つ気があるのか！？」

亮が言うのも無理はないだろう。亮の質問に対し純也は急に真顔になり答えた。

「勝つ気？俺は負ける気なんかハナからねぇよ」

さらに純也は、

「向かってくる敵は全力でぶっ殺す。そうだろ？いまの俺たちに作戦もクソもあるか？戦う前からびびってどうすんだよ？」

その言葉に亮は笑みを浮かべ

「そうだな、今は思いっきりやるしかないな。よし、みんな！相手が上級生だからって弱気にならないで思いっきりやろうぜ！」

『お～！』

『何も力を出さずに終わるより勝ち負け気にせず全力でやるほうがよっぽどいいもんな』

「っしゃあ!!今日でレギュラーが全員1年にしてやろうぜ!!俺も基礎練習には飽きてきたことだしよ」

『おっしゃあ!!』

純也の言葉にチームの指揮は高まる。

それを見ていた薫は自分の周りに集まっている2、3年生に言った。

「ははは、今年の1年生は元気だな。どうやらアイツら（1年）は負ける気が無いらしい。それに答えてやるように頑張っていくぞ!!」

『オッス!!』

両チームからそれぞれ選びぬかれた10人がコートの中心に集結した。

ちなみにスターティングメンバーは……

2、3年合同チーム

4番　木ノ下薫　SF
5番　永瀬勇希　C
7番　小田原君　PF
9番　我利勉翔太　SG
10番　吉原さん　PG

１年生チーム（石ちゃんズ）

６番　石川純也　ＰＦ
８番　長谷川亮　ＰＧ
１６番　渡辺くん　ＳＧ
１８番　遠藤　ＳＦ
番号なし　大山博司　Ｃ

となった。

ジャンプボール

やはり背が高い分博司が有利で博司が弾いたボールを亮が取り、見事に石ちゃんズのオフェンスとなった。
亮がハーフコートまでボールを運ぶ。
そして、ひとまずスモールフォワードの遠藤にパスをだした。

遠藤がドリブルをはじめる。その遠藤を容赦なくマークする木ノ下薫。
遠藤がたまらずにパスを出そうと周りを見渡したときだった。

パシッ！！

一瞬のスキを突かれ、遠藤は木ノ下薫にボールをスティールされてしまった。

「くっ！」

ターンオーバーをした木ノ下薫に亮が懸命についていく。
薫のドリブルは速く、ついていくのにも亮はやっとのようだった。
薫がスリーポイントライン付近に近づいたときだった。
キュッ！
薫はレッグスルー（股を通すドリブル）のクロスオーバーをし、急にその場でブレーキをかける。
「な！？」
急に止まった薫に亮は対応できず、体が流れてしまった。
薫はそのままジャンプシュートをして、あいさつ代わりのスリーポイントを決めた。
「亮、すまん俺……」
薫にスティールされた遠藤がボールを拾いながら申し訳なさそうに言った。
「ドンマイドンマイ。気を取り直していこう。しかし味方が全員戻っていないのに一人で決めるとは……さすがは薫さんだ」
――クローズアップシュート（ランニングからのジャンプシュート）か……走っているときに急に止まって放つシュートは予想以上に難しい……それを難なくやってのけるとはな。

「ふふ、追いかけても追い付けない存在……か」

「亮？どうした？」

亮が心配となり、遠藤が声を掛ける。

「いや、なんでもない。早くパスをくれ」

「あ、ああ」

亮は遠藤からパスを受け取る。

――やっぱり目標はこうでなければな！俺が目指している人に間違いはない！！

「薫さん……この借りはキッチリと返させてもらいますからね！！」

うれしさのあまり笑みを浮かべる亮だった――。

Ｎｏ．２２　我が目標に狂いなし　後編

亮がハーフコートまでボールを運ぶ。

その亮を2年生の吉原さんがマークをする。

しかし、さすがは県でナンバー2の黒沢高校からスカウトがきた男。

吉原さんのマークなど楽々かわしているようだった。

「亮！」

純也が中のポストに上がり、亮にボールを求めた。

亮はそれに気付き、純也が声を出す前からすでにパスをだしていた。

パスをもらう純也に7番、3年生の小田原君がマークをする。

しかし次の瞬間、小田原君の顔は驚愕の顔となる。

「え！？」

純也にパスが渡ったとたん、すぐに抜かれてしまったのだ。

純也はそのまま小田原君を抜き去りレイアップシュートを決める。

パスッ！

ボールはリングを通り抜ける。

「純也ナイス！」

「おお！」

亮の言葉に純也は答える。

そんな中、小田原君が立ち尽くしていた。心配になり薫が声を掛ける。

「どうした小田原？」

「なにがおきたのかわからなかった。純也にボールがまわったと思った途端に抜かれていた……」

「ああ、アイツはパスをもらう前からすでにバックターンで抜きさる体勢となっていた。さらに驚くのはアイツの加速力だ。」

そう言って薫の話はつづく。

「抜き去る方向の膝の力を一瞬抜きその勢いで一気に加速したんだ。こうすれば踏ん張る本来踏ん張っていた時間を削減できるし明らかに踏ん張るより速い。これは日本の古武道の動きと共通してるんだ。」

「古武道？」

「前に一度雑誌で見たことがある。無駄がなく日本古来の動きだそうだ。スポーツ界でも注目され始めている。まあ、純也は古武道なんてしらないだろうな。自然と身についたものだろう」

「そんなものがあるのか……」

「はは、そんなに気を落とすなよ。いくら古武道言っても純也は止められないほどキレがあるわけではないしな。小田原なら今までどおりに普通に止められるさ」

「ああ、ありがとうな」

そして2、3年合同チームの攻撃となった。

2年生のポイントガード、吉原さんがボールを運ぶ。永瀬勇希にパスをだす。そのままボールは我利勉の手に渡る。

我利勉がシュートをした。

そのボールは弧を描きリングに向かう。

しかしリングに嫌われてしまい、外してしまう。

「っのやろぉ!!」

そのボールを純也がうまくリバウンドした。

「純也!!」

純也が取ったのを確認して亮は速攻のため走る。

「ドカーン!!」

純也の意味不明な言葉と共に放り投げられたボールはすごい勢いで

前を走る亮に向かっていく。

バシィィッ！

鈍い音がなり亮はボールをキャッチする。
そして前を見ると薫がついてきていた。

――くっ、さすが薫さん！戻りがはやい！

亮のドリブルに薫がついていく形となる。先程（ＮＯ．１５参照）
とはお互い逆の立場となった。

なかなか振り切れない薫を相手になんとかリングに近づこうとする。
そしてリング付近で踏み切った。

薫もブロックのために跳ぶ。

亮は一度シュートをしようとして差し出していた手を引っ込める。
そう、いつぞやの純也たちとの３ＯＮ３で見せたダブルクラッチで
ある。

しかし、薫はそれを読んでいたらしくブロックのタイミングはドン
ピシャリであった。

――まだだ……

薫は亮がシュートをするのを待ち構えているようだった。

――まだだ……

「なにっ！？」

――まだだ…

薫は驚きの表情を浮かべている。

薫は亮をブロックするために真上に跳んだ。

しかし亮はリングから少し離れたところを目標に跳んでいた。

しかも、リングは亮からして見れば後ろ。コレでは入るのも入らない。

――今だ！！

亮は少し離れたところから後ろに向かってボールを放り投げる。

ボールは一度、二度リングの淵にあたりリングの中に吸い込まれた。

パスッ……

亮は薫をみて一言、

「チビはチビなりに考えてるんですよ」

そして亮はディフェンスをするために戻る。

「ははは、なんてヤツだ」

微笑している薫に永瀬勇希が話し掛ける。

「ドンマイ、マグレだ。気にするな」

「マグレじゃない」

「ん？そうかぁ？」

「あれがヤツの戦い方なのかもな」

「ずいぶんと不思議な戦い方だな」

「そうだな」

そして2、3年の攻撃が始まる。

吉原さんがボールを運び、薫へとパスがまわる。

永瀬勇希が中へと切り込んでボールをもらった。
それに博司（ウド）がマークをするが、永瀬のジャンプシュートをあっさりと決められてしまう。

「何やってんだよウド！！この前のブロックはどうした？」

純也が博司に言った。

「え？ブロック？わかった……ごめん」

そして石ちゃんズの攻撃。いつものように亮がボールを運び試合を展開する。

純也にボールがわたりシュートにいく。
小田原君は頑張ってついていったのだが抜かれてしまいシュートを決められる。

これで6―5と、石ちゃんズが逆転した。

2、3年生の攻撃が始まり吉原さんが薫にパスをだす。そして再び永瀬勇希にボールがまわる。

そのままシュートにいこうとジャンプをしたときだった。

「博司！」

純也が突然叫んだ。

「え？あ、うわぁぁ！」

その意味を理解したのか博司はジャンプをした。

「何！？」

突然の壁の出現に永瀬勇希は驚いた様子だった。

ドォーン！

勇希のシュートは博司の腕に当たり、弾きとばされた。

「よっしゃあ！よくやったぞ博司！」

こぼれたボールを拾いながら純也はそう言った。

そのまま前を走る亮にパスをだし、速攻でシュートを決める。

これで8―5と石ちゃんズが引き離す。

博司を見て永瀬は一言、

「驚いたな……それなりにサマになっている」

その言葉に薫は、

「ああ、そうだな。練習は真面目だし将来は朱雀の大黒柱になりそうだ。」

「たしかにな。素質は無いが努力家だな。そんなことより薫…」

永瀬は薫を見る。薫はアイコンタクトだけで永瀬が言いたかったことがわかったらしい。

「ああ、実力もわかったことだしこれ以上はやらせない」

そう言って薫はボールをもらう。

2、3年のオフェンスとなり、薫に一年生の遠藤がマークをする。

「！！」

今まではアウトサイドの攻めが目立っていた薫だが、朱雀ではポジションがフォワードなためインサイドも超高校級だ。

遠藤は軽く抜き去られてしまう。

「博司！カバーだ！むしろ跳べ！」

純也が叫ぶ。

「え！！う、うわぁぁぁ！」

博司は向かってくる薫にディフェンスをする。
薫がシュートフォームにはいり、それに合わせて博司は跳んだ。

「うわぁぁ！」

パスッ！

ボールは綺麗にリングに吸い込まれた。

「アレ？なにが起きたんだろ？僕はしっかりと跳んだのに……」

そんな不思議そうな顔をしている博司に純也は言った。

「バカヤロォ！あんな単純なフェイクに引っ掛かってどうする！」

「え！？おかしいなぁ……シュートしたと思ったんだけど……」

「そう思わせるのがフェイクっつ～の！あんな単純なのに引っ掛かるなっつ～の！つ～か、おまえ、ブロックの度にいちいち目をつぶるなよ」

「え！あ、うん。頑張るよ」

気合いを入れ直し、戦いにのぞんだ石ちゃんズであったが、永瀬勇希のインサイド、木ノ下薫のどこからでも得点できる攻めにより、次々と得点される。
必死に亮や純也が追い付こうとするが2、3年生の厳しいディフェンスによって押さえ込まれる。

終わってみれば14―37という大差で2、3年生が勝ち、試合は

幕を閉じたのであった。

―――――

―――

―

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

クソ～、これは何かの間違いだ！俺が負けるなんて……

「よく頑張ったな、純也」

試合が終わり、薫が話し掛けてきた。

「へっ、勝ったクセによく言うぜ」

「はは、そうだな。でも、お前のオフェンス力もなかなかだったぞ。ディフェンスはまだまだだが。それと……」

「あ？なんだよ」

「シュートパターンが少なすぎる。本当にお前はゴール下でしかシュートしないからな。それ以外は安パイなんだ」

くやしいが薫の言うとおりだった。試合でも俺に薫がディフェンスしてからと言うもの、得点力が落ちた。それでも何点か決めたのだが……。

「うるせぇ、俺はダンクで十分なんだよ！」

俺の言葉を聞き薫は微笑して、

「ふっ、まあ、参考程度にな」

と言って永瀬薫と部室に向かって行った。

「クッソ～……」

俺は博司に近づく。

ポカッ！

「ウド！」

「痛！じゅ、純也くん！？いきなり何するのさ？」

「デカすぎ！！」

「ええ！？」

「博司！練習するぞ！居残りだ！」

「ええ！？」

とにかく薫に負けるなんて今後あってはならん……今度こそボコボコのギッタンギッタンにしてやる！！

俺たちの居残り練習は夜遅くまで続いた。

Ｎｏ．２３　コンバート（前書き）

少し長めです。しかも次回へ続く感じです。

No．23　コンバート

――朱雀高校放課後

ここは3年A組。

木ノ下薫と同じクラスの永瀬勇希は教室を出て、部室へと向かう。

「なあ永瀬、昨日思いついたんだが……」

薫が歩きながら突然そう言った。

「なんだ？」

クールな顔で永瀬は答える。

「それはな……」

薫が口を開きかけたときだった。

『勇希くん！』

一人の女子が永瀬勇希に話し掛ける。そして、手に持っている手紙を差し出して一言、

『これもらって。返事は後で！』

「ありがとう」

勇希はそれを慣れた表情で受け取る。

手紙を渡した女子はどこかへと行ってしまった。

「ん？またか？」

「いや、別に……」

勇希はあまり興味のない様子だった。もう何度も同じことがあったのだろう。この学校には彼のファンクラブが存在するほどだ。

「まあ、さっきの続きなんだが……」

「ああ」

再び薫が話をしようとしたときだった。

『先輩！』

「ん？」

薫は声のしたほうに目をやるとそこにはまた女子がいた。

『あの……部活頑張ってください！それとコレ……』

そういって女の子は手紙を取り出す。それを薫が受け取った。

「ん？ああ、ありがとう」

『読んでください！それでは！』

そう言ってその女の子は物凄いスピードでどこかへと消えてしまった。

「ん～、慣れないな。こうゆうの」

薫は少し照れながら言った。彼はどうやら後輩に人気があるらしい。
顔もよくスポーツができる彼は憧れの人なのであろう。

「それで、話の続きは？」

「ああ、そうだったな」

永瀬の言葉を聞き、薫は話し始めた。
薫がその内容を話し始める。

それを聞いた永瀬は……

「なんだって！？大丈夫なのか？」

「いや、まだ決めたわけじゃないさ。あくまでも提案さ」

「得点力が落ちるんじゃないのか？」

薫は笑みを浮かべながら、

「大丈夫だ。お前がいるし。それに……」

二人の会話は続いた。それにつられ二人がもらう手紙の数も増えていったのだった。

―――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――体育館

部員達は一通りの基礎練習を終え、レギュラーは実践、その他の部員は基礎練習に別れていた。
いつもどおりの練習が行なわれる。

「あ～あ、だりぃ」

俺はディフェンスの姿勢をとる練習をしていた。
腰を低く落とし構える。
この体勢は意外とキツく、博司を見ると死にそうな顔をしていた。

それが終わり今度はシュート練習に入る。
博司は相変わらずボロボロだった。俺もジャンプシュートは密かに練習していのだが、部活中にはやらないことにしている。
理由は木ノ下薫を驚かしてやるからだ。
またいつものように同じことが繰り返されていくと思っていたときだった。

「純也！！」

突然レギュラーたちのフォーメーション練習が中断し、薫が俺を呼ぶ。

「ん？なに？」

「お前もフォーメーション練習に加われ」

「おお！！よっしゃあ！」

やっと俺の偉大さに気付いたかこのバカチンが！！

「それで、俺は誰とかわればいいんだ？」

その言葉に薫は少し悩んでから答える。

「小田原、純也と交替してくれていいか？」

「うん。じゃあ僕はディフェンス側にまわるよ」

小田原はそう言ってディフェンスのチームに加わった。

「それと博司、お前もだ」

……？

今このキャプテンは何て言った？よく聞こえなかったんだが……。

聞こえたには聞こえたが、何かの間違いじゃないのか？

そう思い俺は薫に聞いてみた。

「おい、今なんて言ったんだ？」

「いや、だから博司もフォーメーション練習に参加しろと言ったんだが」

『え～！！』

部員達から驚きの声が聞こえる。まあ、当然だろう。そして俺たちは博司のほうを見る。

博司はまだこちらに気が付いていないらしく、ひたすらドリブル練習を続けている。

「うわぁ！」

ドテッ！

自分の足元にあるボールにつまずき、博司は転けた。

……。

「おい！本当に大丈夫なのか！？」

たまらず永瀬勇希は薫にそう言った。その言葉に薫は

「……多分な」

心配そうに答えた。

「博司！集合だ」

「はっ、はい！？」

薫の突然の言葉に驚いている様子だった。
博司は薫に駆け寄った。

「あ、あの……何でしょうか？」

「博司もフォーメーション練習に参加しろ」

「はっ、はい……ってえ～～～！！？？」

まったく、近くで大きな声だすなっつ～の。頭が痛いんだっつ～の。

「えるせぇぞ。早くしろ」

「ええ？……でも……」

「『でも』じゃねぇ！いい加減覚悟を決めろっつ～の！」

「う、うん」

「ったくよ……」

俺たちの会話が終わり、薫が部員たちに言った。

「純也と博司を入れたわけだが、レギュラーとして決まったわけではない。この二人はまだまだ欠点があるし、不安要素だらけだ。だから、とりあえずお試しとゆうことだ。俺が指名したポジションにそれぞれついてくれ」

薫の話は続く。

「ポイントガード、長谷川亮」

「はい」

「パワーフォワードに純也」

「おう！」

ここまでは前と同じだ。

「センター、大山博司」

「はっ、はい！！！」

ま、コイツはセンターだろ。っつ～か声でけぇよ！うるせえな。
それじゃあ、もともとセンターだった永瀬勇希はどこだ？ガードか？フォワードには薫の野郎がいるし。

「スモールフォワード、永瀬勇希」

「……はい」

コイツがフォワード！？普通は薫だろ！！
残りはまさか……。

部員たちは薫の言葉を待って、じっとしている。これから起きるであろうまさかの展開に準備をしているようだった。

「シューティングガード……俺だ」

『え～！！！』

『まじかよ！？薫さんがガード！？』

『朱雀で1番得点力があるだろ！！』

やはり予想通りのリアクションだった。

朱雀高校……いや、県内でも得点力の高い薫がフォワードからガードにコンバートするのだ驚かないではいられないのだろう。

「本当に大丈夫なのか？薫」

永瀬が不安そうに薫に問い掛ける。

「やってみればわかるさ」

木ノ下薫の言葉を信じ（俺以外）名前を呼ばれたレギュラーたちは練習を始める。

No.24 逆戻り

試合が始まり、少し経過したところで部員たちは先程薫の言った言葉を認めざるをえなくなった。
その理由は……。

「よし！純也！」

「おう！まかせろ！」

亮が純也にパスをだす。それを受け取った純也はディフェンスをかわしシュートをする。
ボールは軽がるとリングに吸い込まれた。

純也の加入により、荒々しいディフェンスとオフェンスではあるが、インサイドの得点力があがった。

永瀬勇希もすばらしい活躍をみせる。
コンバートにより心配されたが、もともとセンターよりもフォワード向きだったようで、前よりも格段に点が取れるようになったのだ。

さらに驚くのは木ノ下薫だった。
この前まで色々な仕事をこなすためにフル回転していた彼だが、ガードになったことによりスリーポイントに集中することができて前よりさらにスリーポイントの成功率があがった。
もちろんインサイドでも得点することができる。

色々なところから得点できるようになり、亮のパスもかなり生かされているようだった。

しかし、一人だけこの流れについてきていない者がいた。

「博司！リバウンドだ！」

亮が叫ぶ。

「え？あ、うわぁぁ！」

はずれたシュートをキャッチするために跳んだ博司だったが、自分より２０センチも背が低い小田原に取られてしまった。

「おい！しっかりしろよ！」

「純也くん！？ごめん」

それを見ていた永瀬は薫に話し掛ける。

「やはり早すぎじゃないのか？」

「……そうかもな。よし、今日のところこのメンバーでの練習は終わりだ。明日からも毎日このメンバーで少し練習するからな。それ以外はいつも通りのメンバーだ」

『オッス！』

返事をした部員たちはまた練習に戻る。

そして、いつものレギュラーたちの練習が再開された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ～あ、また基礎かよ」

レギュラーたちが練習するコートの端っこでまた俺はディフェンスだの何だの基礎練習をしていた。

「ご、ごめん……。僕のせいで」

博司が申し訳なさそうに言ってきた。

「まあしかたがね～って。暗い話は無しだ無し！！」

「でも……」

「『でも』じゃねぇ！オメ～はオメ～なりによくやってただろ。ハナっから誰もお前には大きな期待はしてねぇって。お前は初心者な分、伸びるものが1番多いんだから今は練習しかねぇだろ」

「う、うん……ごめん」

「木ノ下……いや、勝てなくてムカつくヤツがいたら死ぬほど練習しかねぇよ。いつかは必ずぶっ殺してやるぜ！ってくらいの気持ちで！」

「はは、そうだね。殺しはしないけど」

「まあ、そんなとこだ。わかったら練習だ。俺は休むけど」

「ええ！？」

そしてまた俺たちの基礎練習が再開された。

――――――

――――

――

『ありがとうございました！！』

練習が終わり、1年生は掃除をする。

「おい博司」

俺は博司に話し掛ける。

「ん？どうしたの？」

「掃除が終わったら俺の秘密特訓に付き合え」

「え？いいけど……」

俺たちは急いで掃除をし終え、モップをかたずけた。

「博司、ちょっとまってろ」

「う、うん」

俺はそう言って久留美に近づいていく。

「久留美」

「ん？なあに？」

俺は空の弁当箱を取り出して久留美に渡す。

「え？別に今じゃなくてお家の前で渡してくれればいいのに」

「悪いな。今からちょっと博司と秘密特訓しに行くからよ。先に帰っててくれないか？」

「うん。わかった」

そして久留美は後ろを振り返り歩いて行く。

「あ、それと久留美！」

「ん？今度は何よ？」

「弁当作ってもらっている立場で申し訳ねぇんだけど、最近弁当に『タコ』が多くないか？ペットとして飼っているから非常に食いづらいんだが……」

「しょうがないでしょ？お姉ちゃんが好きで買ってくるんだから。今度、生きたタコを大量生産してジュンにあげるって言ってたわよ」

その言葉を聞き、俺の頭のなかに妹と母の顔が浮かぶそして、さらに今飼っている『タコス』を家に初めて持ち帰ったときのことを思

い出す。

……。

「スマン！それだけは勘弁してくれ！暴走する絵梨佳を止めるのは大変なんだ！」

その言葉を聞き久留美は微笑する。

「クスクス、一応お姉ちゃんに言っておくわ。それじゃあね」

そう言って久留美は離れていく。俺は近くにいた博司に話し掛ける。

「よし！博司！行くぞ！！」

「え？行くぞって何処へ？」

「まあ、ついてこいよ」

俺たちは秘密の特訓の場所へと向かった。

Ｎｏ．２５　秘密特訓

練習が終わり俺と博司はある目的地に向かう。
時刻は七時を過ぎており、微妙に薄暗いが、それほど気にならない。
そのまま俺たちはこの前、久留美と買い物で訪れた商店街についた。

「じゅ、純也くん。ここって商店街じゃないの？練習場所なんてあるの？」

「まあ、つべこべ言わずについてこいよ」

そのまま俺たちは商店街のから裏路地に入る。
そこはにぎやかな商店街の雰囲気とは反対に廃墟や壁に落書きなど、とても暗い雰囲気だ。
そんな雰囲気が俺は好きですこし前までは毎日のようにここに通っていた。懐かしい気分になる。博司はとてもオドオドしている様子だった。

「純也くん……ここって不良の溜り場だよね？見るからにそれっぽい落書きとかあるし……」

「ん？まあ、たしかに溜り場かな？」

「ええ！？」

「まったく、いちいちうるせぇんだよ。ビビリすぎだっつ～の」

「そんなこと言ったって悪い人たちが……って、でたぁ～！！！」

俺と博司は見事に不良たち5人組に囲まれてしまった。

『おい！そこのデケェヤツ。ここに何のようだ！』

「ひ、ひぃ～ごめんなさい～！すぐにここからでます～！さぁ、早く行こうよ純也くん」

「まぁ、待てって」

俺は走って逃げようとする博司の腕をつかむ。

『ん？純也？』

不良たちの一人が俺を見る。

『お？純也じゃねぇか！？久しぶりだな』

「おう？京介か。久しぶりだな。優はどうした？」

コイツの名前は須藤京介〈すどうきょうすけ〉。
身長は優より少し大きめの１８０センチだ。
赤い髪の毛が特徴だ。優のバンドのボーカリストで、ここら辺の不良たちには『赤髪の狂犬』として恐れられている。
とにかくコイツとの出会いは強烈だった。中二の時、俺と優がストリートバスケをしている時に京介がやってきていきなり喧嘩を売ってきたんだ。
京介たちはバンドメンバーを引きつれて四人、こっちは俺と優の二

人。それでどっちが強いがハッキリさせるために俺と京介が1対1の喧嘩で勝負したんだっけ？
三時間の死闘の末、俺が勝利したわけだが結局どちらも入院。苦い思い出だなぁ。
その後は同じ病室で体が動かせないため口喧嘩が続いていた。
そこにたまたま優が見舞いに来て、優が小さいころからギターをやっていることが発覚したり、京介もロックが大好きなことが発覚したり……。
それでいつの間にか優が京介のバンドに加わって俺たちは仲良くなっていったんだ。
まあ、詳しい話はまた機会があったときに話す。

とりあえず京介は学校には行っていなく、近くの楽器屋でバイトをしている。

「ん？優なら今日は会ってねぇぞ。ここにはバイトの帰りに久しぶりに寄ってみたんだ」

「ああ、俺も久しぶりにここに来たぞ。コイツとバスケの練習するためにな」

そう言って俺は博司を指差す。

「あ、あのぉ……ど、どぉも……」

博司は相変わらずビビっているようだった。

「ふ～ん、デカイヤツだな。で、喧嘩は強いのか？」

「え？い、いや……し、したことが無いからわからないです」

「じゃ、試してみるか？」

「ええ！？」

京介は博司に近づいていく。

そして、右手の拳を振り上げる。

「う、うわぁ！」

博司は目をつぶり、両腕で攻撃を防御する姿勢になっている。

……。

ポン。

「え？」

京介の手は博司の肩にそっと置かれる。

「はは、ウソだウソ。昔の俺じゃねぇんだし、いちいち意味のねえ喧嘩売らねぇって」

「おいおい、京介。どうやら博司にはシャレになってねぇみてぇだぞ」

俺は京介に言った。京介は博司を見る。

博司は急に膝の力が抜けたように地面に座り込む。

「こ、こわかった……」

「いや、そこまで驚かすつもりは無かったんだが……悪い悪い」

京介の話は続く。

「じゃあな純也。そろそろ俺用事あっから行くわ」

「ん？バスケしていかねぇのか？」

「ああ、今コイツ等たちと遊びに行くからよ。じゃあな純也。それと練習頑張れよ。そこのデカイヤツ」

「は、はあ」

そう言って京介は裏路地から出ていってしまった。

「こ、恐かったぁ。睨まれたとき獣に睨まれたみたいだったよ」

「ん？そうか？俺はまだまだシャレってわかったけどな。本気になったアイツはマジでヤバいぞ」

それを聞いた博司は、

「え？アレよりも恐いの！？」

そう言って小さく震えてしまった。

「ま、今のアイツはめったなことがないかぎりキレねぇって。とり

あえずついてこい」

「う、うん」

俺たちはさらに奥にあるリングのある空き地に向かった。

No．26　秘密特訓2

「ここが昔から俺がバスケをしていたところだ」

「へぇ～」

七時を過ぎ、空き地には俺と博司以外誰もいなかった。ここのコートの広さは普通のコートの半分。リングも一つ。
みんなでお金を出しあって照明も買ってある。
なので夜でも普通に練習ができる。

「さ、博司。練習するか！」

「うん。でも、何を？」

「俺がジャンプシュートをする。外れたボールをリバウンドしてくれ」

「う、うん」

そして俺たちの練習が始まる。
俺がシュートしたボールは悔しいが外れてしまった。そのボールを博司がとる。

「っと」

博司は得意気な表情だっただった。

「違う！違うぞ博司！」

「え？」

「今日の練習でお前より小さい小田原にリバウンドとられただろ？何でかわかるか？」

「え？わからないよ」

「場所だ場所」

「場所？」

「ああ、あらかじめ場所をとっておくんだ。するとボールをとりやすい」

「ふ～ん」

「しかし！そんなことは誰でも思っていることだ。だからゴール下はいつも戦場になるんだ！」

「戦場？」

「だから死んでも相手に場所をとられるな！死んだら俺が殺す！」

「ええ！？意味がわからないよぉ」

その後、俺は博司にリバウンドの基本を教え、ひたすら同じことを繰り返した。

「違う！肩をもっと張れ！」

「うん！」

……。

「跳ぶタイミングが遅い！！」

「う、うん」

……。

「今度は跳ぶのが早すぎる！」

「……う、うん」

……。

「跳び方がおかしいぞ！」

「……う」

……。

「違う！顔が変だぞ！！」

「ええ！？」

――――――

――――

――

「はぁ、はぁ、疲れた～」

博司は地面に座り込む。

「そうだな、今日はこれくらいにするか。しっかしお前は上達が驚くほど遅いな」

「もう、それはほっといてよ」

――まあ、根性はあるけどな。

「よし、帰るか！」

「う、うん」

そう言って俺たちは帰ろうとした時だった。

『オッス、ジュン！頑張ってるか？』

『ジュン、差し入れもってきたよぉ～』

優と久留美が突然やってきた。

「ん？おまえらどうしたんだ？」

優が答える。

「バイトが終わって帰ろうとしていたら久留美ちゃんと会ったんだ。それでジュンたちに差し入れに行くって言ったからついてきたんだ」

「そ～よ。わざわざ差し入れに来てあげたわよ。有り難くもらいなさい」

そう言って久留美はジュースを取り出す。

「お、サンキュ」

「あ、ありがとう」

それを俺と博司は一気に飲み干した。

「どうして久留美は俺たちがここで練習していることがわかったんだ？」

俺は疑問に思ったことを久留美に聞く。

「え？それは……ジュンが練習って言ったらここしかないじゃない？」

「そうだな。まあ、ジュースありがとな」

「練習しすぎで倒れないようにしてね」

「ああ、それと優。さっき久しぶりに京介にあったぞ」

「へぇ～、まあ俺は毎回会ってるけどな。まさか喧嘩しなかっただろうな？」

「しねぇって。京介はどっかに遊びに行くって言ってたぞ。お前はいいのか？」

「ん？遊び？」

そう言って優は自分の携帯電話を確認する。

「あ！電源切ってたから気付かなかった。わりぃジュン！俺行くわ！京介に誘われてた！」

「おう！じゃあな」

優は急いでどこかへ行ってしまった。

「さ、久留美。俺たちも帰るか」

「うん、そうね」

俺たちは博司を見る。

「……ん、むにゃ…」

見事に爆睡中だった。
「おい、ウド。おきやがれ」
俺はウドを揺さ振る。
「……ん、ん……」
相変わらず気持ち良さそうに寝ていた。
「起きろって」
さらに揺さ振っても起きる気配が無い。
「……ん、爆睡中……」
「何が『爆睡中』だコラァ!!オメー絶対に起きてるな!?」
「……むにゃ」
起きる気配はまったくない。このまま置いていこうか迷っていたら久留美が話し掛けてきた。
「疲れているんだから少し休ませてあげたら?」
「ちっ、しょうがねぇ。30分だけ待ってやる。それが過ぎたら容赦なく叩き起こすからな」
沈黙がこの場を支配する。とりあえず俺は空を見上げてみた。

快晴だった天気のおかげで夜空には星共がごちゃごちゃしている。
でも、そんなに悪い気はしない。

「どう？部活は？」

久留美も空を見上げたまま話し掛けてきた。

「ん？めんどくせぇ」

「それだけ？」

「ああ」

また少しの沈黙。

「まあ、ムカつくヤツが多くて悪い気はしねぇけどな……」

久留美はは空を見上げるのをやめ、こちらを見る。

「ムカつくヤツ？」

「薫とか……亮とか……薫はいつかバスケで再起不能になるくらいボコボコにしてやるぜ」

「フフフ、逆に再起不能にされないようにね」

からかうような目で俺を見る。

――コイツ……可愛くねぇやつだな。

「そういやぁ、何で久留美はバスケ部に入ったんだ？」

「え？」

久留美はその質問に少し考えてから答える。

「純麗さんに誘われて部活見学に行ったの。それで部員の人たちを見たらみんな一生懸命で……」

「ふ～ん。そうなのか」

――以外と単純な動機だったな。

また俺と久留美は夜空を見上げる。星たちは何が好きで光ってんだろう？とか思う。

「それと、カズ君（ＮＯ．１２参照）みたいにジュンも高校になってバスケ始めるかなぁ？って思ったから……とか」

「ん？」

突然の言葉に俺は久留美のほうを見る。

すると久留美も空を見上げるのをやめ、こちらを向きにっこり笑った。

「クスクス、ウソよ」

「お、おう」

――なっ、何だ今のは？でも少しだけ可愛かったな。ホントに少しだが。ペットボトルのキャップにジュースを注いで飲むよりも少しだ。うん、少し。

「あ～、そうそう……」

その後、俺たちのどうでもいい会話は続いたのだった。

――――――

――――

――

30分後……

「ぎゃぁぁぁ！！」

俺に叩き起こされた博司の悲鳴が、夜空に鳴り響いたのは言うまでもない。

Ｎｏ．２７　突然の久留美ちゃん

ある日のこと。

俺は部活が終わり家に帰る。時刻は七時半をまわっており空は微妙に薄暗い。　先程『家』と言ったが、実際は大家に借りているアパートだ。俺の実家から朱雀高校まではそれなりの距離があるので、俺だけ、アパートを借りて一人暮らしをしている。

学校からアパートまでは２０分くらいだが、考え事をしているとあっと言う間だ。

アパートにたどり着き、いつも持ち歩いている鍵を取り出す。

ガチャ！

扉が開き、俺は中へと入る。当然部屋の中には誰もいなく静まり返っている。俺はカバンをとりあえずそこらへんに置き、ベットの上で横になる。

「……メシどうしよう」

いつもは自分で飯を作っているのだが、今は部活で疲れているので飯を作る気力がない。一人暮らしである程度は料理ができるようになった。

ん?何か忘れているような気がする。

何だろう?何だっけ?何か大事なことを忘れているような……。

……う～ん。

読者さんが何か言っているような気がする……。

……あ！

スマンスマン！自己紹介を忘れてた！

俺の名前は『長谷川亮』。木ノ下薫さんと言う人に憧れて、朱雀高校に入学した。薫さんはとにかく凄くてついていくのにもやっとだ。でも、学ぶものが多く、朱雀に来てよかったと思っている。

俺は深く息を吸い込み、

「ふぅ～」

一気に吐き出した。そして、必要最低限しかものが無い質素な部屋を見渡す。

俺の目に写ったのはもう随分古い本だった。名前は『バスケットボールマガジン』と言うもの。略して『バスマガ』。これは俺が中学一年のときに発売されたもので、今だに所持しているのには理由がある。

俺はその本を手に取り、ページをめくりはじめる。そして、あるページでその動きは止まる。

２ページ丸々使った記事の見出しを見ると大きく

『氷室中、全国大会制覇』と書かれている。
この『氷室中学校』とは、別に俺の母校な訳では無い。
そう……俺のもっとも尊敬する人、木ノ下薫さんの母校だ。
優勝チームの集合写真にの中央には、優勝カップを手にして今と変わらず『４番』を背負っているキャプテンの木ノ下薫さん。長身、副キャプテンの福岡誠、そして優勝旗を持っているエース五十嵐拓磨。
今あげた選手は全国でも名の通っている凄い選手達だ。
勝因と書かれている記事を見てみると『焦るエース五十嵐を木ノ下が落ち着かせ、確実に点に結び付けていった』と書かれてある。
そして、最後の決め手は薫の逆転スリーポイントシュートだそうだ。
結果は８６対８５で氷室中が勝利している。

俺はこのバスマガを何度見たのだろうか？自信が無くなったりしたときは、この本を見る。すると自然に勇気がわいてくるんだ。
でも、薫さんはこの時のバスマガ以来、もう注目されることは無かった。
俺は当時、薫さんは白川第一高校に行くと思っていた。世間もきっとそう思っていただろう。しかし、彼はなぜか朱雀高校を選んだ。理由はわからない。
今ではもう、『自ら才能を潰した』だの『過去の人間』だの世間で好き勝手言ってる奴らがいる。俺はそんな奴らをいつかギャフンと言わせてやるんだ。もちろん、薫さんと全国制覇も夢だ。
そして俺は中二になり、なぜ薫さんが朱雀に行ったのか確かめるために友達と試合を見に行ったんだ。

そこで俺は衝撃を受けた。
そこには世間からものを言われてもまったく気にせず、楽しそうにバスケットをしている薫さんがいた。（入学してから気付いたのだが、もともと図太い神経で細かいことは気にして無かったと思う）

そして俺は一緒にバスケをしたいと思うようになり、現在にいたる……と言うわけだ。

「は～あ……」

――考えごとをしていたら腹が減ってきたな……。

そう思い、俺はしかたがなく冷蔵庫にむかう。

中を開けてもあまりものが入っていない。最近買い溜めしてなかったからなぁ……。材料を見てもできるのは目玉焼きと一目瞭然だ。

また目玉焼きだな。と思っていたときだった。

アパートの扉が勢い良く開かれる。

バァン！

『お～っす！亮！』

疲れている今、もっとも会いたくない人物があらわれてしまった。

そ～だよ。俺視点のまま最後までいくはずが無かった。俺はその人物を見る。

石川純也である。

コイツとは口喧嘩ばかりで、まさしく犬猿の中だ。

純也は靴を脱ぎ捨てると、勝手に部屋に上がり込んできた。そして部屋の中央にあるテーブルの横に座った。俺もとりあえず座る。

「亮！元気か！？」

「……ああ」

「しっかし、何にもねぇ部屋だな！お前らしいぜ」

「……ああ」

「一人暮らしか……大変だな！」

「……なあ純也」

「ん？なんだ？」

「いったい何のようだ？」

「おい亮。腹減ったぞ。何かメシ作れ！」

「帰れ」

いったい何なんだコイツは？いきなり上がり込んでメシ要求してきやがった。

「亮、冗談だって！怒るなよ。そんなことより鍋やるぞ鍋！」

「はぁ？いきなり何言ってんだ？俺んちは今目玉焼きしか作れねぇぞ？」

「そうか……残念だ」

純也がそう呟いたときだった。

『おじゃましま～す』

再び玄関から人の声。

まさかこの声は……。

「遅かったじゃねぇか久留美。腹減ったぞ」

うわ～！！俺んちに久留美ちゃんが来た～！！ど～ゆ～ことだ！？

俺は少しの間思考が停止してしまった。

No.28 鍋

「しょうがないでしょ、ジュンったら何にも準備しないんだもん」

「だって腹減ったもん」

「『お腹すいた』じゃないでしょ。まったく……あ、そういえば亮くん」

久留美ちゃんは突然俺に話し掛けてきた。

「ん？何だ？」

「亮くんのお家でお鍋やるってジュンが言いだしたんだけど……やっぱり突然よね」

マジ！？願ってもいないチャンスだぜ！！

俺がそんなことを思っていたとき、純也が余計なことを言いだす。

「あ～、久留美。そのことなんだが、亮はどうやら無理――」

「うんうん大丈夫！久留美ちゃん！鍋おいしそうだね！」

急いで俺は純也の言葉をかき消す。

「ありがとう。じゃあ今から準備するね。でも、材料がまだ全部揃ってないし……」

『ご、ごめんください』

またまた玄関から客がやってきた。今日は来客が多い日だな。

奥からやってきた人物は2メートル近い巨大男、博司だった。手にはおそらく鍋の食材であろう、野菜の入ったビニール袋を持っている。

「純也くん、家でとれた野菜持ってきたよ」

博司はなぜかうれしそうだ。そう言えばコイツの家は農家だったっけ？

「やっしゃあ！始めるか！久留美、準備を頼む！」

「……しょうがないわね」

久留美ちゃんはしかたがなさそうに調理場へと向かう。そして、博司からもらった野菜を手に取り切り刻み始めた。

トントン……

規則性のある音がまな板から鳴り響く。

「よし博司！トランプやるぞトランプ！」

「ええ！？」

純也と博司はどこからか取り出したトランプで遊び始めた。

「……」

何もすることがなくただ立ち尽くしていた俺だが、さすがに久留美ちゃん一人に任せるわけにはいかないので手伝うことにする。

「久留美ちゃん、手伝うよ」

「え？でも……」

「別にいいって。料理は慣れてるしさ」

「ありがとう。じゃあこれお願いね」

そう言って白菜を渡される。

トントントン……

二人で同時に野菜を切り始めた。俺は久留美ちゃんの方を見てみる。慣れた手つきで次々に野菜を切り刻んでいく様子は、見ていて感心する。

「料理うまいね」

「え？そう？」

「うん。一つ一つ大きさが揃っていて感心するよ」

久留美ちゃんは少し照れた様子をする。

「えへへ、料理は趣味だからね。亮くんもなかなかうまいじゃない」

「ん？一人暮らしだから一応一通りはね……」

「それでも凄いと思うよ。お姉ちゃんやジュンとは大違い」

「さすがに純也に負けたら終わりだよ……」

俺たちは純也の方を見る。博司と純也はひたすらトランプに熱中していた。

「へへ～、またまた俺の勝ち～」

「うう……」

見た感じ純也が一方的に勝利しているようだ。いつまでも見ている訳にはいかないので料理に戻る。

「もう……ジュンも手伝ってくれればいいのに……」

「ははは、それは猿に言葉を教えるくらい無理な話だよ」

「ふふふ、そうね」

久留美ちゃんはそう言ってから、再び野菜を切る。　久留美ちゃんは今日は髪を後ろで二つにまとめている。エプロン姿もよく似合っていて見ているだけで落ち着く。

じっと見ていたら久留美ちゃんに気付かれてしまった。

「ん？どうしたの？」

「え？あ、いや……今日は違う髪型だね」

「うん。やっぱり変かな？」

久留美ちゃんは心配そうな顔でこちらを見る。

「に、似合っているよ。か、か――――」

――可愛いね。

と言おうとした瞬間、純也が話し掛けてきた。

「おい久留美！まだできねぇのかよ？腹減ったぞ」

「何もしないくせに文句言わないでよ」

「わかったわかった。ホラ、包丁貸せよ」

「あっ」

純也は久留美ちゃんから包丁をとり、野菜を切り始める。

「フンフンフ～ン♪」

ザクザクザク

変な鼻歌と同時に野菜は切り刻まれていく。

その大きさはバラバラでとても雑だ。

「ち、ちょっとジュン！」

「無敵の要塞～♪俺は無敵の要塞さぁ～♪むしろジンギスカンさぁ～♪」

ザクザクザク

久留美ちゃんの言葉が聞こえないようで、今度は変な歌を歌っている。と言うか、意味がわからん！ジンギスカン！？

あっという間にすべての野菜を切りおわる。はやり大きさもバラバラで見栄えが悪い。

「ほら、出来たぜ！俺の手にかかればこれくらいの野菜なんて相手じゃねぇぜ！」

「ちょっと！バラバラじゃないの！」

「まあ、小さいことは抜きだ。よし！鍋を準備しろ」

純也の手によって料理は進められていく。

――――――

――――

――

『いただきま～す』

鍋を取り囲むようにしてみんな座る。目の前の鍋に目をやると具の大きさがバラバラだ。中には綺麗に切れているものもある。おそらく久留美ちゃんが切ったものだろう。

一口食ってみると、結構うまかった。味付けは久留美ちゃんがやっていたので当然か。

「へへ！肉もらい！」

「ちょっ、純也くん！返してよ！」

この二人は相変わらずいつもにぎやかだ。

かなり腹が空いていたため、すぐに鍋は空っぽになる。

「久留美ちゃん、ごちそうさま」

「え？あ、みんなで作ったものだしね」

「ほとんど久留美ちゃんが作ったようなものだよ。じゃあ、かたづけるのも手伝うよ」

「ありがとう」

外ももう真っ暗だったので俺たちは急いでかたづけた。純也と博司はまたトランプをしている。

――――――

―――

――

「……」

みんなもう帰ってしまって部屋は静まり返っている。

――結局あいつら何がしたかったんだ？

とりあえずもうやることが無いので風呂に入ろうとしたときだった。

ピピピピ

突然携帯が鳴り響く。

「ん？誰だ？」

俺は携帯電話を確認する。

Ｆｒｏｍ純也

『よし！今度は焼肉やるから肉買っとけよ！じゃあな！』

「……」

ピピピ

亮

『死ね』

これでよしっと……。さぁ、風呂でも入るかな。

そしてまた携帯が鳴り響く。

ピピピピピ

「アイツめ！いい加減にしろよ！？」

俺は勢い良く携帯を開く。どうせまた肉がどうとかぬかしやがるんだろ？

Ｆｒｏｍ久留美

『今日は突然ごめんね！一人暮らしでごはん作るのが大変だったら手伝いに行くから。それじゃあね』

……。

「よっしゃあ！！！！」

久留美ちゃんがごはん！？マジかよ！？

ピピピピ

「ん？」

Ｆｒｏｍ純也

『プププ、負け犬』

「……」

No．29　すたーと　その1

――とある日の授業。

黒板の前に先生が立ち何やら語っているようだ。
しかし、俺はそのとき睡魔と格闘していた。

『……という訳で』

先生の言葉がまったく理解できない。右耳から入ってきた言葉が左耳からでていく感じだ。
俺はひたすら押し寄せる睡魔と格闘する。
しかも今日はよい天気で日差しはポカポカ。教室中に眠りガスを充満させる。どうやら睡魔は眠りガスという卑怯な最終兵器を使ってきているようだ。

俺は次第に意識が遠くなっていく。
『……することにより』

――――――――

――――

――

――あれ？ここは？

目の前には見慣れた風景が広がっていた。ここはよく知っている。
近くの商店街だ。

『ちょっとぉ……』

『あ？なんだよ？』

一人の少年を少女が呼び止める。

『ママがそっちはわるい人たちがいっぱいいるからいっちゃだめって言ってたよ』

『ダメって言われたら余計に気になるんだよ！！じゃあ俺は一人でも行くからな！』

『あ！まってよぉ！』

少年は商店街の裏路地へと入っていく。少女もその後をついていく。

――これはもしや……

『暗いよぉ。こわいよぉ。変な落書きいっぱいあるよ……』

少女は少年の右腕を両手でしっかりと抱き抱え、小さく震えている。

『あ？うるせぇな。じゃあついてくんな！』

『ううぅ……だって…』

少女は泣きそうになる。少年はそれをあわてて慰める。

『な、泣くなよ。』

『グスン。え～ん』

少女は泣きだしてしまった。少年は自分のポケットをに手をいれものを取り出す。

『しょうがねぇな。ホラ』

そして少女に見せる。

『ナニこれ？』

『メガトラマンのカードだ！凄いだろ？しょうがなくお前にやるよ』

少女はそのカードをじ～っと見つめる。

「いらない」

ポイ

『あ！捨てるなよ！』

『その人かっこわるいよぉ……何だか変だよぉ』

『あ！メガトラマンをバカにしたな！？コイツは強いんだぞ！』

『つよい？』

『ああ。悪者がやってくるとどこからか現われて戦うんだ。そして、最後にはかならず勝つ！あちょー！』

少年はメガトラマンの真似をしているようだ。

『あはは、ナニソレ～！変だよぉ』

『バカにすんな～！あ～あ、お前に秘密教えてやんね～！』

『え？秘密？教えて教えて！』

幼少期は秘密ごとが大好きである。

『え～？どうしよっかな～？お前絶対誰かに秘密バラすもん』

『え～？言わないよぉ』

『本当か？』

『うん。本当』

『本当に本当か？』

『うん。本当に本当』

『ほぉ～んとぉ～に本当に本当か？』

『うん。ほぉ～んとぉ～に本当に本当だよ』

幼少期は基本的に確認をとるのが長い。

『じゃあユビリキだ』

『うんうん』

少女はうれしそうに少年の差し出した小指に自分の小指を重ねる。

『ゆ～びき～りげ～んまんうそついたらは～りせんぼんの～～ます』

そして少年が言った。

『わかったよ。しょうがねぇな』

『うんうん』

少女は興味深々に目をパチパチさせている。

『俺、実は将来メガトラマンになるんだ』

『え～？無理だよぉ』

『絶対になる！メガトラマンになって悪者を退治するんだ！』

『じゃあ私はお姫さまになる～！』

『ん？どうしてだ？』

『お姫さまになって、さらわれたときにメガトラマンに助けてもらう！』

『う～ん。そうだなぁ……お前がはすぐにさらわれそうだからなぁ……。よしっ！じゃあしょうがなく助けてやろう！』

『ホント！？やったぁ！』

『ふふ、正義の味方だからな』

二人は裏路地を奥へと進む。少女の顔はもう悲しみではなく笑顔でいっぱいだ。しっかりと二人は手を繋いでいる。

しばらくすると物音が聞こえる。

二人は物音のしたほうを覗き込む。

『け、喧嘩！？』

少年が声をあげる。少女は少年の腕にしがみつく。

小さい空き地の中にはたくさんの人がいた。どうやら喧嘩では無いらしい。でも激しく体をぶつけたり、悪口を言ってたりする。

――ああ、そうだよ。たしか俺はここで……。

どうやらみんな何かに熱中しているらしかった。

ボールを地面についてそれをみんなが取り合う。そして網目状のひもがぶら下がっているワッカにそのボールを投げている。

少年の興味が高まり、遠くから見ていたのが次第に近づいていく。

そして視線が一点に集中した。

そこには、自分よりすこし大きいくらいの人が大人に交じっていたのだ。

体をぶつけられそうになったら身軽にかわしてボールをリングに向かって放り投げる。

ボールは見事にワッカに吸い込まれた。

歓声が沸き起こる。そしてしばらくして歓声がやむと、みんなの視線が少年、少女二人に集中する。

『こ、こわいよぉ』

少女は小さく震えている。

周りには怖そうな人が沢山いる。不思議な色の髪の人も沢山いて、少年、少女を不思議そうに見ている。

しばらくして先程の大人に交じっていた少年が二人の前に近づいてくる。そして一言。

『おまえらもバスケットやるのか?』

少年は不思議そうな顔をして答えた。

『ばすこっと?』

『違う違う、バスケットだよ。ば す け っ と!!』

『ばすけっとって何だ?うまいのか?』

少年はどうやらビスケットの一種だと思っているらしい。

『ちょっとこっちにこい』

少し大きい少年は二人をワッカの近くまで連れていく。周りにいる不思議な髪をした人たちは相変わらず二人をジロジロと見ている。少女は怯えているようだった。そして少し大きい少年は言った。

『このボールをあのリングに入れるんだ。そう言うスポーツさ』

『りんぐ？あのワッカのことか？』

『そうだ。シュートしてみるか？』

そう言って少し大きい少年は少年にボールを渡す。

――懐かしいな……

少年はボールを受け取る。リングを見上げるが、相当高い位置にあるようで、届きそうに無い。

『届きそうにないぞ？』

『加速をつけるんだよ。そして思いっきり投げてみ』

少年は大きい少年の言葉を聞き、加速をつける。当然ドリブルという技術はなく、手にもったままだ。

リングの近くまで近付き、ボールを放り投げる。

パス！

ボールは見事にリングに吸い込まれた。

一瞬の沈黙の後、歓声が沸き起こる。

いいぞ！そこのチビ！

ヒュー！ナイッシュ～！

フォームもバラバラ、ドリブルも無しだが、少年が生涯で初めて決めたレイアップシュートだった。

少し大きめの少年が少年に近づく。

『お～！すげ～な！どうだ？おもしろいか？』

少年は嬉しそうだった。自分に向けられた歓声、そして、自分のシュートがリングに入ったこと。

『よくわからない。けど、たのしい』

それは要するにおもしろいと言うことである。

『名前は何だ？』

――ああ、ここで……

少年は答えた。

『純也。石川純也』

『純也か。よろしくな！俺の名前は森村一輝だ。カズって呼んでくれ』

――そうだ……コイツとの出会いはこんな感じだったな。

『カズか。よろしくな！俺の隣にいるのは久留美。凄い泣き虫だなんだ』

『泣き虫なんかじゃないよぉ』

『久留美ちゃんか……よろしくな』

『う、うん』

久留美は怯えながらも返事をした。カズはさらに問い掛ける。

『ここに小さい人が来るなんてめずらしいな。何年だ？』

純也は答えた。

『小学3年だ』

『へぇ～、じゃあ俺より二歳年下か……ちなみに俺は5年生だ』

『5年か。何でこんなところにいるんだ？』

カズは答える。

『バスケットたのしいだろ？ほとんど毎日来てるよ。お前もやるか？』

『うん！やるやる！』

――この時のことはハッきりと覚えている。ただ、もう一度シュートを決めたくて夢中だったな。

純也はその後、ほぼ毎日ここに通うことになる。

Ｎｏ．３０　すたーと　その２

『さようなら～』

ここは朱雀小学校３年２組の教室。すべての授業が終わり、生徒達は下校する。まだ部活などに入っている人はいなく、ほとんどが家に帰る。

ただし俺は違った。ある目的地へと向かう。

学校をでて俺は走る。一刻も早くつきたい。

俺の名前は純也。小学３年生だ。今とても夢中なことがある。

それは『ばすけっと』と言う名前らしい。

商店街に入り、そのままストリートのコートへと向かう。

『わあぁぁ！』

『いいぞ～！！』

やってるやってる！！

コートの中から歓声が聞こえる。

ここには毎日沢山の人が来る。学校をサボっている人も沢山いて、その人たちはとても怖そうな格好をしている。年令はだいたい中学生くらいから高校生くらいまで。

初めは少し怖かったけど、実はみんないい人だった。

とくに『沖さん』と言う人はかなり派手な頭をしていて、ぴあすも一体何個してるんだ？と言うくらいあるが、いつも冗談ばかり言っていておもしろい。みんなにも慕われている。人は見かけで判断

してはいけないなぁ。
本人曰く、高校生らしい。
ここのみんなはとても仲がいい。いつも楽しそうだし、一緒にいておもしろい。中には、バカげたことをやりだす人もいる（金魚を踊り喰いなどその他）。

俺がコートに入ると、沖さんが寄ってきた。

「よお純也！！今日も来たな！未来のスター！」

相変わらずテンションが高い。

「おう。早くバスケがして～！」

そう言って俺はマイボールを取り出す。いつも学校に持っていっている奴だ。お小遣いをためてやっと買ったんだ。そのおかげで、メガトラマングッツは買えなくなったけど……

「どうだ純也？うまくなったか？」

「そうだ！見てくれよ沖さん！昨日ドリブルすこしうまくなったぞ！」

「ほう、見せてみろ」

俺はドリブルを披露する。まだまだボールから目を離すことはできない。

「スキあり！」

沖さんは俺のボールを素早くカットした。

「まだまだあまいな純也！スキだらけだぞ」

「ず、ずるいぞ?！いきなり卑怯な！」

「ストリートにずるいもクソもねぇよ。ホラ、俺からボールをとってみろ」

沖さんはドリブルを始める。

「よしっ！」

俺はカットを狙うが軽くかわされてしまう。

「どうした?」

「くそ～」

突然沖さんはドリブルをミスし、ボールが地面に転がる。

チャンスだ！とばかり俺はそのボールに飛び付く。

俺が飛び付いた途端、沖さんは足のつまさきでボールをすくい上げた。突然目標を失った俺は、地面にダイブする。

「いてぇ！沖さん、卑怯だぞ！」

「ははは、そんなんじゃ生き残れないぜ?」

「ちくしょう！練習するからボール返せ」

「わかったよ。ホラ」

俺は沖さんからボールを受け取り、練習を始める。

しばらくして沖さんが俺に話し掛けてきた。

「なぁ純也。右手じゃなく左手でも練習しないとダメだぞ」

「わかってるよ」

そう言って俺は左手にドリブルする手を移し替える。

なんだか慣れなくて気持ち悪い。ドリブルをしているボールが爪先などに当たってしまう。とっても難しい。

俺は必死に練習した。みんなに早く追い付きたいから。そして、カズに勝ちたかったから。

「そう言えば沖さん。カズは？」

沖さんはタバコを取出し、火をつける。

「ふぅ～、知らねぇ。学校じゃねえのか？」

「ふ～ん。アイツ今日は俺より一時間授業が多い日だな。大変だな、五年生って」

「まあ、俺はほとんど行ってねぇけど」

「ふ〜ん。楽でいいなぁ。俺は母さんが厳しいからなぁ」

「そうだな」

そう言って沖さんはまたタバコを吸い始める。

「なぁ、タバコってうまいのか？」

「ふぅ〜……ん？知らねぇ。吸ってみるか？」

「いやだ。煙い」

「ははは、嘘だって。お前は吸うなよ。まあ、その心配はなさそうだな」

「何で？」

「俺の場合最初は親に反抗が目的だったからな。まあお前にはまだよくわからねぇ話だよ」

「へぇ〜だったら別にいいや。俺なんかが吸ったか母さんに殺されそうだしな」

「ははは、お前んちは楽しそうでいいな。」

「そうかぁ？母さん鬼だぞ？」

沖さんは軽く微笑む。

「ふふ、うらやまし～よ」

羨ましい？あの鬼のどこがいいんだ？

「まあタバコはバスケもまともにできなくなるからやめろよな」

「え？じゃあ絶対に吸わねぇ」

「約束だぜ？お前の将来が楽しみだ。どんだけバスケがうまくなってんだろうなぁ。だからタバコは吸わないほうがいい」

「わかった吸わない。バスケは沖さんよりはうまくなるよ」

「はは、言ったな、コイツめ。そう言えばあの娘はどうしたんだ？」

「あの娘？」

「久留美ちゃんだよ」

「母さんのお見舞いに行くって行ってたぞ。アイツの母さん病気なんだ」

「そうか……」

沖さんは一瞬暗い顔をしてから俺に言った。

「そういやぁ純也」

「ん？」

「あの娘はお前の『コレ』か？」

そう言って沖さんは小指をたてる。

「ナニソレ？」

「彼女だよカノジョ」

「ち、ちげーよ！」

「照れるなって。久留美ちゃんは可愛くなるぞ～。今からでもわかる」

「照れてね～よ！」

俺は沖さんを追い掛け回す。

「ははは！捕まえられるもんなら捕まえてみやがれ！！」

「まて～！！」

そして俺たちの追い駆けっこは続いた。

Ｎｏ．３０　すたーと　その２（後書き）

サクサク進むように、過去の話は短めにしています。これから少し過去編が続くと思いますが、お付き合いくださいませｍ（＿＿）ｍ

Ｎｏ．３１　すたーと　その３

今日もまた、俺はひたすらストリートバスケに明け暮れていた。
俺が初めてここに来てから随分経つ。今日はカズもいて一緒に１対１で勝負していた。

「くそ～……」

勝負は大抵カズが勝つ。そして今日も俺はカズに負けたのだった。

「よし！俺の勝ち～」

「もう一回！」

「ああ、いいぜ」

カズは嫌な素振り一つ見せずに戦ってくれる。最近になって『れいあっぷしゅーと』と言うものを覚えたのだが、カズにはまだまだ勝てない。

カズがドリブルで俺を抜き去ろうとする。

「よし！こっちだ！」

俺はそれを必死に止めるのだが……

「逆」

あっさりと抜かれてしまった。

「卑怯だぞ！騙したな！」

「フェイントだよフェイント」

カズはふぇいんとがうまい。何が何やらわからなくなる。ここにいる高校生も引っ掛かるほどだ。

結局また俺は負けてしまった。

「くっそ～、勝てない」

「純也、そろそろ休憩しないか？」

「ああ」

俺たちはコートの隅にすわり、他の人たちの試合をみる。他の人たちの試合はタックルや頭突きなどが普通に使われている。別に嫌いあっているわけじゃなくて沖さん曰く『シャレ』ならしい。その証拠にみんな攻撃されても笑顔でやりかえしている。

「暑いな……」

カズが突然つぶやく。

今日は快晴でとても暑い。夏も終わりそうなのだが、まだまだ暑い日が続いていた。

「そう言えば今日も久留美ちゃん来てないな」

「ああ。また母さんの見舞いだそうだ」

久留美もよくこのストリートのコートにくる。でも、最近は母さんの調子が悪いようであまり来ていない。

「そうか……色々大変なんだな」

そんな会話をしていたときだった。

「うわ!?つめてぇ」

カズが叫ぶ。空をみるとさっきまでの快晴が嘘のようにくもりになっている。小雨も降りだした。

ザァァァ

雨は激しくなる。

「やべぇ!カズ!どうする?」

「そうだな……俺んちにくるか?」

「お前んち?わかった!早くいこーぜ!」

俺たちは走りだす。

―――――

―――――

――

「よし、あがっていいぞ」

「おじゃましま～す」

カズの家についた。特に普通の一軒家のようだ。俺はカズの支持に従い家の中へ入る。

部屋にはいって俺は驚いた。なぜかと言うと……。

「うわ～……すげぇ」

部屋中にＮＢＡのポスターやユニフォーム、バスケグッズなどでいっぱいだった。

「ああ、バスケが好きだからな」

「これ全部カズが集めたのか？」

「う～ん……中にはここらでなかなか売ってないものもあるしな。俺の場合は父さんがＮＢＡが好きでよく一緒に買いに行くんだよ。バスケ好きは完全に父さんの影響だな」

「そうなのか……それにしても凄い……」

俺のメガトラマングッズとはワケが違う。

俺はカズコレクションを見渡す。するとあることに気付く。

「なぁカズ。この人のポスターが多くないか？」

俺は一人の選手のポスターを指差す。周りをみてもこの選手がかなり多い。

「ああ、アイバーソンか」

「あいばーそー？」

「アイバーソンだよ。アレン・アイバーソン」

「ほう、あいばーそんね」

俺はよくわからずに答えた。

「デビュー当時ポジションはＰＧで、とにかくいい意味でも悪い意味でも目立っていた選手だ」

「悪い意味？」

「言動だよ。言動」

「口悪いのか」

「ああ。それも魅力の一つだがな。しかしながらオフェンス力には目を見張る物があって。シュート、アシストなんでもできるんだ。」

※現在はＳＧとしてＮＢＡで一、二を争う攻撃力を持つ。

カズの話は続く。

「しかし、彼は身長にはあまり恵まれなかった…だが、彼は言った。」

「何て？」

「『バスケは体じゃない、ここなんだ……』そう言って胸に手を当てたんだ。オールスターのＭＶＰをとったときそう言ったんだ……。オレはその言葉を忘れない。その言葉を聞いたときから彼は俺の中の神様なんだよ」

カズは目を輝かせながら話す。本当にバスケが好きなんだなぁと思った。

「だから俺は、自分より体格のいい高校生達にまざってバスケをしているんだ。気持ちで勝つためにな」

「ほ～。だからカズはストリートをやっていたのか」

カズに勝てない理由は気持ちで負けていたからかもな。よし、今度からは絶対に勝つ気で行こう。

「ああ。それとアイバーソンはジョウダンにも勝ったときがあるんだぜ！」

「冗談に勝つ？急に何言ってんの？」

「いや、なんでもない……」

その後も俺とカズとの会話は続いた。

――――――

――――

――

「じゃ～な～」

「おう、じゃあ！」

俺は帰る時間になりカズの家をでる。外は大雨で、冷たい雨が降り注ぐ。

「うひゃあ～！つめてぇ～」

早く帰らないと……

俺は全力で走る。カズの家は走っても１５分くらいかかる。当然、ずっと走っているワケにはいかなく、歩いてしまう。

そんなことを繰り返しているうちにだんだん家に近づいてきた。

「よし、もうすぐだ」

俺の体は雨で濡れていてる。かなり冷たい。微妙に薄暗くなって

きている。

俺の近くまでくる。そして家の前に人影が見えることに気付く。

「久留美！」

そこにはびしょぬれで立ち尽くしている久留美がいた。

「どうしたんだよ？カゼひくぞ？」

「……」

下をむいたままじっとしている。空から降る雨は久留美の髪を伝って下へと落ちてゆく。

「……」

「……」

沈黙のなか、空から降る雨が俺たちの体をぬらしてゆく。

「なぁ？久留美。どうした――」

「死んじゃった……」

――え？まさか……

俺の頭の中に浮かんだことはおそらく正解だと思うが、口にだす勇気がない。

「ママが……ママが死んじゃったの！！」

降る雨が一層強くなる。雨が屋根を叩きつけてさらに激しい音をたてる。

「……」

「どぉしよう……私、どうしよう……」

泣き崩れる久留美。

俺は立ち尽くしていた。

無言の時が流れる。

「あちょ～！」

「？」

久留美は突然俺のとった行動を驚いた目で見つめている。

「あちょ～！どこだ！？そこかぁ！？あちょ～！」

俺は見えない敵に対してひたすらキックやパンチをする。

「……何してるの？」

俺は久留美の言葉を無視して、その動作を続けた。

「そこか！？久留美を泣かせる悪者はそこか！？あちょ～！」

「え！？」

久留美は驚いた表情を見せる。

「そ～ゆ～ことだ」

「……」

「どんな悪者が来ても俺が久留美を守ってやる。メガトラマンとしてな。だから泣くなよ」

自分が馬鹿なことを言っているのはわかる。親が死んでしまった女の子に泣くな！なんて言うのは無理な話だ。

ただこのときは久留美には笑ってほしかった。久留美の悲しんでいるのを見ていると自分まで悲しくなるから。

だから久留美には笑ってほしかった……。

「クスッ」

「ん！？」

「あはは、悪者なんているわけないよぉ」

「あ！笑ったな！？」

「ジュンがあまりにもおかしいからぁ」

「じゃあ泣くなよ？」

久留美は笑顔をつくってみせる。

「うん、もう泣かないよ」

「そうか、じゃあ帰るか！」

「うん」

そう言って俺たちはそれぞれの家に向かう。

「あ！ジュン」

「ん？」

家に入ろうとした途端、突然話し掛けられた。

「あのぉ……この前私がいらないって言ったカード……ちょうだい？」

「ん？ああ、メガトラマンか。お前もあの格好よさがわかったか」

俺はカバンからカードを取り出し、久留美に渡す。　カードは少し雨に濡れてふやけているようだった。

「うん……ありがと」

久留美はメガトラマンのカードを受け取った。

「じゃあな」

「うん。じゃあね」

俺たちは家の中へと入る。

雨がさっきより小降りになったような気がした。

――――――

――――

――

次の日

俺は見事に風邪をひいた。

Ｎｏ．３１　すたーと　その３（後書き）

もうすこしで過去編も終わりです。

No．32　すたーと　その4

時は流れ、俺は小学5年になった。この学校は3、5年生になるときにクラス替えがある。ちなみに久留美とは昔からずっと同じクラスだ。

そしてクラス発表。

「う～ん……石川純也、石川……」

俺は玄関前に貼りだされた紙と睨めっこする。

「あったぞ！！」

5年3組のところには、しっかりと『石川純也』の文字が。

次に俺はある人物の名前をさがす。まさかなぁ……とか思いつつ確認する。

「うわぁ～……またアイツと同じかよ……」

そこにはしっかりと『春風久留美』の文字が記されていた。

「ホントね……変な縁でもあるのかしら。困ったものね」

いきなりあらわれる久留美。

最近久留美は気が強くなった気がする。

だが俺は負けない！！

「はぁ～、またこんなガキと一緒か……先が思いやられる」

「ちょ、ちょっと！誰がガキよ！」

追い掛けてくる久留美から俺は逃げる。そのまま学校に入り、新しい教室へと向かう。

「3組……3組っと」

新しい教室を探しつつ、後ろを振り返ってみると追い掛けてくる久留美の姿が見える。

「まて～！！」

「へへ！待てと言われて待つ野郎がどこにいる！」

俺が後ろを見ながら走っているときだった。

「あ！ジュン！」

突然久留美が俺の名前を呼んだ。

ドォン！！

俺は何かに衝突して、倒れこむ。

「いって～……」

俺は衝突した物体に目をやる。そして凍り付いた。

『純也……お前は学年が上がっても何も変わらないようだな』

そこには生活指導の先生『鬼瓦哲造』の姿が。

顔は怒りに満ちている。背後には炎がメラメラしている錯覚に陥る。この鬼瓦は普段、生徒達から恐れられている。

『廊下は走るな！』

ゴン！

鬼瓦のゲンコツが俺の頭にクリーンヒットする。

そのまま鬼瓦はどこかへ行ってしまった。

「いって～……」

「あはは、ジュン大丈夫？」

後ろから追い付いた久留美が言ってきた。

「大丈夫じゃねぇよ……クソ～、あの鬼瓦め！久留美も走ってたじゃねぇか！」

「私は止まってたから。それに鬼瓦先生は女の子には優しいし」

あのロリコン教師め！

俺たちは『速歩き』で教室に向かった。

「あっ、ジュン！まってよ！」

『はい。新しいクラスの担任になりました、小松田聖子です』

新しいクラスの先生があいさつをしている。綺麗な先生で若々しい。

『それでは、何か質問はありませんか～？』

聖子先生はにっこり笑いそう言った。その言葉にクラスの男子共が一斉に手をあげる。まぁ俺は上げないが……。

『はい！』

『え～と……じゃあそこの君』

先生が生徒を指差す。

『歳はいくつですかぁ～？』

『こら！女の人に歳は聞いてはいけませんよ。今日は特別に教えます。２３歳ですよ』

先生は笑顔で答える。

『はい！』

『どうぞ』

また手を上げた生徒に先生は指差す。

『かれしはいますか～？』

『秘密で～す』

その質問にもサラッと笑顔で答える。大人の対応だ。

その後も似たような質問が繰り返される。相変わらず先生は笑顔で対応している。

――ふっ……ガキ共め！いつも沖さんたちといるとみんなガキに見えてくるぜ！見せてやろう！大人の質問と言うヤツを！！

一通りの質問が終わり、生徒達の手が上がらなくなった。

「先生……」

俺は格好よく、ゆっくりと手を上げる。沖さんに教わった『格好いい手の上げ方』だ。

クラスのみんなが俺に注目する。

『えっ、ええ。じゃあそこの君』

俺は先生に呼ばれ立ち上がる。

「どうも。石川純也です。よろしく」

『え?よっ、よろしく』

大人はあいさつを忘れない。

「先生……」

俺はキリッとした目で見つめる。

『はっ、はい』

クラスのみんなは相変わらず俺に注目だ。

見せてやろう!大人というヤツを!!

「結婚してください」

『……』

クラス中が静まり返る。

――ふっ、決まったぜ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『ここからは純也妄想モード』

「結婚してください」

先生は照れながらも言う。

「ええ、あなたのような大人の男を待っていたのよ！」

クラスの生徒たちからの歓声。

『うお～純也～！かっこいいぞ～』

『キャー！純也く～ん！ステキ～！先生じゃなくて私と結婚して～』

『大人だ～！！』

「先生、行きましょう」

「はい！幸せにしてね」

『純也！純也！純也！純也！』

『いやぁ～純也く～ん！行かないで～』

――――――

――――

――

教室は静まり返っている。

――ふっ、決まったぜ！

次の瞬間

『わはははは！』

クラス中で大爆笑の渦が巻き起こる。

――あれっ？何か現実は違うぞ？

「ぷっ……コラッ！みんな！笑ったら可愛そうでしょ！？……プッ」

先生がフォローを入れるが、明らかにフォローになってない。だって、必死に笑いをこらえてるんだもの。

『ははははは！いいぞ純也！』

『ははは！腹いて～』

『純也は子供だなぁ～』

「あ～！誰だ今子供って言ったヤツ！！」

『わははははは』

「俺は大人だぁ～！！」

俺は一人、ひたすら叫ぶのだった。

Ｎｏ．３３　すたーと　その５

「ふふふ、子供♪」

放課後の帰り道、久留美はからかうような目で俺に言った。

「うるせ～ぞ！俺は大人だ！」

「純也ちゃん」

「くっ……」

――最近の久留美は性格が悪くなってきたな。

「そういえばカズ君はどうなったのかな？」

「ん？ああ、そう言えば今年から中学生だったな」

俺たちはそんな会話をしながらストバスのコートへと向かう。

商店街へと入り、裏路地へと向かう。だんだん目的地に近づくにつれ、大きな歓声が聞こえてくる。

「おっ、今日もやってるな」

コートを見渡すといつものように、試合が行なわれていた。

『いけ～！』

『ははは、殺すぞ！』

『痛ぇ～……』

俺はとりあえず、マイボールを取出しドリブル練習をする。もうこのコートにきてから二年になる。ドリブルもかなりできるようになった。今では高校生たちにまじって試合もしている。

自分が出場する試合をドリブルでもしながら待っていたときだった。

「オッス純也！」

「あっ！沖さん、久しぶり！」

俺は声のした方向を見る。するとそこには沖さんがいた。

「沖さん！最近見なかったな。どうしたんだよ？」

「いや、今まで学校をサボりすぎた分いかなきゃならね～んだよ。卒業できねぇ」

「ええ！？沖さん本当に高校生だったの？」

「あたりまえだろうが！！だからこんなに苦労してんだろ！」

「へぇ～、高校って大変なんだな」

「ああ、俺ももう卒業さ……そしたら今までみたいにここにはこれ

なくなるかもな」

沖さんは悲しい顔をして言った。さらに続ける。

「ホント、俺みたいなのが大人になったらどうなっちまうのかな？最近考えるんだ」

「どうしてだ？」

「不思議でしょうがねぇよ。ガキの頃は大人になったら何かが変わると思ってたんだけど実際はガキの頃のままさ」

「ふ～ん、そんなもんかぁ？」

「いつになったら変わんのかな？まぁ純也に言ってもしかたがないか」

「なっ！バカにすんなよ！俺は大人だぞ！」

怒る俺に久留美が一言、

「純也ちゃん♪」

「くっ、久留美！それは言うなって！」

それに沖さんがくいつく

「ん？どうしたんだ？」

「えへへ、沖さん！今日ジュンが先生にね……」

「バカヤロォ！言うんじゃねぇ！」

俺は久留美の口をふさいだ。

「む～、む～！！」

「おい純也、どうしたんだよ？久留美ちゃんをイジメるなよな」

「ははは、沖さん。なんでもねぇから気にするな！」

「む～！」

「そうか？じゃあ俺はもう行くから」

そう言って沖さんはコートからでていこうとする。

「え？沖さんバスケやらねぇのか！？」

「はは、言ったろ？わりぃけど忙しいんだ。またな」

そしてどこかへ行ってしまった。

――沖さん……何か淋しそうだったな。

ボーっと考え事をしていてあることに気付く。

「む～～～！！！」

「あっ！わりぃ」

久留美を捕獲していたことをすっかりと忘れていた。

「ちょっと！苦しいじゃない！！死んじゃったらどうする気！？」

「ははは、わりぃわりぃ」

「『わりぃ』じゃないでしょ！まったく……」

そうこうしているとき、不意に声が聞こえた。

『よう！相変わらず仲がいいな』

俺たちは声のしたほうに振り向く。

「カッ、カズ！？」

「カズ君！！」

俺たちが驚くのも無理はない。何せ急にカズの髪型がドレットヘアーになっていたからだ。

「どうしたんだよその頭！！」

「ん？あ、これか？アイバーソンみてぇで格好いいだろ？」

「何か妙に似合ってるぜ！強そうだな！」

「ふっ、まあな。これで俺は無敵だ」

「意味がわからん！そう言えば中学校はどうだ？」

俺はカズに聞いてみた。これはずっと気になっていたことだ。

「普通だよ。人が増えたくらいじゃねぇのか？あと色々あってめんどくさい」

「部活は？バスケやるって言ってただろ？」

「追い出された」

「は？」

固まる俺と久留美。

カズは話を続ける。

「いやぁ、何かこの髪型で部活の見学に行ったらよぉ、『なんだその髪型は！ふざけてるのか！』ってクソ監督がいいやがったんだよ」

「ふむふむ」

俺と久留美はその話をコクリコクリと頷きながら聞く。

「だから言ってやったぜ！『俺の魂をなめんじゃねぇよ！』ってな」

「ははは！カズらしいな！でもいいのかよ？」

「問題ねぇさ。あんなヤツにバスケは教わりたくねぇよ」

「そうか。じゃあ今まで通りだな。よしっ！１ＯＮ１やろうぜ！今日こそ倒してやるぜ！」

「ああ、いいぜ！」

そして俺たちの１ＯＮ１は夜遅くまで続いたのだった。

ちなみに俺は今日もカズに負けてしまった。いつかかならず倒してやるぜ！

Ｎｏ．３４　すたーと　その６（前書き）

恐ろしく長く書いてしまいました、申し訳ないです、はい。過去編は実はもう一山あったりします。どうしても慎重にいきすぎて長引いてしまいます。ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

Ｎｏ．３４　すたーと　その６

俺が小学５年生になり、約半年が経過した頃、

俺たちの担任、小松田聖子先生がみんなの前に立ち話しはじめる。

「は～い、みなさ～ん！注目して」

ガヤガヤしていた教室が一瞬にして静まり返る。

いったい何のようだ？

先生が話しはじめる。

「今日からこの５年３組に新しい仲間が加わりま～す！」

『おお～！！』

『転校生だってよ！』

『男かな？』

『どんなんだろ～？』

静まり返っていた教室が先生の発言により、再び騒がしくなる。

「は～い、みなさん！静かにして～！それじゃあ入ってきて」

先生は教室の入り口のドアに向けて声を発した。

しばらくして教室のドアが開かれる。

ガラガラガラ

教室に一人の少年が入ってきた。背は小さめで目は大きい。パッと見ただけでは女と間違えてしまいそうだ。

『え?嘘!?かわい～』

『キャー!女の子みたい!』

どうやらクラスの女子には大人気のようだ。

「それじゃあ自己紹介お願い」

先生が少年に言った。少年は自己紹介を始める。

「……柿崎優です。よろしくお願いします」

なんか暗そうなヤツだな。後ろに影が見える気がするぞ。

「優くんはお家の都合で、この学校に来ました。みんな仲良くしてね～」

『は～い』

先生の言葉にクラスのみんなが返事をする。さらに続けて先生

「じゃあ優くんの席はどうしようかしら?」

先生は腕をくみながら辺りを見渡す。

「純也くんの隣が空いてるわね。優くん、そこに座って」

先生は俺の隣の席を指差す。優と呼ばれたヤツは軽く返事をした後、俺の隣に座った。

「オッス！」

俺は何となく話し掛けてみると、

「……」

見事に無反応だった。気を取り直してもう一度、

「俺は純也ってんだ。ジュンって呼んでくれ！」

「……」

「お前の名前は？」

「……さっき先生が言ったろ」

「くっ……」

なっ、何だコイツは？ノリが悪いにも程があるだろ！！

この会話を聞いていた先生は慌ててクラスのみんなに話し掛ける。

「え、え～と……。優くんは周りが知らない人ばかりで不安だと思うから、みんな、仲良くしてあげてね。優くんも、わからないこと

があったら聞いていいのよ」

「……はい」

優はそう一言だけ呟くと再び下を向いた。

いったい何なんだコイツは？もっと友好的にいこ～ぜ。

――――――

――――

――

一時間目が終わり、クラスのみんなが優を取り囲む。転校生にとっては、避けて通れない道だ。

『ねぇ、優くん。どこから来たの？』

「……仙台」

『へぇ～、東北かぁ。どうだった？』

「……寒い」

みんなの質問に対し、優は一言でかえす。相変わらずノリが悪い。

その後も授業が終わるたびに、みんなが優を取り囲み質問攻めをするが、なかなか優はしゃべらないため、イマイチつかみづらかっ

た。

『さようなら～』

すべての授業が終わったのにもかかわらず、まだまだ質問攻めは続くようだった。

しかし俺はストリートバスケに早く行きたかったのでかまっている暇はない。まぁせいぜいがんばりたまえ、ひま人たちよ。

「久留美、お前今日はどうする？」

「あっ、ジュン。待って、私も行くから」

久留美も優を取り囲む大衆には加わらず、ストバスに来るようだ。机の中の教科書をランドセルに入れる。

「じゃ、行くか」

「うん」

俺たちは商店街へと向かう。

「ねぇ、ジュン」

「んあ？」

「何よその変な返事は……別にいいけど」

「なんだよ？」

「え?え～と、優くんについてどう思う?」

久留美が質問をしてくる。まぁ、下校中にこの話題がでてくるのはある程度予測していた。

「アイツ?なんか暗いヤツだな」

「そうよね。何かあったのかしら」

「知らね。俺の知ったこっちゃね～」

「もう、ジュンったら」

その後もどうでもよい話が続き、気付いたらコートについていた。コートにはあまり人がいない。カズみたいにこれから来る人がほとんどだ。

俺は自分のボールを取り出し練習を始める。

ダムダム

「シュート!」

俺の放ったレイアップシュートは見事にリングに吸い込まれる。レイアップが今の俺のベストショットだ。

『よっしゃあ!ジュン、勝負しようぜ』

近くにいた中学生が俺に勝負を挑んできた。

「よし、負けたほうはジュースおごりな」

『ああ、いいぜ』

売られた勝負は全部買う。最近は、ぼちぼち勝てるようになってきたのでジュースを賭けたりしている。

試合が始まり、両者とも激しい戦いが繰り広げられる。

「おっしゃあ！決まったぜ！」

『くっそ～』

「しまった！」

『へへ、もらい！』

――――――

――――――

――

『はぁはぁ、ジュン。約束通りジュースな』

「ちっ、わかったよ」

善戦したのだが、二点差で惜しくも負けてしまった。しょうがなく俺はジュースを買うために商店街にむかう。近くにあるので便利だ。

「久留美、今からジュース買いに商店街に行くけどお前は？」

「うん。私も喉かわいちゃった」

俺たちは先程来た道を逆戻りする。薄暗い路地裏をでるとすぐに商店街だ。

自動販売機は何度も通ったがまだ俺は買わない。

理由はもっと安いところで買うからだ。

俺たちはここらで一番大きい店に入る。ここでは、自動販売機の約半分の値段でジュースを買うことができる。そのかわり名前もメーカーも聞いたことのないものばかりだが、俺たちにとっては十分だ。

買い物をすませてから再びコートに戻ろうと店を出たときだった。

「ねぇ、ジュン。あそこにいるの優くんじゃない？」

「ん～？」

久留美が突然そんなことを言いだしたので俺は久留美の示した方向に目をやる。

そこには確かに優がいた。下を向いたままうつむいている。誰かと待ち合わせをしているようだ。

俺は何となく話し掛ける。

「よぉ！」

「！！」

突然の俺の出現に驚いたらしい。

「……何のようだ？」

――相変わらず暗いヤツだな。

「いや、お前こそ一人で何やってんだよ？迷子か？」

「……迷子じゃない。人を待ってる」

「ん？誰？」

「お前には関係ないだろ」

――ちっ、話し掛けて損したぜ。

そう思い俺がこの場を立ち去ろうとしたときだった。

『優！』

一人の女性が優に向かって叫んだ。母親だろうか？そいつは優の近くまできて優に話し掛ける。

『優、遅れてごめんね。それじゃあパパの所、いこっか』

「……」

『ん？どうしたの？』

「……勝手に行けよ」

『え？』

優は下を向いていた顔を上げ、なぞの女に叫んだ。

「アイツの所なんて勝手に行けばいいだろ！！」

そう言って優はどこかに走りだして行ってしまった。

『優……。私、間違ってるのかしら……』

なぞの女は泣き始めてしまった。いきなり俺たちの目の前で繰り広げられたドラマに、まったく付いていけなかった俺と久留美は、何をすれば良いのかわからずにその場に立ち尽くしていた。

俺は恐る恐るなぞの女に質問する。

「おっ、おい。泣くなよ」

『え？』

俺たちの存在に気付いたらしく、慌てて涙をふく。

『ご、ごめんなさいね。優のお友達？』

「友達ではない」

俺はキッパリと言い切った。

「なぁ？どうかしたのか？アイツ何か暗かったぞ？」

『本当は明るい子なんです。でも私のせいで……』

さらに続ける。

『私、ずっと前に離婚したんです。それで、再婚が決まってこちらに来ました』

「じゃあ、再婚が原因なのか？」

『はい……、再婚の話がでた途端に急に目の色が変わってしまって……。本当は今日、新しい旦那に優と会うつもりだったのですが……』

「へ、へぇ～」

――何か複雑そうな話だな……あまり関わらないほうが良さそうだな。

『私……間違っているのでしょうか？』

「え？い、いや、たぶんあってるよ。な、なぁ久留美？」

「うん……優くんならわかってくれるはず」

「じ、じゃあな！優の母さん！がんばれよ」

『はい、面倒なことに巻き込んでしまってごめんぬ』

「あ、ああ。よし、行くぞ久留美！」

「え？でも……」

思い止まる久留美を無理矢理連れていく。

優の母さんが見えなくなったところで、俺は久留美に話し掛ける。

「『でも』じゃねぇよ。ああ言う話は関わらないほうがいいぞ。大人の世界だからな」

「うん……」

そして俺たちはストバスのコートへと向かう。

路地裏に入ったところである人影があるのに気付いた。

先程の少年、優である。

「こんなところに逃げやがったのか……」

俺は優に近付き話し掛ける。

「どうした？今度こそ迷子か？」

「うるせぇ。俺に関わるな」

「はいはい、そ～ッスカ。すまんね。じゃ～ね。ばいばいサヨウナラ。いくぞ久留美」

「う、うん」

俺たちは優を通り過ぎてコートに向かう。

「……聞かないのか？」

「あ？」

突然の優の発言に俺たちは振り替える。

「何を？」

「母さんに聞いたんだろ？俺がこうしている理由を」

「あ～、何か言ってたね」

「気にならないのか？」

「興味ねぇし、知ったこっちゃねぇ」

俺は優に背を向け歩きだす。

「どうせまた離婚するに決まってるさ……。新しい父さんも浮気するに決まってる。そんなもんだろ？まったく、母さんはバカだな」

俺は優に背を向けたまま、

「……ついてこいよ」

「は？どこに？」

「ついてこればわかるっつ～の。まぁお前の勝手だが……」

No．35　すたーと　その7

「ここは？」

優は俺に不思議そうに言った。

「バスケットのコートだよ。粗末なもんだけどな」

「バスケット……」

「知ってるのか？」

「知ってるけどやったときはない」

「ふ～ん」

そう言って俺はドリブルをする。

「じゃあやってみるか？」

「ふ、ふざけるな！何でおれが……あっ！！」

優は俺が突然パスしたボールを落とす事無くキャッチした。

「ナイスキャッチ。ルールくらいは知ってるだろ？」

「一応な」

「よし、勝負だ！」

「まだやるとは言ってないぞ……」

「スキあり！」

俺は優からボールを奪い取る。

「スキだらけだな。よしっ！俺からボールを奪ってみろ！」

「くっ！このっ！」

優は俺のボールをカットしようと手を出すが、触れることができない。

俺はそのまま優をかわし、レイアップシュートを決める。

「２対０だ」

そして俺は優にボールを渡す。優はぎこちないドリブルで俺に向かってくる。スキだらけのドリブルなのですぐにカットすることができる。

「もらい！」

「あっ！」

そのままシュートを決めて４対０とする。

「ほらっ、お前の番だぞ」

「わかってる」

優は俺からボールを受け取ると、再びぎこちないドリブルで攻めてくる。

しかし、簡単にボールを奪われてしまう。

「おいっ！俺を止めたければもっと腰を落とすんだな」

「腰……」

俺は優にそう助言し、オフェンスを始める。

「遅いな」

俺は楽々優のディフェンスをかわしたかのように思えた……が

「くっそ！」

――何！？

優のディフェンスにより、とめられてしまった。優のディフェンスはぎこちないながらも必死に腰を落としている。

――こっ、コイツ、しつけぇ

「とった！」

少しのスキを突かれ、俺は優にボールをカットされてしまった。

「と、とった」

「い、今のはマグレだ！さぁ、早くかかってこい」

再び優のオフェンス。

「どうした？シュートしねぇと得点にねぇぜ？」

「っと」

優はリングから少し離れたところからシュートを放つが外れてしまう。

そのボールを俺はリバウンドし、今度はオフェンスをする。

「オラオラどうしたぁ！？もっとかかってこい！」

「……見てろよ」

その後も俺たちは時間を忘れ、ストリートバスケにうちこんでいた。

――――――

――――

――

「はぁ、はぁ、はぁ……優、なかなかやるな」

「はぁ、はぁ、……運動には自信があるからな」

俺たちはコートの隅に横たわっていた。コートでは他の人たちが試合をして楽しんでいる。
俺たちの試合は俺が勝ったのだが、かなり疲れてしまった。優の根性のディフェンスには正直まいった。
俺たちがそんな会話をしているときだった。不意に自分の頬に冷たいものが当たった。
「お疲れ～。はいジュース。はい、優くんも」
「あ、サンキュー」
「……ありがとう」
それを俺たちは一気に飲み干した。
「なぁ優？」
息を整えた俺は優に話し掛ける。
「何だ？」
「楽しいか？」
その言葉を聞いた優は軽く笑みを浮かべる。
「ああ、こんなのは久しぶりだ」
「そうか……」

俺たちの会話が途絶える。聞こえるのはコートで試合をしている人のドリブルの音だけだ。

「お前は聞かないんだな。クラスのみんなは興味津々に俺のことを知りたがってたのに」

今度は意外にも優から話し掛けてきた。

「言ったろ？興味ない。話したいなら聞いてやるぞ」

「ふっ」

優は微笑する。そして話し始めた。

「俺の母さんが再婚する話は聞いているな？」

「んあ」

「前に離婚した原因は父さんの浮気なんだ」

「ふ～ん」

「それも何度も。何回も目をつぶっていた母さんだけど、ついに怒って離婚さ。その時、母さんは泣いてたんだ。だからもうあんな思いをしてほしくないんだ」

「つ～か、さっきお前の母さん泣いてたぞ」

「え！？」

優は驚いた表情で俺を見る。

「母さんには幸せになってほしいんじゃねぇのか？」

「それはそうだ……」

「新しい父さんにはもう会ったのか？」

「いや、まだ会ってない。」

「とりあえず会ってみたらどうなんだ？もしむかつくヤツだったら全力で反抗すればいい」

俺の言葉に久留美が続く。

「そうよ。会ってみないとわからないじゃない。それに……きっとお母さんだって幸せになりたいはず！」

「……」

優はぼ～っとして考え込む。そして、

「わかった。とりあえず会ってみるよ。ありがとな」

「べ、別に暇だったから聞いてやっただけだ」

そして、優は立ち上がりコートを去る。

「じゃあな」

「おう、じゃ～な！母さん泣かせるなよ」

――俺んちだったら間違いなく死刑だな。

やがて優の姿も見えなくなり、久留美が呟いた。

「優くん……うまくいくといいね」

「んあ」

「クスクス、ジュンったら、興味ないフリして実は心配だったり♪」

「ああ！？なわけね～だろ！きまぐれだ、き　ま　ぐ　れ！！」

「『べ、別に暇だったから聞いてやっただけだ』だって……クスクス、かわい～」

「うるせぃ！だまれぃ！」

「照れてる照れてる、子供ね～、純也ちゃん♪」

「うがぁぁぁ！！」

――――――――

――――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レストランにて。

優の隣には母親。そしてむかいの席には、新しい父さんになる予定の男だ。

『この子が私の子供、優よ。ほら、あいさつしなさい』

優は渋々あいさつする。

「どうも……」

それに対し、男も言った。

『おお！コイツがお前の子供か。堅苦しいあいさつはなしにしよ～ぜ！がははは』

「！！」

優は驚いているようだった。あまりにも意外な反応だったからだろう。

『クスクス、そうね』

話は進んでいく。優は相変わらず下を向いたままた。

そして、話も終盤に差し掛かった頃

『ねぇ優？何かこの人にききたいこととかある？』

『よし！何でも聞いてやるぞ！遠慮すんな』

「……」

下を向いていた優は顔を上げ、男に言った。

「お前は前の父さんみたいにはならないだろうな？」

『知らん。神様じゃねぇし、そんなことわかるはずねぇだろ？』

「なっ！だったらなんで――」

『ただ一つだけ、はっきりと今、言えることがある。』

「……」

しばしの沈黙のあと、男は口を開いた。

『俺はコイツを世界で一番愛してる。できれば一日中ずっと一緒にいたい。そして、これからもずっとコイツを見ていたい』

「……」

レストランが静まるかえる。恐らく他の客にも聞こえていたのだろう。優の母は顔を真っ赤にして男に言った。

『ち、ちょっと！！そんな恥ずかしいこと、大きい声で言わないでよ』

『がははは、別にいいだろ?京子、愛してるぜ!ベイビー!』

『もう!!』

『照れるなよ。おい、優だったか?お前の母ちゃんは頑固でさ、結婚してくれって何回頼んでも断りやがって』

『しょうがないでしょ、もう二度とあんな目にあいたくないんだから』

『心配するなって!ホラ、チューするかチュー』

『優、行くわよ!!』

『がはは、待てって!』

「はははははは」

『!』

突然優は笑い始めた。バカにするような笑いではない。
心からの、笑顔を交えた笑いだ。
きっと優はこのときこう思っただろう

――この人ならきっと……

―――――――

―――――

――

次の日。

キーンコーンカーンコーン

すべての授業が終わり、生徒達は下校する。
昨日は優の周りに沢山集まっていた生徒も今日はいない、さすがに二日目なので興味も薄れたようだ。

突然優は純也に話し掛ける。

『おい純也！』

『ん？』

突然話し掛けてきた優を純也と久留美は不思議そうに見つめる。

「早くストバスいこ～ぜ！ホラ」

そう言って優は背中に隠していたものを二人に見せる。
二人の前にあらわれたのは新品のバスケットボールだ。

「おっ！バスケボールじゃんか！買ったのか？」

「ふふふ、昨日父さんに買ってもらったのさ。グズグズするなよ！先に行ってるぞ！」

そう言って優は大急ぎでコートに向かった。　やがて優の姿が見えなくなり、久留美が口をひらいく。

「優くん、うまくいったみたいね」

「ん？たぶんそ～じゃねぇの？」

「よかった……。ジュンも本当はうれしいくせに」

「だから、俺は自分に関係ないことは興味ねっつ～の」

「ふふ……そう。それじゃあ、いこっか」

「ああ。これから毎日優の相手をしなくちゃいけねぇしな」

「そ～ゆ～台詞はカズ君に勝ってから言いなさい♪」

「くっ、いつかぶっ倒すっつってんだろ！！！あ～！そう考えてたら急にやる気が湧いてきた！よぉし久留美！早く行くぞ」

「あっ、待ってよぉ」

No．36　すたーと　その8

父さんが新しい人になって一週間がたつ。
新しい家にも少しだけ慣れてきたところだ。

ちなみに今日は日曜日。だが俺はあるところに向かう。

そう。あのストリートバスケットだ。部屋にある真新しいバスケットボールを手に俺は勢い良く家をでる。

『いってきま～す！！』

『はやく帰ってくるのよ』

母さんがそう言ってきた。新しいと父さんは休みなのでまだ寝ている。

俺は走って5分くらいの場所にあるコートへと向かった。
コートは初めは恐い人だらけで正直ビビッたけど、実はみんないい人たちで、俺を歓迎してくれた。

そうこうしているうちにコートに辿り着く。

「よお！優。おせ～ぞ」

純也が話し掛けてきた。

「くそ～、今日は絶対に俺のほうが早いと思ってたのに！」

「ははは！まだまだだな」

「いつも2番目か……よし、練習しよっと」

そう言って俺はシュート練習を始める。

純也はレイアップ、俺は少し離れたところのミドルシュートだ。

俺はリングに向かってシュートする。

ゴンッ！

しかしボールはリングの淵に当たり、弾き飛ばされてしまう。

――おかしいな……

その後もシュートをうってみるが入らない。

『オッス優！』

俺は突然声のしたほうを見る。声の主はジュンではない。

「お、カズか」

そこには最近知り合った男、『カズ』の姿があった。

「ああ。みんな来るの早いな」

「おう。早く練習したかったんだよ。って言ってもここに一番最初に来たのはジュンだけどな」

「ははは、アイツはバスケバカだからな。まぁ、俺もだが」

そう言ってカズはリングに向かってシュートする。　そのボールはリングの淵にあたる事無く、綺麗に吸い込まれた。

俺も負けずにシュートする。やはり、惜しいところで外れてしまう。

「へぇ〜、優はサウスポーなのか？」

突然カズか俺にそんなことを言ってきた。

「さうすぽー？」

「左利きのことだよ。ほら、もう一度うってみろ」

「ああ」

俺再びはシュートをうつが、また外れてしまう。

「肘だな。優はいい線をいっているんだが、肘が明後日の方向を向いてる。肘はこうやるんだ」

カズは構えてみせる。肘は綺麗にリングの方を向いていた。

「こうか？」

俺も真似をして構えてみる。何だがぎこちない気がする。

「そうだ。後は肘が横にブレないことを意識して、手首でバックス

ピンをかけるようにして放つ」

「肘、手首……」

俺はカズに言われたことを意識してシュートを放つ。

シュッ！

ボールは綺麗な弧を描き、リングに向かっていく。

スパッ！

今度は綺麗にボールがリングに吸い込まれた。

「は、入った……」

「へぇ～、筋がいいな。後は膝のバネを使うように意識してみる。手の力より明らかに足の力ほうが強いからな。使わないともったいない」

「膝のバネねぇ」

カズの言った通りにするとなぜかうまくいく。

その後も俺はカズにアドバイスをもらい、練習に励むのだった。

――――――

―――

「ただいま～」

俺は家に帰り、部屋に戻る。今日もたくさん試合をしたので疲れた。

しかしカズにはまったく歯が立たない。ジュンもさすがにバスケ暦が長いのでうまい。早くみんなに追い付かなければ……。

そんな考え事をしていた時だった。

ギュイーン！

近くにある父さんの部屋から何やら音が聞こえた。

「何だ？うるさいな」

俺はそんなことを思いつつ、父さんの部屋に向かう。

コンコン

ノックをして、一瞬間を置いた後、返事が聞こえたので俺は部屋の中へと入った。

「父さん、何やってんだ？」

『ああ、うるさかったか。悪い悪い。久しぶりにギターを触ってた

ところだ』

「え!?父さんって、ギターできたの?」

『まあな。これでも昔は夢を追い掛けてバリバリならしたもんだ。結局夢は叶わずに、今では普通の会社員だけどな。ははは』

「はは、何だよそれ」

父さんは練習を再開する。

――な、なんだこれ?

俺は目の前の光景に目を奪われる。

――凄い……何だかよくわからないけど凄いぞ……。

父さんの演奏が終わる。

『いやぁ〜、鈍ったなぁ。恥ずかしくて人前で弾けねぇや、ははは』

父さんは恥ずかしそうにそう言った。

「凄い……」

『ん?そうかぁ?全盛期はこんなもんじゃなかったんだがなぁ。ブランクってのは怖ぇぜ』

「ギターってそんなことができるんだ」

『そうだろ？　まったく、スゲェ玩具だぜ。どうだ？　お前もやってみるか？』

「うん。でも俺、左利きだけど関係ないのか？」

その言葉を聞いて父さんは考え込む。

そして結論を言い放った。

『安心しろ』

「え？」

『何と偶然にも俺も左利きだ』

「ええ？本当に？」

『ああ。だから俺の使わなくなったギターを貸してやろう。いつか自分のギターを手に入れたら返せよ』

「うん！わかった！」

この日から俺はバスケとギターに夢中になることとなる。

Ｎｏ．３７　すたーと　　その９（前書き）

時間があいた投稿ですみません。忙しかったのと慎重にいきすぎてボツ作を二個もだしてしまいました。ボツになった話はまたいつか違う形で使用したいです。とりあえず、長い過去編はこれで終わりです。

Ｎｏ．３７　すたーと　その９

時が流れるのは早いもので、気付けば俺は中学生になっていた。

しかし相変わらず俺の日常の流れは変わらずバスケばかりしてた。

残念なことに沖さんや他の人たちも大人になりストバスのコートには来なくなってしまった。

『今まで俺は親に迷惑かけっぱなしでよぉ、俺のために毎日馬鹿みてぇに働いてな。俺にはそれがわからなかったんだ。たった一人で俺に食わせるために必死に馬鹿みてぇに……』

『え？　沖さん？　どうしたんだよ急に？』

『…なんでもねぇよ。純也にもいずれ社会にでればわかるさ。……今度は俺が母さんに恩返しする番だ』

『ん？　よくわからねぇ』

『ふ……じゃあな純也。これでここに来るのは最後だと思うからな。バスケ期待してるぜ！』

『ち、ちょって待てよ！　沖さん？　最後って……』

……。

これは一年前の会話。

沖さんはそれ以来本当にコートには来なくなってしまった。真面目に働いているのか？　どうなったのかはわからない

「おいジュン！　ぼーっとしてないで準備しろよ。もう時期試合だ」

「ん？　ああ、悪い悪い」

考え事をしていたらカズに突っ込まれた。

現在俺、カズ、優、久留美の四人はストリートバスケの大会の控え室にいる。

この大会は自由参加で年齢制限もなし、俺たちの力を試すにはもってこいだ。ちなみに久留美はストバスの仲間と応援に来ている。

「よし！あと二回勝てば優勝だな」

優が俺とカズに言った。俺は答える。

「ああ、あまりたいしたことねぇな。このままぶっちぎりで優勝だぜ！」

『よっしゃあ！』

俺たちはそう言って互いの拳を合わせる。

意外とここまで来るのはあっけなかった。俺たちは最年少にもか

かわらず、快進撃を繰り広げ大人達を次々となぎ倒していったのだ。

『試合開始3分前です』

控え室にスタッフらしき人が入ってきてそう言った。

「がんばってね」

「ああ」

久留美の言葉に返事をして、俺たちは会場へと向かった。

――――――

――――

――

『Ｙｏ！　またせたな！　今から待ちに待ったＳｔｒｅｅｔ　Ｂｏｙｓ準決勝が始まるぜ！』

『わぁぁぁ！！』

会場のＭＣの言葉に観客の声援が勢いを増す。

小さな大会だと思っていたのだがしっかりとした室内の体育館で行なわれ、観客も驚くほど多い。理由はおそらく県外からも参加者がいるほど大規模な大会だからだろう。

俺たちがここまで勝ち上がってこれた凄いことだ。

『両者自己紹介が始まるぜ？準備はいいかい？』

『わぁぁぁ！！』

ＭＣが対戦相手のメンバー紹介をはじめた。名前を呼ばれた人は一人ずつコートに出ていく。観客に手を振ったり準備運動をしながらメンバー全員がコートの上にたった。

『さぁ、次は今大会最年少にして準決勝への切符を手にしたチームだぜ！ヨォ！』

『わぁぁぁぁぁ！』

『いいぞぉぉぉ！』

『待ってました！！』

『カズくぅ～ん！！』

『キャー！優くん素敵！』

相手チームの声援より俺たちの声援の方が大きかった。つぅか、俺に対する声援が少ないような……。

ＭＣが俺たちのメンバー紹介をはじめる。

『コイツがいなかったら準決勝進出はありえなかっただろう！　数々のスーパープレイで観客の視線を釘づけ！　アシストではキラーパスを連発したオフェンシブガード……森村カズキぃぃぃぃ！！！』

『おぉぉぉぉ！！』

カズは軽いステップをふみながらコートに入る。

『綺麗なのは顔だけじゃないぜぇ！？　美しいフォームから放たれるスリーポイントシュートで数々のピンチを救ってきた男、フォワード……柿崎優！』

『キャー優く～ん！』

なんか女の声援が大きいような気がするんだが……。

「今大会、センターの中では最小だが、持ち前のパワーとテクニックで強者達との１ＯＮ１に勝利していた男……」

――よし！　こい！

『きた男……』

――ん？　なんだ？　勿体ぶんなくていいぞ？　ドンと来い！

突然ＭＣの様子がおかしくなる。

『あれ？　何ていう名前だっけ？』

どかーん！！

俺は思わず転ける。

『わはははは！』

会場は笑いでいっぱいになる。つ～か、マイク通してわざわざそんなこと言うなよ！

『あれ？　君、名前なんだっけ？』

「あ～！？　俺の名前だぁ～？　一回しか言わねぇから耳糞かっぽじって聞きやがれ！　俺の名前は――」

――石川純也様だこの野郎！！

と言おうとしたときだった。

「ガチャピン」

――は？

突然声のした方を見てみると、そこにはニヤニヤと笑みを浮かべたカズがいた。

『ＯＫＯＫ！　ガチャピンか！悪かったな！会場のみんな聞いてくれ！　彼が強者達を得意の１ＯＮ１で粉砕してきた男……』

「おい！　ちょっとまて！」

『ガチャピン！！』

『わぁぁぁ！！』

――ちょっとまて！　明らかにおかしいだろ？　気付よな！！

「よし！　頑張るぞ『ガチャピン』」

と、カズ。

『落ち着いていけよ、『ガチャピン！』』

と、優。

「カズ！　テメー、ぶっ殺す！」

『両者それではジャンケンで先攻後攻決めてくれ！』

俺が今にもカズにロケットパンチをくらわそうとした時、ＭＣが割り込んできた。くそ！　覚えていろよ！

会場には大音量のＢＧＭが流れている。

そんな中、俺たちの試合が開始された。

先攻は俺たちボール。

カズはゆったりドリブルしながら辺りを見渡す。

『よしっ！』

それを相手はチャンスとみたのかスティールの体勢に入る。

「残念」

『何！？』

カズにはそれが来るのをわかっていたようで、体勢の崩れたディフェンスの逆サイドから抜き去る。

リングにむかって一直線のカズを他の敵がカバーをした。

カズがドライブで切り込みシュートを放とうとしたときだった。

『え！？』

カズは突然自分の右斜め後ろにパスをだす。ディフェンスはかなり驚いた様子だった。

ボールの向かう先に待機していたのは優。

ノーマークだった。

綺麗なサウスポーシュートから放たれたボールは綺麗に弧を描きながらリングに一直線に向かっていく。

パスッ！

そのボールはリングの淵ににあたる事無く綺麗に吸い込まれた。

『わぁぁぁぁ！』

『ＹＥＳ！ＹＥＳ！ＹＥＳ！一輝はいったいどこに目がついているんだぁぁっ！　いきなりノールックビハインドパスからのスリーとはやってくれるねぇ！』

ＭＣもかなり興奮しているようだった。

カズはディフェンスに向かって一言、

「切り込んでからさばく、基本だぜ？」

『くっ！』

相手チームは悔しそうな様子だった。

そして俺たちのディフェンスが始まる。

相手もなかなかやるようでスピードのある攻撃だった。さすがは準決勝だな。

カズのきついチェックに耐えかねて、相手チームはシュートを放つ。

「純也！　リバウンドだ！」

「おう！」

カズの言葉を聞く前から俺はリバウンドの体勢に入る。

『なっ！　このチビのどこにこんな力が！？』

相手チームのリバウンダーを力でねじ伏せ、そのまま俺は豪快にリバウンドをかます。

「よっしゃあ！　カズ！　行くぜ！」

俺はカズにボールを渡し、俺たちのオフェンスの番だ。

カズのボールが俺の手に渡る。

「石川ドライブ！」

素早いドリブルで俺は相手をかわす。

しかしゴール付近になって追い付かれてしまった。

『止めてやる！』

気にせずに俺は今の自分にできる最高のシュートを放つ。

そう、レイアップシュートだ。

『た、高けぇ！？』

俺はディフェンスの上からシュートを放った。昔からジャンプ力には自信があった。

シュートが決まり四点差とリードを広げた。

――ふっ！決まったぜ！

『ガチャピンのスーパーシュートが決まったぁぁっ！なんと、相手の上からのシュートだぁぁっ！』

「おい！　ガチャピンじゃねえって！」

必死に抗議している俺にカズが一言、

「ナイッシュ、ガチャピン！」

「うがぁぁ！　誰のせいでこうなったと思ってんだぁぁっ！」

「まあまあ」

いつまでも怒っているわけにもいかないのでディフェンスをする。

その後の展開も俺たちが優勢で何本か相手にシュートを決められるが、フェイントのプロ、カズに翻弄され相手はリズムを崩す。

シュートと思ったらパス。パスと思ったらシュート。

カズは小さな隙を見つけると確実に点に結び付けてくる。

周りの人の使い方が非常にうまいのだ。

この試合はカズの才能を観客に存分に見せ付けるゲームとなった。

Ｎｏ．３８　すたーと　終わり

『ナイスゲーム！』

準決勝を見事に勝利した俺たちは控え室に戻る。
するとストバスのみんなに祝福された。

『一輝さん！　かっこよかったっす！　さすがはコートができて以来の天才ッスね！』

「ああ、ありがとう」

おそらくカズのファンだろう。カズはこの大会でかなりのファンが増え、知らないバスケ少年から話し掛けられ、尊敬の眼差しでみられることになった。

『きゃ～！　優くん！　お疲れさまです！』

今度は優のファンクラブっぽいやつらだ。
あ～、ウゼェ！！　早くどっかに行ってくんね～かな？

『純也、ナイスだったぜ！　ギャハハハハ』

……俺の周りにはこんな野郎ばっか。何だろうか、この怒りは？

「ジュン！　お疲れ～」

「ああ、久留美か」

「頑張ったね～はいジュース」

「サンキュ」

久留美からもらったジュースを一気に飲み干した。

「次はいよいよ決勝だな！　頑張ろうぜ！」

カズがみんなに気合いを入れる。

『おっしゃあ！！』

――このままぶっちぎりで優勝だぜ！！

――――――――

――――――

――

と気合いを入れて望んだ決勝戦だったが、高さとスピードのあるバスケに苦戦する。そんな中でもカズのプレーが光り、接戦にもつ

れ込む。

とってとられてのシーソーゲーム。

しかし、カズの奮闘も虚しく、大会成績は二位という結果に終わった。

――――――――

――――

――

「くそ～！　４点差か……悔しいぜ」

「まぁまぁ純也。俺たちはよくやったほうだぜ？　初出場二位なんですげぇよ」

カズにそう言われたが納得がいかない。

控え室で俺とカズが話しているときだった。

ガチャッ！

突然控え室の扉が開かれる。

中に入ってきたのは二人。一人は見覚えがある。久留美だ。しかし、その後ろにいた人物は知らないヤツだった。

「久留美、そいつ誰だ？」

「こらジュン！　そいつじゃないでしょう！？」

「その人誰？」

「もう……カズ君に用事があるって」

「え！？　俺！？」

突然のことに驚くカズだった。知らないヤツが話しはじめる。

『君がカズ君か。いい試合だったね』

「あ、ありがとうございます。あの…用事って」

『君と二人で話がしたい。いいかな？』

――――――――

――――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カズとなぞの男以外誰もいない廊下。

「あの……用事って何でしょうか？」

『ははは、突然スマンね。私はこの高校でバスケの監督をしている者だ』

そう言って名刺を渡す。

「ふ～ん…それで、何の用ですか？」

『突然だが君をスカウトしにきた』

「え！？」

驚いた様子のカズだった。

『試合をみていて君が中学生だと聞いたから急いで駆け付けたんだ』

「……」

『どうかね？』

しばらく考え込んでからカズは答えた。

「……ここって私立だろ？わざわざそんなとこに言ってバスケしたいとは思わないね。ドレッドのことも言われそうだしな」

『別にその髪型でもかまわない。さらに、君を特待生として入学させる。どうだ？　よい条件だと思わないか？』

「……」

『もっとレベルの高い所で頂点を極めたいとは思わないか？　君にはその力がある』

さらにカズはしばらく考え込む。

「……考えさせてください」

『そうか……急にすまなかった。決心したなら名刺に書いてある番号に電話してくれ』

なぞの男はその言葉を言い残し、廊下の奥へと消えていった。

「レベルの高い所……か」

――――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大会が終わり、俺はストバスのコートに直行する。

コートにつく頃にはもう七時を過ぎており辺りは薄暗かった。

俺は黙々と一人で練習をする。あのとき、俺がシュートを決めていれば優勝できたかもしれない……
そんな想いが体を動かさずにはいられないのだ。

敗北が俺を強くする。

カズに負けて悔しいから練習する。そうやって強くなってきた。

カズと言えば、大会が終わって帰り道、考え事をしていたようで一言も口を聞いてくれなかった。あの謎のおっさんと何があったんだろうか？

練習を開始してしばらく経った頃、コートに一人の人影が現われた。

その視線の先には……

「カズ！？　いったいどうしたんだ！？　急に」

「ふっ、純也のことだから練習していると思ってな」

「ああ、悔しいからな」

カズは俺に次第に近づいてくる。

「なぁ純也？」

「ん？　何だ？」

「俺と１ＯＮ１しないか？」

「！？」

１ＯＮ１はいつもやっているのだが、なぜか今日は雰囲気が違う気がした。

俺はカズに言われたままに１ＯＮ１を開始した。

「純也！　どうした！？　それがおまえの実力か？」

「くっ！」

カズは強かった。フェイントがかなりうまく、さらにどこからでも点をとれる。

「純也、もっと本気でこいよ！」

「くそっ！」

カズに気合いをかけられ、俺たちは接戦になる。カズとこんなに競ったのは初めてだろう。近差の戦いが続いた。

「なぁ純也、これからもバスケを続ける気か？」

「え？」

カズの突然の発言に俺は動きを止める。

「隙あり！」

「！？」

カズは止まっていた俺を抜き去り、シュートを決めた。

そして、こっちを向いて一言、

「俺、高校行ったらバスケやろうと思うんだ」

「急にどうしたんだよ？」

「いや、さっき高校の監督にスカウトされてさ」

――あの謎のおっさん、監督だったのか。

「観てみたくなったんだよ」

「何を？」

「高いレベルのバスケってヤツをね」

そう言いながらカズはシュートをする。

外す事無くボールはリングに吸い込まれた。

「だからここ（コート）にはもうこれなくなる」

「……」

「安心しろ、俺とお前がバスケを続けているかぎり……バスケを好きでいるかぎり、きっとまたいつか戦えるさ」

突然のカズの言葉に俺はなんて言えばいいのかわからなかった。

「だからこの１ＯＮ１の続きはその時な」

そう言ってその場を立ち去ろうとしたカズ。

「ちょっとまてよ！」

「ん？」

「俺は今まで、カズを目標に練習をしてきた……。本当に……本当にまたいつか戦えるんだろうな？」

「ああ。いつか必ずな」

そう言ってカズは俺に背を向け、歩いていく。

「誰にも負けんじゃねぇぞ！　負けたら死刑だ！」

俺の言葉にカズは振り向きもせず、右手をあげて別れの合図だけをして、コートから消えた。

……カズ。

この時から俺とカズとの時間は確実に、音をたてて止まった……。

――――――

――――

――

……ジュン

――んん……。

……ねぇジュン！

「う……」

『ジュン！　起きろ～！』

ユサユサユサ！

俺の体が揺れる。

――ん、んん。

「ん？　あれ？　ここは？　カズは？」

目を明けるとそこには久留美の姿があった。

「なに寝呆けてんのよ！？　カズ君なんてこの高校にいるわけないでしょ？」

――ん？　高校？

「なぁ久留美、ここはどこだ？」

俺の言葉に久留美は呆れた様子で答えた。

「はぁ？　どんな夢みてたか知らないけどまだ寝呆けてるようね！

？　ここは朱雀高校教室よ、教室！」

「……教室」

――夢だったのか。懐かしい夢だったな。

「わりぃ、今何時間目だ？」

「もう終わったわよ。ジュンったら朝からずっと寝てたんだから！」

「マジで！？」

――道理で長い夢だったのか。

「マジよ！！　さぁ、早く部活に行くわよ」

――ぶかつ？

――バスケ！！！

「おう！！　行くぜ！」

「ええ！？　急に元気に！？あ……ジュン！　まってよぉ！」

Ｎｏ．３９　新たな風

「どうした！？　ペースが落ちているぞ！　３対２、２対１の速攻はオフェンスが重ならないようにして確実に決めろ！　ボールマンはカットインするなりして簡単なアウトナンバー（オフェンスがディフェンスよりも多い人数）を作ることも忘れるな！」

『ウッス！！』

放課後、朱雀高校体育館ではいつになく大きい声で部員達に気合いをかけるキャプテン『木ノ下薫』の姿があった。

「キャプテン、気合いが入ってますね」

マネージャーの春風久留美が部員に指示を出している木ノ下薫に話し掛ける。

「ああ、何せ関東カップが近いからな。少しでも気を抜けないんだ」

「そ、そうですか……。確かに大会まで２週間きりましたからね」

「ああ、そうゆうことだ」

そう言って薫は再び練習に戻る。久留美は少々気合いに押され気味のようであった。

――関東大会

関東の高校が参加する大会である。インターハイ予選より早い時期

に行なわれる。

部員達はその大会に向けて必死に走り回っているようだった。

「よし！　ひとまず休憩だな。休憩が終わったらすぐにセットからのオフェンスを始めるから、レギュラーとＢチームは準備をしてくれ」

『ウ、ウッス……』

ヨロヨロになりながらも部員達はマネージャー達が用意したジュースを手に取り、一気に飲む。

そして地面に座り込んだ。

『き、キツイなぁ』

『最近のキャプテン、ピリピリしてねーか？』

『しかたねぇだろ？　大会が近いんだから』

部員達はわずかな休憩時間で精一杯休んでいるようだった。

「大丈夫ですか？　我利勉さん」

朱雀高校一年ポイントガードの長谷川亮が二年生の我利勉翔太に話し掛けた。我利勉はグッタリとしながら床に座っていた。

「だ……大丈夫…ゴホッゴホッ……だよ。ありがとう」

見るからにアウトの気配が漂っていそうだった。亮は心配した様

子で翔太に話し掛けた。

「そ、そうですか。　あまり無理をなさらないで下さいよ。ただでさえ速攻はフォワード、ガードが走りますからね」

「ははは、ありがとう。でもここでやめる訳にはいかないよ。みんなに迷惑かけるしね」

「そうですね……大会頑張りましょうね」

「うん」

そう言って亮も我利勉翔太の横に座った。

部員達が束の間の休息に全力で休んでいるときだった。

ダムダムダム！

『ん？』

突然、聞こえたドリブルの音の方に部員達は目をやる。

そこには休息もしないでシュート練習を始める純也の姿があった。ボクシングのシャドーのように、見えない敵と戦っているようだった。その相手が誰かはわからない。

「おい純也」

「ん？」

薫が慌てて純也のもとへ駆け寄る。

「休憩のときはしっかりと休め」

「何で？」

「長時間ずっと練習するより、集中して練習、そして休む……の方がずっと身になるんだぞ」

「休憩なんて家に帰りゃあいつでもできんだろ？　第一俺休憩するほど動いてないし」

純也の言葉に部員達はギョッとする。おそらく自分達と同じ量の練習をこなしているのにまだ練習したりない純也に驚いているのだろう。練習の辛さは自分達が良く知っているためだ。

「実は薫もあまり疲れてねぇんだろ？」

純也のその言葉に薫は、

「……ほどほどにな」

と、軽く笑みを浮かべていった。そのまま薫は休憩に入るべくジュースを取りに行く。

そして、純也が練習を再開しようとしたときだった。

ダムダムダム！

「ん？」

突然、純也は自分以外のドリブル音が聞こえたので、不思議そうにその方角に目をやった。

ダムダムダム！

そこには自分と同じく練習をし始めた亮の姿があった。

「おい亮。疲れてんなら無理すんなよ。ひ弱なんだから」

純也のツッコミに亮は『冷静に』答えた。

「はは、自分だけが体力があると思ってもらっちゃ困るなぁ。お前もあまり無理すんなよ」

その言葉に純也は『笑顔で』答える。

「ははは、お前こそ！　足にきてんじゃねぇのか？ちゃんと飯食ってんのか？」

亮は『とても笑顔で』答えた。

「お前こそ瞳孔が開いてんぞ。無理すんなよ」

純也は『歯の見えるような笑顔で』答える。どこからか歯ぎしりが聞こえるような……。

「余裕余裕。見よ、このボールさばき！」

純也はそう言って物凄いスピードでハンドリングを始める。

「そんなもんかぁ？」

今度は亮が持ち前のドリブルテクニックを披露する。

……。

……。

……ニコ。

「おりゃぁぁぁあっ！！」

「はぁぁぁぁぁっ！！」

純也と亮の馬鹿バトルが始まった。

「どうした亮？そんなへっぽこドリブル何かじゃ、いつでもスティールできんぞ？」

「お前こそ！　そんなボールキープ力じゃあガードとして安心してポストにボールはだせねぇなぁ！」

……。

……。

……ニコ。

「おりぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

両者とも『ニコちゃんマークも真っ青なくらいの最高の笑顔で』ハンドリング、ドリブルテクニックを披露する。

「亮、お前背低いな」

「お前とたいして変わらねぇよ」

「お前のそのヘットバンド、かなり汚れてるな。俺が買ってやろうか？　ごみ箱で」

「それほど練習を頑張ってるってことだよ！　お前こそ顔洗ってんのか？　俺が洗ってやろうか？　ゴム手袋で」

……。

……。

……ニコ。

「ははは、お前は、え～と……その、バーカ！」

「貴様、顔に鼻糞ついてんぞ！」

「貴様こそ、少し怒ってんじゃねぇのか？　顔が真っ赤だぜ？　この『ゆでダコ』がぁ！」

「俺はオメーと違って紳士だから怒らねぇよ。俺を怒らせたらたいしたもんだよ」

「何長州風に言ってんだよ。このアンポンタンめ！」

「お前の母ちゃんデベソ！！」

「お前の父ちゃん水虫！」

貴様等いくつだよ？

二人の争いがデットヒートしてきたころ、二人の周りに変化がおき始めた。

『アイツらが練習してんだ。俺も負けられねぇなぁ』

『お、俺も！』

『よし！1対1やろうぜ！』

突然他の部員も休息をやめ、練習しだした。どうやら二人に影響されたようだ。

その光景を見ていた三年マネージャーの赤川純麗は木ノ下薫に笑顔で話し掛ける。

「あの子たち、朱雀に新しい風を吹き込んでるわね」

「う～ん……」

「他の部員達にもいい刺激になってるんじゃない？」

薫はその言葉に悩みながら、

「いい刺激か悪い刺激かはわからないけどね」

苦笑いで答えた。

そのころ二人は……

「クソ亮！　殺すぞ！」

「うるせぇ！　ションベン純也！」

今だに低レベルな争いを繰り広げていた。

「新しい風……確かに競争が生まれてチームの状況はいい感じになってきたな……」

純麗の言葉に考えさせられる薫だった。

No．40　ドライブ&シュート

俺、石川純也はなぜか木ノ下薫に1ON1で勝てない。
毎日のように戦いを挑んでいるのだが、負けてしまう。
いったい何が悪いのか？練習量は共に同じくらいやっているハズなんだがなぁ……。

そして現在、レギュラーチーム対Bチームの実践形式の練習が行なわれている。
レギュラーは、

木ノ下薫　SF
永瀬勇希　C
小田原君　PF
長谷川亮　PG
我利勉翔太　SG

という感じだ。

ちなみに俺はBチームだ。非常に気にいらんな！
俺を敵に回したことを後悔させてやるぜ！

レギュラーチームのオフェンスが始まる。
亮は辺りを見渡し、ドリブルをして隙を作る。

そして瞬時にポストへと上がった永瀬勇希にパスをだし得点する。

俺たちのオフェンスが始まった。

セットからのオフェンスだったが、俺は小田原君をあっさりとかわし得点する。

その後レギュラーチームも我利勉のスリーを放つが外れてしまい、１９８センチの巨人、大山博司がリバウンドをする。まだまだぎこちないリバウンドだが、秘密特訓の成果があらわれているようだった。

「博司！　よこせ！」

俺は速攻のような形で自分達のリングに向かって走った。やがて博司のパスにより、放たれたボールが俺の手にわたった。

「！？」

改めて前を確認すると、もう既に木ノ下薫はディフェンスに戻っていた。

――ちぃ！　薫め！　戻りが速ぇ。

俺と薫の１対１が始まった。

俺はいったんフェイクを入れ、中に切り込もうとするが木ノ下薫のディフェンスにより、道を塞がれてしまう。

その後も何度も試みてみるがうまくいかない。

「っしゃあ！」

やっとのおもいで薫を抜き去りシュートにいったときだった。

バシィィッ！！

「何ぃ！？」

突然の薫のブロックにより止められてしまった。

そのまま薫は自分達のリングにボールを運ぶ。

残念ながら速攻は決まらず、ひとまず長谷川亮にボールを渡し、レギュラーチームのセットからのオフェンスとなる。

俺たちのディフェンスはマンツーマン。俺は徹底的に薫をマークしている。

その薫の手に、ボールが渡る。

俺と薫の両者が目を合わせる。俺は、動きを読むために決して離さない。

――さっきの仕返しだぜ！絶対に止めてやる！

薫もフェイクを入れる。

――よし、こい！

俺は薫のドライブに備え、腰を落して構える。

突然薫は地面を蹴り、ジャンプした。

「何！？　シュートだと！？」

俺も薫のシュートをブロックするべく、ジャンプする。
しかし、薫のシュートの方が先だったようで、薫の手から放たれたボールは綺麗な弧を描き、リングに向かっていく。

「リバウンド！」

そう薫は叫んだが、その必要はなくボールはリングに吸い込まれた。

――チクショウ……俺がドライブに備えているのを見破りスリーに切り替えたのか？　くそ……。

――――――

――――

――

「今日の練習はこれで終わりだ。各自体調管理はしっかりとするように！　大会も近いからな」

『ウッス！』

「よし、それじゃあ、ありがとうございました」

『ありがとうございました！』

薫の話も終わり、部員達はあいさつをし帰宅の準備をする。
ただ、俺は薫の元へと向かう。

「おい薫！」

「ん？　何だ？」

薫は汗を拭き、バッシュの紐をといている所だった。

「俺と勝負しやがれ！」

「どうした急に？」

「だまって勝負しろ！」

薫は少し考えたあと、

「ああ、別にかまわないが……」

と言って、いったんとき始めたバッシュの紐を再び結び始める。

薫の準備が整うと、俺達はボールを持ったままコートへと移動する。俺はボールを持って一言、

「先に１０点先取したほうが勝ちだ！」

「ああ、わかった」

俺たちの勝負が始まった。ちなみにオフェンスは俺。

――ちっ！　かわせねぇ！

薫のディフェンスは無駄がない。常に肩はリラックスをしていて、重心の置き方、間合いのとり方も申し分ない。長年のバスケ人生で体の中に自然とインプットされているのだろう。

それに安易なフェイントには引っ掛かってくれないので得点するのが難しい。

俺は一度、右サイドへ、ドリブルで移動する。

そして不意のドラッグ・ターンで薫を振り切った。

――やったぜ！

薫を抜き去った俺は、そのまま得意のレイアップシュートに持ち込む。

バシッ！

「なっ！？」

突然の後ろからのブロックにより、シュートを叩き落されてしまった。

――なぜだ！？　完璧に抜いたと思ったのに！

薫のオフェンス。

さっきの二の舞にならないように、薫のスリーを警戒して間合い

をつめる。

しかし、一瞬の隙を突かれ、あっという間に抜かれ得点される。

――こんなに速かったのか？　くそっ！　何が悪いんだ！？

――――――

――――

――

試合が終わってみれば、４対１０で負けていた。

「くそっ！　何が悪りぃんだ？」

「なあ純也」

「ああ！？」

「ちょっと俺のディフェンスをしてみろ」

「……」

俺は無言で薫の指示通りディフェンスする。

やがて薫のドリブルが始まり、それに俺はディフェンスをする。

俺は絶対に抜かせまい、と必死についていく。

――シュートか？

そう思った俺は、薫に対するチェックを厳しくした……のだが、また一瞬で抜き去られてしまった。

シュートを決めた薫はボールを拾い、俺に言った。

「1対1の基本は常にディフェンスに気を抜かせないこと……だ」

「ん？」

薫は続けていった。

「そのためにはアウトサイドにいても得点できる技術が必要だ」

「ミドルシュートとか、か？」

「ああ、そうだ。常にオフェンスがアウトサイドにいても不気味な存在ならば、ディフェンスは離して守わけにはいかなくなる。そうなればディフェンスはくっついてくるだろう」

「……」

「そうなったら、今度はゴール下に切り込んでシュートを決めることも可能になるんだ。つまり、アウトサイドからとれる人は、シュートチャンスが多くなると言うことだ」

「！？」

――確かに……。薫との１ＯＮ１では常にそんな感じだった。カズと戦うときも……。

「だから、お前がどんなにフェイントの手を使おうが、ドリブルで左右に振ろうが俺から見れば何とでもないんだ。お前の意識は常にゴール下にあるからな。だが、お前のドライブ力にミドルシュートを加えたら、かなりの武器になるだろうな。課題はそこなんだ」

「……けっ！」

そう言って薫は部室に向かった。

やがてその姿が見えなくなる。

「くそっ！　痛てぇとこついてきやがって」

――ミドルシュートか……。秘密特訓で練習はしていたが、まだまだ成功率が低いんだよな……。

俺は前に薫に言われたことを思い出す。

「手首のバックスピン、肘、膝のバネか……」

俺は今日もまたストリートのコートに向かい、秘密特訓を開始するのだった。（もちろん博司も）

木ノ下薫をぶっ倒すために。

Ｎｏ．４１　博司の事情

『博司リバウンドだぁ！！』

「ふ、ふわぁい！」

俺は突然叫んだ。それにあわせて博司が慌てて飛び跳ねる。

ドォン！

リバウンドに跳んだ奴らが激しくぶつかり合う。ゴール下では戦争が繰り広げられていた。

「あう……」

博司は情けない声をあげる。

ボールを手にしたのは博司ではなく、キャプテンの薫であった。

「こら博司！　何やってんだよ！　もっと体張れよ！」

「じゅ…純也くん、ご、ごめん」

こうして今日も大会に向け、気合いの入った練習が繰り広げられているのだった。

―――――――

――

今日の部活は午前中で終わりだ。練習を終えた俺は今日も秘密特訓を行なうべく、博司を誘う。

「おい、博司！　今日も時間空いてるか？」

俺の言葉に気付いた博司は慌てた様子で言った。

「え？　き、今日はちょっと……」

「今日は何だ？　予定でもあるのか？」

その質問に博司はほんの少しの間考えてから

「うん。今日は家の手伝いがあるんだ」

「へぇ～、真面目だな。でも今まで手伝いなんてなかなか無かったろ？　急にどうしたんだ？」

また博司は考える。そして俺に言った。

「高校に入って家の人は仕事を手伝わなくていいって言ったんだけど、今回は特別でね……」

「特別？」

「うん。家のお母さんが転んで怪我をしたんだ。それで少しの間、仕事ができなくなってね。父さん一人に仕事を任せるわけにはいか

ないから手伝うんだ」

「大変なんだな」

――しょうがない。

「じゃあな博司、頑張れよ」

「うん。ありがとう」

そう言って博司はバッシュの紐をとき始めた。

まだ慣れていないのかぎこちない。

「なぁ博司、その仕事っていつ一段落するんだ？」

「え？　今日でとりあえず一段落だよ。あとはお母さんの怪我も治るから」

――ちっ、しょうがねぇな。

「よし、今日は博司の家に遊びに行ってやる」

「ええ！？」

その言葉を聞いた博司はかなり驚いた様子だった。

「でっ、でも……今日は仕事があるって――」

「安心しろ、俺も手伝ってやる」

「でも……」

「でもじゃねぇ！　そのかわり手伝いが終わったらバスケの練習するからな」

「う、うん」

『へぇ～、ジュンもいいとこあるじゃん』

突然と俺たちの会話に入ってきた奴がいた。

俺たちはその声の聞こえたほうを振り向く。そこには最近、髪型をツインテールにし、さらにガキっぽくなった久留美の姿があった。

「へっ、明日の練習試合までにシュート練習してぇだけだよ。博司がいるとボール拾いをしてくれて色々と便利だぜ」

「べっ、便利って……なんだか僕、ロボットみたい」

俺言葉を聞いた久留美はあきれた様子で言った。

「はぁ……練習熱心なことは結構だけど、しっかり明日の試合に備えて体を崩さないようにするのよ？」

「わかってるっつ～の。明日はまかせろぃ！　得点王の俺様がいるかぎり負けることはないぜ！　一週間後の関東大会も優勝だ！」

そう、明日の日曜日は練習試合、そして来週の月曜日には関東大会が控えている。その大会がこの俺のデビュー戦となるだろう。実に楽しみだぜ！

「ま、ジュンが試合にでれるとは限らないけどね」

――くっ、水を差すようなことをいいやがって。可愛くねぇやつだな。

「それで、久留美は俺に何のようだ？　わざわざ悪口を言いにきたのか！？」

「違うわよ！　アンタと一緒にしないで！」

「じゃあ何だよ？」

「私も博司くんの仕事を手伝おうと思って……」

「はぁ？」

――――――――

――――――

――

と言うわけで俺たちは博司の家まで移動中。

「わぁ～、僕んちに人が友達が来るなんて何年ぶりだろう？」

目の前には博司が踊るように歩いている。

その博司を俺と久留美が横に並んで後ろからついていく。

「ふんふんふ～ん♪」

とうとう博司は音痴な鼻歌まで歌いはじめやがった。

「なぁ久留美」

俺は博司に聞こえないような声で久留美に話し掛ける。

「な、何よ？」

「アイツ、よっぽど友達がいねぇのか、相当喜んでるみてぇだぞ？」

「……そうね。博司くんがあんなに喜んでるの初めて見たもん」

『うんうん』

俺と久留美は同時にコクリ、コクリと納得した。

――――――

――――

――

博司の家は以外と遠く、４０分くらい時間が掛かった。

「ただいま～」

博司がそう言って家の扉をあける。家は古くもなく新しくも無い、普通の家だった。近くにはビニールハウスなどがある。

「さぁ、二人とも入ってよ」

『おじゃましま～す』

博司の言葉通り、俺たちは家のなかに入った。
すると中から博司の母さんらしき人がでてきた。背は全然高くない。右腕は怪我をしているらしく、吊り下げられていた。

「あら～どうも。博司のお友達？」

そう言って頭を下げる。とてもニッコリしていて優しそうな感じの人だ。体格は博司と全然似てないが、顔はやはりそっくりだ。

『どうも』

俺たちもつられて頭を下げる。

「いつも博司が迷惑かけてすまないねぇ」

「いえいえ、迷惑なんてとんでも無いです」

それに久留美が対応する。さすがにそれは礼儀だ。

「そうかい？　うちの子は鈍いから心配でねぇ……友達もいないのかと心配で。アナタたちを見て安心したよ」

「いや、友達と言うよりは奴隷だけどな」

「コラ、ジュン！」

久留美が俺を睨み付ける。おいおい、冗談だって。そんなに怒るなよ。

博司の母さんはそんな俺の言葉に嫌な顔一つせずに俺たちに問い掛ける。

「アナタは随分と可愛い子だねぇ。何ていう名前なんだい？」

その言葉を聞いた久留美は自分の両手の手のひらを前に突き出し、あわてた様子で言った。

「か、可愛いなんて……わ、私は博司くんと同じ、バスケ部マネージャーの春風久留美です」

「マネージャーさんかい？　うちの博司が迷惑かけるねぇ」

「だ、だから博司くんは良くやってますよ。頑張り屋さんです」

「頑張ってもヘタクソだけどな」

「コラ、ジュン！」

またまた久留美が俺を睨み付ける。

「冗談だって。わりぃわりぃ」

「冗談だって言っていいときと悪いときがあるでしょ？　ほら、ジュンも自己紹介しなさい」

自己紹介！　めんどくせぇな。

「わかったわかった、俺はバスケ部の――」

「石川純也君……だろ？」

「え？」

俺が名前が先に博司の母さんに言われてしまった。

「いつも博司から聞いているよ。もしかしたらこの子じゃないかと思ってさ」

聞いていてる？　何をなんだ？　悪いことか？

「か、母さん！　今日は仕事手伝うからゆっくりしてて！！」

博司が俺たちの会話を止めるようにして言った。いったい何なんだ？　博司の慌てた様子を見るかぎり怪しいぞ？　いったい家で母さんに何を喋ってるんだ？

博司言葉を聞いた母さんは少し悩ましげな口調で喋る。

「いいって。もう怪我だってほとんど治りかけてるんだから。それに部活はいいのかい？」

「うん。今日の部活は午前で終わりなんだ。それに今日は友達も仕事を手伝ってくれるって言ってるし」

「そうです！　今日は私たちも手伝いますから、博司くんのお母さんはゆっくりしてください」

久留美の言葉を聞いた博司の母さんは少し考えてから言った。

「すまないねぇ。怪我さえしなければ良かったのに。歳はとりたく無いもんだねぇ」

「大丈夫ですよ。頑張りますから」

「そうだぞ博司の母さん。なんか美味いもんでも作って休んでてくれ」

「コラ！　ジュン！」

No．42　肉じゃが

そんなことで――。

「お～い博司！　これってここに置いていいのか？」

「うん。気を付けてね」

「任せろって」

さっそく仕事に取り掛かった。

俺と博司は野菜をダンボールに入れてトラックの荷台に積み重ねる作業。

久留美はそのダンボールにシールを貼り、どれだけ出荷したのかメモをとる作業。本来は博司の母さんがやっていた作業だ。

ちなみに博司の父さんも一緒に荷物運びをやっている。身長は俺と同じくらい。いったい博司は何であんなにデカイんだよ？

「くそ……さすがに疲れるな」

そう言ってダンボールを持ち上げる。野菜以外と重くて数をこなしていくにつれて疲れが増す。筋トレ並みに辛い。

「うんしょ」

博司はフヌケた気合い声と共にダンボールを四個積み重ねて持ち上げた。

――!!??　何だアイツは？　四個も持ち上げやがった!!　くそ～!

俺は五個、ダンボールを積み重ねる。そして…

「ぬおおぉっ!」

持ち上げた。

――さ、さすがにキツイぜぇ!

「ジュ、純也君!　大丈夫かい?」

俺は笑顔を作り答える。

「ああ、余裕だぜ。それより早く終わらせようぜ」

「うん、そうだね。よいしょっと」

博司はダンボール四個を軽がると持ち上げ、歩いていった。

――博司のバスケでの馬鹿力も納得がいく……

俺たちは黙々と仕事を続けた。

―――――
―――――
―――

「ふぅ～、終わったぜ」

とりあえず仕事が終わった。かなり早く終わったほうだと思う。

「ありがとう春風さん。そして純也くん」

博司がお礼を言う。かなり感謝しているようだった。

携帯電話で時刻を確認せると、四時を過ぎたところだった。今からなら十分に練習ができる。

「それじゃあ博司。シュート練習に行くか」

「うん、でもちょっとまって」

博司はそう言ってから一旦家の中に入った。

そして出てくる。

「母さんがご飯作ったって。みんなお腹すいたでしょ？　食べていってよ」

確かに。よく考えたら何も食わずに仕事をしていた。夢中になりすぎて気付かなかったぜ。

―――――

―――――

――

『いただきます』

俺と久留美の声がハモる。目の前には肉じゃがを中心とした料理が並んでいた。野菜も博司の家でとれたものだろう。

俺は勢い良く目の前の料理を口に運ぶ。

「うまい！」

「おいしい！」

そして、俺と久留美はほぼ同時に声を発した。

「この肉じゃが、おいしいです。どうやって作ってますか？　私料理をやっているので参考にしたいです」

久留美はこの肉じゃがの味に興味深々のようだった。

「そうかい？　うれしいねぇ。料理なんて今時感心なこだよ。作り方はね、あとでメモをあげるから」

「あ、ありがとうございます！」

とてもうれしそうだった。まぁ、久留美がこの肉じゃがを作れるようになればいつか作ってもらえるな。頑張れ、久留美よ。

そして全員がご飯を残さずに食べおわった。

『ごちそうさまでした』

「よし、博司！　行くか？」

「う、うん」

「じゃあ博司の母さん、博司をちょっと借りるから」

「ふふ、どうぞどうぞ」

にこやかに博司の母さんは答えた。

俺たちは玄関から外に出る。外はまだまだ明るい。練習するには十分だった。

玄関を見てみると博司の母さんが見送りにでていた。

「お邪魔しましたぁ」

久留美がそう言うと博司の母さんは礼をした。

「ちょっと純也くん」

「ん？」

博司の母さんが突然俺の名前を呼んだ。俺は近くに歩み寄る。何だ？何かいいたいことでもあるのか？

俺が近くにくると博司の母さん、博司、久留美に聞こえないような声で言った。

「いつもありがとう」

「？」

突然感謝されても困るんだが……

「博司のことだよ」

なるほど。

「博司は優しい子でねぇ、小、中学校のときは文句も言わずに自分から仕事を手伝ってくれてね。遊びにもいかず、私たちは助かるんだけど、やっぱり友達がいるのかが心配で」

更に話し続ける。

「高校になって部活を勧めたんだよ。はじめは気を使って嫌がっていたんだけど何とか返事をしてくれてね、バスケ部に入ったんだ」

――なるほど。

「そしたら急にあの子が明るくなって帰ってくるようになったんだよ。辛いけど部活は楽しいって。それでね、いつも純也君のことを笑顔で話すんだよ」

「悪口っすか？」

「悪口なんてとんでもない！　博司はいつも『わからないことをいつも教えてくれる。たまにキツイときがあるけど本当はとても優しい』って言うのさ」

「……」

「だからさ、これからも博司のことをよろしくね」

「は、はぁ…わかりました」

俺は久留美たちのところに戻る。後ろを振り替えると博司の母さんが手を振っていたので礼をした。

「……博司、早く練習するぞ」

「え？　う、うん」

「急げ！　走るぞ！」

「え！？　ち、ちょっと！」

俺たちはストバスのコートを目がけて走り続けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前をみるとジュンと博司くんが駆け抜けていく。姿が見えなくなりそうだ。

ジュンったら私もいたことを忘れていたようね。

練習熱心なこともわかるけどもっと周りを見てほしいな。

……そう、周りを。

……。

いけない！　私ったら、急に何を考えてたんだろ？

とりあえず博司くんのお母さんからもらった野菜もあるし、肉じゃがの秘蔵のレシピもあるし……帰りますか。

あの練習熱心な人たちにジュースでも買って行ってあげようかしら？

マネージャーも大変だわ。

私は一人、コートに向かって歩いて行く。

No．43　スタメン！？

「スターティングメンバーを発表する！」

『オス！』

キャプテンの薫の言葉に、並んでいた部員たちは一斉に返事をした。いつもとは違う、部員たちの気合いの入った表情がうかがえる。

それもそのハズ、今日は練習試合なのだ。会場も朱雀高校体育館なので普段の練習試合より少しだけ、早起きしなくていい。

ちなみに、相手の高校はまだ来てない。

「まず、４番スモールフォワード、俺」

そう言って薫は自分の胸に手を当てる。

ん？薫がフォワード？なんか引っ掛かる……

「５番、センター、永瀬勇希」

「はい」

永瀬は返事をし、マネージャーからユニフォームを受け取る。

「７番、パワーフォワード、小田原君」

「はい！」

はぁ？　俺じゃねぇのかよ！？

特に顔に特徴もない、なんとも言い表わしがたい小田原君は、元気良く返事をしてマネージャーからユニフォームをもらう。

「8番、長谷川亮」

「はい」

くそ～……何であいつが！

「9番、我利勉翔太、以上！！」

「ちょっとまった！！」

「ん？　どうしたんだ純也」

「俺、レギュラーじゃねぇのかよ？」

俺は必死に薫に抗議する。

「ああ」

たった二文字で返されてしまった。

「冗談じゃねぇ！　後悔するぜ？」

「純也、良く聞け」

「あ？　なんだよ？」

真面目な顔をして薫は話しはじめた。

「確かにお前はなかなかの実力を持っている。しかし、技術があってもそれを試合で発揮する技能が無くては意味が無い」

「俺は技能ＭＡＸだっつーの！」

「だから少しずつ試合慣れをしていくんだ。だから、後半……」

薫はひとまず間を置き、再び語りはじめる。

「後半はお前を試合に出すから、しっかりと体を温めておけ！」

「！！」

や……

やったぜぇ！！　俺の試合初デビューかよ！！

「よっしゃあ！　薫！　その言葉、絶対に忘れんじゃねえぞ？」

薫は軽く微笑んでから、

「ああ」

と、再び２文字で答えた。

―――――

―――――

――

そしてレギュラーの奴らはアップをはじめる。
補欠の俺たちはムカつくことに、モップがけ、オフィシャルの準備など、かなりコキを使われていた。

「あ～、マジダリィ……俺も試合に出るんだったらアップさせろよな」

「こら、つべこべ言わずに働きなさい。ほら、ボールカゴ持ってきて」

俺の横にはスコアブックを持った久留美の姿があった。

「はぁ、なんだ、お前かよ。ビビらせやがって」

「ちょ、ちょっと！　何よその態度は！？」

「しらね」

俺はそう言って鼻糞をほじる真似をする。あくまでも『真似』だからな。

「ム、ムカつくわね」

久留美の表情がだんだん曇ってくるのがわかる。
俺は人差し指で久留美の額を突いた。

「きゃっ！　ちょっとぉ！　何すんのよ！？」

「そんなに怒ってばかりだとシワだらけの顔になっちゃうよ、エヘ☆」

その言葉を聞いた久留美は一気に爆発した。

「もぉ～怒ったわよ！　覚悟しなさい！！」

「うわっ！」

俺は追い掛けてくる久留美からひたすら逃げ回る。トムとジェリーのように。

ゴン！

「いてぇ！」

急に頭に衝撃が走った。何かが当たったのだろう。　足元を確認するとなぜかホウキが転がっていた。

「いてぇな！　飛び道具は卑怯だろ！？」

「アンタが悪いんでしょうが！」

「しらねぇよ！！」

『ジリジリジリ』

お互いの目線に火花が散る。花火に点火できそうなくらいだ。

そんなときだった。

『ねぇ純也くん』

「ん？」

俺は突然声のしたほうを見る。

「す、純麗さん！」

そこには何と、三年生のマネージャー、赤川純麗さんの姿があった。

「はい、何でしょうか！？」

「相手チームさんにだす麦茶を準備してくれる？」

「はい、喜んで！！」

「それじゃあお願いね」

「はい！　わかりました！」

そう言って純麗先輩は他の仕事に取り掛かる。雑用も悪くないかもしれん。

そんなことを考えてると不意に後ろから冷たい視線を感じる。

『じ～～』

やはり案の定、久留美だった。

『じ～～』

「どうした？」

「アナタずいぶんと私と純麗先輩と話すときの態度が違うわね」

「当たり前じゃん。俺とお前の仲だぜ？　昔からのダチみてぇなもんじゃん。気使わなくてもいい仲じゃないか」

「ジュン……」

久留美はうれしそうな笑顔をする。

「それに、純麗さんは可愛いから特別なんだよ☆お前と一緒にすんな」

「……アンタは」

久留美の背後から物凄い気炎がみえる。錯覚か！？

「アンタは……」

「お、おい……どうした？」

「いつも一言多いのよ！！」

またホウキを持った久留美が追い掛けてくる。

「わっ！　じ、冗談だって！　早まるなぁ～！」

「うるさぁ～い！」

こうして、俺たちの熾烈な追い駆けっこは、キャプテンの薫がとめるまで続いたのだった。

Ｎｏ．４４　トラッシュトーク

「はぁはぁはぁ」

疲れて息のあがっている俺に薫は話し掛けてきた。

「もうアップはいいみたいだな」

「ああ、どっかの暴力女のおかげですよ」

「だれが暴力女よ！！」

『ジリジリジリ』

再び火花が散る。

そんな俺を落ち着かせるように薫はいった。

「落ち着け、試合前から体力を消耗しすぎてどうする？」

「ん？　ああ、わりぃ」

薫は部員たちに聞こえるような声で言った。

「よし、そろそろ試合が始まるな。集合！」

『オス！』

薫の周りに部員たちが集まる。

『今日の相手は佐川商業。センターの松岡のポストプレイと、フォワードの加藤のドライブを中心としたチームだ！　実力は同じくらいだと思うが、フォワードの加藤は調子にのらせたら次々に得点してくる。みんな、最後まで気を抜かないように！』

『オッス！』

部員たちの気合いの入った声が体育館に鳴り響く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは相手側ベンチ。
監督が部員を集め話しはじめる。

「朱雀さんはなかなかいいチームだ。元全中ＭＶＰの木ノ下薫が常にチームをリードして流れを作っている。かれを止めるのは至難の業だろう。しかし！！」

監督は顔をしかめ、少し声のトーンをさげる。

「木ノ下薫以外は物足りない。センターの実力だってうちの松岡のほうがあるだろう。ほかにもフォワードからだっていくらでも付け入るスキはある。シューティングガードの我利勉はよほどのフリーにならないかぎりシュートは打ってこない。適度にプレッシャーをかけておけば大丈夫だ」

『オッス！』

部員たちは返事をしてベンチに戻る。

「おい、松岡、加藤」

監督が主力メンバーの二人を呼ぶ。二人はまた、監督に歩み寄る。

「5番、センターの永瀬や7番の小田原より、明らかにお前たちのほうが実力が上だ。松岡、相手のセンターには絶対に負けるなよ」

松岡と言われた男は監督に向かって話しはじめる。

「まかせてください。僕の方が身長も体格も上です。絶対に負けません」

更に加藤。

「おい松岡、あんなヒョロヒョロしたヤツなんかぶっとばしちまえ」

「おい、加藤。期待してるぞ」

加藤は拳を握りしめ、監督に言った。

「まかせてくださいよ。全中ＭＶＰだか何だか知らねぇが、俺が倒してやるぜ」

―――――

―――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

試合が始まった。俺はさっきの話し通りベンチスタートだ。

まず亮がドリブルをしながら周りを見る。

そのボールが薫の手に渡る。

中に入った永瀬がボールをもらい、シュートに行こうとしたときだった。

バシッ！！

１９５センチの大型センター松岡のブロックにより阻止されてしまった。

そしてそのまま相手チームは得点をした。

朱雀のチームはほとんどが外からのシュートで、佐川商業は中からのシュート。

リバウンドも相手の松岡に支配され苦しい展開となった。

ディフェンスの方も、相手チームのエース、加藤のドライブ力の前にうちの小田原君はまったく歯がたたずに次々と得点される。

薫も頑張って巻き返すが、永瀬が完全に捕まり、厳しい状況だ。

ドリブルをする加藤に、薫がついていく。

荒々しいが、ファールギリギリの強引なシュートを放つ。

パスッ！

見事にリングに吸い込まれた。

シュートを決めた加藤は、薫のほうを向き、突然言った。

「こんなもんかよ？　全中ＭＶＰも落ちたものだな」

「！？」

驚いた顔を見せる薫。

加藤は自分のディフェンスに戻る。

「薫さん、気にしないでください！」

「……ああ」

心配になった長谷川亮が話し掛ける。

まぁ薫があんなので取り乱したりするはずはないと思うが。

その後もシュートを打つが、相手のほうがシュートの回数も多く、確実に決めていった。

そして、

『ビィィッ！』

前半の終わりを告げるブザーが鳴り響く。
スコアを確認すると、４５―２８という大差をつけられ負けていた。
部員たちは無言で控え室に戻る。

――――――

――

――

「すまない、相手のトラッシュトークで思わず熱くなってしまった」
薫が控え室でみんなに謝る。それにあわてて長谷川亮が言った。
「薫さんのミスでは無いですって。なんかあのセンターやりにくいんですよ」
松岡とつねにマッチアップしていた永瀬が答える。
「ああ、さすがに１０センチ差はキツイぜ。なぁ薫？　どうするつもりだ？」
その言葉を聞いた薫は一旦目を閉じる。
そして、俺に向かって言った。

「純也、博司、後半行くぞ！」

やっと出番が来たか！

あの加藤とか言うヤツ気に入らねぇんだよ。

「ええ！？　僕も！？」

やはり博司は驚いているようだった。

「うるせぇ！　練習の成果みせろよ！」

「う、うん。わかったよ、純也くん。やってみるよ」

17点差か……これ以上はきついな。

そして俺たちは控え室からまた、試合会場の体育館へと向かった。

――――――

――――

――

『それでは、両チーム、スタンバイしてください』

審判が両チームに向かっていった。

薫が気合いを入れる。部員たちも真剣だ。

「気合い入れていくぞ！！」

『オウ！！』

両者が中央に集まった。加藤が薫に向かって一言。

「気合いを入れたところで何も変わらねぇよ」

その言葉に薫は軽く笑みを浮かべながら答えた。

「やってみなきゃ、わからんさ」

俺たちの攻撃が始まった。

Ｎｏ．４５　ファール王

佐川商業との試合。

俺たち朱雀高校は、相手の長身センター松岡と、調子に乗らせると得点力が増す、フォワード加藤の二人によって前半戦終了４５－２８と苦戦をしいられた。

そこで、流れをかえるべく、期待の超大物新人の俺、石川純也とウドの大木、こと大山博司が投入された。

後半のメンバーは

４番　木ノ下薫　ＳＧ
５番　永瀬勇希　ＳＦ
６番　石川純也　ＰＦ
８番　長谷川亮　ＰＧ
１１番　大山博司　Ｃ

となった。以前から少しだけ練習していた、薫がフォワードからガード、永瀬勇希がセンターからフォワードにポジション変更するという作戦だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

朱雀高校のスローイングから試合が再開される。

亮は薫からボールを受け取り、ハーフコートまでボールを運んだ。

「ゆっくり、一本いこう」

亮が焦らずに指示を出す。そしてみんながポジションに着いた。

『な！？』

相手チームの顔が驚きの顔となる。

おそらく、ポジション変更のことだろう。

相手の松岡より身長が大きい博司は、さりげなく相手にプレッシャーを与えているようだ。

相手チームの監督が焦り気味の部員に声をかける。

薫にディフェンスについた加藤は、苦笑いをしながら薫に話し掛けた。

「はは、おいおい……永瀬って言うヤツがシューターはありえないからお前がシューターか？　チーム１の得点力をガードにするとはヤケクソか？」

その言葉を聞いた薫は、笑みを浮かべながら、

「なるほど、ヤケクソ……か」

そう言って、薫にボールが渡った。

薫がドリブルをはじめる。

「何が来てもとめてやるぜ、ＭＶＰさんよ！？」

薫が変速をつけて切り込む。

それに負けじと加藤が薫に付いていく。

（右か！？　いや、左だ！！）

加藤が来るべきドライブに備え、構えたときだった。

（何ぃ！？　ブレーキ！？　クローズか！？）

薫はトップスピードに近いスピードから急にブレーキをかける。

そのまま少しもブレずに完璧なフォームをからシュートが放たれた。

一瞬、時がとまったような錯覚に陥る。　そして、

スパッ！

ボールがリング中の網を外へ弾きながら、中へ吸い込まれていく音だけが鳴り響いた。

唖然とする加藤に薫は話し掛けた。

「こんなものさ」

その言葉を聞いた加藤の顔が、怒りの顔へと変化する。

（くそ……薫め！！）

加藤は仲間からボールをもらうとすぐに、相手のゴールに向かってドリブルしていく。

（なめやがって……）

加藤がそのまま、中へ切り込みシュートをしようとした時だった。

「博司！」

純也が突然叫んだ。それに気付いた博司はブロックのために、切り込んできた加藤に迎え撃つ。

「邪魔なんだよ！！」

「うわぁぁ！」

加藤の手からボールが放たれようとした時だった。その瞬間、ビビリながらも博司がブロックに跳んだ。

（何！？　コイツ、高けぇ！）

博司は加藤の更に上に行っていた。

ドン！！

ボールは博司の手にあたり、弾き飛ばされる。

そのボールをすかさず純也が拾った。

「よくやったぞ！　博司！」

「え？　う、うん！」

純也はそのままボールを亮にパスする。

そのボールを亮と永瀬が即効で繋ぎ得点する。

これで３３ー４５と１２点差まで近づいた。

その後は相手の松岡が意地を見せ、博司を振り切り得点し、更に点差を広げた。

相手の監督が佐川のレギュラーたちに大声で話し掛けた。

『そうだ！　まだまだウチが勝っているから焦らなくていい。ポジション変更は付け焼き刃にすぎん！』

「ほぉ、付け焼き刃かどうか見せてやろうじゃんかよ？」

亮が再びボールを運び、セットからのオフェンスとなった。

薫にボールが渡る。それに加藤がディフェンスをする。

薫は加藤に真剣な表情で話し掛けた。

「さっき、俺がチーム１の得点力とか言ったよな？」

薫はボールを自分の懐に引き込み構える。

「ポイントゲッターは俺じゃない、永瀬勇希、そして……石川純也！　アイツ等がやってくれる！」

「何！？」

薫のボールが純也へと渡る。そのボールが渡った途端、純也は不気味な笑顔を浮かべた。

「やっと出番かよ……待ちくたびれたぜ！」

キュッ！

『は、速ぇ！？』

純也は必殺の一歩目からのトップスピードバックターンで、一気にディフェンスを抜き去る。

相手はその動きにまったく付いていけないようだった。

そして、純也がドリブルをする先には、

「来い！　絶対に決めさせない！」

１９５センチのセンター、松岡がゴール付近で仁王立ちをしていた。

「松岡！　そんなチビ、叩き落としちまえ！！」

そう加藤は叫んだ。

「はぁ？　チビだぁ？」

純也はそう言って松岡の前で思いっきり地面を蹴り、宙に浮かんだ。

「止める！」

「うぉりゃあっ！！」

松岡もそれに合わせて飛び跳ねる。

「な、なにぃ！？」

松岡はジャンプの最高到達点に達し、体が地面に向かって落ちはじめる。

しかし純也はまだ飛んでいた。

「雑魚は引っ込んでろ！！」

そして、松岡の上からリングにボールを叩きつけた。

ダァァァァン！！

少しの間、純也はリングにつかまり、ぶらさがる。

会場全体が静寂に包まれた。

Ｎｏ．４５　ファール王（後書き）

そろそろ、この試合が終わったら第一の山場です。関東大会は本当に、思いもよらぬ結果です笑。これからも、まだまだ続くと思いますがよろしくお願いします。

No．46　ライバル心

そして、

『わぁ！！』

『す、すげぇ！　ダンクだぜ？』

『トマホークかよ！？』

的味方関係なく声援が純也に向けられた。
それに調子にのった純也は、リングにぶらさがったままピースサインなどをしている。

「イエーイ！　みたか野郎共！」

ピィー！

「ん？」

突然審判の笛が鳴り響く。そして、

『ファール！』

「はぁ！？　何でだよ？」

その純也の頭を亮は叩いた。

「イテ！？　なんだよ！？」

「ぶらさがりすぎだ。ちゃんと手を上げろ」

「なんじゃそりゃあ？　そんなルール知らねぇよ。ダンクの特権は敗北者を見下ろすことだろうが！？」

薫が純也に近付き、呆れた様子で注意した。

「はぁ……途中までは良かったんだが、まだまだだったな」

「今のは完璧だろうが！！」

『青、６番、手を挙げて』

審判が純也に向かって注意した。

「ちぇ、しょうがねぇな」

渋々手を挙げたのだった。

その後も、永瀬のドライブ、純也のゴール下、さらに駄目押しの木ノ下薫のスリーポイントにより、朱雀高校は爆発的な得点力を見せる。

博司は少々相手が悪く、少しばかり失点がみられたが、練習の成果がでて、最小失点に抑えることに成功する。

相手チームの加藤は、リズムが崩れてしまいまったくシュートが決まらなくなったのだった。

朱雀の欠点がみられたと言えば純也のファールだ。

純也はダンクによるチャージング、荒々しいディフェンスによるファールが積み重なり、試合時間残り約一分と言うところで5個目のファールをし、試合初出場でわずか20分の間に初退場という、ある意味偉業を成し遂げた。

試合が終わってみれば、83－64という、前半の結果が嘘のような快勝だった。

石川純也の初出場（18分52秒）
合計16得点
ファール　5（退場）

――――――――

という結果に終わった。

――――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ふぅ、勝った勝った。楽勝だったな。

控え室に戻り、勝利の余韻に浸っていたときだった。

『しつれい』

控え室のドアが開き、人が入ってきた。あれは確か……佐川商業の監督じゃねぇか？

『薫くんは居るかね？』

「はい？　何でしょう？」

いきなり入るなり薫を指名してきやがった。

佐川の監督は握手を求め、薫の前に手をだす。

それに薫がてを重ね、握手をする。薫！　チャンスじゃねぇか！

相手のボディがガラ空きじゃんかよ！！

『いい試合をさせてもらったよ』

佐川の監督は薫に話し掛けた。それに薫が答える。

「いえ、こちらこそ、あのセンターはいい経験になりましたよ」

『はは、松岡か。ヤツはまだまだだったな。また1から鍛え直しだよ』

「そうですか……それじゃあ、ますますこれからの試合が厳しくなりますね。僕達も負けないように頑張りますよ」

『ははは、そうだな。お互いに頑張ろう！　それと……』

佐川の監督の顔が真面目な顔になる。

『後半からでてきた子何だが……あの坊主頭の６番』

え！？　俺かよ？

「ああ、純也ですか。ヤツはまだまだですよ。試合では色々とご迷惑をおかけしました。なにせ、純也は公式バスケ初めてまだ一ヵ月なので、まだルールは完全に覚えてないんです」

『いっ、一ヵ月だって！？』

監督の顔が驚愕の顔となる。

いや、俺、一ヵ月って言ったって、小学三年生からバスケをやっていた訳で、ヘタをすりゃ、今の高校三年の奴らよりはバスケ暦は長い訳で……。

「ええ、ですから今日もわずか１９分で退場という結果に……」

『ということは彼はまだ一年生か……いい部員が入ったな』

「はは、手はかかりますけどね」

殺すぞ、薫！　俺はじゃが芋並みに手が掛からずに育つんだぞ！！

『これからの努力次第で、とんでもない化け物になるな。それと、薫くん。君に加藤からの伝言があるんだが……』

「加藤から、伝言？」

『ああ、今度会ったときは絶対に倒してやる、覚悟しな！　ってね。ははは、とんだ恐れ知らずでして……加藤はなぜか薫くんにライバル心を持ってるんですよ』

「ライバル心……ですか。じゃあ俺からも伝えて下さい。『じゃあまず、不安定な精神をしっかりと治してからこい』と」

佐川の監督は笑いながら答える。

『ははは、こりゃあヤツにいい薬になるな。ヤツは精神的にムラがありまして、今日から猛特訓をはじめるに違いない。それじゃあ、忙しいとこ、失礼したね』

「はい、ありがとうございました」

パタン、とドアが締まり、監督の姿が見えなくなる。

俺は薫に近づいて話し掛ける。

「ったく……最初から俺を試合に出していれば圧勝だったのによ」

「いや、まだまだお前は課題だらけだ。第一、スタメンで出場していたとしても、どっちにしろ１９分で退場だから変わらないだろ」

「審判がファールを大げさに取りすぎなんだよ。どいつもポンポン吹っ飛びやがって……ちゃんと飯食ってんのかよ」

「お前のは荒々しすぎるんだ」

「公式ってのはメンドクセェぜ」

「やれやれ……」

呆れた顔をする、薫だった。

ころで来週の関東大会もベンチスタートかな？

困ったものだぜ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このとき、純也は来週の関東大会に思いもしない結果が待っていることは、まだまだ当然のように気付きもしなかった。

Ｎｏ．４７　たこ焼き地獄！？　前編

佐川商業との練習試合が終わり、俺は家に帰宅した。

そのまま部屋に入ると、ベットに倒れこむようにして居眠りを始める。

……。

――関東大会は、やはりベンチスタートなのか？

今日の試合、あれだけ派手に暴れたのだからしょうがねぇか……。

……。

まあいいや。寝よ。

今の俺を邪魔するものは無い。一眠りしてから晩ご飯といこうか。

……。

……。

だんだん意識が薄れてきた。まるで、ふわふわした雲のうえに寝ているようだ。今の俺の睡眠を邪魔でもするようなら一瞬で抹殺してやる。

……。

……。

『チャラララチャララ♪』

――なんだよ？　俺は寝るんだ。邪魔すんな。

突然鳴った携帯電話を無視して俺は眠り続ける。

『チャラララチャララ♪』

……。

……。

『チャラララチャララ♪』

『ウフッ♪』

――ウフッ!?　なんだよウフッ!?　って！　また絵梨佳（妹）のヤツ勝手に俺の携帯いじったな！

まぁいいや、寝よ。

……。

『……』

やがて携帯も止まったようだ。あとで掛け直すから今は寝かせろ。

……。

……。

『チャラララチャラララ♪』

再び携帯電話が騒ぎ始めた。

――うるせぇな、静かにしろい！

……。

……。

……。

『チャラララチャラララ♪』

『純也くん？　起きて！　エサの時間よ？』

――エサ！？　とゆうかなんだこの着信音は？

『本当はいるんでしょ？　でてきなさい☆お姉さんがお仕置きしてあげる☆』

桜さん！？

この声は間違いなく桜さんだ！！（ＮＯ．１１にでてきた久留美の姉）

でも何で着信音が桜さんの声に！？

『絵梨佳ちゃんに協力してもらったのよ☆』

なるほど。どうもご丁寧に……って、

「何で俺の思ったことがわかるんだよ！？」

『純也くん？　電話にでて』

でるもんか。

『そんなに強情ならお姉さんだって考えがあるわよ☆』

考え？　つぅか、しかし長い着信音だな。録音にどれだけ時間を費やしたのだろうか？

『純也くんの部屋のエッチな本の隠し場所を久留美に教えちゃいま～す☆』

絶対にでるもんか。だいたい隠し場所なんてわかるはずがない。

『ベットの下と見せ掛けて押し入れの中の右から2番目の棚のすぐ近くの――』

「はい、もしもし」

「あら？　純也くん、もっと早くでなきゃダメでしょ☆」

電話にでると桜さんの声が聞こえてきた。

「桜さん、いったい何スか！　あの着信音は！！」

「ウフフッ、内緒♪」

桜さん、おそるべし……。

「それで、何のようですか？」

「う～ん……」

「……」

電話の向こうで頭を抱えながら悩んでいる桜さんが想像できる。

「え～と……」

「……」

「何だっけ？」

ドカッ！！

知るか！！

「用が無いなら俺寝るんで……」

「あ～！　思い出したわ☆」

急に耳が痛くなるほど声のトーンがあがる。

「何でしょう？」

「考えてる暇は無いわ！！　急いで春風家に集合よ☆遅れたら隠し場所いっちゃうよ～♪」

ガチャッ！

ツー

ツー

「一刻も早く急がなければ！！」

――――――

――――

――

「おじゃましま～す」

『はいは～い☆』

家の中に入ると奥からエプロン姿の桜さんがでてきた。

「あの～、何ですか、用事って？」

「とりあえず上がって☆」

「あ、はい」

そう言って家のなかに入る。

キッチンに近づくにつれて何やらいい匂いがするのは気のせいか？

そして台所に案内されたときだった。

「……桜さん、何スか？　この物体は？」

『えっ？　純也くん、どう見てもたこ焼きじゃない☆』

それはわかる。紛れもないたこ焼きだ。

だが量がハンパじゃない。大きめの皿にこれでもか！！　ってくらいたこ焼きが山積みになっていた。

「あっ、ジュン。来てたの」

今度は久留美が現われた。こちらもエプロン姿だった。

「ああ、所で、なぜこんなにたこ焼きが山積みになっているんだ？」

久留美は腰に手を当て、悩ましげな顔で答えた。

「私が今日の試合のスコアを整理していて、少しの間お姉ちゃんから目を離したら、この通りよ」

桜さん、おそるべし……。

「桜さん、何でこんなに作ったんですか？」

無駄だと思うが、一応問い掛けてみる。

「だってぇ～……たこ焼きがだんだん丸くなって面白かったんだモン☆」

やっぱりな。どうせそんなことだろうと思ったよ。

「それで、食べきれないから俺を呼んだと」

「そうよ☆」

そう言って桜さんは笑ってみせる。とても癒される笑顔だ。

「しょうがない……食べるか」

「うん☆ウフフ、純也くんのエライエライ♪」

「そうね、それじゃあ食べましょうか。ジュン、お姉ちゃん、はい、お皿」

「あ、サンキュ」

「ありがとう☆」

久留美の手から皿が手渡される。

俺は山積みになったたこ焼きから何個か取り、ソースをかけて食べてみる。

……。

……あ

「うまい！」

「ふはひ☆（うまい）」

「おいし～」

三人ほぼ同時に声をあげた。

確かにうまい。手作りにしてはなかなかの味である。

「桜さん、うまいっすね！　これだったら全部食べられるんじゃないんですか？」

「そうね☆これだけの量でも何とかなるかも♪」

『よぉ～し、食べるぞ～』

気合いを入れてたこ焼き（山積み）に挑む俺たちだった。

Ｎｏ．４８　たこ焼き地獄！？　前編

１５分経過。

目の前にはまだまだ沢山のたこ焼きがある。
俺たちはペースを落とす事無く食べ続ける。

「うまいなぁ！　まだまだいけるぜ！」

「ほひひ～☆（おいしい）」

しかし、

「う～……私、もうダメかも……」

「何だ久留美、情けないぞ！」

「アナタたちの胃袋と一緒にしないでちょうだい！」

久留美、１５分でリタイア。

―――――

―――――

――

３０分経過。

目の前にはまだまだ減ることを知らないたこ焼きの大群が。

「うまいねぇ～」

「ほひひ～☆（おいしい）」

ペースはまだ落ちていなく順調だ。

結構いけるもんだな。

久留美は俺たち二人の食べている様子をじっと見ている。

「よくもまぁそんなに食べられるわね」

「おう！任せろ！」

「ほひひ～☆（おいしい）」

―――――――

―――――

――

４５分経過。

「ま、まだまだいけるぜ！」

「ほひひ～☆（おいしい）」

めの前には次第に量が減り始めているたこ焼きがある。しかし、まだまだ沢山あることには変わり無い。

久留美は相変わらず俺たち二人の食べている様子を観察している。

「見てるこっちが疲れるわね」

ちょっとキツくなってきたな……。

―――――――

―――――

――

1時間経過。

「……オエッ」

「ほひひ～☆（おいしい）」

たこ焼きはまだある。いったいどんだけあるんだよ！？

そろそろマジ吐きそうだぜ……。

俺たちの戦いは更に続く。

――――――

――――

――

「ほひひ～☆（おいしい）」

「……」

「……」

俺はリタイアし、桜さんの食べっぷりに呆気にとられていた。

久留美を見ても俺と同じ様子だった。

「ほひひ～☆（おいしい）」

「桜さん！　さっきから『ほひひ～』としか言ってないじゃないですか！」

『へ？　そうかな？　だっておいしいんだモン☆』

桜さんの挑戦は続く。

―――――――

―――――

―――

「ごちそうさまでした☆」

『ご、ごちそう…さまでした』

桜さんの掛け声に俺たちが情けない声で続く。

結局、最後は桜さんの一人舞台であった。なぜ桜さんはあんなにスタイルがいいのか不思議でたまらない。

「あ～おいしかった♪純也くん、ありがとね☆」

「ええ、どういたしまして……っていうか、俺が居なくても桜さん一人でいけたんじゃないっすか？」

その言葉を聞いた桜さんは自分の前で手を振り、

「まあまあ、いいじゃない☆ごはんは人が多いほうが楽しいし♪」

「まぁ、そうですけど……」

「じゃ、私食後の睡眠するから☆」

そう言って桜さんはリビングにある大きめのソファに横になった。

『スー……スー……』

どうやら、もう寝たようだ。最速のスピードだ。

「あ～、もう…お姉ちゃんったら、そんなとこで寝たら風ひくよ？」

『……スー……スー』

久留美が桜さんに話し掛けるが、残念なことに桜さんはもう自分の世界に入っていた。

「もぅ……しょうがないわね」

そう言って久留美はどこからか毛布を持ってきて桜さんにかけた。こうして見ると、どっちが姉なのか全然わからない。むしろ、久留美のほうが姉に見えるんだが……。

「じゃあな久留美、俺も帰って寝るから」

そう言って帰ろうとしたときだった。

「はぁ……おかたづけしなくちゃ。誰か手伝ってくれないかなぁ？」

久留美はそう言って俺を見る。要するに俺に手伝えってことか？

しかし俺は眠いんだ。今にも眠りそうだ。布団があれば桜さんほどまでにはいかないが、ドラ〇もんの、の〇太並みのスピードで寝

る自信はある。

「じゃあな」

俺はその場を立ち去ることにした。

「うん……じゃあね。しっかりと疲れをとるのよ？」

意外と簡単に帰ることができた。

しっかりと疲れをとれ……か。

あいつもマネージャーなりに気を使ってんのかな？

……。

……あ～！　くそっ！　しょうがねぇな！

俺はキッチンへと引き返す。そこには一人、皿を洗い始めた久留美の姿が会った。

「しょうがねぇ、そこまでいうなら手伝ってやるよ」

「え？　ジュン。戻ったの？」

「タダ飯ってのも悪いからな」

「……そうね、当然ね」

俺たちは一通りの皿を片付けると、今度はたこ焼きを作る道具の掃除や、生ごみの処理を行なった。

そしてやっと元どおりの姿に復元した。

これでやっと眠ることができる。

「よし、おわったぜぇ～！　俺は寝る。誰が何と言おうと寝る！　たとえ神様でも俺の睡眠を妨げることはできない」

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

またもやお姉ちゃんに続き、ジュンまでもが夢の世界へと旅立ってしまった。

お姉ちゃんは自分の家だからいいけどジュンは私の家なのよ？　ジュンには悪いけど起こさないと……。

「ほら、ジュン！　起きて！」

私はジュンの体を揺らした。首がカクカクして面白い。

『ズー……ズー……ズー』

あ、だめだわ！　完全に爆睡状態ね。

私は押し入れからお客さん専用の毛布を取出し、ジュンにそっとかけた。

「今日はしょうがないわよね」

私は今日の試合のスコアに目を通す。

薫さんが３３得点で一番。アシストも二桁だから、さすがね。

次は２６点で勇希さん。

そしてその次が１６点でジュン。

ま、退場になっちゃったけど。

「……クス」

もう時期関東大会ね。ジュンがレギュラーは厳しいかな？

私はジュンの方を見る。

「……ズー……ズー……久留美が…」

「え？」

「久留美が悪いんだ……ホウキ持って追い掛け回すから……」

「あのねぇ！？　言っとくけど、あれはジュンがわるいんじゃない！」

「ズー……ズー……ズー」

寝てる人に怒ってもしょうがないわね。

「ズー……ズー……ズー」

「……ジュン」

かなり気持ち良さそうに寝ていた。どんな夢を見てるのかしら？

「ありがとう」

No．49　ピンチ!?

事件は関東大会まで残すところあと5日というときに起きた。

今日は水曜日。来週の月曜から四日間の日程で関東大会が開かれる。

俺はいつも通り、部活を終え久留美と自宅への道を帰っていた。

「関東大会、私たちどうなるかな?」

久留美が歩きながら俺に話し掛ける。

「ま、優勝だろ。楽勝で」

「はあ、アナタのその自信はどこからわいてくるのよ?」

「知らん」

俺はきっぱりと答えるた。この会話は今回の話には直接関係ない。

このようなどうでもよい話がしばらく続いた。

やがて、家に辿り着く。

「じゃあね、ジュン」

「おう!　じゃあな」

いつものように久留美と別れてから俺は自宅へと入る。

「ただいま」

『あ、お兄ちゃんお帰り～』

玄関に入ると、まず、妹の絵梨佳が出迎えてくれた。

「おう、腹へったから飯食うわ」

『うん』

俺はそう言って台所に向かう。

いつも部活で遅くに帰るので、俺が飯を食う頃にはもう既に、親父以外の奴らは飯をすませていた。

親父はまだ仕事だろう。帰る時間が固定されていないので『家族全員がそろうまでご飯は食べない』などというルールは我が家にはない。

「いただきます！　モグムグ」

……。

……。

「ゴチソウサマデシタ！！」

あっと言う間にご飯をたいらげた俺は風呂に入るべく、風呂場へと向かったのだった。

脱衣所のドアを開けようとしたのだが……。

ガチャ

「ん？」

どうやら鍵がかかっているようだ。試しにノックをしてみる。

コンコンコン！

『あ！　私入ってるから！』

「あ！　スマンね」

どうやら先客がいたらしい。声からして妹の絵梨佳だろう。

俺はこの間の暇を潰すために部屋に向かおうとした。

この時、事態は突然にやってきた。

ピンポーン！

「ん？　誰だ？」

突然、家のインターホンが鳴り響いた。

ピンポーン！

ピンポーン！

ピンポーン！

客は何やら焦っているようだった。俺はめんどくさそうに玄関に向かう。

ピンポーン！

ピンポーン！

「わかったって！　今出るから！」

ガチャ！

俺は鍵をあけ、玄関の扉を開けた。

そこにいたのは何とも意外に……。

「優？　どうしたんだよ。こんな夜になってから」

「ジュン！　大変だ！」

優にはめずらしい大声だった。きっと何かあるに違いない。

「どうしたんだよ？　大声なんかだして」

俺は優を落ち着かせるように言った。
だが、優は相変わらず調子をかえずにしゃべり続けた。
「とにかく大変なんだ!!　落ち着いて聞いてくれ!」
うん。この状況なら間違いなく誰でも『お前が落ち着けよ』って言うだろうね。ベタなツッコミパターンさ。
だが、そんなコメディーチックな雰囲気ではないことを察し、俺は優に真面目な顔で話し掛ける。
「ああ、どうしたんだ?　言ってみろ」
「ああ」
次の瞬間、優の話した内容を聞き、理解した俺は驚きの顔となる。
「なんだって!?」
――――――
――――
――
ここは商店街裏のストリートバスケットのコート。
そう、いつものお馴染みの場所である。

時刻は既に九時を回っている。太陽が隠れて現われた闇を、コート専用のライトが辺りを照らす。

そのライトが照らしだした先に俺たちがいた。
人数は九時を回ったと言うのに二十人近くは居る。
全員が円の中心を向くようにして座っている。

「今日みんなにここに集まってもらったのは、大事な話をするためだ」

俺は語りはじめた。

「驚かないで聞いてほしい、いいか？」

ゴクリ

周囲がみな、唾をのんだ。
静寂だけがこの場を支配していた。

俺が次の言葉を言うまでは――。

「このコートが……正確に言うとこの空き地だった土地が買われるらしい」

『？』

クエスチョンマークがみんなの頭に浮かんだ。まだ理解していないのだろう。

「要するに、このコートが無くなるってことだ」

……。

……。

『え～！！！？？？』

一瞬の沈黙のあと、予想どおり驚きの声があがった。

Ｎｏ．５０　猛反対

『なんでだよ!?　こんなボロい土地、買ったって意味がねぇだろ?』

「落ち着け!　困ったことにこの土地は買ったところで何にも利用されない」

『じゃあ何でだよ?』

俺は続けた。

「最近、俺たちのようなガラが悪い奴らが商店街の近くにたまっているのが目立ちはじめたそうだ。もちろん、俺たちは悪いことをしているわけではない」

『ってことは、俺たちが集まらないように、土地を買い取って立ち入りを禁止するってことか?』

「そうだ。物分かりがいいな」

まわりのメンバーは、いても立っても居られない様子で激怒したようだった。

『冗談じゃねぇ!　買い取ったヤツをブン殴ってやる!』

暴れはじめたヤツに、優は言った。

「県が買い取ったんだ。下手な事をすると警察ざたになるぞ?」

『警察が恐くて不良なんかやってられっかよ！？』

突然、一人の男が落ち着いた様子で話しはじめた。

『でも、もし買い取られたとしても、また違うところにコート作ればいいだろ？　粗末なもんだし、すぐに作れるだろう』

その言葉にまわりの奴らが賛成する。

『おお！　確かに！』

『その手が有ったか！』

『リングを置くだけだから簡単に作れるもんな』

俺は、やれやれと言った様子で話しはじめた。

「確かにいい案だ。だが、お前等は本当にそれでいいのか？」

『え？』

「俺はこのコートに沢山のおもいでがある。お前等もそうだろ？俺にとってこのコートは原点なんだ」

黙り込むメンバーに続けて言う。

「このコートが無くなったら俺はバスケを辞めるね」

まわりがみんな、黙り込んでしまった。

やはり、みんな俺と同じようにこのコートは特別な存在なのだろう。

「だが、可能性が無いわけではないぞ」

『え？』

みんな一斉に顔をあげる。

「実は俺、買い取るヤツに問い合わせてみたんだ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『もしもし、こちら環境管理…』

「うるせ～！！　とっとと商店街の近くの土地を買い取る責任者にかわれ！」

『あの……どちら様で』

「うるせぇ！　さっさと変われっつってんのが聞こえねぇのか！」

『は、はい、ただ今』

そしてしばらくの間をおき、ナイスミドル的な声が聞こえてきた。

『はい、変わりましたが』

「てめぇ！　商店街の近くの土地を買い取るってどういうつもりだ

！？」

『ああ、なるほど。君があの不良グループのリーダーかね？　どうもこうもない。ただ買い取るだけだよ』

「だからそれがワケわかんねぇって言ってんだろうが！」

『君たちはがあの土地にたまっているのに不満を覚える人も少なくなくてね、とくに商店街に頻繁に買い物にくる客のことだが』

「迷惑かけてねぇだろ！？」

『やはり不安なんだよ。君たちのような人たちが集まったら何をしでかすかわかったもんではない』

「俺たちは真面目にバスケットが好きで練習してるだけだ」

『……』

「たしかにガラのワリィやつだっているさ。だけどな、奴らはバスケが好きで集まってんだよ！」

『……』

「何とか言えよ？」

しばらくして、電話の受話器から声が聞こえた。

『わかった。ただし、コート存続には条件がある』

―――――

―――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『ストリートバスケ大会？』

周りの奴らが口をそろえて言った。

「そう。このコート存続の条件は今週の土、日曜日の二日間で開催されるストリートバスケ大会で優勝することだ」

土、日曜日で助かったぜ。月曜からは関東カップがあるからな。ちとばかり、ハードスケジュールになるがな。

「本当にバスケが好きで練習をしているなら優勝できるだろう。とのことだ」

『でも、誰がでるんだ？　純也と優は確定だろ？　あとの一人は……』

みんな、お互いの顔をあわせはじめる。

残念ながらこのコートには飛び抜けて強いヤツなどいなかった。

沖さんがいたあたりだと何人かいたんだが……。

『な、なぁ純也。その大会ってレベルはたけぇのか？』

一人が心配そうに問い掛けてきた。

「ああ、間違いなく高い。優勝チームには２０万円の賞金があるそうだ」

『おお～！』

「だから県外からも優れたチームが集まるんだ。俺が昔出場した時よりもレベルは格段に上がっているだろうな」

『そんなに強いのか！？　ど、どうする？』

ここは悩みどころだ。ここにいる奴らには悪いが、コイツらではいいところまでは行けても、優勝できるかと言うと、微妙だ。

俺と優だけではキツすぎる。ましてや、優は少しのブランクもある。

どうしたらいいんだ……。

『どうして俺を呼んでくれないんだ？』

！？

突然、コートの入り口から声が聞こえた。

姿はまだ見えない。

やがて、その声の主はライトの照らす範囲に入ってきた。

その人物を見た誰もが驚いた。

「カ、カズッ！！　どうしてここに？」

特徴のあるドレッドヘアー。

そこにはなんと、コートが出来て以来の天才児と呼ばれていたカズ、こと森村一輝がいた。

「久留美ちゃんに教えてもらった」

やがて、カズの後ろから久留美が顔をだす。

『よ！』

何が『よ！』だよ。いきなりカズを呼んでくるとはな。

「純也、俺だってこのコートには愛着があるんだ。呼んでくれないなんてみずくさいぞ？」

「いや、だってカズは関東大会予選があるからやばいだろ？　キャプテンだし」

「それはお前も同じ条件だろ」

「ははっ、そうだな。スタメンかはわからねぇけど……しっかし、そろっちまったな」

俺は優に向かって話し掛ける。

「ああ、久しぶりだな。このメンバーは」

俺は気合いを入れるようにしていった。

「しゃあねぇ……こうなったら本気でやってやろうじゃねえか！！」

『ああ！』

そう言って俺たち三人は空を見上げる。

夜空には沢山の星が輝いていた。

No.51　開幕

ストリートバスケ大会当日――

俺、優、そしてカズの三人は大会に参加するべく、市の体育館に集合していた。

休日と言うこともあって、かなりの人が集まっている。

年齢は高校生から20代前半くらいまで。有名な大会なので、実力者が多く集まる。

実は今日、関東カップが近いということで当然のように朱雀高校バスケ部は大会に向けて練習があった。　その件については、キャプテンの薫には風邪をひいたと言って仮病を使った。

これで俺の関東カップベンチスタートは決まったようなものだな。

俺、優、カズは大会にエントリーするべく、市民体育館の中へと入った。

玄関からすこし歩いたところに、受付がある。

受付の人は、二十歳前後の女。俺たちが目の前に立つと、笑顔で話しかけてきた。

『ようこそ！　Ｓｔｒｅｅｔ　ｂｏｙｓへ。エントリーの方ですか！？』

受付の女はとてもキラキラさせた目で俺たちを見た。

いや、俺たちと言うより『優』と『カズ』だろう。イケメンコンビに囲まれて喜んでるってか？

ちっ！　くだらねぇ！

「え……ええ」

優が受付に対応する。どうやら迫力負けしているようだ。

『本当に!?　じゃあエントリーしますので、チーム名を教えてください。ついでに名前も聞いちゃおうかしら。ウフッ』

その言葉に対して優は軽く笑いながら答える。

「え～と……チーム名は『Ｓｋｙ　Ｂｏｍｂ』でお願いします。名前は……柿崎優です。一応フォワードかな？」

ちなみに『Ｓｋｙ　Ｂｏｍｂ』とは、俺たちが考えた名前だ。

優はそう言って俺たちを見た。おそらく、次はお前たちが名前を言え、と言うことだろう。

優の合図を悟ったカズが自己紹介した。

「カズです。ガードっす」　よし、俺の出番だな。この大会のヒーローになる男だからな。名前くらいは覚えていてくれないとこまる。

俺は口を開いて自己紹介する。

「どうも、センターの石川――」

『へぇ～、優くんにカズくんかぁ。お姉さん応援しちゃおっかな？頑張ってね！』

……。

……ん？

……ナニコレ？

『試合絶対に見に行くからね！』

……。

……。

……うん。

「こぉらぁぁ！！　このクソアマ！！」

「おい純也！　よせって！」

暴走する俺を慌てて優が引き止める。

「うがぁぁぁぁ！」

「う、受付のお姉さん！！　控室はどっち！？」

『え……あ、あっちです』

受付の女はそう言って控室の方向を指差す。

「ありがとうございます！」

優は俺を引き連れその方向へ走った。

「うがぁぁぁ！」

取り残されたカズはただ一人、

「やれやれ……」

と言って控室に歩いて向かった。

……。

『な、何だったんだろう？』

状況を飲み込めない受付であった。

――――――

――――

――

「あの受付、許さん！」

「まぁまぁ落ち着けって」

優が俺に向かって言った。

「んなこと言ってもよぉ」

ここは控室。

エントリーを終えた選手たちが集まって、色々雑談をしているようだ。

高校生らしき人も何人かいるが、大人の方が多い。

開会式とか訳のわからんようなものを終え、ひとまず休憩ってところだ。

参加チームは全部で２９チーム。強そうなやつらもいたなぁ……。まぁ勝つけど。

この大会は二日に渡って行われる。俺たちはシードでは無いので、五回勝てば優勝という事になる。今日は三試合、明日は二試合やる予定。

第一試合のやつらが終われば、次は俺たちの番。つまり第二試合が俺たちの試合だ。

「そろそろ体あったためておこーぜ？」

そう言ったのはカズだった。

「おう」

俺と優は同時に返事をしてアップを開始する。

軽いランニングからのストレッチ。ボールを触れるのは試合直前のシューティングだけなので、今はこれを念入りにやっておくことにする。

しばらくして、体があったまってきた頃だった。

『それでは、第二試合の方、準備をお願いします！』

この大会のスタッフの人が広い控室に響きわたるような声で言った。俺は二人に向かって叫ぶ。

「よっしゃ！　行くか！」

『おう！』

俺たち三人は気合いを入れ、会場へと向かった。

長い廊下を歩いて、一番奥の扉を開ければ、会場がある。声援がここまで聞こえるってことは、第一試合も終わりそうで最後の白熱した展開だからであろう。

俺たちは廊下の一番奥の扉を開けた。

『ワァァァァッツ！』

『オォォォォォッツ！』

物凄い声援だった。スーリートの大会は普段大音量のＢＧＭが流れているのだが、その音量に負けないくらい凄い声援だった。

やがて試合が終わり、声援が先程より低くなった。

『第二試合の選手はシューティングを開始してください』

「おっしゃ！」

俺たちは三人は声をそろえ、コートに飛び出していた。

そして、すぐさまシューティングを開始する。

『キャー優く～ん！！』

『カズく～ん！　頑張って～！』

あ～、また始まったよ……。俺にも少しくらい応援してくれよ！

『純也～！　頑張れよ！　ギャハハハ！』

はぁ、あんな野郎ばっかだぜ……。なんだかムカついてきたぞ？

『ジュン～！　応援してくあげるんだから、頑張りなさいよ～』

ん？

俺はそう声のした方向を見てみる。

そこには久留美がいた。

「久留美！　お前部活はどうしたんだ？」

『休んじゃった。コートが無くなるかもしれないのに落ち着いていられないわ！』

ああ、なるほどね。

「おう、まかせろ！　絶対に優勝してやる」

『負けたらゆるさないわよ？』

「わかったって！」

俺はそう言ってシューティングに戻る。応援してくれているヤツがいるとわかれば、随分と気合いの入りかたも違ってくる。

俺はフリースロー付近に立ち、観客に向かって手をあげアピールする。

『ん？　何だあいつ？』

『なにをする気だ？』

「ジュンったら……バカ」

久留美が呆れた様子でこちらを見ていた。

俺はアピールを終えたあと、カズにアイコンタクトを送った。

「ふっ、いいぜ。やってみろよ」

カズは俺のアイコンタクトが通じたのか、シュート体勢に入った。

俺もゴール向かって走り出して。

カズの手からシュートが放たれる。

そのシュートは決してリングに入ることは無い。

なぜなら、俺へのパスなのだから。

俺はおもいっきりリングに向かってジャンプした。

そのまま空中で、カズの放ったボールをキャッチする。

そして、ボールをリングに叩き込んだ。

ゴォォン！！

凄まじい音がコートになり響く。

『……』

一瞬の静寂のあと、一気に歓声が膨れ上がった。

『ワァァァッ！』

『アリウープかよ！　やってくれるぜぇ！』

「へっ、こんなことも出来るんだぜ？」

俺はフリースローラインに戻った。

そして、再びリングに向かってドリブルをしながら走り出す。

一定の距離に近付き、俺はまたジャンプした。

ボールを空中で一回転させる。大きい円を意識しながら。

ドォォン！

『ヒュー！　いいぞ～！』

『今度はウィンドミルかよ！』

「お前らよく聞け！」

『ん？　今度は何だ？』

歓声収まったのを確認して、俺は叫んだ。

「俺がこのＳｋｙ　Ｂｏｍｂの爆弾、石川純也だ！！　覚えてろ！」

特に、受付の女！

『オォォォォッッ！』

『いいぞ～、爆弾！　応援してやる！！』

＊＊＊＊＊＊＊

え～、どうも柿崎優です。

突然ですが、今のダンクはウィンドミルですね。

なぜ、今日は純也君がハイレベルなダンクを連発出来るかと言いますと、ストリートのリングは公式のリングより１０Ｃｍほど低くなっています。

これは、派手なプレイを多くするためであり、だからこそ純也君はハイレベルなダンクが出来たのでしょう。

これは、期待できそうですね。

それでは、失礼しました。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「純也、完全に観客を味方につけたな」

カズが俺に近づき、そう言った。

「よしっ、これで頑張らないわけにはいかねぇぞ？」

その後の一回戦は楽勝で勝利だった。

完全に観客を味方につけた俺たちは、びびって小さくなっている相手を楽勝で倒した。

どうやら今日は優の調子も良いらしく、スリーポイントも結構決まるみたいだ。

あと、四回勝てば優勝だな。

この調子でがんばらないとな。

No．52　進藤鉄也

「いや～、勝った勝った」

俺は満足げに言った。

「ああ、楽勝だったな」

優も同じ様子だった。

一回戦終了後の控室。

一回戦はまさしく『快勝』だった。

十分、十分の計二十分の試合なのだが、あまりにも楽勝なため全然疲れなかった。

相手びびってたし、この大会の手応えもバッチリだ。

そんな勝利の余韻に浸っているときだった。またもや俺の気分を害するヤツらが現れたのだった。

『きゃ～！　優くん、お疲れ様です』

「う、うん」

『カズくん、お疲れ様！　これ、ジュースです。もらってください！』

「あ、ああ」

来たぜ、追い掛けどもが！　しっしっ！　さっさと行きやがれ！

ドカッ！

「いてっ！」

突然、俺にぶつかってきたやつがいた。

『ちょっと～！　邪魔よ！　どいて、私は優くんに用があるんだから』

そう言って追い掛け野郎は優に向かっていった。

「……」

トイレに行こうか……。

敗者？は去るのみ。

―――――

―――――

――

「ちくしょう、あの追い掛けどもなんとかしてほしいぜ」

俺はトイレにて、用をたしながらそう呟く。毎回毎回あの追い掛けがくるたびに居場所がなくなる。

困ったものだな。

トイレを終え、控室に戻ろうとしたときだった。

ゴンッ！

またもや、俺にぶつかってきたヤツがいた。

念のために確認しておく。

『いってぇな！　どこ見てんだよ！？』

「ああ！？」

よく見てみると、茶髪の高校生くらいのヤツだった。目付きが悪く、俺に向かってにらんできた。

当然俺もにらみかえす。

『どこみて歩いてんだよっつってんだ。殺すぞボケェ』

「ほぉ」

俺を殺すって？

その度胸は誉めてやろうか。

だがな、

「今の俺は優しくねぇぞこの野郎！！」

『上等だコラァ！』

お互い物凄いスピードで間合いをつめる。

まさに、互いの拳がぶつかりあおうとした瞬間、

『まあまあ』

突然俺たちの喧嘩を止めるように、どこからか声が聞こえた。

俺たちは喧嘩を中断し、その方向を見る。

そこには、いかにも人が良さそうな、ロン毛の男がいた。

伸長は優より少しデカイ。１８０センチはあるだろう。

笑顔が印象的で怒った顔が想像できないくらいだ。

『なんだてめぇ！？　死にてぇのか！』

茶髪の野郎は矛先をロン毛に変え、物凄い勢いでとびかかった。

『おっと』

ロン毛は特に慌てた様子もなく、向かってくる野郎をみていた。

そして、

ササッ！

――なっ、速えぇ！

あっという間に、相手の後ろにまわりこんでしまった。

『喧嘩は良くないな。いきなり殴りかかってくるとはどういうことだい？』

ロン毛は笑顔でそう言った。

それが挑発に聞こえたのか、男は再びロン毛に向かっていった。

『っのやろう！』

『はぁ、やれやれ……』

ロン毛はまた鮮やかに向かってくる男をかわし、足をかけた。

男は、自分の勢いを止めることができず、そのまま地面に激突する。

『いってぇ……』

『お互いにバスケットボールプレイヤーなんだから、仲良くしようじゃないか』

そう言って、ロン毛は右手を差し出し、倒れた男を起き上がらせようとする。

『ちっ……』

男はその行為を受け入れず、差し出された手を弾いた。
そして、この場を去るようにトイレから出ていってしまった。
俺とロン毛だけがこの場に残されたのだった。
ロン毛はこちらをみて、ニコッと笑いながら話しかけてきた。

『どうしたんだい？　喧嘩なんかして』

「別に喧嘩じゃねぇよ。あの野郎がからんできただけだ」

『そうかい？　そうは見えなかったけど？』

またもや、笑顔をみせる。おめぇはそんなにニコニコするのが好きなのかよ。

「関係ねぇだろ」

『ふふ、そうだな。失礼した』

そう言ってロン毛は自分の右手を差し出してきた。このタイミングからにして、握手を求めているのだろう。
べつに拒否する理由もないので、お互いに握手をかわす。

『よろしく』

「ああ」

そして、男はハッと気付いたように言った。

『そういえば、自己紹介がまだだったね』

ん？　確かにな。まぁどうでもいいけど。
男はこちらの返事も聞かないうちに自己紹介をしはじめた。

『僕の名前は進藤鉄也〈しんどうてつや〉。黒沢高校二年生ガードだよ』

黒沢高校？　どっかで聞いた名前だな。
とりあえず、俺も自己紹介することにした。

「俺は石川純也、朱雀高校一年だ。普段はフォワードをやっている。この大会はセンターってことになってるがな」

『へぇ、朱雀か。木ノ下薫さん率いる高校だね』

「いや、違う。石川純也率いる高校だ」

『はは、そうかい？　でも薫さんって言ったら県を代表するような選手だからね』

はぁ、だめだな。ここにも亮みたく勘違いしてる野郎がいるぜ。

「お前もこの大会に出場してるのか？」

『いいや、僕はある選手を覗きにね。この大会に出場すると聞いたもので』

「ある選手？」

そんなに凄い選手が出場しているとは思えないが……。

『こっちの話さ。じゃあ、頑張ってくれよ。陰ながら応援してるからさ』

そして、お得意の笑顔をみせる。そして、そのままトイレから出ていってしまった。

「黒沢の進藤……か」

動きをみただけで上手いとわかる。相手をかわすときに、無駄なタメがなかった。

一応覚えておいてやるぜ。

Ｎｏ．５３　黙ってられないね

「ふぅ～、疲れた」

カズはそう言ってから溜め息をついた。
押しよせるファンも一段落したようであった。

控室には他のチームが沢山いるのだが、彼の所属する『ｓｋｙｂｏｍｂ』の残りのメンバー二人はここにいない。優は押しよせるファンが落ち着いたところで、ジュースを買いに行ったらしい。

「純也のヤツ、おせぇな」

カズがそう言うのも無理はない。
いつの間に出ていったきり、なかなか帰ってこないのだ。
次の試合まで間に合うのか不安なのだろう。

カズが次の試合に向け、体を暖め始めたときだった。

『やあ、おつかれさん』

「ん？」

カズは突然声のした方を向く。

『こっちはあなたたちの高校を倒すために必死に練習しているというのに、アナタは随分と呑気なものですね。まぁアナタらしいと言

えばアナタらしいか……』

その言葉を聞いたカズは軽く笑いながら答える。

「進藤か……お前こそ練習さぼってまでここにきてるじゃねぇかよ」

『おっと、人聞きの悪い。ちゃんと午前の練習にはでてましたよ。そこでアナタがここに出場してるという噂を小耳に挟んだもので』

「午後からも練習があるならどっちにしろ同じだろ」

『はは、ごもっともで』

少しの間、笑っていた進藤だったが、急に真面目な顔になり話し始めた。

『今年の僕らは去年までとは違いますよ。チームの状態もかなりいい。ですから、今年は……』

今まで笑顔が印象的だった顔が、一瞬にして鋭い眼差しの顔付きになる。

『僕たちが必ず勝ちます！』

しばらく沈黙が続いた。そしてカズが答える。

「ああ、こっちもただじゃやられないさ」

そう言って右手を差し出す。

進藤はその手に自分の手をかさね、握手をした。もう先程の鋭い顔付きはどこかにいってしまったらしい。

『それでは、二階席から応援してますので』

進藤はそういいながらこの場を立ち去ろうとする。

「あ、ちょっと、オイッ」

それをカズは慌てた様子で呼び止めた。

「坊主頭で背が俺より少し低いくらいのヤツをみなかったか？　同じメンバーなんだ」

それを聞いた進藤は少しの間考えてから、なにか閃いたように言った。

『石川……純也くんかい？』

「ん？　なんで知ってんだ？　まぁいいや。そうそう。ソイツだよ」

『彼ならさっきトイレであいましたよ。まさかアナタと同じチームだったとは』

「ああ、そうだ。ヤツはああ見えて結構やるぜ？　一対一だけなら五十嵐にも匹敵するだろうな」

最初は少し驚いた進藤だったが、冗談だと思ったらしい。笑いながら答えた。

『はっはっは、またまたご冗談を……。五十嵐とは１ｏｎ１の実力なら木ノ下薫さん以上と言われている県内最強のフォワード、五十嵐拓磨〈いがらしたくま〉さんのことかな？　僕の聞き間違いだといいのですが』

カズは笑みを一つ見せずに答える。その顔はまさに真剣そのものであった。

「そう。その五十嵐拓磨だ。確かに、まだまだそれを言うには大袈裟かもしれないがな。だが、ヤツはもっと伸びるだろう、ヘタをすると……」

『……』

次の言葉を進藤は無言で待つ。

そして……

「俺たちもそうだが、お前ら、朱雀にやられるかもしれないぜ？」

何をいっているのか分からない、という状況の進藤であった。

『朱雀？　確に木ノ下薫さんは恐ろしい存在だ。だか、僕らが警戒するチームだとは思えないな。それとも何かい？　アナタたちのチ

ームがそれほど弱体化していると言うことかな？』

「これを本気ととらえるか、ウソととらえるかはお前次第だ」

その言葉を聞いた進藤は一瞬、真剣な顔付きになるが、

『キツイご冗談だ……』

と言ってこの場を去ってしまった。

―――――――

――――

――

ふぅ、トイレも終わったし、控室に戻るかな。

俺は控室に向かった。

控室についたのはいいのだが、そこには優の姿はなくカズが体を温めながらまっていた。

「おう、純也。遅かったじゃねぇか！」

「いやぁ、変なクソガキに絡まれてよ」

「クソガキ？　進藤がか？」

「ん？　なんで知ってんだよ。クソガキは進藤っていうヤツじゃなく、茶髪の高校生のヤツ。その喧嘩を止めにきたのが進藤ってやつ」

「はは、相変わらずだな」

カズはそう言って笑った。

「なんだ？　カズは進藤ってヤツと知り合いか？」

「ん～、まぁそんなところかな？　黒沢高校で一年の時からレギュラーやってるヤツだよ。去年一度戦ったときがあるからな」

「ヤツは強いのか？」

「ああ。そりゃあ黒沢高校だからな。その中でもアイツは上手い方だったと思う。今年の黒沢は間違いなく強いぜ」

「ふ～ん……わりぃ、あんま興味ねぇわ」

「ははは、そうだな」

―――――

カズの笑い声がなり響いた。

―――――

――

進藤は再び、黒沢高校に向かう。

先ほどまでは観戦すると言っていたのだが、

『あんなこと言われてだまってはいられないね』

カズの言葉が気になったらしい。急に行き先を変更し、練習に戻るところだ。

黒沢高校高校についた進藤は急いで体育館の扉を開ける。

『失礼します』

急に聞こえた大声に、練習中の部員が振り向く。

「ん？　進藤、お前……白川第一に偵察に行くとか言ってなかったか？」

そう進藤に話しかけたのは、黒沢高校キャプテンの安倍雅人〈あべまさと〉だった。

『いえ、急に気が変わったんで……』

「そうか……」

この日は夜遅くまで、部員たちの声がなり響いたのだった。

Ｎｏ．５４　ファール？

『それでは、次の試合の方、それぞれ準備に入ってください！』

控室中にスタッフの声がなり響いた。

「よし、行くか」

『おう！』

カズの掛け声に、俺たち二人が続く。

次はいよいよ俺たちの試合だ。

長い廊下を三人ならんで歩いていく。

体育館からまだ少し離れているにもかかわらず、大音量のＢＧＭが、俺たちの耳になり響いていた。

そして、大きな扉の前に立ち、その扉を開けた。

……。

『ワァァァァッツ！』

二回戦というのに、凄い歓声だった。

「凄いな……」

優がそう呟いていた。

まぁ、一回戦あれだけハデにやったんだから、しょうがねぇか……。

『それでは、ＳｋｙＢｏｍｂの皆さんはシューティングを開始してください』

どこからか聞こえたアナウンスに従い、俺たちは練習を開始した。

前試合の用にハデにやるのはやめておこうか……。

俺たちは黙々とシューティングをこなす。

そして、

『シューティングを終了してください』

再びアナウンスが聞こえた。

俺たちは試合開始を待ちベンチに座った。

「なぁ、ジュン。俺たちの次の相手って誰なんだ？」

優が話しかけてくる。確に俺たちは次の敵がどんな奴らかわからなかった。

『ヤンキーズの入場です』

アナウンスが終了すると同時に、対戦相手が入場してくる。

ヤンキーズとはまたまたベタな……。

そして、ヤンキーズと呼ばれたやつらが姿を現したのだった。

「あ！！」

『あ！！』

俺はヤンキーズに見覚えのあるヤツがいて、思わず声をあげてしまった。相手も俺に気づき声をあげた。

『お前は……』

「ん？　純也、知り合いなのか？」

カズが不思議そうに俺に問いかける。優も同じ様子だった。

「コイツがさっちトイレで俺にからんできやがったクソガキだ」

まさか、次の対戦相手がクソガキだったとは……。

『なんだと！？』

俺の言葉を聞いたクソガキは怒ってとびかかってきた。

『やめろって！　退場になるぞ！』

それを、他の仲間が必死に止める。これはチャンスだな！

「おい、テメー」

『あ！？』

クソガキは仲間に取り押さえられている状態で俺をにらみつけてくる。

「や～い、クソガキ～！　トイレのモップ～！　負け犬！」

『こ、このやろ！！』

『やめろって！』

『うるせぇ！　アイツは俺が殺す！』

「や～いや～い！　トイレモップに俺が殺せるかな？　トイレにダイブしてたクセによぉ～、ケラケラ」

『ぬぉぉぉ』

クソガキの怒りは頂点に達している様子だった。

『コラッ！　君たち！』

ん？　何だ？　誰なんだ俺の邪魔をするヤツは？

俺は新たに声をしたほうを振り向く。

そこには、この大会の審判みたいなやつがいた。

『なにをしているんだ？　これ以上ヒドイようなら両者退場にするぞ？』

『ちっ』

その言葉を聞いたクソガキは渋々自分のベンチに向かった。いい気味だな。

「おい純也、ほどほどにしとけよ、退場にされたらかなわん」

「まぁまぁカズ、そう言うなよ。かるくからかってやっただけだ」

「まったく……」

カズは軽く笑みを浮かべ、ヤンキーズの方をみた。俺もしかたがなく見てみる。

どうやらシューティングをしているようだった。

特にめだったヤツはいなく、そこそこと言う感じだ。

へっ、これなら楽勝だな！

俺たちはシューティングを見ながら、静かに試合開始を待った。

――――――――

――――

――

『両者、コートに入り並んでください』

やっとシューティングが終わったようだな。

俺たちは軽く体を動かしながらコートに入る。

クソガキの方を見てみると案の定俺を睨みつけていた。

「そんなに怒るなって。モップ」

『俺の名前はサエジマだ！　俺らとあたったことを後悔させてやる！』

「へいへい」

どうやって後悔させるんだか……。

そして試合が始まった。

先攻はジャンケンで勝った俺たちだ。

カズがドリブルをしながら辺りを見渡す。

『キョロキョロよそ見してんじゃねぇ！』

サエジマがスティールを狙いに飛び出した。

ヒョイッ！

「ハズレ」

『！？』

カズは逆をつき、サエジマを抜き去る。

そしてそのままシュートを決めて２―０とした。

『ちくしょう！』

サエジマたちの攻撃が始まった。

ボールがある程度回り、サエジマが強引に突っ込んできた。

バシッ！

俺はうまくタイミングを合わせてブロックした。

「その程度で俺を殺せるのかい？」

『くそ……』

その後、カズのアシストにより、優がスリーポイントを決める。

スパッ！

「優！　ナイス！」

「お、おう！　なんとか腕は鈍っていないようだ」

俺が声をかけると優は照れくさそうに反応した。

優はしばらくのブランクがあるのにもかかわらず、完璧に近いフォームで決めていた。さすがだな。

そのあとも、カズと優が目立つ試合展開となり、確実に点を決めていった。俺はハデなことはせず、それなりに決めたのだった。

そして前半の終了。

２１―６で俺たちの圧勝だった。その後の展開も分かりきった様なものだな。

「よし！　優、カズ、よくやった！」

「おう！」

「ああ」

優とカズがそれぞれ答える。おれはサエジマ率いるヤンキーズに聞こえる声で二人に言った。

「今回の敵もあまりたいしたことねぇな。このまま楽勝だぜ！」

『あ、ああ』

複雑そうに応答する優とカズだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『くっ……クソが！』

サエジマが怒りをあらわにする。とても悔しそうな顔をしながら地面を蹴った。

そして他のメンバーに言った。

『よし……こうなったら負けてもかまわねぇ。アイツらを生きて帰すな！　アイツらに本当のストリートってのを見せてやろうぜ！』

サエジマの言葉にうなずく他のメンバーだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、残りの１０分の後半戦が始まった。

ヤンキーズのオフェンス。

ヤンキーズはボールを回し、ポストに入った選手にボールが回った。

その選手はそのままシュートにいこうとする。

俺はすかさずブロックに飛ぼうとしたのだが、

「な！？」

シューターが俺のつま先に乗り、シュートをしてきたのだ。これでは跳べない。

ボールはそのまま選手の手から放たれ、リングの中を通過した。

『ナイスシュート！』

『ああ』

相手チームは挑発するかのように喜んでいた。

「ヤロウ……」

俺が怒っていることに気付いたのか、カズが慌てて俺に話し掛けた。

「純也、落ち着け。退場したら元も子もないぞ」

確に……。商店街裏のストバスのコートが無くなっちまう。

「ちっ……しょうがねぇ」

再び試合を再会する。

今度は俺たちのオフェンスだ。先程の借りを返さなくてはな。

カズがドリブルをして、優にボールを渡す。

そして中に切り込んだカズは優からボールをもらい、そのままシュートにいく。

『させるか！！』

ドスッ！

ヤンキーズのサエジマの肘打ちがカズにヒットした。ボールは反動でリングから外れてしまった。

そのボールをヤンキーズがリバウンドした。

「今のファールだろ！」

優がたまらず審判にどなった。その優に対し、ヤンキーズのメンバーたちは罵声を浴びせる。

『おいおい、審判にケチつけんじゃねぇよ！』

『ストリートバスケではこのくらいの接触はあたりまえだっつ～の！』

『ははははは！』

確に奴らのいってることは正しい。ここは生温いバスケをする場所ではない。俺たちメンバーも黙ってディフェンスにまわった。

ヤンキーズのオフェンスが始まる。

一度中に入ったボールが外にいる選手に出される。その選手はそのままスリーポイントを狙った。

優がそれにあわせてブロックに跳ぶ。

『へっ！』

シューターは後ろに跳びながらシュートを放つ。

そう、フェイドアウェイだ。後ろに倒れこむと同時に優の腹にケリを入れた。

「ぐっ……」

『く』の字に折れ曲がる優だった。

「今のは……ファールだろ……」

苦しみながらも訴える優。しかし、審判の出した答えはＮＯであった。偶然と判断されたらしい。

「なぁ、カズ。どうする？」

俺はカズに近寄っていき話し掛ける。

「これ以上調子に乗らせるとマズイな」

そして、カズは笑いながら俺に向かって喋った。

「よし、純也。容赦しなくていいからおもいっきりやれ。ただし『バスケット』でな」

バスケット？

ああ、なるほどね。

『おい、早くしろよ！』

ヤンキーズのクソヤロウどもが煽る。

「優、大丈夫か？」

「ああ、純也。大丈夫だ」

「俺、ちょっと頑張っちゃうから、アシストよろしくな」

その言葉を聞いた優は少し考えてから、笑いながら、

「ああ、容赦するな」

と答えた。

俺たちのオフェンスの番。

変に燃え上がる俺たちだった。

No．55　バケモノ

俺たちのオフェンスが始まった。
まずは司令塔、カズが一人でかきまわす。ドリブルで相手を抜き去る。

『くそっ！』

当然、抜かれた相手はカズに必死について来るようだった。カズに操られていることも知らずに。
そして、カズはある位置に向かって行き、急にブレーキをかける。勢いあまったディフェンスはそのまま体が流された。

『えっ！？』

ゴンッ！

『痛てっ！』

カズは見事に、相手のチーム同士を衝突させることに成功した。まさに計算された動きであった。

「優！　打て！」

「おっけ～」

カズのパスを受け取った優は、ノーマークでノビノビとシュートを放った。

パスッ！

美しいフォームから切り出されたシュートは、リングに当たることなく通り抜けたのだった。

「ナイッシュ！」

「ああ！」

俺と優は軽くハイタッチを決めた。

次はディフェンスをするために、相手の攻撃にそなえる。

『チクショウ！　いくぞ！』

『ああ！』

相手はサエジマ中心に攻撃を組み立てるのだが、俺たちの守りにより中に入ることさえできなかった。

『クソッ！　ボールをよこせ！』

仲間からボールをもらったサエジマはディフェンスの優をなんとかふりきった。俺に向かってドリブルをしてくる。

俺はただちにカバーに入ることにした。サエジマも味方を使おうなんて、これっぽっちも考えていないらしい。一人で突っ込んでくるようだった。

『ははは！　お前だけは許せねぇんだよ！　吹っ飛べや！』

サエジマ自分の体重を肩にのせて、俺に体当たりをしてきた。も

う退場覚悟ならしい。

ドンッ！

『あれっ？』

ニヤァ

俺は不気味な笑みを浮かべ、リング下に仁王立ちしていた。
俺に体当たりをしてきたサエジマが宙を舞う。その顔には、なぜ自分が吹っ飛んでいるんだ？　という文字が浮かんでいた。

答えは簡単さ。

お前が弱いだけ。

もしくは、俺が岩（ロック）の石川であるからだ！背番号も６だしね。

なんちって。

俺たちがルーズボールを拾い、オフェンスが始まった。
カズは優にボールを渡した。優はドリブルで移動しながら辺りを見渡した。

そして、

「純也、そろそろ決めろ」

「ああ」

俺は優からボールをもらった。そろそろ相手にトドメをささないとな。

俺はディフェンスの目を見ながらドリブルしている手を後ろに回し、自分の後ろでドリブルをする。

そのまま上体を少し落とす。

これで相手からはボールが見えないはずだ。

ディフェンスは急に来るディフェンスにそなえて、俺の後ろにあるボールに神経を集中する。

俺は手首のスナップを使ってボールを相手の頭上を越えるように弾いた。

相手はまだ俺の後ろにボールがあると思い込んでおり、かなり集中して入る様子だった。

俺の弾いたボールは優がポストで受けとる。

「残念、もうボールは無いよ」

『えっ！？』

俺は笑みを浮かべながら両手の掌を相手に見せた。相手はかなり混乱している様子だった。

さ、遊びは終りだ。

俺は中へ切り込み優からボールをもらう。そしてドリブルでリングに向かって走っていく。

『させるか！』

サエジマともう一人のヤツが二人がかりでリングを死守する。はたして二人程度でこの俺を止めることが出来るかな？

俺はリングに近付いたところでおもいっきり地面を蹴る。

ディフェンス二人もそれに合わせてとんだ。

俺は相手ディフェンスをかわそうなんて思ってはいない。容赦なく相手に激突していった。

ダァァンッッ！

リングが激しい音をたてて揺れた。

俺のディフェンスをしていたやつらは後ろに吹っ飛んでいた。

俺はリングにぶら下がり、そいつらを見下ろした後リングから降りる。

『ひっ……ひぃぃ』

サエジマは近付いてくる俺を見るなり、かなり脅えているようだった。

俺はサエジマにお互いの鼻がつきそうなくらい顔を近付け、喋った。

「わりぃわりぃ。あんまりもろくて吹っ飛ばしちまった……」

そしてにらみつけて一言。

「ハンパにストリートやってきたわけじゃねえんだよ。これ以上やるってんなら……」

『……ゴクリッ』

「潰しちまうぞ？」

『う、うわぁぁっ！』

サエジマは立ち上がり、審判にかけよる。

『しっ、審判！』

『ん？　どうしたんだい？　今、相手はチャージングだから君たちボールからだよ』

サエジマはそんな言葉も聞かずに慌てて喋る。

『おっ、俺ら棄権させてくれ！　な、なぁ？』

サエジマは他のメンバーに急いで確認をとる。

『あ、ああ！』

他の二人も、首を物凄いスピードで縦に何度も振っていた。

そして、

『じ、冗談時じゃねぇ！　あんなバケモノとやってられれっか！』

そんなことを叫びながら、会場から急いで逃げていった。

……。

沈黙がこの場を支配する。観客は訳がわからない様子だ。

審判は戸惑いながらも一言、

『ＳｋｙＢｏｍｂの勝ち！』

―――――

―――

――

『はっはっはっは！』

ここは控室。

この控室中を俺、優、カズの笑い声が支配していた。

「純也、あれはやりすぎだろ、ははは」

カズは笑いながら俺に語りかけてきた。

「いや、本当に軽く吹っ飛んだんだよ。手加減したって」

俺には良心があるんだよ。うん、たぶんね。

「しかし、あれは傑作だったよなぁ……サエジマが言った言葉覚えてるか？」

優が突然そう言った。そして、

『ひ、ひぃ～』

俺たち三人の声がハモる。そして再び爆笑の渦に包まれたのだった。

『ずいぶんたのしそうね』

「ん？」

俺は突然声のした方を振り向く。そこには見覚えのあるヤツがいた。

「おう、久留美か。勝ったぞ」

「勝ったぞ、じゃないでしょ？　まったく……無茶しちゃって……」

『無茶じゃねぇよ。アイツらから先に手をだして来たんだ』

「確に……優くんが蹴られたときは観客席の女の子たちが大変なこ

とになってたわ」

久留美も何かを思い出したように笑っていた。

とりあえず、俺たちが勝った。一日目は三試合。つまり、次を勝てば一日目の日程は終了だ。

俺たちは決して負けることは出来ない。

コートのためにも頑張らないとな。

しばらくは笑い声が控室になり響いていた。

現在の時刻１１：３０

午前の日程を終えた俺たちは昼食を食べに二階の観客席に向かっていた。そう、他の奴らの試合を見ながら飯を食べるためだ。

俺たちは午前の日程が詰まっていたぶん、午後の試合までにはまだまだ余裕があるとみての行動である。二階席についた俺、優、カズ、久留美の四人はそれぞれ持ってきた弁当をひろげた。

ちなみに俺は久留美が来ることをしらなかったので、弁当は適当にコンビニで買い揃えてきた。沢山買ったのでスタミナがつきそうである。

久留美を見てみると、いつものように自分で作った手作り弁当を持ってきていた。カズも自分では作ってはいないだろうが、手作り弁当を持ってきていた。

そして優を見る。

バナナ、プリン、ポカリ、そしてお約束のカロリーメイト！！

「なぁ、優」

「ん？」

優は手に取っていたものをいったん食べるのをやめ、こちらをみる。

「お前、そんなもん食って足りるのかよ？」

「足りるとか足りないとかじゃなく、俺たちは午後からも試合があるんだぞ？　これくらいが丁度いいのさ」

う～ん……、そうかなぁ？　俺だったら試合中腹が減って倒れちまいそうなんだが。

そんなことを考えていると、久留美が俺の弁当を覗きこみながら言った。

「牛丼、オニギリ、カレー、牛乳……ジュン、アンタは馬鹿なの？　これから試合を控えてるっていうのに……見てるこっちが気持悪くなるわ」

「いやいや、俺はお前らみたいにヒョロくないんでね」

「もう……試合中調子が悪くなっても知らないんだから！」

「はいはい、わかってますよ」

まったく、久留美の心配症には困ったものだぜ。

やっと邪魔がいなくなったところで俺は待ちに待った昼飯を食べようとしたときだった。

『あ、あの……ＳｋｙＢｏｍｂのみなさんですよね！？』

「うん？　そうだけど」

突然聞こえてきた男の声に優が反応する。俺はどうせまた優かカズのファンだろうと思い、気にせずに飯を食べ続ける。う～ん、うまい！

『一回戦、二回戦とＳｋｙＢｏｍｂの試合をみて感動しました！　カズさんのキラーパス並のアシスト！　優さんの精度の高いスリーポイントシュート！　参考になりました！』

そらきた！　どうしてこう優、カズファンが多いのだろうか？　俺が危険なイメージがあるからか？

俺は飯を中断して話しかけてきた男の方をみる。

短めのさっぱりした髪をしていて、背はそんなに大きくない。目はパッチリしていてキラキラ輝かせていた。優やカズのプレーをみて参考になったと言っているのだから、ガード系のポジションだろう。

「おう、サンキュ」

「あ、ありがとう」

カズと優は照れながらもその少年に答えた。

『それと、純也さん！』

ん？　何か用か？　という顔で少年をみた。

『純也さんのプレーには本当に感動しました！　激しさの中にもテクニカルなドリブル、相手選手二人を吹っ飛ばしてしまうほどのパワー、小さいながらも豪快に決めるバリエーション豊富なダンクシュート！』

「おお！？　そうかそうか！　俺に憧れたか。良いことだぞ、はっ

はっは」

俺のことを理解してくれるヤツがいたのか……。まだまだ捨てたもんじゃないな。

「ねぇ君、ジュンに影響されて危険な真似をしちゃだめよ？」

久留美がそんなことを少年に言っていた。

「しっしっ、久留美は引っ込んでろ、邪魔するな」

「もう、すぐに調子に乗るんだから……」

邪魔者を排除した俺は再び少年に話しかけた。

「そんで、お前もこの大会に参加してんのか？」

『はい、これから試合があるんですよ。試合前に是非とも挨拶をしておきたくて。他のメンバーは純也さんが怖くてくるのを嫌がってるんですけど、全然そんなことないですよね！　思ったとおりいい人でしたよ』

「ははは、そうかそうか！　理解のあるやつじゃ。くるしゅーない、くるしゅーない」

俺のテンションはどんどんあがっていた。

『同じフォワードとして憧れますね』

「ん？」

今何て？　同じフォワードがどうとか。

「お前フォワードなのか？　そう言えば名前は？」

少年は慌てた様子で自己紹介を始めた。

『は、はい、小さいながらもフォワードやってます。名前は遅れましたが、玄武中学校三年の服部卓郎（はっとりたくろう）です。この大会にはｌａｉｎｂｏｗというチームで参加してます』

「へぇ～、中学生だったのか。まぁ予想はついたけど」

何の捻りもない、予想通りの展開だったな。実は三年生だった！とかいうオチを期待しちまったぜ。

『だから同じフォワードとして純也さんの動きは参考になります。まぁ真似はできませんけど』

「簡単に俺の真似が出来てたまるかっつ～の」

『はは、そうですよね。だから僕はＳｋｙＢｏｍｂとは勝敗関係なしに一度対戦してみたいです！　間近でみるとどんなものか楽しみですよ』

「おう、いいぜ。ただし容赦はしねぇけどな。俺たちは負けられねぇんだ。」

そう、俺たちはどんな相手でも負けることは出来ない。俺たちにはストバスのコートの命運がかかってるからな。

『僕たちがＳｋｙＢｏｍｂと戦うには決勝まで行かないといけないんですよね。反対がわブロックですし』

卓郎はとても残念そうに言った。この大会はＡブロック、Ｂブロックの二つに分かれており、決勝でＡ、Ｂのそれぞれのブロックを制覇したもの同士戦うことが出来るのだ。

「そうか……。まぁ、お前らの実力がどんなもんかは知らねぇけどなんとかなるだろ。頑張れよ」

そう言うと卓郎はまた目をキラキラさせた。

『ありがとうございます！　頑張りますよ！　そろそろアップがあるので失礼します』

「おう」

卓郎はそう言って手を振りながら去っていった。

「ふふ、なかなか良いやつじゃのう」

「あんな真面目そうなやつがお前に近付いてくるなんて珍しいな」

今まで無言で弁当を食べていたカズがそう言ってきた。確に、俺に話しかけてくるヤツといえばストバスのコートにいるような野郎ばっかだ。

「ああ、どんなもんかねぇ～」

俺は腕を頭の後ろに組み、天井を見上げた。

そして飯を食いながら、次に行われる服部卓郎たちの試合を待っていた。

――――――

――――

――

やがて卓郎率いるｌａｉｎｂｏｗの試合が始まった。
服部のチームは服部以外はそれなりの身長があった。ただ服部が小さいだけかもしれないが。

服部たちのオフェンスでボールが何人かの手に渡った後、服部に渡った。

そして、

――はやい！

俺はそう思った。一気に二人抜いたかと思うとアッサリとシュート決めてしまった。

「へぇ～、なかなかやるじゃん」

カズが隣で呟いた。スピードに関しては合格点のようだ。

相手のオフェンスにそなえ今度は服部たちがディフェンスをする。
相手のやみくもに放ったシュートは外れて外に弾き出された。そのボールに服部は物凄い勢いで飛び付いた。

「高いな」

今度は優がそう呟いた。背が低いわりには高く飛ぶようだ。ダンクはまだまた出来ないようであるが。

オフェンスに関しても、服部は、ミドルからなども決めチームのほとんどの点数をとっていた。
俺のプレーが参考になると言っていたので、どんなタイプかと思っていたのだが、俺とは全くの違うタイプのようだった。それはそれで面白いけどな。

結局、服部率いるｌａｉｎｂｏｗは圧勝だった。

―――――――

――――

――

『勝ちました～』

試合が終り服部が駆け寄ってきた。

「おう、お疲れさん。楽勝だったな」

俺も返事をかえす。

『ＳｋｙＢｏｍｂのみなさんが見てると思うと緊張して大変でしたよ』

「その割にはいい動きだったな。決勝までこれるんじゃないのか？」

『う～ん、頑張りますよ。とりあえず次の試合を頑張ります』

「俺たちも負けられねぇか」

俺は優、カズの方をみた。

「よし、そろそろ試合だし、アップでもしに行くか！」

『ああ』

カズの一声に俺たちは続いた。

そしてコートへと向かっていった。

No．58　油断

第三試合。

『フレー！　フレー！　ｓｋｙｂｏｍｂ！』

『まだいけるぞ～！』

ちつ…何か急に周りが騒がしくなってきたな。俺はスコアに目をやった。

「くそっ、負けてんじゃねぇか！？　何やってんだよ！？」

『お前が原因だ』

この試合、敵のトラッシュトークにまんまと引っかかった俺が我を忘れて暴走してしまった。そして気がついたら試合も終盤だったという訳である。

カズと優の声がほぼシンクロしていた。ったく、イラつくぜ。

まぁ、俺に期待する後輩のためにも頑張らないとな…！

「いくぜ？　ついてこいよ！」

『ああ』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

やや不調と思われた純也だったが、一度歯車が噛み合ったｓｋｙｂｏｍｂの勢いは止まることを知らず、みるみるうちに敵チームとの点差を縮めていく。

そして、

「これで逆転だぁぁっ！」

純也のダンクが決まり、リングが揺れる。

『わぁぁぁっ！』

『いいぞぉっ！』

『ヒューヒュー！』

実力でも観客を味方につけたｓｋｙｂｏｍｂだった。

アウトサイドからは優、インサイドからは純也、そして、それをアシストしつつどこからでも点をとれるカズ。

もはや、力の差は歴然であった。

――――――

―――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「危なかったな……」

カズが控室にてそう呟いた。

結局、俺たちの逆転勝利だった。負けたチームは納得のいかない顔をしていた。まぁ当たり前だろうが。色々と考え事をしちまったせいで調子が狂っちまった。

「まったく、一時はどうなるかと思ったぜ……」

「まぁ優。そう言うなって。前半は敵にハンデを与えてやったのさ」

「まったく……どこまで本気なんだか……」

微笑する優であった。

またもや快勝？　で一日目の日程を終えた俺たちだった。

俺たちは明日にも試合を控えているので、寄り道などせずに家に真っ直ぐ帰ることにしたのだった。

明日、運命の時が始まる……。

No．59　謎のチーム

ストリートバスケットの大会も順調に進み、二日目を向かえようとしていた。
現地集合だったのだが、二日目と言うこともあり、みんな時間通り控室に集合していた。

「おうジュン！　遅刻しなかったようだな」

優が笑顔で俺に話しかけてくる。

「さすがにコートの運命がかかってるんだ。気はぬけねぇぜ」

俺がそういった途端、横にいたカズが話しかけてきた。

「そう言ってるわりには、昨日の試合はなかなか危なげだったぞ」

「う……うるせぇ、昨日は楽勝すぎてつまんなかったんだよ！」

俺の反応をみて、笑みを浮かべる優とカズだった。
少し時間が経ち、今度は久留実がやってきた。

「あら、もうみんないるじゃない。純が遅れてこないなんて珍しい！」

「るせぇ！　俺だってやるときはやるの！」

「そのわりに昨日の試合は……」

久留実までおんなじことぬかしやがる。困ったもんだな。

「あ、今日はみんなにプレゼントがあるの」

久留実は何か閃いたように、自分のバックの中を覗き、あるものを取り出した。

「じゃ～ん！」

そして、それを俺たちに向かってつきだした。

「……ミサンガ？」

優が久留実に問いかけた。

「うん、そう。昨日がんばって作ったんだ！　あんまり良いものはつくれないんだけど……アタシも何か力になりたかったから」

「へぇ、ありがとう。　十分力になるよ」

カズがそう言ってミサンガを見る。そしてあることに気づくいた。

「全部色が違うんだね？」

それを聞いた久留実は、待ってましたと言わんばかりに答えた。

「そうなのよ！　その人にあったイメージの色を勝手に決めて作ってきちゃった」

そういって、チョコッと舌をだした。

「カズくんは黒！　着てる服も黒が多いし何より、そんなイメージだから。今日の試合も暴走するジュンをうまくコントロールしてがんばって！」

「オーケー、がんばるよ。ありがとう」

カズはそう言って久留実からミサンガを受け取り、自分の腕に巻き付けた。やはり、なんとなく黒が似合う気がする。

「優くんは赤。もっとあかるめの色かな？　って思ったんだけどやっぱり赤かなって。今日もスリーポイント期待してるんだから」

「お？　さすが久留実ちゃん、よく俺が赤好きってわかったね。ギターも赤のストラトだからさ。期待に答えるように頑張るよ」

そして優は笑顔で久留実からミサンガを受けとった。

「最後にジュン……」

「あ？」

なんか妙に期待しちまう。自分ってどんな色か気になるしな。

「ジュンは青！　朱雀高校のユニフォームと同じ色！」

……。

「え～！？　朱雀のユニフォームと同じ～？」

「嫌なの？」

久留実が心配そうな目で俺をみる。

「嫌と言うか、自分は危険な色がいいな。黒とか赤とか好きだし」

「青にはね、純にもう少し冷静になって欲しいって思ったんだけど……。それに……」

「それに？」

久留実は、俺から目をそらし、ややうつ向きながら呟く。

「私のイメージする純は、周りや純が思ってるより乱暴じゃないよ……」

「……？」

何いってんだ？よくわからねぇやつだな。

ビシッ！

「ま、頑張りなさい！　そろそろ応援席いってるから！」

久留実そう言って、俺の背中を叩いた。

「お、おう」

ま、ありがたく貰っておくかね。

『よう優！　応援しにきてやったぜ』

ん？

俺たちは突然声のした方をみる。

「京介！　来てたのか！」

優が驚きながら声をあげた。そこにいたのは須藤京介。前にも登場したが、優のバンドのボーカリストだ。

周りからは『赤髪の狂犬』として恐れられている。現在楽器屋にてバイト中である。

「今日はバイトもねぇし暇だったんでな。応援しにきたぜ」

「ありがとな。絶対に勝から見ててくれよ」

「ふっ……ま、悔いの内容に頑張りな」

京介はそう言い終わると、胸元からサングラスを取り出し、かけた。

「純也も頑張れよ。話は聞いたがコートがやべえんだろ？」

「ああ。負けると無くなるからな」

「ま、お前なら大丈夫だろ。なんせ俺に勝った男だからな、ははっ」

「あんときに比べれば楽勝だぜ」

俺と京介は軽く笑う。

そして……。

「じゃあな、応援席で見てるぜ」

「おう」

京介はそう言い残してから、後ろを振り返り歩いていった。

――――――

――――

――

いよいよ俺たちの準決勝が始まろうとしていた。

『ｓｋｙｂｏｍｂの入場！』

アナウンスが聞こえた途端、観客の声援がなり響いていた。

ドアを開けて開場を見渡すと、かなりの観客がいるようだった。
胸に直接響いてくるような重低音ＢＧＭ。観客たちの興奮はますます高まっていく。
入場がおわり、まだ歓声がなりやまぬ中、対戦相手の入場が始まった。
『城清の入場！』
城清？　かなり普通な名前だな。聞いたことあるような、ないような……。
おさまらぬ大歓声の中、城清と呼ばれた人たちが入場してきた。
「あ、あれは！？」
カズが突然叫んだ。
「どうした？」
俺の言葉にカズは少し悩んでから、
「あ、気のせいかな？」
と言った。思わずずっこけてしまう。
俺は相手チームを見る。
みんなサングラスに帽子、マスク装着という、かなりあやしい装備だった。
身長は大きめの奴らだ。１７０後半が二人と、１９０オーバーの

奴が一人。

「でっかいなぁ……」

優が思わずそう口にしていた。

「ああ、博司までにはいかないが、かなりでかいかもな。ま、こっちも全然退けとってねぇって」

「そうかもな」

入場がおわりシューティングもスムーズにこなされていく。

相手もとくに目立ったところはないようだった。

試合開始直前になり、俺たちは相手チームと向かいあった。

やはり、一人やたらとデカイのがいた。どうも日本人ばなれしているようたきがする。

『それでは、ｓｋｙｂｏｍｂ対城清の試合を始めたいと思います』

わぁぁぁ！

いいぞぉ！！

優く～ん！

カズくんがんばって～！

相変わらず変な声援が聞こえるようだが気にしない……。試合に集中しよう。

ジャンケンにより、城清の先行が決まった。

Ｎｏ．６０　まさかの事実

相手の一人がドリブルして様子をみているようだ。カズがそれに隙の無いディフェンスでついていく。

ボールが次の人に渡った途端だった。

シュッ！

パスをもらった人の手から、すぐにシュートが放たれた。

――おいおい……嘘だろ？　あんなデタラメシュート入るわけ……。

……スパ！

試合開始早々、いきなりスリーを叩きこまれてしまった。

『ないすしゅーと！』

『あんがど』

シュートを決めた人が仲間に誉められ照れくさそうな様子だった。

「あの独特なシュートフォーム、まさかな……」

「ん？　どうしたカズ？」

俺は一人呟いているカズに話しかける。

「いや、なんでもない」

「そうか？」

「ああ、それより、次は俺たちの攻撃だぜ？」

「ああ」

俺たちの攻撃が始まった。

ボールがある程度まわり、俺にボールが渡る。

「いくぜ！」

俺はディフェンスのデカイヤツをかわし、シュートしようとした。

次の瞬間、

パーンッ！

「な！？」

みごと、相手にブロックされてしまった。

うそだろ！？　今完璧にかわしたはずなのに……。

ブロックが高い！

そのままボールが相手に渡り、相手の攻撃。

ガード対決。カズとのマッチアップだ。

いくつもフェイントをかけるが、カズにはまったく無意味のようだった。

「ちっ」

しびれをきらしたのか、相手はさっきのシュート決めたヤツにボールを渡そうとした。

キュッ！

しかしボールは渡さずに、自らリングに突っ込んできたのだった。

「は、速い！？」

カズはがんばってついて行こうとしたのだが、ギリギリでかわされてしまった。

そのままシュートをきめられてしまう。

わぁぁぁ！

いいぞ！

歓声がさらに大きくなった。

「純也、絶対に気を抜くな」

「ん？　抜いてねぇよ。急にどうしたんだ？」

「あいつら、全員現役バスケ部だ。しかも名門のな」

「なんだって!？」

俺と優の声がハモった。

「間違い無い……」

カズは相手チームに向かって言った。

「おい、城清高校のやつらじゃないのか？」

「ギクッ！」

ん？　いま『ギクッ！』って言ったぞ。

「そ、そんな、自分達は城清高校なんていう創部２４年目、昨年度はベスト４までいった笹岡監督率いる城清高校の部員じゃねんだべよ」

「バカッ！　詳しすぎるだろが！」

ガードの人がスリーポイントを決めたヤツの頭を叩いた。

「イテッ！　何するべよ！」

「お前のせいで俺たちが城清学園の部員だってバレたらどうすんだよ！　関東大会近いし内緒にしておかないと！……はっ！」

じ～……。

俺たちは冷めた目付きでガードの人をみる。

「ちっ、ちがう！　今のは冗談だ！」

じ～……。

俺は一応問掛けてみた。

「じゃあ聞くけどさ、なんでチーム名が城清なの？」

「そ、それはぁ……コイツ！　コイツが勝手にきめたんだよ！」

ガードのヤツがさっきスリーポイントを決めたヤツを指差す。

「んなご言ってもよぉ、先輩が名前なんて適当につけれってわぁだぢさ言ってきたがら、つけたんだべよ。全部わぁだぢさまがせっきりにした先輩がわりんだべさ」

もの凄いなまりだが、どうやらガードの人に訴えかけているようだ。

「アホッ！　だからって、実際に自分達の高校名にするやつがいる

か！……はっ！」

じ～……。

「へ～、実際に自分達の高校名にしたんだぁ」

優がそうつぶやいた。

ギクッ！

「あ～もう！　ばれちまったものは仕方がねぇ！」

そう言って帽子とマスク、サングラスを脱ぎ捨てた。
そこにはスキンヘッドでいい感じのガタイの人がいた。
スキンヘッドにあわせて、他の人たちも脱ぎ捨てる。

そして、ガードのやつが言った。

「俺が城清高校7番、三年の石塚哲平（いしづかてっぺい）だ！」

次にとなりの方言がすごい人が喋り始めた。

「城清の１２番やってます、二年の杉山健祐っていいます。どうがよろしぐしてけろ」

どこか『のべら～』っとした様子で杉山は自己紹介を終えた。本当にコイツがさっきもの凄いシュートを決めたやつなのか？

最後にでかいやつ。

「オ～！　みなサンハジメマシテ～！　ジョウセイガクエンの六番の大蔵・ソニン・裕康デ～ス。三年デツヨ～！」

「おい、外国人かよ!?」

「イイエ～、ハーフデスノ～！アンタタちイショよ～ナカヨクしまショ～！」

「よ、よろしく。こちらけそ……」

何故かしらんが、腰が低くなってしまう優。

「おい、注意しろよ……」

カズがそっと耳元で俺たちにいってきた。

「ガードの石塚はドライブの速さで有名な選手だ。気を抜くとすぐにとられるぞ……」

「さっきはやかったもんな……」

優がカズの言葉を聞いてそう呟いた。

「ああ。それと、シューターの杉山は危険だ。速いモーションから繰り出されるシュートは木ノ下薫に匹敵するほどのレベルだ。速さなら木ノ下以上だな」

「そんなに凄いのか！？」
「ああ、デタラメに見えるフォームだが何故か決定率がたかい。狙った獲物は逃がさないスタイルから『ハンター杉山』と呼ばれているほどだ」

真面目に言ってるのか？カズなら本気かな。

「最後に大蔵だ。彼はハーフということもあり、日本人離れしたバネをもっている動ける大型選手だ。２メートル相手でも十分マッチアップできる。」

俺たちの会話を聞いた石塚が、語りかけてくる。

「へぇ～、随分と俺たちに詳しいんだな。さすがは名門白川第一高校キャプテン、森村一輝だぜ」

「ポイントガードっていう仕事柄上こうなんだよ。わりいな」

……え？

……今なんて言った？

カズが……

……白川のキャプテン！？

Ｎｏ．６１　隙（前書き）

ようやく復活です。これからガンガンいくのでよろしくおねがいします。

No.61 隙

「お、おい……白川のキャプテンってどういうことだよ!?」

カズがどこかの高校のキャプテンをつとめていることは、前々から知っていたが白川とは初耳だ。

「あれ？　言ってなかったっけ？」

カズはとぼけたような声で言った。いや、もしかしたら本気でいい忘れてたのかもしれない。

「残念ながら一度も聞いてないぞ」

「あ～、スマンスマン！　別に隠すつもりはなかったんだ。それに……」

「それに？」

今度は優が不思議そうな顔でカズの次の言葉を待っているようだ。

「聞かれなかったから」

……うん。

なるほど、カズらしい答えだったな。

そんなことを考えていた俺に、カズが話しかけてきた。

「まぁ、今は試合中だ。今度詳しく話してやるから今は試合に集中しようぜ」

「別に話さなくてもいいけどな」

「ははは」

俺のいい放った言葉を聞いたカズは微笑した。

試合が再会される。

またいつものようにカズがボールをドリブルし、辺りを見渡す。

「（純也にはあの巨大な大蔵がマークしていてインサイドは少しきついかな？　中のディフェンスを薄くするとしたら……）」

カズは何かを思い付いたようにマッチアップしているディフェンス、石塚を見る。

右にいったんフェイントを入れ、左から抜き去ろうとする。

「ちっ！」

石塚はそれをよんでいたらしく、左に移動する。

カズは流れに逆らって、自分の後ろにボールをまわして、右からディフェンスを振り切った。

「なにっ！？」

抜かれた石塚は急いでカバーに行こうとする。

カズがゴール付近に近付き、レイアップシュートの体勢に入ったときだった。

「ノー！　行かせませんヨー！」

純也をディフェンスしていた大蔵がカバーに来ていた。

ブロックのタイミングはバッチリ。大蔵はカズから放たれるボールを待っていた。

しかしカズは、空中で体をひねり、大蔵とリングに背を向けるような格好になる。

そのまま自分からは見えないリングに向かってシュートした。

いや、シュートにしては高すぎるかもしれない。

リングの淵にも当たらずにボールがリングをスルーしていた。

――タタタッ！

しかし、その外れたボールの行方を的確に追っている者がいた。

純也である。

純也はあらかじめボールが入らないことを予想して、皆よりイチ早いタイミングで飛んでいたのだ。

空中でボールをキャッチする。

そしてそのままリングに叩き込んだ。

――ダァァンッ！

リングがミシッという音をたて、何度か縦に揺れたあとぶら下がっていた純也がリングから降りる。

『ウォォォッ！』

『いいぞぉ！』

見事にアリウープが決まったら。このプレーはあらかじめ、計画されていた訳ではない。
途中でカズがパスすると判断した純也が、それに早く気付き行動に起こしたのだ。
カズ、純也、優の三人は小さなころからのストリート慣れにより、こうしたアドリブの利くプレーが身についていったのであった。

「カズ、ナイスパス！」

「ああ、純也こそな」

二人のハイタッチが交される。

「ちっ！　やられたぜ」

それを悔しそうな表情で見ている石塚がいた。そんな石塚に後輩のハンターこと杉山が言った。

「まぁ、今のはしかだねべさ。気をとりなおしていぐべよ」

「まぁな」

城清チームのガード、石塚がドリブルを始める。
それにカズがついていく。カズのデフェンスは相手にとっても嫌なようで、適度にプレッシャーをかけながら、また、抜かれないような間合いを保ちながら石塚を徹底マークしていた。
「ちっ、ストリート出身者はディフェンスがお粗末なことが多いんだが、さすがは森村といったところか…。だが！」

石塚が左右に上体を振り、無理矢理きりこもうとする。
「俺のスピードについてこれるかな？」
キキッ！
並外れた加速により、カズを振り切った。
そして純也のブロックをかわしてシュートをきめる。
『わぁぁぁ！』
会場がどよめく。
「お、おい……大丈夫か？」
心配した優が声をかける。
「ああ……すまない。もう大丈夫だ」
「そうだぞ優！カズにいらねぇ心配すんな」
純也は相変わらず気にしてないようで、さあ気をとりなおして次いこうぜ、と言ってオフェンスにまわった。
その後も激しい攻防が続く。
ダァァン！
『おお！今度は大蔵が決めたぞ！』
ハデさはないが、純也の上から大蔵がダンクを決める。

「フォウ！」

理解のし難い奇声をあげ、石塚とハイタッチした。

「ノってきたな。そうなったお前を止めるのは難しい」

石塚がうすら笑いをうかべ、大蔵にいったのだが、全く耳に入らないほど、テンションがあがっていた。

前半の残りもあとわずかというところで、城清が一本差でリードしていた。

ｓｋｙ　ｂｏｍｂの攻撃がはじまる。

カズにボールがまわるが、まわりも徹底的にマークされており、油断はできない。

「さすがは基本ができているな……」

（目には目を……）

カズはポストにあがった純也にパスをだした。

大蔵がしつこくマークする。

「ココはワタシがイルカギリ、トオシマセンヨ～」

「ったく……。さっきからうるせぇ野郎だぜ」

純也純也がそうつぶやき相手をかわそうとする。

「隙ナドアリマセーン」

大蔵は大きい体を横一杯にのばした。

「へぇ、たしかに隙がねぇや」

そういって純也は笑みを浮かべた。

「一般人ならな！！」

地面を強く蹴り、純也が宙を舞う。そして、大蔵の上から思いきりダンクをかました。

ドォォン！

激しい音がなり響く。

「『上』ががらあきなんだよ！このウグイス野郎！」

『わぁぁ！！』

『いいぞぉ！』

次々と繰り出される技に観客のテンションは最高潮に達していた。

「くっそぅ…」

石塚がオフェンスにまわる。どうやら前半はリードで終わりたいようだ。

再びカズとのマッチアップになった。

「また抜いてやるぜ！」

石塚は何度かフェイントをいれたあと、怒涛のドライブを見せる。

――よっしゃあ！

すぐさまカズの手が石塚のボールをカットした。

「なにぃ！？」

ビィィ！

そして、前半終了のブザーがなり響いた。

「イエー！さすがカズ！」

純也たちはベンチにもどりながら、嬉しそうにハイタッチした。

それを悔しそうに石塚と大蔵が見ている。杉山は相変わらずボーっとしているようだ。

石塚は自信のあるドライブをかわされ、大蔵にいたっては、自分よりもかなり背の低い人に、自分の上からダンクを叩き込まれたのだ。

「ゆるさねぇ…」

「百倍ニシテカエシテヤリマショー」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ベンチに座りながら純也がカズに言った。

「お前よく止めたなぁ」

「たしかになぁ」

優も感心していた。あの場面でのあのディフェンスは今後にも影響すると思ったのだろう。

カズは少し間を置いてから語り始めた。

「見つけたんだよ。ヤツ（石塚）のクセってヤツをさ」

その言葉を聞いた純也と優の2人はすぐにカズの方を振り向く。

「なんだって!?　それは確かなのか?」

優の言葉にカズは笑みを浮かべながら答えた。

「あぁ。まさか、とはおもったんだが、間違いないだろう」

カズは名門白川のキャプテンにして、ポイントガードである。相手のクセを見抜いたり、試合全体の流れを見たりするのは日常的に行っていたことだ。

――さすがはカズ。敵にまわしたくねぇ野郎だぜ。

純也はきっとそう思っていただろう。

「それで、笑うなよ?　そのクセってのはな……」

カズが2人にむかって、小さな声で話始めた。

Ｎｏ．６２　信じるように

カズが石塚の『クセ』について語り始める。

「ヤツのクセは舌にある」

『したぁ～？』

２人とも訳のわからなそうな反応だった。きっとコイツは何を言ってるのだろうか、と言わんばかりである。

「ああ、そうだ。この舌だな」

笑いながら舌をだす。

「石塚はまさに、移動する方向に舌が動いてるんだよ」

「えぇ！？」

当然のごとく、仰天する２人。

「いや、これが人の動きってのは意外と舌と連動してたりしてな。あのジョーダンも実践してたらしい」

さらに続ける。

「舌を移動する方向に動かすと、体もついていきやすいとされる。石塚は意識してか、してないのか、舌を移動させすぎてるあまりに、頬がふくらむんだ」

こう、プクっとな。と言いながらカズは口内から頬を舌でつつく。

「し、しかし……よく見つけたなぁ」

苦笑しながら優はそう言った。２人が驚くのも無理はないだろう。

「一度、じっくり見すぎてアッサリ抜かれてしまったがな」

冗談まじりにカズはそう言って笑った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『後半戦を開始しますので、両者コートに集まってください』

「っしゃあ！いくか」

『おう』

純也の掛け声に２人が続く。

そして、試合がはじまった。純也たちの攻撃である。

ボールが何回かまわった後、優がスリーポイントを決める。

そしてすぐさま城清の攻撃。石塚が気合を入れてカズに突進するも、あっさりとカットされてしまった。

その後も石塚はカズばかりでなく、今までの猛攻が嘘のように残りの２人までにも止められはじめる。

「くっ！　杉山！」

「うい」

石塚から杉山にボールがまわり、シュートが放たれる。
本当に狙ってるのかも分からないようなシュートがリングに吸い込まれた。
城清はオフェンスの軸を変更してきたようだ。アッサリと潰れないところが、さすがは名門といったところである。

「くっ、やはり石塚を止めただけでは倒せるチームじゃないな……」

カズが純也にそう呟いた。それに純也がかえす。

「もはや作戦もクソもねぇな。点の取り合い、『戦争』だ！もはや俺らの土俵だぜ！」

その後はまさに点の取り合いだった。
純也、カズが決め、城清は杉山、大蔵が決める。スコアも瞬く間に加算されていく。

後半も残り3分をきっていた。
純也は周りを見渡してから中に切り込む。そのままパスする方向を見ずにカズにボールをまわした。

スパッ！

カズはそれをあっさり決めた。
城清の攻撃。大蔵が中に入りボールをもらう。そしてそのままシュートにいこうとしたのだが――。

バァン！

鈍い音と共に純也にブロックされてしまった。

そのままｓｋｙ　ｂｏｍｂの攻撃になり、カズがアッサリ決めてしまった。

あっというまに城清ボールになる。大蔵が中に切り込むが、純也の気合いの入ったディフェンスにより、止められる。そして、

「隙ありぃ！」

純也がボールをカットしたのだが、ボールはそのまま転がってしまった。

「とらせるか！」

石塚が飛び込み、ボールを死守する。そして杉山にボールがまわる。

またまたボールが放たれた。余りにも『デタラメ』で『セイカク』なシュートは綺麗に決まった。

しかしまだ1点差で純也たちがリードしていた。純也が相手の勢いを沈めるべく、ダンクを狙った。

バシィィ！

「オーット！ソウ何回モ決めさせマセンヨー」

大蔵に叩きおとされた。ルーズボールを石塚がせいする。

「うおりぁ！」

石塚がカズにディフェンスされながらも気合いの一本を決めた。

試合に城清の逆転である。

『ワァァァ！』

まったくよめない試合展開。観客はどちらを応援するわけでもなく、ただこの試合に酔いしれていた。

残り１５秒をきる

どうしても決めたいｓｋｙ　ｂｏｍｂ――。

意地でも決めさせない城清――。

このワンプレーで試合が決まることは観客はもちろん、選手も確信していた。

カズが辺りを見渡しながら、ドリブルをする。石塚は下手にカットは狙わない。ただ『止めさえすればいい』からだ。しかも、相手は森村一樹。一見隙だらけに見えるドリブル自体が『フェイント』だったりする。

石塚の判断は正しかった。カズは相手が来ないと思うと、ドリブルで左方による。

純也が走りながらトップでボールをもらう。大蔵は純也がスリーポイント、またはミドルシュートがないと思い、ゴール下をかためた。

案の定、純也はゴールに向かってつっこんだ。

「とりゃぁ！」

「あ、バカッ！」

あまりにも想定外の動きにカズはおもわず声をあげていた。

さらに純也の予想外な動きは続いた。

ゴールに向かって加速したと思ったら、今度はフリースローライン付近でジャンプしたのだ。

「まさかっ！」

優は2つの意味で驚いた。1つは純也があの『エア・ウォーク（大空時間が長く、宙で歩いてるように）みえるダンクシュート』をくりだしたこと。

そしてもう1つは……。

「純也！　お前それ一度も成功したことないだろ！」

――え？

観客たちはその言葉に唖然した。

試合時間は残り5秒をきっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺はフリースローラインで地面を蹴り、ジャンプする。

とにかく時間がなかった。

俺の体がリングに向かってとんでいく。

『純也！　お前それ一度も成功したことないだろ！』

優の声が聞こえてきた。

――あぁ、まさにその通りだよ……。

――気付いてくれ……。

俺の体は勢いをなくしていく。

――たのむぜ、気付いてくれよ！

純也の体はさらにリングに向かって行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リング付近にて、純也は失速していた。

やはり、いくらなんでも無理がありすぎたのだろうか。

そして次の瞬間純也はノールックで見向きもしない方向に向かっ

てボールを放りなげた。

まるで『誰かがいてくれる』と信じるように。

そして、なんと驚いたことにそこにはカズがいたのであった。

そして0度のポジションでパスを受け取ったカズからボールが放たれる。

……パスッ！

リングの縁に当たることなくボールは吸い込まれていた。

ビィィィ！

ほぼ同時にブザーが試合の終りを告げる。

一瞬の静寂の後大歓声が巻きおこった。

『ウワァァァ！』

『スッゲェ！』

耳が痛くなるような大歓声。

石塚が膝をガクリとさせ、地面を叩いた。

「くそう！　チクショウ！なんで気付けなかったんだ！」

そんな石塚に純也がいった。

「俺だってあそこに誰かがいるなんてわからなかったぜ」

「まさか……今のは作戦でもなかったと言うのか！？」

純也は笑いながら答えた。

「あぁ。そのまさかだぜ。カズならいるかなと思ってさ。何年一緒にバスケやってきたと思ってんだよ」

「……」

石塚は信じられないような顔をしていたが、やがては落ち着き、

「次に会うのは関東大会、またはインターハイだな。覚悟しとけよ！」

「なんで俺が公式バスケやってること知ってんだ！？」

「城清の情報網をなめんじゃねぇよ」

笑いながらそういい放つと、城清メンバーは控室へと消えていった。

『よくやったぞ！』

『城清！　城清！　城清！』

その後もしばらくは、エールがなり響くことはなかった。

―――――

ｓｋｙ　ｂｏｍｂ控室。純也がカズに言った。

「しかし、カズ。よく気付いたなぁ」

カズの凄さに改めて苦笑いをしながら。

「お前ならパスもあるかなと。それに、優の言葉を聞いて確信したんだ」

優はすこし考えた後答えた。

「ん？ああ、あの『一度も成功しなかっただろ』ってやつね」

「ああ。あの点差、あの時間で純也はつっこんだ。あまりにもバクチすぎる。しかも一度も成功しなかったときいたら、『もしかしたらな』と思ったんでな。パスする方向は『勘』だ」

『……』

白川のレベルの高さを知った２人だった。

No．63　圧勝？

『おつかれさまです！』

　ｓｋｙ　ｂｏｍｂの３人は突然、声のした方をむいた。
そこにはＬａｉｎｂｏｗの服部卓郎がいた。

「みなさん決勝進出ですね！おめでとうございます！」

　純也が答えた。

「おう！　次勝てば優勝だぜ。お前らは？」

「それが…結構大型のチームと当たっちゃって…負けちゃいましたよ」

「ほ～、お前らが負けるとはなぁ。ま、どっちにしろ俺らと当たっても同じ事だけどな」

その言葉を聞いて卓郎は笑う。このような冗談を言い合えるほど知らないうちに仲が良くなっていたみたいだ。

「いつか、純也さんたちと戦えるように頑張ります。必ず！」

　純也は手をさしだした。その手に卓郎の手が重ねられる。そして純也は一言、

「そのときは手加減無しだぜ」

「はい！もちろんです！」
卓郎は嬉しそうに返事をしたあと、控室に戻っていった。
「さて、俺たちは観客席にでもいくかな～」
カズがそう呟き、純也と優もそれに続いた。
――――――
――――
――
客席につくなり、突然優が言った。確かに、準決勝にしては極端に人が少なかった。
客の歓声は少なく、大音量のＢＧＭだけがなり響いていた。
ふと近くにいた若者たちの会話が純也たち3人の耳に入る。
「あれ？　人がやけに少ないな」
『あ～あ、次の相手はあいつらか～。対戦相手がかわいそうだぜ』
『あぁ、きっとまた誰か潰されるにちがいねぇや』
その会話を聞いたカズは慌ててその会話に入る。
「ちょっといいか？いまのは一体どういう意味なんだ？」

いきなり話しかけられ相手は最初は戸惑っていたようだが、話しかけられた相手がＳｋｙ　ｂｏｍｂのカズだと知るとすぐに態度を変え、話始めた。

『アンタはカズさんじゃねぇか！　毎試合応援してるぜ！』

「あぁ、ありがとう。しかし、さっきの言葉はいったい？」

『ん～、それがなぁ……』

若者たちはお互いに顔を会わせてから語り始めた。

『次のＬａｉｎｂｏｗの対戦相手のケルベロスってチームなんだが……そのチームにはどうも変な噂が流れていてね』

純也、優、カズの３人は唾を飲み込み、集中して話を聴く。

『今までの試合のうち二勝は相手の突然の出場辞退や、試合中の反則行為による相手の負傷で勝ってるんだ。どうもこれがわざとやってるという噂もあってねぇ』

「なんだと！？　そんな反則したんなら出場禁止ならないのか？」

純也が血相を変えながら問掛ける。

『それがさ……審判も試合中の事故だと思ったらしい。本当にきわどかったんだ。裏で不良グループとも結びついてる噂もあるし、嫌なチームだぜ。観客も気付きはじめてこの様さ』

そういって観客席を指差した。先程も言ったように席は明らかにガラガラである。

「ありがとう。いきなりすまなかったな……」

『あぁ、あんたらも気を付けろよ』

カズは最後に若者たちにそう言うと今度は純也、優2人にむかって話始める。

「まずいな……なにもなければいいのだが……」

嫌な予感がした。

No．64　タイムリミット!?

「おいっ！　カズ！」

俺は急いで治療室にたどり着いた。

カズと優は先についていたらしい。

そこには先ほどの試合で足を捻った選手がいた。卓郎のチームに勝った大型のチームの選手だろう。

「なぁ、カズ。気付いてたか？」

「まぁな」

カズは話の内容を言わなくても分かっているようだ。

「ケルベロスの野郎共、わざとやりやがった」

「それに、ヤツら結構やるぜ？　動きが一瞬で変わったしな」

ケルベロス、と呼ばれたチームは相手が負傷したのを良いことに容赦ない攻めでダブルスコア以上の点差で勝利していた。

カズの言葉に俺たち2人はうなずいた。いつでも勝てるってか？ますます腹立たしい野郎共だぜ。

やがて優が思い出したように言った。

「あと15分で試合が始まるな。決勝は1人1人、入場があるからな。早めにいって入り口の前で待機してないといけない。2人はもう準備は済んだのか？」

「ああ、バッチリさ」

カズはそう答えたのだったが、俺はあることに気づいた。

「急いでてトイレ行ってねぇや。悪いけど先に体育館入り口に行っててくれ！」

おいおい、といった表情を見せた2人だったが、納得したらしく、早く来るように俺に呼び掛けてから体育館の入り口に向かった。

「やべぇ、トイレトイレっと」

近くのトイレで用を済ませた俺は、手を洗い廊下へと出た。ふぅ、やっぱトイレ行っとかないとねぇ。

バッシュを手に取り、体育館への道を歩いていた。試合前ということもあり、廊下には誰もいないようだった。

「絶対にぶっ殺してやるからな……。まってやがれ」

廊下の中盤に差し掛かった時だった。

『Ｓｋｙｂｏｍｂの石川だな？』

背後からいきなり名前を呼ばれた。俺は、面倒くさそうにふりかえる。

「あぁ？　いきなり誰だ……」

ゴォン！

「!?」

突然の頭への激痛で一瞬何がおきたのかわからない俺だったが、体勢をたてなおしやがて目の前にいるヤツを確認する。全身黒ずくめで顔にはマスクをしていた。その手には木の角材が握られている。

『ほう、今ので気を失ってないとはな……。たいしたものだな。だが、優勝するにはお前は邪魔なんでな。ここで消えてもらう』

くっ……、ケルベロスの回し者か？　いくら俺だからっていきなり後ろから角材がよ……。

「ったりめぇだ！　角材持ったぐれぇで俺に勝てるとでも思ったか馬鹿野郎が！」

『ふっ、いつまでその口がきけるかな？』

「なに……？」

周りを確認したが、いつのまにか十数人に囲まれていた。

「くそ……、きたねぇぞ……。」

『なんと言われようと結構。よし、殺れ』

一人の合図と共に全員がかかってきた。俺は、意識がはっきりしているのを確認してから叫んだ。

「公式バスケ始めてなぁ、抑えてたが久々に暴れてやるよ！！」

一瞬叫び声で怯んだ敵だったが、再び俺に向かってきた。

『なに凄んでんだよ！状況がわからねぇのか！？』

そう言って不利下ろしてきた角材を俺は、横にかわして、相手のボディーめがけて殴る。

ドカッ！

相手は2メートルほど吹っ飛び、その場で悶絶した。

「オラァオラァ！　次はどいつだぁ！？　一気にきてもかまわねぇぜ！」

『調子に乗るんじゃねぇ！』

今度は一度に3人かかってきた。

俺はかまわず1人めがけて突進して行き、足を狙って蹴る。動きの止まったところに顔面に右ストレートをぶちこんだ。

『喧嘩になったらまずは足を狙え』

沖さんに教えられたことが無意識にでるところから、いまだに体に焼き付いている様だった。

相手は一発で気を失った。もう1人が背後に来ているのを察知し、回し蹴りをお見舞いする。吹っ飛んだ後、その場で動かなくなった。

ドカッ！

「!?」

いてぇ……、まともにもらっちまった。

俺が1人を相手している隙に角材が頭にヒットした。頭に手をあて、確認してみると、出血していた。

『へ……へへ。どうだ?これで参ったか?』

視界がやがて血に染まっていく。目が痛い。

俺は、手で目に入った血をぬぐいながら角材で攻撃してきたやつにむかって歩み寄る。

『お、おい……。これ以上はやべぇだろ!　無理すんなよ……うっ!』

しゃべってる途中におもいきりぶん殴った。

「……次は……、どいつだよ……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、体育館では入場が終わり、それぞれのメンバーがアップを終え、試合開始のコールを待つだけとなっていた。

『まだかね?』

「きっと腹でも壊したんですよ。もうちょっとで来ると思いますので……」

純也が来ないことを何度も聞いてくる審判に、優とカズの2人は必死に対応していた。

「純也、なにやってんだよぉ……」

優がたまらず情けない声をあげていた。

『おいおい、メンバーがこねぇんじゃあ話にならねぇなぁ。俺たちの勝ちじゃね？』

『たしかにな、ハッハッハ』

ケルベロスのメンバーが審判に聞こえるような声で会話をしていた。

「くっ……」

優の拳が強く握られる。そんな優とは反対に審判からある言葉を告げられた。

『大分待ったし、あと3分で来なかったら不戦勝にするよ、いいね？』

「そんなっ……」

驚きを隠せない2人だった。

No．65　危機一髪

審判が時計を見てから、優、カズの2人にむけて言った。

「んー、あと1分だな。それまでに来なかったら不戦勝とさせてもらうよ」

「アイツいったい何してんだよ・・・」

優がそう思うのも無理は無い。いくらなんでもトイレにしては長すぎる。会場もいつまでたっても始まらない試合に苛立ちを感じ始めていた。

審判が2人の前に立ち、何かをしゃべろうとしたまさにそのときだった。

「ちょっと待った・・・」

突然した声に、会場中が静まり返った。

「純也！」
「ジュン！」

カズと優の2人は会場に現れた純也に向かって走り出す。

「ばかやろう、いったい何をしてたんだよ?」

優が苦笑いをしながら純也にそう問いかけた。

「あぁ、ちょっとあってな。それよりすまない、もう試合はおわっちまったのか？」

「いや、お前を待ってたんだよ」

「そうか・・・間に合ってよかった・・・」

『くそ・・・なぜきやがった！』

ケルベロスのメンバーが何かを言っているようだったが、３人の耳には入らなかった。

「くっ・・・」

突然純也がよろめいた。優があわてて体を支えた。そして純也から流れでた額のを見て驚愕する。

「おっ・・・おい、いったいどうしたんだ！？」

「隠せ・・・」

「え？」

「審判から俺が見えないように隠してくれ」

優はその言葉に戸惑いながらも、さりげなく純也が審判から見えないように隠した。

「くそ・・・もう血は止まったと思ったんだがな・・・」

純也はそうつぶやくと、ボロボロになっていた上着を脱ぎ、細長く破いた後頭に巻いた。
おそらく血を止める意味のほかに、誰にも気づかれないようにする意味もあっただろう。

「大丈夫かよ?」

カズもとても心配そうにしていたが純也は特に動揺した様子も無くアッサリこたえる。
「詳しいことは後で話す。俺は大丈夫だから今は試合だ」

『きみたち、まだかね?』

審判も苛立っているようだった。3人はコートの中に入り審判に謝った後、先攻後攻を決めるジャンケンをする。

お互いのメンバーが向き合い、会場中も次第に盛り上がってくる。
ケルベロスの1人のメンバーが純也にしか聞こえない声で語りかけた。

『おい、どうやってあいつらから逃れたかはしらねぇが、もう限界なんだろ?あきらめろよ』

純也は話しかけられた方向も見ずに、周りには聞こえないような声で返す。

「死にたくなかったら今、俺に話しかけるなよ・・・」

その言葉をきいたケルベロスのメンバーは笑いながら答えた。

『死にそうなのはどっちだよ、ははは、頭の中までおかしくなっちまったってか？こりゃあいいや』

やがて純也たちの後攻がきまり、コートの運命を決める一戦が始まった。

ケルベロスが素早くボールをまわす。その動きはかなりの統一感がある。今までの苦戦が嘘のようにコートを自由に走り回る。

「やはり隠していやがったか」

カズはディフェンスをしながらつぶやいていた。ボールが純也の相手にまわる。

いとも簡単に抜き去られ、最初のゴールはケルベロスが決めたのであった。

「本当に大丈夫なのかよ？」

さすがに簡単に抜かれたのが心配におもったカズが純也に声をかけるが、純也は大丈夫を言ってきかなかった。

Ｓｋｙｂｏｍｂの攻撃。

カズが辺りを見回しながら、ドリブルをする。純也はまともに使えない状態ではＰＧとしてはかなりの厳しい状況を強いられていた。

「よこせ！」

突然純也がポストに入り叫ぶ。

カズは迷いも無く純也にボールを渡す。純也はドリブルせずにガッシリと構えて、相手を睨んだ。そして、一瞬の隙をみて抜き去った。

『くそっ』

ゴール手前でよろめいた純也であったが。気合でねじ込んだのであった。

ワァァァ！

会場からの声援がケルベロスがゴールを決めたときより大きかった。ケルベロスがおかしいことは会場中が気づいていた。

ケルベロスのオフェンス。わざとらしく純也に向かっていき軽く接触した。軽い接触でも純也はふらついてしまう。

『へッ、チョロいもんだ』

ケルベロスは純也のところから次々と得点を重ねていった。気合で何本か止めるが次第にその点差が広がっていく。優とカズがドライブ、スリーポイントなどで粘るも1人がなかなか機能しないようでは限界が見え始めていた。

そして、前半終了のブザーが会場に鳴り響いた。13対22という大差でケルベロスがリードしていた。

お互いの選手たちはベンチに戻る。Ｓｋｙｂｏｍｂのメンバーもベンチにもどり腰をおろしていた。

純也が肩で息をし、下を向いたまま動かなかった。

「なぁ純也？　ケルベロスのやつらか？」

カズは何か気づいたようだった。洞察能力は非常に優れている選手なのである。

「……ああ」

純也は顔を下げたままそれに答える。優がその先を聞こうとした時だった。

『なんだ負けてるじゃねぇかよ』

突然ベンチのすぐ横から聞き覚えのある声が聞こえた。３人とも声のした方を見る。

そこには優のバンドのボーカルの京介と久留美がいた。

「京介！　無事だったのか！？」

純也が驚きながら叫んでいた。

『まぁな、さすがにちょっと手強かったけどな』

そう言って京介は笑った。

No．66　赤髪の狂犬

決勝の試合開始数分前の出来事。

純也の顔は血で真っ赤に染まっていた。突然あらわれたケルベロスの仲間と思われる黒ずくめの集団の角材を頭にまともにもらってしまったからである。

「……次は……どいつだよ……」

純也が一度に3人でかかってきた相手を殴り倒したあと、そう呟いた。

『この死に損いがぁ！』

今度はケルベロスの黒い集団が一度にかかっていった。

「くそ……次から次へと……」

向かってくる角材を手で受け止め、反撃する。

その間にも他から攻撃を受けてしまう。その様な状態が続き、純也へのダメージは確実に蓄積されていた。

――これはさすがにやべぇ……。

純也がそう思ったであろう、そのときであった。

『珍しく苦戦か？』

そんな言葉をはきながら京介があらわれた。

「京……介……？」

純也は意識の薄い中、その方向を見る。

「試合に来なくて何やってるかと思えば」

京介はそう言って笑った。ケルベロスの1人があることに気付く。

「お前は……赤髪の狂犬……」

京介は不良の間ではかなり名のしれた人物であった。その武勇伝はケルベロスのメンバーまで伝わっていたのだろう。

「おい純也、この雑魚は俺がかたづけるからお前はさっさと試合に行け。不戦勝になるぞ」

「大丈夫なのか？」

京介の言葉が勘に触ったのかケルベロスの1人が京介に襲いかかった。

『馬鹿かてめぇは？こっちは何人いると思ってんだ？！』

物凄い勢いで向かっていく。

京介は特に移動はせず、ポケットに手を突っ込んだまま、相手の顔面に蹴りを入れた。相手は吹っ飛び、そのままピクリとも動かなくなってしまった。

そして純也に向かって一言――。

「ま、気にするな」

そう言って笑いながらサングラスをポケットにしまった。純也も大丈夫と確信したらしく、一言言ってこの場から立ち去った。

「すまない！」

そんな純也を追うものは1人もいなかった。あの怪我では試合は無理と判断したのだろう。

「ったくよぉ……。正々堂々戦えってんだ。一人で向かっていった純也をみなかったのかよ。泣きいれりゃあ半殺しで勘弁してやるぜ？」

『くっ……ふざけるな！』

ケルベロスのメンバーは再び全員で向かっていく。

「ちっ、めんどくせぇ」

京介はポケットから手を取り出し、構えた。

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、大丈夫なのかよ？」
俺は京介に、そう問いかけた。京介は特に威張った様子などなく、ごく自然に答えた。
「まぁな。雑魚はいくら集まっても雑魚だからなぁ」
――さすが京介……。今戦ったら負けてしまうかもしれないな。
そんな会話をしていた時だった。久留美が血相を変え、純也の肩を掴んだ。
「京介君から全部聞いたわ！　そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？　こんな試合意味無いわ！今すぐ審判に言いましょ！？」
肩におかれた手に力がこめられる。
「いや、アイツらだけはバスケで倒さなければ気がすまねぇ……。コートのためにな。」
――そして服部たちのためにも。
「だ、だってインチキじゃない！　フェアじゃないわ！」
そんな久留美に京介は後ろから声をかける。
「春風。かける言葉が違うぜ。男にはな、こんなときかける言葉は1つだ。」
何を言ってるのかわからない、といった表情をしている久留美に京介はさらに続けて言った。

「頑張れ。ぶっとばしてこい」

「ああ、まかせろ……」

俺は即返事をした。そして久留美の方に顔を向けて言った。

「ということだ。悪いが久留美。いってくるわ」

信じられない、と言うような顔をした久留美だったが、やがて何かを納得したらしく、諦めたようだった。

「がんばりなさい。でも、絶対に無理しちゃだめよ？」

「ああ」

さすがは久留美だ。ながいこと一緒にいるだけのことはある。

『後半戦を始めますので両チーム、コート中央に集まって下さい』

「行くぜ。俺たちの本気を見せてやろう」

『おう』

カズの言葉に俺たちは続いた。久留美、京介は観客席へと戻っていき、俺たちはコートに出る。

『へへへ』

両チームのメンバーが向き合う。ケルベロスのメンバーたちの顔は、勝ち誇ったような笑みが浮かべられていた。

やがて、俺たちの先攻により試合がはじまった――。

Ｎｏ．６７　薄れる意識で

俺は薄い意識の中、後半戦のコートに立った。カズがボールをキープしつつ、ディフェンスに軽くフェイクをかける。そして一瞬の隙をついて抜き去った。

『何ぃ！？』

相手はディフェンスカバーに入るも、あっさりとカズにかわされてしまい、得点を決められたのであった。

「ナイス！」

「この調子でいくぞ！」

カズは優との会話を交わした後、ディフェンスにまわる。ケルベロスのオフェンスとなった。

ケルベロスは自慢のフットワークで、コートを走り回る。やがて、俺がマークしているヤツにボールがまわった。

――ちっ、やっぱり俺狙いかよ…

俺は抜かすまいと、ピッタリマークした。相手は俺にしか聞こえないような声で話しかけてきた。

『わかってねぇなぁ。お前が足をひっぱってんだよ』

そして、ドリブルで突っ込んでくる。ついていこうと体に力をこめたときだった。また体がふらつき言うことをきかなくなってしま

ったのだ。右から抜かれてしまう。

『諦めろよ』

抜き去り際に敵はそうつぶやいていた。そして、ゴール下へといきレイアップの体勢となった。くそっ、体がきかねぇ…。

そのとき、とあることが脳裏に浮かぶ。コートのこと、そして…。

「くそがぁっ！」

『！？』

俺は気合で相手の後ろからボールをブロックした。すかさずボールを手に取、外にいるカズへとまわす。ボールは優にわたり、綺麗なフォームからくりだされるシュートにより、綺麗にリングにおさまったのであった。

『ワァァッ！』

『いけいけー！』

前半戦で静まり返っていた歓声が再び沸き始めた。

「いつまでも調子にのってんじゃねぇよ」

『くっ…』

俺はブロックした相手に向かってそう言った後再びディフェンス

にまわった。試合残りは8分。点差はおもったほど広がってない。いまなら逆転のチャンスはある。

ディフェンスがかみ合い始めた俺たちは、確実にあいてにプレッシャーを与えていた。その証拠に、前半戦であれだけ得点してきたケルベロスの得点がすっかり止まっていたのだ。

そして…。

「いけぇ純也！」

「まかせろ！」

カズから俺にボールが渡る。そして俺は地面をおもいっきり蹴って宙に向かって飛ぶ。ケルベロスのディフェンスの頭の上からダンクを決めた。これで23対22と俺たちの逆転だ。

『これこれ、俺たちはこれを見に来たんだ！』

『もっといけぇ！』

観客の熱気も最高まで達していた。俺は歓声に答え、手をあげる。するとさらに歓声が沸いた。

「残り3分ある。絶対に気を抜くな！」

カズは俺たちによびかけた。あったりめぇだ。こんなんで浮かれるわけがねぇ。このままぶっちぎりで優勝してやる！

ケルベロスのオフェンス。ドライブと思いきや、はなたれた3Pが見事にリングにおさまり、再びケルベロスの逆転となる。しかし

歓声が沸くことはなかった。
すぐに俺たちは反撃にまわった。カズからボールが優へとわたり、そしてフェイクを入れた後に俺にまわる。

「くっ……またかよ……」
肝心なときに限って意識が薄くなる。俺は気合いれシュートに持ち込んだ。

バシィッ！

しかし、相手にとっては非常に隙だらけだったようで、ボールをカットされてしまった。

「純也！　ディフェンスだ！　切り替えろ！」

「ああ！」

カズに返事を返し、すぐにディフェンスに戻るのだが、再び頭を強く揺らしたような錯覚に陥る。

『おっと、おせぇなぁ！』

ケルベロスは俺のマークを軽々とかわし、再びゴールを決めた。
２３対２７と、ケルベロスが点差を広げる。残り時間は少ない。
体が思うようにきかない。体の力が抜け、その場にしゃがみこむ。

「くっ…、冗談じゃねぇ」

「純也！」

「ジュン！」

優とカズが慌てて駆け寄ってきた。審判も不思議に思ったのか、近付いて来て、俺たちに言った。

「ん？　どうしたんだい？」

「あー……その…」

優がひたすら理由を考えているようだった。ケルベロスの奴らが続いて挑発してくる。

『急に地面に座り込んでどうしたんだろうなぁ』

『僕ちゃん疲れちゃったんじゃねぇの？』

『ギャハハ』

――くそ…体さえ自由に聞けばあんな奴ら……。

そんなとき、観客席から京介の声が聞こえた。

『純也！昔俺と戦ったときのお前はこんなもんじゃなかったぜ？』

『ジュン……』

久留美も京介の隣で心配そうに見ている。

「ちっ、誰に言ってやがる……」

――心配そうなツラしやがって…。俺を誰だと思ってんだ……。

「俺は……」

開場中が静まりかえっていた。審判が怪しく思い、また話しかけてくる。

『きみ、大丈夫か――』

「ああ！　俺はなんともねぇ！　さっさと始めようぜ！」

――石川純也様だクソ野郎が！

力を振り絞り、体を起こした。

俺たちのオフェンスだ。

「カズ！ボールをくれ！」

Ｎｏ．６７　薄れる意識で（後書き）

十数話にわたるストバス編もこれで終りです。ここまで読んで下さったかた、本当に感謝です。物語的には序盤を過ぎたところでしょうか？やっと公式戦に入ります。

Ｎｏ．６８　関東大会…？

カズは俺の言葉に、迷いなく素早いパスを出す。パスをもらった衝撃が頭に響いたが、もう気にしてられない。

俺は、バック・ターンで相手をかわし、レイアップをきめる。２５対２７と、点差を２点に縮めた。

ケルベロスのオフェンスとなる。カズにカットされそうになりながらも、ボールが優の相手に渡った。フェイクをいれた後のミドルシュートにより、２５対２９と、またまた４点差となった。

時間は１分を切っていた。ピック＆ロールで俺はカズからボールをもらい、中に切り込む。

そのままゴール下に行き、シュートの体勢にはいる。ケルベロスは慌ててブロックの体勢になった。

俺は、体を反転させ、ボールを優にパスした。

『なに！？』

敵は驚いていた。慌てて優のカバーにはいるが、怖いほど完成されたフォームから放たれたシュートは、リングの淵にあたることなく、綺麗に吸い込まれたのであった。ったく、土壇場で恐ろしい奴だぜ。

『ワァァァ！』

『キャー』

優が決めて歓声が大きくなるが、優はいたって普通の様子だった。俺たちは喜んでいる暇はない。

1点差、残り45秒。なんとしてでも、このディフェンスは止めなければならない。

ケルベロスが得意のスピードで掻き回してくる。やがて、俺がマッチアップしているヤツにボールが渡った。

その場でシュートモーションに入ったため俺は距離をつめた。

ササッ！

その隙に横から抜かれてしまった。判断力がやはり落ちている。

――しまった！

相手がレイアップのモーションに入った。これが決まれば確実に試合がきまる。

バシィッ！

『なにっ！？』

なんとカズがカバーに入っていたのであった。ルーズボールをそのまま優が拾う。

「すまねぇ」

「きにするな」

カズに一言礼を言った後、すぐにオフェンスにまわる。
おそらく、これが最後の攻撃となるだろう。優はひとまずカズにボールを渡し、セットの体型にもどした。

カズのドリブルに一瞬の隙があると見たのか、ケルベロスはスティールを狙った。だが、その動きはカズの周辺視野に入っていた。
よいＰＧというのは、周辺視野が広いのである。
カズは素早く手をかわり、一気に抜き去った。

『しまった！』

カズがリングに向かってドリブルで突っ込んだ。慌ててケルベロスの他のメンバーがカバーに入る。

『！？』

突然、カズは俺にパスをだした。これを決めれば勝てる！
俺は、手薄になったゴール下へと突っ込んだ。

「うぉぉぉっ！」

『くっ！』

――絶対に決める！絶対に……あれ……？

――どうしたんだろう。

……。

――――――

――――

――

「……ん」

頭がボーっとする。

――ここはどこなんだ？

俺は、閉ざされていた重い瞼をゆっくりとあけた。光が一瞬眩しくて閉じてしまったが、やがて慣れたようで、普通に開くことができた。

「ん……」

どうやら俺はベットに寝ているようだ。

――へぇ……なぁーんだ、ベットか。ははは

――……？

「えぇぇぇぇっ！？」

試合は！？ストバスはどうなった！？

大声をだし、俺は勢いよく上半身を起こした。

「痛て……」

まだ頭が痛い。そしてベットの横を見た。キョトンとして、つっ立っている久留美と目があった。

「あ、ジュン！ようやく目覚めたのね」

「ここはどこだ！？そしてストバスの大会は！？」

「え……？」

あなた本当に覚えてないの？と、言った後、さらに久留美は続けて言った。

「ストバスの大会はＳｋｙＢｏｍｂの優勝よ。ジュンが最後に逆転ゴール決めたじゃない！　そしてここは病院。ジュンったら、３日

間も寝てたんだからね！本当に何も覚えてないの！？」

「！？！？」

一度に何個も知られざる真実をつきつけられ、一瞬頭が混乱する、

「あー……え～と……。まず一個ずつな？」

「何よ？」

「コートは大丈夫なのか？」

その言葉を聞いたとたん、久留美は表情を急に明るくして答えた。

「それがねー、あなたたちのおかげでコートはなくならなかったわよ！さらに、あの大会をみて、ストバスしに来る人が増えたわ」

――無事だったか……。よかった……本当によかったぜ。

「じゃあさ、３日間寝てたってことは……関東大会は？」

今度は久留美は表情を曇らせた。

「はぁ……関東大会わぁ！」

『そのことは俺の口から伝えるよ』

急に部屋の入り口から声がした。俺たちはその方向を見る。ゾロゾロと数人が部屋の中に入ってきた。

「げ、木ノ下薫！」

そこには朱雀高校バスケ部のキャプテン、木ノ下薫の姿があった。
さらに後ろには、亮、博司、我利勉、永瀬の姿があった。

「げ、とはなんだ、げ、とは」

やれやれ、と言った様子薫は頭を掻いた。

「まず最初に、無事でなによりだ。医師の方からも後2、3日ほど安静にしていれば大丈夫と言われた」

「ほぉ」

やけに詳しいな。やがて薫は表情を変えて言った。

「まったく……、お前と言うヤツは……。理由は春風から聞いたが、何かあったら俺に一言言ってから行くようにな。あとはお前は朱雀高校のバスケ部の一員なんだ。そこら辺をもうちょっと考えてくれ。部員みんなに迷惑がかかるときもあるんだ」

部員みんなにか。確かに俺のせいで出場停止になったら洒落にならねぇな。

俺は、頭を下げて謝った。

「すまねぇ、今度からは気をつける！」

その言葉をきいた薫は表情を緩め、俺の肩に手をのせて言った。

「まぁ、本当に無事で何よりだ」

薫の言葉に我利勉が続く。

「ほんとだよ～。君は大事なメンバーだからね。」

さらに博司と亮。

「純也くんよかった～！一緒に練習を教えてくれる人がいないと僕がこまるよぉ」

「さすが生命力はゴキブリ並だなぁ、ははは」

「くそ亮！ぶっ殺す！」

病院の部屋中に笑い声が響き渡った。

そして俺は、忘れかけてた話題を切り出した。

「で、関東大会は？」

……。

あれ？急にまた部屋が暗い雰囲気に……。

「大会は――」

木ノ下薫から、関東大会での出来事が語られ始めた。

Ｎｏ．６９　嵐の後に

ここはとある病院の一室。

朱雀高校のメンバー数名は純也のベットを囲むようにして立ち、木ノ下薫の話を深刻な様子で聞いていた。主将の木ノ下薫が語り始める。

「ストリートバスケの試合の次の日、例の関東大会予選が行われた。関東の代表を決める大会だな」

選手たちはうなずいていた。純也は何のことか正直わからなかったのだが、とりあえずうなずいていた。

「俺たち、朱雀高校は１、２回戦と順調に勝ち進んでいた。そして３回戦、県でＮｏ、２といわれている黒沢高校と当たったんだ。実力的には今年のメンバーは白川と互角ともいわれている。そこで俺たちは…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『お願いします！』

両チームがコートの上で向き合う。青のユニフォーム「朱雀高校」対、深緑のユニフォーム「黒沢高校」の試合である。

１、２回戦と快進撃を続け、勢いに乗る朱雀ということもあって、バスケ関係者、観客席共にすごい人だかりができていた。

ジャンプボールが始まる。朱雀は永瀬勇希がセンターサークルへと立つ。対する黒沢高校は１９８センチの大型センター細川啓志（ほそかわけいし）である。

高校生らしくない髭を生やし、体格も共に高校生離れしていた。佐川商業の松岡敬吾（まつおかけいご）、白川の御庭慶彦（おにわよしひこ）と並ぶ、県内三大センターの１人である。

ジャンプボールは当然のように細川が手にして、黒沢ボールのスタートとなった。

「もどれっ！」

木ノ下薫が突然叫ぶ。黒沢の１８４センチ名ＰＧの進藤鉄也（しんどうてつや）は目にも留まらぬような鋭いパスでスリーポイントライン付近に立っていたＳＧ中野翼（なかのつばさ）にパスをだす。そしてすぐさまシュートが放たれた。

パスッ！

綺麗にリングに吸い込まれる。なんと黒沢高校は開始3秒で3点をとっていたのだった。一瞬何がおこったのかわからなかった観客だったが、次第に歓声があがった。

木ノ下薫がサイドから長谷川亮にボールをだす。そこに黒沢がビッチリとマークした。

「フルコートマンツーだと!?スタミナ消費がこわくねぇのか」

亮がそうつぶやき驚く。亮をマークしているのはＰＧ進藤鉄也である。身長差は２０センチ以上のミスマッチがおきていた。他のポ

ジションもそれぞれミスマッチがおきていた。
黒沢高校は県内1位の平均身長を誇るのである。

亮は得意のドリブルで進藤をかわそうとする。しかしなかなか振り切ることはできない。

「くっ」

「亮！こっちだ！」

薫が亮からパスを受け、ハーフまでボールを運ぶ。そしてポストに入った永瀬にパスを出した。そこに細川啓志がピッタリマークする。ここでも15センチほどの身長さがあった。永瀬はスピードで細川をかわしてシュートにいった。

バシィッ！

そこにブロックが放たれる。黒沢高校のキャプテン、PF安倍雅人であった。190センチと恵まれた体を持ちながら、リバウン、ブロック、何でもこなす選手である。そしてボールが進藤に渡され速攻で中野翼が決めたのであった。
再び朱雀ボールとなる。亮は今度こそは進藤をかわしてハーフまで運んだ。持ち前のキラーパスにより薫へとボールがまわる。そして、中へときりこみ身長差も関係なくゴールを決めた。

こうして、わずかながら反撃を試みる朱雀高校であったのだが、PFの吉原さんが、全国でも指折りの選手、安倍をおさえられるはずもなく、大量に得点されていった。
ふと、ドリブルしている亮に向かって進藤が周りに聞こえない声で言った。

「中学で名をはせたお前でもしょせんは中学生レベルということだな」

「なっ！？」

一瞬の隙をついて進藤がスティールを決め、速攻で得点した。

「俺が中学生レベルだと…。ふざけやがって！」

亮はドルブルで進藤を交わそうとするが、進藤のマークがきつくなかなか前に進めない。

「お前は黒沢にきてもレギュラーにはなれない。これでわかっただろ？」

「ふざけるなっ！」

そして、このような流れが続き前半戦は黒沢が圧倒的さを見せ付けて終えたのであった。

黒沢高校のベンチにもどった進藤鉄也は監督の隣にすわった。監督が鉄也に話しかける。

「なかなかいいペースだ。絶対にあのＰＧをのせるなよ。しかし、長谷川亮…、動きに無駄が多いな。ウチにさえくればもっと強くなっていたんだが」

その言葉に鉄也は一瞬表情を険しくし、監督に言った。

「父さん、あの選手は父さんが思ってるほどの選手じゃなかったよ。僕が証明したでしょ?黒沢は僕がいるから大丈夫さ」

「それはそうだが…。まぁ、いい後半戦は…」

黒沢の監督の話が続いた。今の話からもわかるように、進藤鉄也は黒沢高校の監督、進藤力也の息子である。彼はＰＧとして実業団で何年か活躍した後、母校である黒沢高校の監督になった名監督だ。

鉄也はなぜ父親が朱雀にいった亮をあんなにも押しているのかがわからなかった。それと同時に嫉妬にも近い感情を抱いていたのであった。

そして多量に点差をつけられての後半戦がはじまった。

「え……?」

「……」

後半戦がはじまり、朱雀高校のメンバーたちの表情が急に曇る。コートにでてきた相手選手の背番号がスターティングメンバーと全員違うからだ。そう、朱雀はレギュラーをみんな代えられて、控え選手を出されるという屈辱を味わうこととなった。

「いくぞ……」

木ノ下薫が言った。試合が再開し、薫のペースもあがっていく。

他の選手もなんとか薫に続こうと頑張るが、前半でつけられた差が響き、やがては試合終了のブザーが鳴り響いていた。

１０３対７２という大差をつけられ、あげくの果てには屈辱的な目に会い、朱雀は３回戦で姿を消したのであった。これには大会関係者、観客共に驚きを隠せなかった。朱雀といえば薫が入学してのここ最近は県ベスト１６の常連だったのだが、ここまで差があるとは思わなかったのであろう。

そして関東大会予選は白川第一高校が１位、黒沢高校が２位、城清高校が３位通過で幕を閉じたのであった。

No．70　強豪強し

「というわけだ」
薫の話が終わった後、病室内はさらに暗い雰囲気となっていた。
純也が何かに気づいたように言った。
「予選ってことは本戦はいつやるんだよ？」
「一週間後に開かれる。白川第一高校はおよそ一週間後に秋田県のバスケ名門校、稲川工業（いなかわこうぎょう）が主催する稲川カップというものに出るから関東大会の本戦には出ないことになった。関東で強豪の神奈川の湘南西校なども、そっちの大会にでるために今大会には出ないらしい。」
稲川カップとは、薫が言ったとおり、秋田の名門校が毎年主催している大会である。高校バスケではこの大会に呼ばれることが、強豪としての証とされている部分もあった。なので、他の大会とかぶってしまったとしても、稲川カップを優先させることがあったりする。
純也は何に納得するように頷いた。
「まあ、そんなことだから俺たちは部活に戻るよ」
薫の言葉に他のメンバーも続く。

「純也君、はやくかえってきてね」

と、博司。

「退院したてで足ひっぱんじゃねぇぞ～」

と、亮。

「うるせぇ、めてぇこそもっと練習しやがれ！」

「わかってるさ…」

純也の言葉に亮は一瞬素になったが、すぐに表情を戻し、じゃあなといって病室からでていった。純也と久留美が2人だけとなり、急に病室が静まり返った。純也が口を開く。

「お前は部活にでなくていいのか？」

「純麗先輩がジュンの看病してなさいって言ってたから」

「もう大丈夫なんだがなぁ…」

その言葉に久留美はあきれた様子で言った。

「3日間も寝てたくせに何いってるのよ」

そのときだった。

再び病室に人が訪れた。

『お〜っす』

『おじゃましまーす』

赤い髪がトレードマークの京介と、綺麗な顔が印象的な優であった。京介が言った。

「見舞いにきてやったぜ。ほらよ」

そういって京介は純也に紙袋を渡した。純也はその中身を確かめる。

「ってお前、酒かよ！」

「ははは、気にするな気にするな。その金は大会の賞金で買ったものだしな。俺たちはうちあげやったんだが、お前これなかったろ？」

「まぁそりゃあそうだけどな。サンキュ」

「おうよ」

「あ…大会の賞金なんだけどさ…。」

優が突然口を開いた。

「コートのリングがボロくなってたから新しくするのにつかったよ。あと壁も取り替えたしね。それでさ……お前の取り分なくなっちゃったんだよね、ははは」

優はそういって笑った。すごく申し訳なさそうな様子だった。純也

はそのほほえましい様子に笑みを浮かべながら言う。

「まぁ、コートに来る人が増えたんだろ？その使い方が1番正しいんじゃねぇかな。賭けバスケで稼げばいいわけだし……」

最後の言葉は自分にしか聞こえないようにボソっとつぶやいた。

「カズは稲川カップとかいうやつでチーム全体が調整に入ってるから見舞いにこれなくてな。代わりに伝言をもらっといたよ。『次はインターハイ予選で会おうな』だってさ」

優はそうつぶやいた。純也はうれしそうに拳を自分の目の前で揺らしながら言った」

「おもしれぇ……退院したらそっこうぶっ潰してやるぜ」

久留美がすぐさまつっこむ。

「ムリね」

「なんだと!?　俺が本気をだせばなぁ！カズなんて相手じゃねぇ！」

「いや、それはさすがにムリがあるだろ」

優もこの悪ノリに続いた。それを聞いて京介も爆笑している。そして笑いがおさまった京介は純也に言った。

「でもまぁ、ストバスの大会の最後のお前はかっこよかったぜ。ゴールを決めた後急に倒れちまったしな。いったいどうしたんだ？」

純也は不思議そうな様子で答えた。
「いやー、それがさ、ゴールを決めたことなんてまったく覚えてないんだよなぁ。決める直前までは記憶あるんだが」
「ほう、じゃあ無意識にってことか、やってくれるねぇ」
京介はそういって純也を肘でつっついた。さらに続ける。
「お前がただものじゃないってことは中学んときに十分に知らされたけどな」
「今回は入院してるのは俺だけだけどな」
そう言って純也は苦笑いする。この2人かかつては敵同士だった。なぜ現在はこんなに仲が良いのかというと、入院がきっかけなのである。なぜ入院がきっかけなのかというと……。

Ｎｏ．７１　赤髪の男

純也と優がまだ中学2年生のときの話である。

その歳ですでにストバスのコートの顔となりつつあった2人は、いつものようにコート内で賭けバスケをしながら休日を楽しんでいた。もう普通に高校生相手でも勝てるようになっていた2人に、とある人物が訪れる。

『ちょっと俺にもやらしてくんねーかな?』

「ん?」

純也と優は見知らぬ人物を不信な人物に首をかしげた。髪の色は真っ赤で眼つきはとても鋭い。そして取り巻きの人物も同じにおいがしてた。純也はそんな奴等に免疫があり、あったく恐れていない様子で返事をかえす。

「ああ、いいけどここのルールは知ってんのか?」

『まぁな』

その男はにやけながら答える。他のやつらもニヤニヤしながら見ていた。そんな中で純也と赤髪の男の試合が始まった。

純也がマークをかわしシュートに行こうとしたときであった。

ガスッ!

赤髪の男の蹴りが純也の背中にヒットする。行き場をなくした体はそのまま地面に倒れた。

「……ってぇ」

『なんでもアリなんだろ?ここのストリートってのは』

そういって不気味な笑みをうかべた。純也はゆっくりと起き上がる。

「あぁ、まちがっちゃいねぇよ。続けようぜ」

純也は赤髪の男にボールを渡した。そしてディフェンスにまわる。

京介はボールを持ったまま動かない。そればかりか純也を見て再び不気味な笑みをうかべている。

「どうした?　はやくこいよ」

『フフ…そうか』

そういってボールを純也に向かって蹴り飛ばす。その隙に赤髪の男は純也に接近し再び蹴りをぶち込んだ。

『!?』

しかし、純也はその行動が読めていたようで、相手の足を持つようにして止めたのだった。

「ワンパターンが何回も通じるかよエリマキトカゲ野郎!」

そういって足を持ったままブン投げた。相手は地面に激しく衝突する。それを見た京介の取り巻きの数人が暴れだした。

『野郎！』

一般の人たちにもお構い無しに喧嘩をふっかける。まさにコートは大乱闘の場と化した。しばらくもめた後、純也が口を開く。

「このままじゃあラチがあかねぇ。サシで勝負しようぜ」

『あぁ、かまわねぇよ』

赤髪の男はコートの中央へと歩み寄る。純也もコート中央へと歩み寄り、お互いが向き合った。そして壮絶な喧嘩が始まったのであった。

純也が殴りかかる。それをいとも簡単にかわしボディにカウンターを入れた。

純也の体が九の字に曲がる。そこに今度は顔面めがけて蹴りを入れた。

さっきとは逆方向に体が飛んで行き、純也は地面に倒れたままピクリとも動かなくなった。

『なんだ…つまらねぇ。帰るぞ』

赤髪の男は他の連中にそう言うと純也に背を向けコートから出て行こうとする。そのときだった。赤髪の男の肩に手が置かれる。

「おい」

赤髪の男はその方向を見て驚いた。先ほど完璧に蹴りが決まって倒れたはずの純也がおきあがっていたからだ。純也は無防備になっている赤髪の男の頬を殴り返す。

今度は赤髪の男が軽く吹っ飛びながら地面に倒れた。さらに純也は歩み寄る。そして胸座をつかみ相手を睨んだ。そして再び顔面めがけて拳を振り下ろした。その瞬間、赤髪の男は額を拳にあわせてぶつける。人の骨、というものは予想以上に固く、純也の拳にもダメージを負わせたのだった。

『バーカ』

怯んだ純也に向かって下から殴りかかる。直撃をくらい今度こそは倒れたと誰もが思っていた。しかし純也は起き上がる。

『しつけぇ野郎だ』

赤髪の男はトドメをさしに再び歩み寄る。赤髪の男はストレートを繰り出すが、純也と相打ちになってしまい、ぐらつく。

『くそが…』

「お前のパンチなんてこれっぽっちも効きやしねぇんだよ」

純也はそういって、手でアルファベットのCの文字をつくる。余裕

をみせている純也であったが、足は小刻みに震え、誰が見ても大きなダメージを負っているようにみえた。それをみた赤髪の男は不気味ににやけて起き上がる。

『そうかい……じゃあ何度もぶん殴るだけだ！』

そう言って純也に向かって走り出す。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

「ハァハァ」

『くそ……この俺が』

すでに戦闘のペースが落ち、2時間以上が経過しようとしていた。赤髪の男は前傾姿勢で苦しそうな顔をしていた。赤髪の男が口元の血を腕でふき取り再び純也に襲い掛かる。純也もそれにあわせて力をふりしぼり起き上がった。

『こんなザコに負けるかよ！』

「うがぁぁっ！」

勢いあまって突進してきた赤髪の男に、純也の会心の一撃の頭つきがヒットした。あまりの威力に赤髪の男は宙を舞った。

『くそ……こんなやつに……俺が……』

手で杖をつくり、赤髪の男は起き上がる。その目はまだ生きており、見るものをすべて振るいあがらせるように鋭い。純也はもう相手が起きられないと思っていただけに、驚きを隠せなかった。もうすでの体中のガゾリンを使い果し、立っているのもやっとな状況だったからだ。

「まだきやがるのか……」

しかし状況は純也の意思とは反していた。赤髪の男は1、2歩あるいたかと思うとその場に倒れてしまったのだ。

『京介！』

周りの取り巻きたちがあわてて赤髪の男にかけよる。そして純也に向けて一言、おぼえてろよ、といってからその赤髪の男を肩で抱え立ち去ったのであった。

そして、純也も意識がなくなりその場に倒れこんだのだった。それをみたストバスのみんなはあわてて駆け寄った。

『純也！』

『ジュン！』

ーーーーーー

ーーーー

ーー

純也が目覚めるとそこは病院の一室だった。コートでの出来事を思い出し、今の状況を呑み込むことができた。ふと突然隣のベットでねていた人物が目を覚ましたようだった。

『ん……んん？』

どうやら寝起きで状況がまったくつかめていないようだった。そして純也とその男の顔が合う。

『……』

「……」

『てめーは！！？』

「お前は！？」

ほぼ同時に声をあげた。２人が驚くのも無理はない。昨日大喧嘩し

た相手が隣のベットにいたからだ。

「なんでお前がここに!?」

『それはこっちのセリフだ!』

再び大喧嘩がはじまった。お互い体が動かせないので病室は壮絶な口喧嘩の場となっていた。そこにタイミング悪く優が現れる。その背中にはこれからスタジオで使うであろうエレキギターが入ったケースが背負われていた。

「おいおいおい、いったいどうしたんだ?」

目の前で繰り広げられている低レベルな口喧嘩に苦笑いをしながら優は言った。純也がそれに勢い欲答えた。

「どうもこうもねぇよ!昨日のあの赤髪やろうが隣に入院してたんだぜ!?」

その言葉をきいた優は特にとどろいた様子も無く、サラリと答える。

「うん。そうみたいだね。一晩共にした仲だし、仲良くしようじゃないか、ははは」

つまらないギャグに病室の空気が凍った。

「はは……はは…は」

優の笑い声だけが鳴り響く。それを2人は悲しい人を見るような目で見ていた。そして赤髪の男は呆れたように言った。

『ケッ、てめぇらを見てると何もかもがバカバカしくなってくるぜ』

そう言って、純也たちとは反対側の窓側をみる。そんな日々が何日か続いた。

そしてある日、また病室を訪れていた優に、赤髪の男からとつぜん優に話しかける。

『なぁ、お前いつもギターもってるが、バンドでもやってんのか？』

突然話しかけられた優はすこし驚きながらも答える。

「いや、バンドはやってないよ。メンバーが集まらないし、趣味が合う人もいないしね…」

『へぇ、どんな音楽が好きなんだ？』

「えーと」

優はカバンの中にある何かを探し始める。そしてあるものを見つけたらしく、カバンの中から取り出した。とある洋楽のバンドのＣＤである。それをみた赤髪の男は優に興味を示したらしかった。

『それなら俺も聞いてるぜ』

「ほんとうか！？」

『あぁ、他に聞いてるやつは……』

2人は音楽性がかなり似ていたらしく、尽きることのない会話にしばらくは病室内はにぎわっていた。そして、純也が退院して何日かした後だった。ストバスのコートに再び赤髪の男が現れる。コートにいた人々は再びやってきた男に罵声を浴びせる。そこに純也もやってきた。コートのみんなは再びものすごい喧嘩になると思っていた。だがしかし、予想していた事態とは異なっていた。

「よう京介、お前も退院したのか！」

『まぁな』

そういって赤髪の男は照れくさそうに頭を掻いた。そう、この2人性格には優を含めた3人は優の音楽の話がきっかけに普通に友達になっていたのだった。そしてコートに赤髪の男が来るようになってから何日も過ぎた。そのころになるともうコート内ではだれも赤髪の男のことを悪く言うものは1人もおらず、むしろ普通に試合などをするようになっていた。赤髪の男も昔ほど、意味も無く暴れたりすることもなくなっていた。

そして、優の音楽の道へのキッカケとなる言葉が赤髪の男から告げられる。

『なぁ、一緒にバンドやらねぇか？』

Ｎｏ．７２　博司の武器は？

黒沢との敗戦を告げられた日から二日後、無事に退院した俺は、軽い調整もかねてさっそく部活に参加していた。やることと言えば機械見たいに基礎を繰り返すだけなのだが……。病み上がりだからしょうがねぇか。

『よし、今の形式でもう一度やってみよう』

『オス！』

木ノ下薫の言葉に部員たちも続く。Ａチーム対Ｂチームの実戦形式での練習みたいだ。

そんなやつらを見ていたとき、ふと不審な人物に気がついた。

『ブツブツ……』

あの２ｍ近いウドの大木の大山博司である。薫たちの練習を見ながら、なにやらぶつくさ言っている。

「オメー何してんだよ」

『わっ！？』

急に俺に話しかけられてビックリしたようで、大きな体が上下に揺れた。

「純也くん!?　ビックリしたぁ……」

「お前の方こそ、ぶつくさ怪しいことこの上ないぞ」

博司はとても困った様子で俺に話す。

「昨日からキャプテンに次のフォーメーション練習に加われって言われて……。頑張って覚えてたところなんだ」

へぇ、博司もそれなりに期待されてんのかな?　まぁ、黒沢とのミスマッチはシャレにならないからな。

「ま、頑張ってこいよ。無理だと思うがな。ケケケ」

「ひどいよぉ!」

そう言って博司は悲しい顔をした。その時、木ノ下薫の声が体育館中に響き渡った。

『よし博司!　加われ!　永瀬はフォワードでな』

「ああ」

「ふぁい!」

永瀬の声と、博司の情けない声が薫に返って行く。すかさず俺も返事をした。

「おう！　まかせろ！」

さりげなくコートに出てみる。

「……」

「いやぁ、俺もやっといた方がいいかなと……はは」

皆からの視線が冷たい。負けるかよっ！

そんな俺に、亮がすぐさま飛びげりをかました。

ドカッ！

「ぐおっ！？」

「勝手に出てくんじゃねぇサル助！　病人は黙って休んでろ！」

「コノヤロ！」

ドカッ！

ガス！

ボコッ！

低レベルな争いが始まった。いつものことなので、特に誰も止めには来ない。やがて、薫がしゃべりはじめる。

「黙ってストバスの大会に出た罰だ。今は頭を冷やせ！」

亮が口元を押さえながら笑う。

「プププ」

「この犬野郎め！」

「まぁまぁまぁまぁ」

そんな俺を我利勉が苦笑いをしながら、コート外へと連れていく。

「純也はいつか必ず出番があるから、今はおさえようね？」

「あぁ、わかってるよ」

我利勉に返事を返した後、俺は、コートの外にでて練習を再会した。ときどきフォーメーション練習を見てみるが、博司はやはりついて行けないようだった。

「博司！そこはもっと早くもどれ！」

「ふぁい！」

情けない声が響いていた。俺は、それを楽しく観戦している。

「博司はディフェンスは見れる位にはなったけど、オフェンスがまったくダメだなぁ」

シュート力と言うものは短時間で身につくものではないと、俺自身が実感していた。名シューターと言われる奴らは何千、何万と機

械のようにシュート繰り返すことにより、シュート力を身に付けている。カズや優のシュート力はまさに努力の賜物だ。

いっそのこと、ディフェンス一本に絞ってもいんじゃねぇかなぁ。三年間でシュート力を身に付けるなら分かるが、インターハイ予選で使うとなると正直厳しいと思う。

そんなことを考えているうちに、フォーメーション練習は終わった様だった。

博司はヘロヘロになりながら俺の近くに帰って来た。

「ぜぇぜぇ……」

「まったく……、相変わらずウドの大木だなぁ」

博司はムッとした表情をして言う。

「もう、しょうがないじゃない！　動きが難しくて…」

正直そんなに難しいとは思えないようものだったが、何もかもが初めての博司だから、そう感じのだろう。

「お前の武器はまさに身長だろ？　それは才能だ。努力で得られるものじゃないしな。その才能を活かせる方法を考えたらいいんじゃねぇの？」

「身長を活かせる方法……」

博司は少しなやんだ後に言った。

「なにかなぁ……。わからないや」

「知らね」

「えぇぇ！？」

博司よ、悩むがよい。そういうものは悩んで身につくものなのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『よし、じゃあクールダウンしたら今日の練習は終りだ。』

薫の指示により、練習後の後始末が行われる。

それぞれ掃除などの役割を終え、薫の所に部員たちが集合した。皆が集まったのを確認して、薫が語り始める。

「今日もお疲れ様。いきなりだが、明後日の連休に秋田県の稲川工業が主催する稲川カップを観戦しにいくことになった」

『おおぉ～』

一瞬にして部員達がざわつき始めた。稲川カップといえば全国の強豪が集う、有名な大会である。

その大会を主催しているのが、過去に全国大会での優勝経験４３回という名門稲川工業だ。

選手たちが驚くのも無理はないだろう。

「全国のプレーは、とても参考になるところが多いと思う。何かを掴むきっかけになればいいな。では、今日はこれで解散だ。」

部員達はみんな立ち上がる。そして薫が頭を下げながら叫んだ。

『おつかれさまでした！』

『あっしたぁっっ！』

周りも薫に続き、今日の練習は終わった。

No.73 彗星

稲川観戦を明日に控えた俺は、練習後に体を動かすためにいつものストバスのコートに立ち寄っていた。商店街から裏の路地に入る。コートに近づくにつれて、遅い時間にもかかわらず数人ものはしゃぐ声がきこえてくる。

コートの中に入った俺は辺りを見渡して驚いた。

「しかし、かわったなぁー。リングまで新しくなってやがる」

そう言って笑みを浮かべた俺に、知り合いが何人か話しかけてきた。

『よお純也、久しぶりだな』

『大会は大変だったみたいだな』

『調子はどうだ?』

俺はそれぞれに対応したあと、マイボールを取り出して2、3度地面に叩き付けてドリブルをする。手に1番なじんでいると実感できる。ストバス大会のおかげか、知らない人も大分増えているようで、コート内での試合が頻繁に行われていた。俺は端っこでドリブルの小技をしながらコートが空くのを待っていた。

ふと、コート内での3on3を見ていたとき、見覚えのある人物がいることに気がついた。小柄ながら、背の高いヤツにまけないくらいのジャンプ力、素早い動き。俺は慌ててその人物の名前を呼んだ。

「よお!服部じゃねぇか。なんでこんなとこにいるんだ?」

試合に集中し、いままで俺の存在に気づいていなかった服部が、ようやくこちらに気づいたようで表情を変えながら向かってくる。

「純也さん！　お久しぶりです！」

「よう！っていっても一週間くらいだけどな」

お互いが笑う。そして俺は疑問に思ってたことを聞いた。

「なんでここにいるんだ？」

服部はその質問に、考える様子など無く、すぐに答えた。

「ここが純也さんたちのコートと聞いて、隣町からやってきましたよ。人が多くてびっくりしました」

「まぁ、人が急激に増えたのはここ最近だからなぁ。よし、せっかくだし軽く試合でもしてくか？」

「本当ですか？！　お願いします」

その言葉を聞いた外野たちは、ざわめきはじめる。彗星のごとく現れた謎のバスケ少年対石川純也の試合が気になるのだろう。予想通り、周りは使用していたコートから外れて観客にまわっていた。俺はマイボールを取り出して服部に渡す。

「先に１１点取ったほうが勝ちな。先攻はお前からでいいぜ」

「はい！いきます！」

服部がドリブルをしてこちらの様子をうかがっている。俺は適度にプレッシャーをかける。1度フェインををかけたあと服部は右から俺をぬいた。そしてシュートモーションに入る。

バシィ！

「！？」

俺のブロックが決まった。すぐさまボールを拾い、アウトサイドにドリブルしながら出る。

「はは、決まったと思ったんですけどねぇ」

服部はそういって苦笑いをした。

「そう簡単に決めさせるかよ」

俺は笑いながらそう言った後、オフェンスを再開した。ピッタリと服部がマークしてくる。俺は左右に振った後、今度は左から抜き去った。シュートのタイミングで1度フェイクをかける。そして、服部のタイミングがずれたのを確認してから俺はダンクシュートをかました。

ダァァン！

『ワァァ！』

明らかに以前より声援が大きい。夜中でこのくらいの人数だから、昼間はどれだけいるのだろうか？まぁ。最後に残るのは本当にバス

ケが好きなヤツらだけだろうけどな。

俺はリングから着地した後、服部にボールを渡した。

「ほれ、お前の番だぞ」

「はい！」

服部もダンクの影響か、燃えているようだった。普段の目の輝きを数倍輝かせる。

――――――

――――

――

「ハァハァ、やっぱお前やるじゃねぇか」

「い…いえ、純也さんにはかないませんでしたよ」

試合が終わり、その場に座り込んだ服部が笑いながら言った。周りからは歓声が響き渡っていた。試合の結果は４－１２で俺の勝ちだったのだが、見ているほうもそれなりに楽しめた試合だったらしい。コイツも中学生とは思えない動きをしやがる。服部は何かを思い出したように語り始めた。

「よし、決めました。俺、来年朱雀高校に行きます！」

その言葉を聞いた俺の頭にある疑問が浮かんだ。

「ん？　何で俺が公式やってること知ってんだ？」

「いろいろ調べたんですよ…フフフ」

不気味な笑みを浮かべながらそう言った。気のせいか、目がキラーンと光ったようにも見える。俺はその雰囲気に圧倒されながらも返事をした。

「あ…ああ、そうか。楽しみにまってるぜ。変なヤツだらけだけど気にすんなよな」

特に亮とか博司とか。少しの笑いの後、服部は思い出したように、家の門限を思い出して家に帰っていった。また一緒にバスケしましょうね、という言葉を残して。

しかし、いつの間にかこんな時間になってたんだなぁ。他のやつらがこんな遅くまでここにいるなんて沖さんがいたあたりの頃を思い出す。そういえば沖さんはなにしてんだろうなぁ。

よし、俺もそろそろ帰るかね。明日は何気に早いし、遅刻したら薫あたりがメンドクセェ。

コートのやつらに軽く挨拶をした後、俺はその場をあとにした。

No．74　稲川カップ

ムニャムニャ……

あぁー、まるで綿の上にいるようだ。フワフワしている。ムニャムニャ……。

『チャララ♪チャララ♪』

携帯のメロディーが聞こえる。しかし出る気はない。

「うるせぇ……ブッコロスゾ…ムニャムニャ」

『チャララ♪チャララ♪』

相変わらずメロディーは鳴り響いていた。いったいどれくらい鳴ったであろうか？しばらくの時間鳴った後にようやく静まり返った。俺の眠りを邪魔するヤツはたとえ携帯でも容赦は……ムニャムニャ。

……

ドタドタドタ！！

ものすごい階段を駆け上がる音が聞こえ、俺の部屋の前でその足音はとまった。そして、勢いよく扉が開かれた。

ドォォン！！

「？！」

俺はその音に一瞬、目が覚める。ドアの方を見ると久留美が荒い息で血相を変えて立っていた。俺はとりあえず挨拶をしてみる。

「よう久留美。おはよー」

「おはようじゃなぁぁぁいいっ！！」

寝起きの頭に久留美の声が響く。

「今何時だと思ってるの？！準備もまだしてないじゃない！」

時計を確認してみる。時計は6時を指していた。

「まだ6時じゃねぇか。ビックリさせんな」

そういって俺は再び布団をかぶった。布団サイコー。

「って、ねるなぁぁっ！』

今度はその布団を勢いよく久留美がひきあげる。今までぬくぬくしていた体に外界の冷たい空気が染み渡る。いったいここはどこなんだ？あのフワフワはいったい？！

『今日は朝6時30分に体育館集合でしょ！？わかってるの！？あと、30分しかないのよ！』

久留美のハイトーンボイスが頭に突き刺さる。そして俺はようやく今日の集合時間を思い出した。

「やべ！」

勢いよくベットから飛び出した。そして洗面所にむかいつつ久留美に言う。

「外で待っててくれ！5分で準備する！」

「はぁ……」

久留美はため息をついたあとに玄関へと向かったのであった。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

「わりしわりぃ、待たせたなっ！」

「待たせたなっ！じゃないわよ！とにかく走るわよ！」

玄関で待ち合わせをした俺たちは。学校に向かって走り始める。時計を見ると15分を過ぎていた。おもったより準備に時間がかかっていたらしい。時間の流れとは恐ろしいものである。

見覚えのある所をなんどか通り過ぎた後、ようやく朱雀高校の門が見えてきた。体育館は門の裏の方にある。学校の敷地内に入った俺たちは早速体育館に向かった。

この学校には普段生徒が出入りする正門と、体育館側に設置されている裏門がある。今日はその裏門にバスが停車しているというわけだ。息をきらしながら俺たちはみんなが待っている体育館の中へと入った。

「おねがし……しま…す」

「ちわーっす！」

挨拶をして体育館に入り、俺たち2人は挨拶をした。久留実はとても疲れた様子で俺を睨みながら言った。

「なんとか間に合ったようね……」

そんな俺たちに薫が話しかけてくる。すこし呆れ気味の様子だった。

「ギリギリセーフだったな。お前たちが最後だ。他の人たちはもうバスにのってるから、お前たちも早く乗れ。」

「うす」

「はい……」

薫はキャプテンという立場上、みんなの出席を確認していたようだ。全員確認し終えた薫は俺たちと一緒にバスにむかった。

裏門に止まっているバスは市から借りたもので、特に名前はない。朱雀高校が部活動専用のバスを持っているわけも無く、このバスがみんなにとっての『いつものバス』となっているようだった。薫がバスの先頭に立ちみんなに言った。

「移動に長時間かかるとおもうので、具合が悪くなったらはやめに言うようにな。運転手さん、今日もよろしくおねがいします」

薫は運転手に向かって頭を下げる。それに続いて部員たちも挨拶をした。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

長旅を終え、現地に到着したあたりにはもうしっかりと昼も過ぎていた。バスで弁当を食べた後に俺たちはバスからおりる。しかし、ほとんど寝ていたためにまったく記憶がないなぁ。

バスから出るなり、博司が弱音をはいていた。

「うぅー」

どうやらバス酔いしたらしい。まったく、図体だけでかいのに相変わらずヒヨワなやつだ。そんな俺たちに薫から指示がとぶ。

「会場は全国的に有名な大会ということもあり、非常に混み合う。

移動は速やかにするように。質問があるやついるか？」

特に質問はなかったので、すぐに体育館へと向かった。さすが全国的に有名な大会ということもあって、会場の外には大きなＴＶモニターが置かれ、記念グッズ販売などの露店が所々にならんでいる。秋田の名物なのであろうか、ピンクと黄色のアイス屋さん？もいくつかあった。

そんな疑問を持ちながらも体育館の中に入る。ストバスの大会みたく、大音量のＢＧＭはかかっていなかったが、それに勝るとも劣らずの大歓声が鳴り響いていた。会場にはいくつかのカメラが敷かれている。どうやネットで全国中継もしているらしかった。観客席は埋め尽くされており、俺たちは立って観戦することになった。こんな中、カズが試合するのかと思うと不思議でならなかった。

ふと、とある人物が訪れる。どうやら薫に用があるらしかった。

「ん？　おお！　薫じゃないか！久しぶり！」

薫は話しかけられた方向を見る。身長１９０は軽くこえているであろう。この大会に参加しているのか、ユニフォームを着ていた。その人物を見た薫は一瞬驚いた様子だったが、やがて返事を返した。

「誠か！　久しぶりだな。」

「驚いたよ。薫がこんなところにいるなんてさ」

そう言って笑った。薫も笑いながらそれに答えた。

「今日はチームでこの大会を観戦しに来ててだな。誠は選手だろ？もう出番はおわったのか？」

「いや、俺らの出番はこれからだよ。午前中はミニバスの試合や、色々な出し物があったからね。試合は今日の午後から明日の午後にかけてだよ。」

「なるほどな…試合に間に合ってよかったよ。」

「まぁ、ゆっくり見学していってくれ。じゃあ俺は戻るよ。また一緒にバスケやろうな」

「ああ、頑張れよ」

軽く挨拶を終え、誠と呼ばれた人物は階段を下りていった。

「いったい誰なんだあいつ?」

亮を見るととても感激した様子で誠とよばれた人物を目で追っていた。

「あの人の名前は福岡誠(ふくおかまこと)。中学時代に薫さんと全国制覇を達成したときのメンバーの1人だ。当時は副キャプテンだった。近くで見ることができてラッキーだったなぁー」

「へぇー」

俺はそんなに興味が無かったため、軽く返事をした。そういえば亮は中学時代の薫のチームのファンだったんだっけか。

「でもさ、ユニフォームに神奈川って書いてた気がするんだが」

その言葉に亮は思い出すようにして返答する。

「たしか、誠さんは神奈川の湘南西にスカウトされていったんじゃなかったかな。今回のこの大会に湘南西出るし。」

中学時代に共に戦っていたやつが、今ではバラバラになってるってことか。

そんなことを考えてるうちに場内アナウンスが始まった。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

『これより、男子第一試合、福岡国際高校対四日市高校の試合をはじめます』

観客がどよめいていた。これから始まる数々の試合に心を躍らせていた。観客数も次第に増え始め、会場を圧迫する。

ワァァァッッ！

＊＊＊＊＊＊＊

稲川工業をはじめ、白川第一、湘南西、四日市、福岡国際など計８つの強豪があつまるこの大会。事実上全国大会といっても過言ではないこの大会が今、純也たちの目の前で始まろうとしていた。

No.75 衝撃

稲川カップ初日。俺たちは次々と消化される試合を観客席から見ていた。第一試合は福岡国際が勝利し、第二試合、カズこと森村一樹率いる白川第一高校の試合が始まろうとしていた。対戦相手は越前高校というところらしい。

『これより、第二試合白川第一高校対越前高校の試合を始めたいと思います』

再び場内が大歓声で埋め尽くされる。やがて両チームの選手たちが入場してきた。黒に赤のラインのユニフォーム白川と、白のユニフォーム越前である。

その中に1人、見覚えのある人物がいた。

「まさか本当にいるとはねぇ」

俺はカズの姿を確認し、改めて白川のメンバーだったことを確認する。両チームとも他の俺たちが練習試合なんかで戦っているチームたちとは明らかに雰囲気がちがっていた。

ふいに薫が博司に声をかける。

「博司。白川の8番を見ておけ。きっと何かが見つかるはずだ。」

「8番ですか？は…はい！」

そういって博司は白川の8番を見る。どこかで見たような顔立ちをしていた。急に永瀬勇希の表情が曇ったのを俺は見逃さなかった。

そういやぁ似てるなぁ。

選手たちの入場が終え、やがて試合が始まった。朱雀の部員をつばを飲んでその試合を見ていた。

「いいかい？　純也君。絶対に勝ち進んだらインターハイ予選で当たるチームだからしっかりと見てて欲しい」

「ん？　我利勉じゃないか。」

そこにはメガネを怪しく光らせ、俺に話しかけてくる我利勉の姿があった。白川と越前のジャンプボールが始まる。白川はかなり大型のスキンヘット野郎がジャンプらしい。我利勉が語り始める。

「白川のあの大きい人が県内三大センターの１人の御庭慶彦（おにわよしひこ）だ。身長は２ｍを越えている。ゴール下のオフェンスの要だね。」

ジャンプボールは白川の御庭が制し、白川ボールとなった。ボールはカズに渡る。越前のもどりも早く、セットからのオフェンスとなった。

「あのＰＧは森村一樹（もりむらかずき）入学当時はＳＧとしてレギュラー入りをしていたんだけど、２年生のときにＰＧ転向したんだ。アシスト、スティール、３Ｐ、すべてにおいて高評価されている。選手だね」

知ってるっつーの。やつの強さなんて俺が１番身にしみてるぜ。

ポストに御庭が入る。ボールをカズから受け取り、ジリジリとゴールに近づいた。そしてシュートと思いきやアウトサイドにいた１３番の選手にボールをパスした。ゴーグルをして表情はつかめないが、かなり落ち着いた様子だった。

そして素早いモーションからロングシュートが放たれる。

パスッ！

白川はあっという間に3点先取したのである。我利勉がまた話しかけてきた。

「今のゴーグルの１３番をつけた子は、ＳＧの佐々木健之助（ささきけんのすけ）。まだ君と同じ1年生だ。中学時代全国選抜に選ばれているほどの腕だから気は抜けないよ。薫さんと似たようなスタイルだね。恐ろしいことにこの選手は双子でもう1人、ほぼ同じ力をもっている佐々木真之介（ささきしんのすけ）という弟が白川のベンチにいるんだよ。」

そういって我利勉は白川のベンチを指差した。ベンチにも同じようなゴーグルをした１４番をつけた選手がいる。兄弟で区別するためであろうか？１３番はゴーグルのバンドの部分が白く、１４番は黒い。不思議な雰囲気を出している兄弟だった。

「2人をそのときの調子で交互に代えてきたりもするから、スタミナ配分に容赦がない。アウトサイドのシュート力とカットインは非常に驚異的だよ」

「ケッ…同い年なんて関係無しにぶっつぶすだけだ」

越前のオフェンスが始まった。白川はハーフマンツーらしい。越前のＰＧがパスをまわす。ある程度して、フリーになった選手がシュートを放った。ボールはリングに嫌われ、1度リングにぶつかった後、外に出てしまう。そのボールの行方を追って何人かリバウンドに飛んだ。

肘一つ分腕が群れから伸び出たかと思うと、あっという間にボー

ルを懐に抱え込んだ選手がいた。

「高い！？」

俺は思わず声を上げてしまった。明らかに他の選手より手が抜き出ている。そこへすかさず我利勉の解説がはいった。

「今の８番の選手の名前は永瀬朋希（ながせともき）。身長は全国の中ではそんなに大きいほうじゃないんだけど、脅威のバネにより最高到達点３ｍ４０後半という脅威の記録をたたき出しているんだよ。天性のボディーバランスで、空中で状態がブレても立て直してリバウンドをとることができる。」

話しているうちに白川はあっという間に得点し、再びディフェンスとなっていた。越前の１人が中に切り込んでシュートしたかと思うと……。

バシィ！

あっという間に８番にブロックされてしまった。

「彼のスタイルはとにかくディフェンス重視。周りが得点できるからかとは思うんだけど、得点は１試合で２桁いくかいかないかだね。そのかわりルーズボール、ブロック、リバウンドには人一倍貪欲なんだ。彼自身そのスタイルを貫いているのさ。そしてなにより……永瀬勇希さんの弟なんだよ。」

永瀬勇希の方を見てみると、曇った表情で試合を見ているのがわかった。あの表情にはこんな訳があったのか。もっと深い理由がありそうだな。

薫が博司になぜああ言ったのかわかった気がした。俺も大体同じことを考えてたからな。

ルーズボールを手にしたカズは凄いスピードでコートのディフェンスをかいくぐり相手ゴールに向かっていった。そしてある選手にボールがまわる。黒のユニフォームに7番の番号を背負った男だった。

1度2度フェイントをかけたと思うと、相手に向かって容赦なく突っ込んだ。相手は何が起こったのか、もしくは恐ろしくて動けなかったのか、詳しくはわからないがピクリともしないうちに抜かれてしまった。それほどまでに早い動きだった。

そして豪快なダンクが決まる。

ドォォン！

リングが軽く上下に揺れた。大歓声が聞こえる。

「今の人が白川のエース五十嵐拓磨（いがらしたくま）。1年生の頃から白川のエースナンバーの7を背負っていた人だよ。県でＮｏ、1フォワードと言われているのは見ればわかるよね。」

目の前で次々と五十嵐が得点を重ねる。

「中学時代に氷室中を薫キャプテン、福岡と一緒に全国優勝に導い

たときのエースの人だよ」

我利勉には悪いが、解説はほとんど頭に入っていなかった。このとき俺は人生の中で初とも言える衝撃を受けていた。目の前の黒の7番から悔しいが目を話せないでいた。

荒々しさの中にも正確な動き。

相手を威嚇するようなドルブル。

正直、白川などの名門高校は、なぜだかわからないが、御堅いバスケの印象が強かった。そんなイメージを一瞬にして打ち砕かれたのだ。なんせその7番の繰り出す技、シュートの1つ1つが――。

まさに俺の理想とするスタイルだったからだ。

結局この試合は、白川第一が１００点ゲームという力の差を見せつけ、圧勝したのであった。続く第三試合、湘南は名門稲川工業とあたり、６８－８１という点差で敗れてしまったようだ。福岡誠という選手は長身から繰り出されるフックシュートが武器らしい。ったく、薫の野郎には楽しみなやつらがたくさんいやがる。

それぞれの第一試合を見終えた俺たちは、バスの前に集合していた。

「よし、全員いるな。乗ってくれ」

「オス！」

この稲川カップというものは2日間かけて行われるらしいが、朱雀高校では泊まりの予算が無いために日帰り日程だそうだ。明日の試合は部員たちで中継を見ることにしたらしい。

数々の試合を見て衝撃を受けたのか、選手たちの口数が減っていたのだった。特に博司はあの8番にとても影響されたらしい。

「すごい…僕もああなりたい」

と、ブツブツ言うだけだ。あの天性のバランスは正直得るのはきついが、彼のスタイルなどはとても参考になってたのかもしれない。

帰りのバスの数時間、俺は一睡もせずにいたのだった。

Ｎｏ．７６　４点分の働き

朱雀高校バスケットボール部の部室にて――。

部員一同は稲川カップの決勝戦の様子が映されたビデオを見ていた。これは昨日ネットで中継されていたものである。

決勝戦は白川第一高校対稲川工業。

稲川工業は平均身長は全国的に高い方ではないが、伝統の粘り強いディフェンスと、またたくまに得点する素早い速攻が印象的な高校だ。

メンバーも平田に星野、苦竹と、高校生全日本候補が多く揃う強豪である。

前半戦、会場の予想通り稲川工業の一方的な試合展開になった。持ち前のスピードで次々と得点していく。一人一人のボール持ち時間が短いのも稲川バスケの特徴であった。

稲川リードで向かえた後半戦。白川は自分たちのペースに戻し、五十嵐中心に試合を組み立て反撃を開始する。

永瀬がリバウンドし、五十嵐、御庭が得点する、単純なことだが、確実にこなすことにより、少しずつ点差を縮めていった。

そして白川１点ビハインドで向かえた残り１０秒――。

森村一樹によるスティールにより、白川が得点。

全国大会とも言われるこの稲川カップ。白川第一高校が見事に優

勝を手にしたのであった。

―――――――

―――――

―――

ビデオを見終わった後、部室は静まりかえる。

「やはり強いな、白川は…」

木ノ下薫がそう口にする。

実は部員たちはこのような結果になることはビデオを見る前から知っていた。それは、県で発行されている新聞にこの記事が大きく乗っていたためである。

「知っているとは思うが、黒沢高校も関東大会で見事に優勝を果たした。どちらも強いが、上を目指す道で必ず戦う相手だ。そのことを頭に入れてこれからの練習に望んでほしい。以上だ！」

『オス！』

部員たちも薫に続き、返事をする。どこか不安も入り混じっているようにも聞こえた。静まり返っていた体育館に再び部員たちの声が鳴り響いた。ランニングから始まり、決められたメニューを次々にこなしていく。そしてＡチームとＢチームによる実戦形式の練習

が行われた。

木ノ下薫が次々と選手の名前を呼ぶ。

「Aチーム！　俺と永瀬、長谷川亮。そして博司と純也！　準備してくれ。Bチームは…」

「いやっほう！！　オラオラー！」

純也がBチームの名前を呼ぶ前にはしゃぎだした。そしてコート内に飛び出す。それにすかさず薫はつっこみをいれる。

「わかってるとは思うが、この前の練習試合のようなことになればすぐに交代だからな」

この前の試合、とはおそらく佐川商業との練習試合のことだろう。その言葉をきいた純也はめんどくさそうに答える。

「チッ、わかってらぁ」

そう言って純也は練習用ゼッケンを着た。博司が薫に近づき、恐る恐る話し始めた。

「あのーキャプテン……」

「ん？　どうした博」

薫もゼッケンを着ながら博司に反応した。博司は勇気を振り絞るようにして言い放った。

「ぼ…僕も、あの白川の8番のようになりたいです！」

「……」

急に言われて驚いたのか、薫はすこしの間黙ったままだった。やがて博司に向かって話し始める。

「リバウンドは4点分の働きをもつ、という言葉の意味がわかるか？」

「え？」

突然薫から発せられた言葉に、博司は戸惑っていたようだった。そんな博司に薫は更に続けた。

「その意味を実践でつかんでもらえれば嬉しい」

「え？あ……でも！」

博司が何かを言いかける前に、薫はコートに向かって歩いていってしまった。

「リバウンドが4点分の働き？　点を取るわけじゃないのに……。よくわからないなぁ」

博司はそう言って頭を掻いた。

「おい博司！　はやくこいっつーの！　試合だぜ試合！」

「あ、うん！」

急に純也に怒鳴られ、博司は慌ててゼッケンを着る。純也は試合形式の練習が待ちどおしいようで、陸にあげられた魚のようにピョンピョン飛び跳ねていた。

Bチームのメンバーが決まったようで、Aチームがオフェンス、Bチームがディフェンスのセットの練習が始まった。

ある程度セットからの練習をこなし、次はオールコートでの試合が行われる。

ジャンプボールをAチームが手にして、最初のオフェンスが行われた。

薫から亮にボールがまわる。そしてゴール下に切り込んだ純也にパスをだす。純也はボールを持ったかと思うと、すぐさまバックターンで最大加速に達する。ゴール下にいた小田原さんを楽々かわし、先制点を決めたのだった。

そして純也は亮を指差して一言。

「相変わらず、すっトロいパスだしてんなぁ」

「うるせぇ猿助！」

そんな二人に薫が注意する。

「おい！　はやくもどれ！」

「へいへい」

めんどうくさそうに純也は言い放ち、ディフェンスにまわった。

Bチームのオフェンス。何度かパスがまわった後、一年の遠藤はスリーポイントシュートを狙った。

だが、ボールはリングの縁にあたり、外に飛び出す。そのボールの行方を追って数人がジャンプした。

ゴール下の激しい争いをものにしたのは純也だった。そして、味方ゴールに走っていた薫にパスをだす。

「おりゃぁぁ！」

物凄いスピードでボールが飛んでいく。薫はそのボールをいとも簡単にキャッチし、ゴールを決めた。

そのプレイを見ていた博司は突然立ち止まる。

「そうか……。そう言うことだったのか！」

「どうした博司？　足がとまってるぞ」

「すみましぇん！」

薫の声に、博司は再び走り出したのであった。

―――――――

―――――

―――

「キャプテン！はぁはぁ」

やがて練習が終わった。博司は真っ先に薫のもとに駆け寄る。

「ん？　どうした？」

呼吸を整え、やがて博司が口を開いた。

「リバウンドが４点差分の働き、という意味が分かりました！」

「ほう」

「相手の攻撃を阻止して、味方の攻撃のチャンスをつくる。だから４点なんですよね！？」

博司のセリフを聞いた薫は一瞬驚いた表情を見せる。そして笑顔で言った。

「驚いたな。まさにその通りさ」

「純也君ありがとー！！」

薫の言葉を聞いた博司は、純也に向かって走っていった。おそらく、純也のプレーがヒントとなったのだろう。

「うわ、なんだおめぇ！気持わりぃ！」

迷惑そうな純也を博司は追い掛け回していた。

そんな2人を見て薫が周りに聞こえないような声でつぶやいた。

「やれやれ。しかし驚いたな。練習が終わったら説明しようと思ったんだが。その必要はなさそうだ。リバウンドはそれほど重要な技術なんだ。お前が頑張ればチームの得点力が更に増すだろう。期待してるぞ！」

部員たちの自主練習はよる遅くまで続く。

No．77　バカ正直

『お兄ちゃん！　バスケしよーよ』

子供の頃の記憶が夢の中で鮮明によみがえるときがある。１つ下の弟と夜暗くなるまでバスケットをしていた。

ただひたすらバスケをする夢。やがてその映像は小学校のミニバス、そして中学バスケに切り替わる。

『兄さん、俺にもできたよ！』

いつからだろうか。弟のその言葉を聞くのがたまらなく嫌になったのは。俺が練習してできた技を弟はいつも簡単にやってのけた。

いつからだろうか。弟と一緒にバスケットをするのがたまらなく嫌になったのは。

いつからだろうか……。

『永瀬兄弟ってさ、弟のほうがすごいよな』

『同じポジションだからさらに差が目立つしなぁ』

『顔はかっこいいけどね、アハハ』

やがてそんな会話が、聞こえてくるようになる。それでも俺は弟と同じポジションで居続けた。

そして中学校最後の大会、ＰＦのポジションの座を手に入れていたのは弟だった……。

『永瀬君弟にポジションとられたんだってー』

『あー、やっぱり？』

『弟すごいもんなー』

『アハハハハ』

ーーーーーー

ーーーー

ーー

「！？」

俺はベットから勢いよく上半身を起こした。時計の針はまだ朝の５時をすこしすぎたあたりだった。朝練には少し早い時間だ。

「またあの夢か……」

最近になってまたあの夢を見ることが多くなった気がする。白川の試合を見たあたりからだろうか。いったいどうしてしまったものか。

もう眠れる気がしなかったので、俺はベットから起き上がり適当にＴＶをつける。

このアパートに１人暮らしを始めてから3年になるが、起きたらＴＶをつけるのは習慣になっていた。ニュース番組にチャンネルをまわし、俺は朝食の準備をする。昨夜の食べ残しをレンジで温め口に運ぶ。

「俺はいったいなにしてんだろうなぁ……」

高校に入学してバスケットなんてやる気すらなかった。それなのに毎日こうして早く起きて朝練習にまで参加している。本当にどうしたものか。

なんとなく？　薫に誘われたから？

自分がわからない。１人暮らしをしてまで実家を離れ、バスケットをする理由がわからなかった。何度かやめようと思ったのも事実だ。

でも気がつくと、まだ続けている。弟も高校に入ってバスケを続けてるというのに……。バスケに未練はないはずなのに……。

やがて朝食を食べ終わる。制服を着て、髪型を整えアパートを出た。まだ朝練には時間があった。でも家にいても嫌な考え事しか思い浮かばなかったので、早めに朝練に向かうことにしたのであった。

朱雀高校は俺のアパートからはさほど遠くはない。歩いてもいける距離にあった。

耳につけたイヤホンから音楽が聞こえる。１、２曲聞き終わったあたりで朱雀高校に到着していた。裏門から入り、体育館の扉をあける。

ドンドンドン

こんな早い時間にもかかわらず、ドリブルの音が聞こえた。そしてその人物と目が合う。

「ん？　永瀬か。どうした？今日はずいぶんと早いんだな」

俺はすこし呆れた様子で、一呼吸おいてから答えた。

「それはこっちのセリフさ。まったく……」

「たしかにそうだな」

そう言って薫は笑った。しっかりしているようで意外と天然っぽいところがある。長いこと一緒に居たから「木ノ下薫」という人物のキャラは大体わかるようになっていた。学校入学当時は薫のキャラが本当につかめなかったものだ。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

＊＊＊＊＊＊＊

入学式が終わり、正門には帰りの新入生であふれかえる。永瀬勇希もその人ごみの中に混じっていた。新しい新生活に心を躍らせ、などど彼が思うはずも無く、これから始まるであろう平凡な生活を考えながら、新しく我が家となるアパートへと向かっていた。

部活など入るはずもない。高校は普通に入学して普通に勉強して普通にテストをうけて普通に卒業する所だけだとおもっていた。

そんな永瀬が正門を出たとき、とある人物に声をかけられた。

「君、永瀬君じゃないかな?」

永瀬はその方向を振り向く。見覚えのある人物に一瞬驚いたらしかった。永瀬は、その人物とは話すのは初めてだったが知っていた。県内で中学バスケをしていてこの人物を知らない人は、いなかったほどだ。

「永瀬だけど、何か用か?」

「やっぱり東中の永瀬君か。同じ高校だとはおどろいたよ。高校でもバスケやるのかい?」

「俺はそんなに有名ではなかったよ。それに、バスケは高校ではやらないんだ……。すまない」

「永瀬君のことは知ってたさ。君ほどのバスケセンスを持った人がやらないなんてもったいないぞ」

「俺がバスケセンス?　残念だが思ったことすらないな」

そう言って永瀬は歩き出す。

「明日から部活が始まるから見学にでもきてみないか？」

「考えとくよ」

永瀬は振り向かないまま答えた。もちろん見に行く気などサラサラなかったからだ。

そして次の日、永瀬は体育館に向かっていた。あれほど嫌なバスケなのに。薫に言われたことが気になっていた。なぜか自分を知っていたのも気になる。

『君ほどのバスケセンスを持った人がやらないなんてもったい』

お世辞かもしれない。みんなに言ってるかもしれない。バスケセンスなんてむしろ無いとまで思っていた。それは弟とのことで思い知らされていた。

体育館ではさっそくバスケ部の練習が行われていた。朱雀高校といえば進学校で、とくに部活で目立ったところは無かった。それどころかバスケか弱小として知られていた。

その中で薫の実力は飛びぬけていた。３年生相手でもまるで歯がたたない。いくらマークを増やしても、とめることすらできないでいた。

いったん練習が一区切りして、薫は永瀬がいることに気がつく。

「お、きてくれたか。どうだい？これから試合形式の練習があるらしいけど、参加しないか？」

「いや、俺は……」

「いいからいいから」

半強制的にゼッケンを着せられてしまった。キャプテンらしき人も、『薫の知り合いの元バスケ部』ということで納得してしまったようだ。すでに薫は、部活内で信頼を得始めているようだった。

永瀬があたふたしている間にも試合が始まっていたようだった。薫がドリブルをする。そして急に永瀬にボールがまわった。

永瀬は次々にくるディフェンスをかわし、シュートを決めた。永瀬もまた、このメンツでは抜きでていた。

プレーが続き永瀬はあることに気づく。

『初めて一緒にプレーするのに、違和感が無い』

薫のアシストの力だろうが、永瀬は公式バスケでは今までに無い、そしてどこか懐かしい感覚がしていた。矛盾しているがそんな気持ちがしていた。

薫はバスケットというものを楽しんでいる。そして周りもそれにつられて知らぬ間に楽しんでいた。

『いつからだろうか。バスケをするのがたまらなく嫌になったのは』

『いや、少なくとも今は嫌じゃない。』

そんな力がこの薫という男にはあるのか？永瀬はとても混乱していた。あんなに嫌だったのに。ここでは『バスケット』ができる気がした。

試合が終わり、1年生チームは先輩チームに大差をつけて勝利していたのだった。薫が息を切らしている永瀬に歩み寄った。そして上体をあげた永瀬に一言。

『どうだ？　バスケしないか？』

ーーーーーー

ーーーー

ーー

＊＊＊＊＊＊

「どうだ？　バスケしないか？」

薫がボールを持ち、こちらを見てそう言った。

今の朝練での薫の一言が、入学当初の薫に重なって見えた。それがおかしくて俺は笑ってしまう。

「あっはっはっは」

「む？　どうした？」

「あはは、いや…なんでもない」

３年目になるけど根本的なところはかわってないよなぁ。

ただひたすら自分に正直で、

バスケットが好きで。

あと少しで俺らも引退なんだな。

このバカにもう少しだけ付き合ってやるか。

俺たちの朝練は続いた。

No．78　輝き

ここはバスケットの名門校、白川第一高校体育館。　平日の昼を過ぎたあたりにもかかわらず、体育館には部員たちの声が、なり響いていた。

私立と言うこともあり、スポーツ科に属する選手は、午後になるとすぐに部活動に没頭するのだ。

そんな中、沢山ある部室の一つからにぎやかな会話が聞こえていた。

「そこは左によけろよ、ヘタクソ！」

白川第一のエース、五十嵐は最新のゲーム機の画面を見つめつつ、身長2メートルの大型選手、御庭にツッコミを入れていた。

御庭の手にも五十嵐と同様、ゲーム機が握られている。

どうやら、一緒にゲームをしているらしい。

「いや、今は右が空いていた」

「じゃあ、なんでさっきから何回も死んでんだよ！」

ボカッ！

「むう、何をする！」

そんなほのぼのとした雰囲気が部室に流れていた。

ここの部室は三年生用の部室である。各学年に2つずつ、計6つの部室が存在するのだ。

現在部室にいるのは五十嵐、御庭、森村の3人である。

部室におかれている、小型のバスケットリングにシュートを放ちながらカズが言った。ボールがリングに綺麗に吸い込まれる。

「そろそろ時間じゃないのか？」

『おっと』

五十嵐と御庭は、ほぼ同時に時計を見た。そして五十嵐は御庭を叩きながら言った。

「やべ、オメェのせいで今日も全然進まなかったじゃねえか！」

「いや、アレは俺のせいじゃない。」

「だまれウドの大木め！」

ポカッ！

朱雀高校でも普段から聞こえてくるような会話だった。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

「おねがいしやーっす」

『おねがいしゃっす！』

森村、五十嵐、御庭の３人が挨拶をしながら体育館へと入る。その挨拶に、体育館にいた部員たちが返した。すぐに森村が部員に集合をかける。

「集合！」

『オッス！！』

森村の周りに部員たちが次々と集まり始める。しかし、白川の部員の数にしては明らかに少なかった。

「よし、３年はみんないるみたいだな。じゃあいつもの通り、監督が来るまで一通りやろう」

『オッス！』

そう、見ての通りこの白川第一高校は、スポーツに力を注いでいる学校だ。その中でも男子バスケットボール部はかなりの実績を残しており、学校にもかなり期待されている部活なのである。

それゆえ、フルコートが２面あるバスケコートと、さらには別の建物に、フルコート１つ分の設備も用意されてるのであった。

部員が少なく感じられたのは、最初の練習は各学年だけで、それぞれ用意されているコートで行うスタイルをとっているからであった。したがってここにいるのは全員３年生なのである。

練習内容が次々に消化されていく中、とある人物が3年生が練習している体育館に訪れる。

「今日もしっかりやっているな。五十嵐のヤツ、また一段と動きが速くなっとる」

体育館の入り口で眩しい笑顔をふりまき、選手達には聞こえないような声で、そう呟いていた。

初老も向かえ、白髪も少し目立ち始めたその人物は、この白川第一高校を12年連続インターハイ出場、過去3回全国優勝に導いた名将、大平三朗（おおだいらさぶろう）である。普段は笑顔が印象的な人物だ。

彼が現れても、特別に集合はかけられないまま、選手たちは黙々と練習をこなしている。

「よーし、それでいい。では、次に向かうかな」

そうつぶやいた後、大平監督は2年生のコートに向かう。その先でも特に集合はかからず、2年生もひたすら練習にうちこんでいた。

1人1人の選手を確認し終え、別の建物にある1年生コートへと向かう。

1年生のコートは2、3年のコートに隣接しており、すぐに行くことができるのであった。

1年生のコートについた矢先、大平監督はある人物2人に話しかけられる。その人物たちはものすごく興奮した様子で、勢い良く話しかけてくる。

「監督！」

「監督！」

話しかけてきたのは、1年生キャプテンの佐々木健之助とその弟の佐々木真之介であった。血相を変えて話しかけてきた彼らに、後ずさりしつつも返事を返した。

「ど…どうした？」

健之助が言った。

「聞いてくださいよ、真之介のヤツ、俺がシュートのときに、もうちょっと肘の位置を上げたほうがいいってアドバイスしてんのに聞かないんすよ！」

それを聞いた真之介も黙ってはいなかったらしく、健之助に言い返した。

「いやいや、お前は肘が高すぎるんだぜ。俺のほうが狙いを定めやすいだろ！」

てっきり大事かと思っていた大平監督は拍子抜けしていた様だった。

「どっちですかね！監督！」

「聞いてるんですか監督！！」

「ま…まぁ、落ち着け」

勢いに圧倒されつつも、監督は答えた。

「１０本3ポイントを放ってみて、多く入ったほうが正しいんじゃないのか？」

なんとも適当な答えであった。しかしその言葉がこの兄弟に火をつけたらしかった。

「おもしろい！真之介！今日こそお前がダメってことをわからせてやるよ！」

「はは、そんなデタラメシュートが正しいわけないだろうが」

さっそく2人のシュート対決が始まった。どこが違うのかわからないほど似ているシュートフォームから次々とシュートが放たれる。そしてお互いに１０本シュートをし終えたのだったが……。

「ははは、どっちも7本成功じゃないか。じゃあどっちも正しいってことだな。はっはっは！」

大平監督のその言葉にこの兄弟が納得するはずも無く……。

「いつか絶対に証明してやるからな！」

「こっちこそだバーカ！」

そう言って再び練習に打ち込んだのだった。大平監督はその様子に軽く笑いながら、他の選手も一通り見渡す。

「ふむふむ、お？アイツいい動きになってきたなぁ」

そう言って再び3年のコートに戻るのであった。

ーーーーーー

ーーーー

ーー

「よし、では森村。集合をかけてくれ」

監督のその言葉に全学年の集合がかけられた。ゾロゾロと3年生体育館に集まり先ほどの人数とは比べ物にならないほどの数が集まる。こうしてみるとやはり名門校らしさが見えてくる。

「えーと、こっからはいつも通りに、一軍と2軍の試合形式の合同練習、その他は各自自主練習になるわけだが、その前に1つ」

オホンと咳を1つしたあと、監督はさらに続けた。

「2年の内藤、動きがだいぶ安定してきたな。あとシュートのときのクセが抜けてないからそこら辺を探るように練習に打ち込んでみたらどうかね」

『ハイ！』

「それに、1年川崎。一段とドリブルが上手くなってるな。佐々木

兄弟危ないんじゃないか？ははは」

『ありがとうございます！』

川崎と呼ばれた人物は元気良く返事を返した。ここで再び黙っているわけのないこの兄弟。

「なにおぉぉ！？」

「そんなわけ！……ない…よな？」

そんな佐々木兄弟はさておき、次々と監督からアドバイスがとぶ。

アドバイスを送る選手は森村や五十嵐といった一軍選手の選手だけにとどまらず、新入部員、二軍、ベンチ外など送る対象は関係なかった。監督にいたってはすべてが自分の部員の一員であり、誰にでもチャンスはある。自分は上達の『キッカケ』を与えるだけに過ぎないと、そう思っているからである。選手の自主性を最優先し、クドクドとした支持などは、よほどのことが無い限りしなかった。選手たちが伸び伸びと練習に打ち込んでいるのはそのためである。

「まぁ、俺は言えるのは今日のところはこのくらいだな。じゃあ、最後にこれだけは言っておく。努力は必ずしも報われはしない。だがな、努力をすることによって必ず手を差し伸べてくれる人はいるぞ。それは応援に来る人、サポートしてくれる学校もそうだが、一番はお前らの仲間、そしてお前ら自身なんだよ」

『ハイッ！』

一際大きな返事が返ってくる。

『努力をすることによって必ず手を差し伸べてくれる人はいる』

いつも白川第一高校の練習は、監督のこのセリフから始まっていたのだった。もう聞きなれたセリフなのだが、選手たちは何度聞いてもかみ締めるように聞くのだった。

そして各自に別れ練習が始まる。

今日も選手たちの目は輝いていた。

Ｎｏ．７８　輝き（後書き）

ずいぶん遅れての更新となりました。かならず完結はさせますので、今しばらくお付き合いくださいませ。ここまで目を通していただき、まことに感謝しております。

Ｎｏ．７９　石川士郎　その１

「ただいま～」

部活が終わった俺は、すぐさま家に帰り、玄関のドアを開ける。

『ワン！』

「……」

何か嫌な予感がする。俺の家に『ワン！』と叫ぶ生き物なんていただろうか？

そして、俺の予感は的中した。

『あ、まてぇ～！』

突然、妹の声がしたかと思ったら、今度は、とある生き物が姿を現した。

『ワン！ワン！ワン！』

猛スピードでその生き物が向かってくる。そして、俺の顔面めがけて跳び跳ねた。

モフッ

「……」

『ハァハァハァ』

俺の視界は、白くてフワフワしたもので覆われたのであった。

――――――

――――

――

「で、急な展開にまったくついていけないんだが、説明してもらおうか？」

俺は顔を洗った後、リビングにて、妹の絵梨佳に質問した。

「説明って言ったって……。犬よ」

「ヒント少ないな」

絵梨佳に抱かれ、ハァハァハァしてるのが犬なのは誰でもわかる。俺はなぜ、ここにいるのかと聞きたいんだが。

さすがに伝わってないだろうと感じた母さんが、キッチンで皿を洗いながら言った。

「絵梨佳ったら、捨て犬を拾ってきちゃったのよ」

俺は改めてその犬をみる。体全体が真っ白い短めの毛て覆われていて、みるからに雑種という感じだ。オマケに絵に書いたようなマヌケ顔をしてやがる。先程の玄関での出来事から、オスだということは確認できた。

「それで、飼うことにしたのか？」

俺は母さんに質問した。

「ママは別に構わないわよ。」

「へぇ、じゃあ父さんは？」

新聞を見ながら、父さんは俺の質問に答えた。

「パパも構わないぞ。絵梨佳の言うことなら、なんでも聞いてやる！」

「わぁ～い！ありがとうパパ～！大好き！」

そう言って絵梨佳が父さんに抱きつく。なぜ、石川家はこうも絵梨佳に甘いのだろうか。違う！違うぞ日本人！

「お兄ちゃんは飼っても大丈夫なの？」

「ああ。別にいいんじゃね？」

俺はアッサリ答える。別に妹が世話をするなら関係ない。

「じゃあ、俺は部屋に行くわ」

「お風呂早めに入りなさいよ～」

「わかってるよ」

母さんの言葉に軽く返事をして、俺は二階へと上がった。

『やっぱり、何度みてもお兄ちゃんに似てる～！かわい～』

『本当だわねぇ。飼い主に似るって本当なのかしら？』

階段を上がる途中、そんな会話が聞こえてきた。俺をそんなマヌケ顔と一緒にするな！あと、飼い主は俺じゃねぇよ！

気にしていてもしょうがないので、俺は部屋に行くことにした。

――――――

――――

――

「ん……」

目をさますなり時計を確認した。一時間ほど経過したようだ。どうやら部屋に入ってベッドに横になった途端、寝ていたようだ。

『ガリガリ』

なんだ？この音は？

俺は、奇妙な音のしたほうに振り向いた。そこにはいつのまにやら先程の犬がいたのだが……。

「勝手に部屋に入ってんじゃねぇ！ってか」

――放し飼いかよ！

「なぁにぃ～？夜中に大声出してどうしたの～？」

声を聞き付けてか、妹の絵梨佳が駆け付けた。

「外で飼えよ。俺のポテチ食べられたじゃねぇか」

「ごめんねお兄ちゃん……。この子寒そうだと思って」

「どうでもいいが絵梨佳。」

俺は、落ち着いた様子で次のセリフを言い放った。

「その話しかけてる相手は俺じゃなく犬だぞ」

「あ、間違えちゃった」

――もしかしてギャグでやってるのか？

「まぁ、しっかり繋いでおけ。俺は、メシ食って風呂入って寝るから」

「あ、お兄ちゃん待っ……」

妹が言い終わる前に、俺は、キッチンへと向かった。そしてキッチンへたどり着いて一言。

「絵梨佳……。俺のメシは？」

テーブルの上はとてもスッキリしていて、先程に用意されていた料理などは、見る影もなかった。

「この子が食べちゃった！」

『ハァハァハァ』

「あのなぁ……」

呑気にハァハァしている犬を見てると、怒るのすら馬鹿馬鹿しくなってくる。

「しょうがねぇ、風呂入ってねるわ」

「あ、お兄ちゃん待っ……」

妹が言い終わる前に、俺は、風呂へと向かった。そして風呂へたどり着いてまた一言。

「絵梨佳……。湯船のお湯はどうした？」

「お兄ちゃんもう入らないと思ってこの子の体洗うためにお湯使っちゃった！」

……。

「だぁぁ！このクソ犬がぁっ！」

「キャ～！お兄ちゃんやめてぇ！」

―――――――

―――――

――

「反対だ！俺は絶対に反対だからな！」

深夜にも関わらず、石川家では、家族会議が行われていた。

「ふわぁ～、どうしたのよ急に」

母さんが眠そうな様子で言った。

「犬を飼うなんて反対だ！俺の生活までが狂い始める！」

「さっきまでは飼ってもいいって言ってたじゃないの」

「気が変わったんだよ！ダメなものはダメ！」

「あら、困ったわねぇ」

困った様子の母さんに、絵梨佳が心配した様子で話しかける。

「ママ……どうするの？」

母さんはしばらく悩んだ後に、絵梨佳に向かって静かに言った。

「純也が言い出したら聞かない子なのは知ってるし……」

――そうなのか！？

「それに、いい？絵梨佳。生き物を飼うと言うことは、その命を預かるのと一緒なの。家族の一員になることなのよ。半端な気持じゃいけないの。家族の中に一人でも嫌だっていう人がいるなら、飼われる犬がかわいそうだと母さんは思うわ…」

「う～……」

妹は何も言えなくなってしまった。

「純也には後から言っておくから、今日は寝ましょう。ね？」

――何を言うんだ！？

「お兄ちゃん……どうしてもダメなの？」

妹が目に涙を浮かべながら、上目使いで訴えかけてくる。

「ああ、だめだ。カンベンしてくれ」

俺は、キッパリと言い放った。

『ハァハァハァ』

犬の息の音だけが、リビンクの一室に消えていく。

「だいたいさぁ、俺に迷惑かけといてハァハァして知らないフリだぜ？」

「お兄ちゃんだって夜に変な本見てハァハァしてるじゃない！」

――本当にそれが中学生の使うギャグか！？

「ち、ちょっとまて絵梨――」

「お兄ちゃんなんて知らない！死んじゃえ！」

そう言って二階へ続く階段を勢いよく登り、部屋にこもってしまった。

「大丈夫。一晩すればきっとなおるわ。今日のうちに元の場所に返しに行きましょう」

「ああ、すまない」

そして、俺と父さん母さんの三人は、絵梨佳が拾ってきたという公園へと、返しに行ったのだった。

No．80　石川士郎　その2

「じゃーな、悪く思うなよ」

俺は犬をもともと捨てられてあった公園のダンボールへと戻した。

そこで、あることに気がつく。

「しかし、この公園は通学路の途中じゃねぇか」

人通りも多いし、これなら新しい飼い主も見つかるだろう。

「よし、帰るかな」

『ハァハァハァ』

何もわからない犬は、いつもと変わらぬ様子でその場を立ち去る俺たちの背中を見つめていたのであった。

――――――

――――

――

沈黙が続いていた。いつもはうるさいくらいにしゃべる絵梨佳が、今朝の朝ごはんで一言もしゃべらなかったのだ。絵梨佳から発せられる『しゃべったら気まずい』ムードが、部屋中に漂っていた。

さすがに、暗すぎると思い俺はどうでもいいような話題をふってみる。

「なぁ、絵梨佳。昨日の巨人が阪神に――――」

「ごちそうさまっ！」

――ガシャン！

テーブルを叩くようにして立ち上がった絵梨佳は、あらかじめ準備してあったカバンを持ち、すぐに学校へと向かったのだった。その様子を見て、母さんが困ったように言った。

「しょうがないわね。いろんなことを考える年頃なのよ」

そう言って、絵梨佳の残った朝食を片付ける。俺は、絵梨佳がここを立ち上がるときに、テーブルにあった1つのパンを持って言ったのを見逃さなかった。

「ったく…。腹が減ってるならゆっくり食ってきゃいいのに」

そして俺も学校に向かったのであった。

――――――――

――――――

――

「今日の朝練は間に合いそうもねぇなー」

昨日の夜、あんなことがあったおかげで、すっかり寝坊してしまった。すでに久留美も朝練に参加している頃かな。ストバスの大会といい、最近はさすがにサボリすぎたな。

そんなことを考えているうちに、昨日の公園にたどり着いた。俺は昨日のダンボールの中身を確認してみる。

「ゲッ」

そこにはまだ、昨日の犬がいたのであった。今度はスヤスヤと寝ているようだ。そしてあることに気がつく。

「あれ?そのパンは確か…」

まだ寝ているために食べていないのだろう。犬の隣には、真新しいパンが1つ置かれていた。そのパンは確かに見覚えがある。

「アイツ……」

俺はその場を後にした。

―――――

―――――

――

「ふ～、今日も疲れたな～」

部活を終えた俺は家路へと急いだ。部活が終わったあとの、薫との居残り１　ｏｎ　１　により、こんな時間にまでなってしまったのだ。今日も負けてしまった。何度やってもうまくいかない。

「ちくしょ～！いつか絶対にぶっ倒してやるっつーの。」

久留美は先に帰ったから、弁当を返しに行かないとな。ま、家も隣だし問題ねえか。そこで、俺はあることを思い出す。今日の昼休み、居眠りのことで担任の野郎に呼び出され、ガミガミ説教の続くこと数十分。弁当のを食う時間さえなくなっていたことを…。弁当は何も手がついていない状態だったのだ。

「ヤバイ…。そう考えたら急に腹が…」

よし、途中の公園のベンチに座って食おうか。今なら誰もいないだろうし。

公園にたどり着いた俺は、弁当を広げ食べ始める。さすがは久留美、といったところか。何度食べてもおいしい。

『ハァハァハァ』

ふと、目の前に気配を感じたので目を移す。

「またお前かよ…」

そこには例の犬がいたのであった。まだ、こんなところにいやがったのか。まぁいい。俺には関係のないことだ。今は弁当を食べることにしよう。

モグモグ

『ハァハァハァ』

モグモグ……

『ハァハァハァ』

モグ……。

「あぁぁっ！一体ナンなんだよお前は！」

『クゥゥン』

前傾姿勢で座り、初めて弱弱しい声を出した。

「なんだ？腹でも減ってるのか？」

『クゥゥン』

朝からパン1個しか食べてないだろうからな。まぁ、今は俺も腹が減ってるんだ。

「残念だったな。しっしっし」

モグモグ

俺は食べるのを再開する。犬はマヌケ顔をしながら、ずっとこっちを見ていた。

モグモグ

「くそ！そんなに欲しいなら少しやるよ！」

そう言って俺は、ウィンナーを犬の前に置いた。

そのウィンナーを犬が食べ始める。

「お？うまいか？」

「ワン！」

「久留美の弁当はうまいぞ。お前にはもったいないくらいだ」

「ハァハァハァ」

もっとくれ、と言わんばかりに視線を合わせてくる。

「ほら、もう一個食え」

「ワン！」

再びウィンナーをたいらげた。

「人のものを食べてしまったらすみませんでした、だろ？ハァハァじゃねーっての。おかげで昨日はメシ食えなかったんだからな」

「ハァハァハァ」

「そうか、お前犬だから、言葉しゃべれねぇよな。とりあず返事しとけ」

「わん！」

「お、返事できるじゃねぇか」

「ハァハァハァ」

俺は、携帯で時間を確認する。この公園に来てからすでに３０分が経過していた。

「おっといけねぇ。遅くなる前に久留美に弁当返しに行かないと」

そして俺は、犬に一言

「じゃーな。久留美に礼でも言っとけよ」

と、言ってその場を立ち去ったのであった。

『ハァハァハァ』

公園には犬の吐息の音だけが虚しく響いていた。

Ｎｏ．８１　石川士郎　その３

―――――――

―――――

――

「行ってくるわ」

『気をつけて言ってらっしゃい』

次の日、俺は朝練に出るためにいち早く家を出る。いつものように数個のパンを持ち歩く。朝練の時は、パンを食いながら登校するのが癖になっていた。

「よう」

『あ、おはよう。今日は遅れなかったわね』

家から出るとすぐに久留美が立っていた。どうやらあっちも今出てきたところらしい。

「ねみー」

『まったく…』

そんな会話が続き、知らぬ間に昨日の公園へとたどり着いた。さ

すがにもういないよな。

『ワンワン！』

「お前、まだいやがったのか」

「あら、この子犬は？ずいぶんとジュンになついてるようだけど」

久留美が不思議そうに犬を見つめる。

「こいつは、一昨日に妹が家に拾ってきた犬だ。結局飼わないことにしたんだがな。お前もさっさと誰かに拾われろよなー」

「ワン！」

「フフ、なんだかこのコ、ジュンにソックリだわね」

「似てねぇよ！こんなマヌケ顔」

どいつもこいつも……。

『クゥーン』

犬は俺の足元に鼻をすり寄せる。

「ん？　腹が減ったのか？そういやぁ、絵梨佳のやつ、まだきてないもんな」

そういって俺は袋の中からパンを１つ取り出す。

「ほらよ。一個だけだぞ」

『ワンワン！』

犬は、そのパンを勢い良く食べ始める。

「あら、意外とやさしいとこあるじゃない」

「死なれたら後味わりーからだよ。ほら、いくぞ。薫にガミガミいわれちまう」

そして俺たちは朝練に向かった。

――――――

――――

――

「ちっ、今日も負けちまったぜ」

いつものように薫との一対一を終え、俺は自宅へと戻る。そして、例の公園にたどり着いたのだが……。

そこにはあの犬の姿は無かった。ダンボールの中は、今朝のパンを含め、何もなくなっていたのであった。

どことなく虚しさが感じられる。よかったなマヌケ顔。

いいやつに飼われればいいな。

そう思い、自宅へと歩を進めようとしたときだった。

『ワンワンワン！』

『ガルルルル』

『キャン！』

公園の木の陰から複数の犬の鳴き声が聞こえてきた。

俺は何かと思い、陰に目をやる。そこには2匹の犬に囲まれ、威嚇されているマヌケ顔の犬の姿があった。

他2匹はそれなりにデカイ。マヌケ顔が不利なのは目に見えていた。

突然、1匹の犬がマヌケ顔に襲いかかる。

『キャン！』

強烈なフックにより、マヌケ顔の体が吹っ飛んだ。

しかし、ヨロヨロと立ち上がり、2匹に向かって突進していく。

『ドン！』

鈍い音をたてて、相手が横に倒れた。それをみたもう1匹の犬が、マヌケ顔に再びフックした。

マヌケが倒れる。しかし、また立ち上がり相手を睨みつけ、吠える。

その目はまだ死んでいない。

『ワン！』

かなり瀕死状態だった。２匹の犬がトドメをさしに襲いかかる。

「くぉらぁぁぁっ！」

『！？』

突然現れた俺を見て、２匹の犬は威嚇を開始する。

『ワンワンワン！』

「ほう、俺とやるってのか？」

そう言って俺は近くの木を力一杯殴った。

『ドォン！』

木が激しく音をたて、揺れたあと、木の葉がパラパラと落ちてきた。

「人間なめんじゃねぇぞ！このワンコロが！」

『キャン！』

情けない音をたてて、２匹の犬は逃げ去った。

俺は、マヌケ顔の近くに歩み寄る。かなりフラフラしているようだった。

「俺はお前のようなヤツは好きだ」

そして俺は、犬を抱きかかえ、自宅へと戻ったのであった。

――――――

――――――

――

「ただいま」

『あ……』

玄関に入ると同時に、絵梨佳とバッタリあってしまった。俺が抱きかかえる、ボロボロの犬を見て、血相を変えた様子で叫んだ。

「ひどい！お兄ちゃん、そんなことする人だとは思わなかったのに！最低！ママ！」

そう叫ぶと、母さんを呼びにリビングへ行こうとする。

「まてまて、俺じゃねぇよ！」
「じゃあ、なんだっていうの？」
「野良犬に襲われてたのを助けてきたんだよ。その……」
ゴホン、と咳をいれる。
「俺んちで飼ってやろうかと思ってな」
しばらくの沈黙がながれる。
「え？狩って？」
「ちげぇよ！飼う、だ、飼う。なんで俺んちでトドメをささなきゃいけないんだよ」
その言葉を聞いた妹が嬉しそうに駆け寄ってくる。
「お兄ちゃんありがとう！」
「そのかわり、家の中で飼うなよ。あと、名前を考えたんだが」
不思議そうな様子で妹がが俺を見る。
「士郎……なんてのはどうかな？」
「え～、もっと可愛い名前がいいよ！お兄ちゃんの事だから、白いからって言う単純な理由なんでしょ？」
興奮する妹を押さえ、俺は続きを言った。

「実はそれもあるんだが、違うんだ。家に帰る途中に、名前を考えてブツブツ喋ってたんだよ。そしたら『士郎』って言葉に妙に反応したんだ」

妹は嘘つきを見るような目で俺を見た後、犬に話しかける。

「チャム！」

『……』

「ポチ！」

『……』

「クラウディア！」

『……』

――クラウディア！？

「……士郎」

『ワンワンワン！』

「ほらみろ！」

「むー、もっと可愛いのがいい！」

騒がしく感じたのか、今度は母さんがやってくる。

「いったいどうしたっていうの？」

そして、俺が抱きかかえる犬を見る。

「ボロボロじゃない！どうしたのよ！？」

「いや、家で飼ってやろうかと思って」

またしばらくの沈黙がながれた。

「え？狩って？」

――お前らいっぺん死ぬか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

石川家に突然やって来た白い犬。

妹がたくさん名前を考えるも、失敗に終わり、結局名前は『士郎』に落ち着いたようです。

今では家族の中で一番、純也が可愛がっているとか、いないとか……――――。

Ｎｏ．８２　何かの気持ち（前書き）

短めです。次回からいよいよインターハイ予選になります。

Ｎｏ．８２　何かの気持ち

朱雀高校体育館――。

インターハイ予選まで残りわずかと言うこともあり、普段よりも選手たちの気合いの入った声が体育館中に響きわたる。

県内で最後まで勝ち抜いたチームのみが出場することの出来る大会――。

どの高校の誰もが夢をみる有名な大会である。

その、たった一つの切符をかけて戦うのだから、選手たちの気合いが入らない訳が無かった。

更に、この群馬県は、１２年連続で白川第一高校がインターハイ出場を決めている場所でもあり、その歴史を塗り替えるが如く、県内の強豪達も皆『打倒白川』を目標に日々の練習に励んでいた。

朱雀高校もその一つである。

激しい練習の中、周りよりも少しだけ元気のない亮に、キャプテンの木ノ下薫が話しかける。

「どうしたんだ？　元気がないぞ」

遠い目をしていた亮は、ふと我に帰り薫の声がした方向に顔を向ける。

「あ、いや……。ちょっと…」

一瞬言葉が詰まり、少し間を置いてから、再び語り始めた。

「俺、本当に朱雀のポイントガードが勤まるんでしょうか？」

急に弱気な発言をした亮に薫は驚きつつも答える。

「どうしてそう思うんだ？お前らしくないな」

「この前の関東大会で、俺は進藤に手足も出なかったんです…」

更に、暗い声で続ける。

「ガードの俺が壊れたら試合も壊れるってのに…」

その言葉を聞いた薫は、顎に折り曲げた人指し指を当て、考える。

確かに、関東大会での黒沢高校との試合はここ最近の朱雀には珍しいほどの、圧倒的実力差を見せ付けられた試合だった。

「まぁ、今年の黒沢高校は白川並の実力があると言われてるしな。」

練習に戻るように亮に背を向け、肩越しに顔を向けながら話しかける。

「俺は、そこまで勝敗をひっくり返せないほどの実力差があったとは思ってない。もちろん、亮と進藤の差もだ。もし差があったとしたなら…」

そして、完全に亮に背を向けて、コートに向かいながら呟いた。

「それは何かの気持ちだろうな」

そう呟くと、コートにいる全員に向かって指示を出していた。

『次はセット形式での最終チェックだ！』

取り残された亮はその場で立ち尽くしていた。

――何かの気持ち？

あのときの進藤にはあって、自分には無かったもの…。

「負けたくない…」

今度は絶対な負けたくない。

こう、怒りとは違った不思議な気持ちが自分の中から溢れでてくるのがわかった。

その後、亮の顔付きが変わったことは、チームの誰もがわかるほどであった。

Ｎｏ．８３　インターハイ予選開幕

県の市民体育館に、県内中の高校生が集っていた。全国大会への切符をかけて戦うインターハイ予選である。選手たちのユニフォームの色により、体育館中がカラフルに彩られる。

現在はその開会式の真っ最中であった。

『…ということ訳で、スポーツマンシップを大事に…』

お偉いさんの話が進む中、朱雀高校が並んでいる列の先頭の方から気の抜けた声がした。

「ふぁあああ…」

坊主狩りに１７０センチと小柄ながらもガッシリとした筋肉質の男、『石川純也』である。

口に手のひらを当てたかと思うと、再び情けない声を出しながら欠伸をした。

彼は背番号が６なので、木ノ下薫、永瀬勇希に続く３番目の所に並んでいた。

その音を聞いた薫は振り向かずしてもその声の主が誰だかわかったのだろう。やれやれ、といった様子で一呼吸してから軽く後ろを振り向き、純也を見る。

「あ、わりぃわりぃ」

その様子を見た純也は、やすめ、のスタンスを取り、腕を腰の後

ろで組み始めた。

『選手宣誓、前年度優勝校白川第一高校主将、森村一樹君』

「はい」

司会がそう言った途端、会場中に緊張が走った。そして、名前を呼ばれた森村は白川第一の並びから歩み出て、すべての列の先頭へと立つ。

黒のユニフォームに赤のライン。その中央には『4』の文字が描かれている。ドレッドヘアを後ろで束ねているその人物の名は…。

『宣誓、我々はスポーツマンシップに……』

容姿がすでにスポーツマンシップかどうかは微妙なところではあるが、彼が県のスター集団をまとめているキャプテン『森村一樹』である。変則的で型破りなプレーも多く、なおかつ基本が出来ていて視野が広い、という彼は、すでにプロのストリートバスケットチームや大学バスケから引っ張りだこ状態なのであった。

森村の宣誓が終わると、会場中から一斉に拍手が沸き起こる。その様子をみて純也が笑っていた。

「アイツ、心にも思ってねぇことを…ククク」

昔からの森村を知っている純也は、選手宣誓の言葉の1つ1つがギャグにしか聞こえていなかったのである。

開会式が終わり、試合のある学校以外は会場を後にする。朱雀高校は初日の午後からなので、そのまま観客席に向かうことになった。

移動するまでにすれ違う人の数から、どれだけの人が来ているかがわかる。
移動する途中、マネージャーの春風久留美が純也に話しかける。
「しかし、カズ君も変わったわねぇ」
その言葉に純也は笑いながら答えた。
「いやいや、アレは確実に心にも思ってないだろ。きっと宣誓の間、ずっと顔がひきつってたと思うぜ」
「フフ、確かにそうかもね」
そう言って久留美も口に手を当てて笑った。
――――――
――
「いやぁ、緊張したなぁ」
体育館からの帰りのバスの中で森村はそう周りに言った。
白川高校は第一シードなので試合は二日目からなのである。
その言葉を聞いた五十嵐拓磨は即座にツッコミを入れた。

「お前笑いそうになってただろ。声が震えてたぜ」

驚いたように森村が答えた。

「あれ、バレてた？　うまく誤魔化せてたと思ったんだけどな」

一般の人からすれば普通に見えたのかもしれないが、3年間一緒にプレーしてきた人から見ればバレバレだったようだ。その様子を見た白川第一の5番御庭慶彦が言った。

「宣誓はちゃんとやらないとダメだろ。スポーツマンシップというものがあってだな…」

「テメーはどこの先生だ」

ポカッ！

「むう、何をする！」

五十嵐はそう言って御庭の頭を叩いた。試合前日にもかかわらず、非常にリラックスした様子の選手たちであった。

――――――

――――

――

午後からの初戦が近づき、朱雀高校の部員は別の体育館でアップを行っていた。もうここまできたら練習、というよりは最終確認で

ある。

そして、試合時間が近づいてきたということもあり、キャプテンの木ノ下薫は全体に集合をかけた。その言葉をきいた部員たちは薫の下へと集まる。

「いよいよこのときがきたな。辛い練習にもよく耐えてついてきてくれた。ありがとう」

少し間をおき、再び喋り始める。

「今のチームはどこと比べてもひけをとらないチームだと思う。自信を持って言える。今までやってきたことを信じて最後まで全員で戦おう」

『オッス！』

「永瀬は何か言うことはないか？」

薫が副キャプテンの永瀬に話をふった。少し困った様子だったが、やがて語り始める。

「まぁ、弱小だった朱雀も昔と比べて随分と強くなったと思う。入学当時沢山居た同期だったが、今じゃ俺と薫と小田原とマネージャーの赤川だけだ」

さらに続ける。

「言い換えれば、それほど辛い練習をしてきたということなんじゃないかな。自信を持って戦おう」

『オッス！』

現在朱雀高校の3年生は3名しかいない。元々進学校でバスケ部は息抜き程度として考えられていたため、耐え切れなくなった人たち沢山やめていってしまったのである。

「じゃあ、最後に赤川。何か一言とスタメン発表を頼む」

「はい」

名前を呼ばれた赤川純麗はみんなの前にでる。

「えーと…。本当に今までおつかれさま！ここからが厳しい戦いになると思うけど、頑張ってください！毎年成長を続けてるこのチームだから、次はきっといけるはず！」

『オッス！』

「では、スタメンを発表します！」

そう言ってメンバー表に目を移した。

「木ノ下薫君」

『はい』

「永瀬勇希君」

『はい…』

「石川純也君」

『ヒャッホー！　公式戦初デビュー！？』

きっと誰もが予想していたことだが、純也がはしゃぎ始めた。公式戦に出るのは今回が初めてなので、いつもよりも喜んでいる様子だった。

「長谷川亮くん」

『はい！』

「大山博司君」

「は…ふぁい！」

すべてのスターティングメンバーが読み上げられた。これは木ノ下薫が悩みに悩んだ末、考え出したものである。そして、薫本人が語り始めた。

「小田原のディフェンス力は誰もが認めている。大事な場面での出場も増えて来ると思うからいつでも準備しておいてくれ」

「わかった」

小田原君が笑った。彼も辛い練習に耐えてきた1人である。それだけで薫の信頼は厚かった。

「よし、じゃあ行こうか！」

『オッス！』

この様子をみた純也は不意に喋り始めた。

「おいおい、負けに行くんじゃねぇんだからもっと明るくいこうぜ！　なんたって俺のデビュー戦なんだからな！」

これに珍しく亮も続いた。

「そうですよ！　目指しましょう！」

この先のセリフは数年前の朱雀高校の部員なら、口が裂けてもいえないセリフだろう。

『全国大会！』

その言葉を、何の恥ずかしさもなく受け止めている部員たちがいた。

――――――

――――

――

県内６５校が参加するこの大会。世間では短いような期間だが、

選手たちにとっては長い長い、熱い戦いが始まろうとしていた。

Ｎｏ．８４　派手なデビュー戦

朱雀高校と、第一回戦の相手『大田高校』が控え室からコートへと姿を現す。大田高校は良くもなく悪くもない、普通のチームである。

この大会の出場校は全部で６５校。白川第一高校をシードに、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄのブロックに別れて戦う。そして決勝はＡからＢブロックの勝者とＣからＤブロックの勝者２校がインターハイを賭けて戦うのだ。ちなみに朱雀高校はＤブロック。白川第一がＡブロックのシードで、黒沢高校がＣブロックだ。つまり、うまく勝ち残っていけば、準決勝で黒沢高校、決勝で白川第一高校と当たることになる。

朱雀高校の居るＤブロックには４回戦で当たる城清高校がいるので簡単には勝ちあがることはできないだろう。城清といえば純也達がストバスの大会で戦ったことのある、石塚、杉山、大蔵のいる高校だ。前大会でベスト４まで入った高校はＡからＤに分けて抽選されるので、このような風になったのだ。

しかし、朱雀高校の目標はただ１つ、優勝。抽選でどこになろうが関係ない、といった感じであった。

やがて、シューティングが終わり、両チームはベンチへと戻る。まだ一回戦ということもあり、応援は少なかった。次の試合の相手だろうか、いくつかのチームが観戦しているのもわかる。

そんな中、朱雀高校キャプテンの木ノ下薫は皆に向けて言葉を送る。

「いまさら言うことは特に無いが、俺たちも去年とは違うということを見せてやろう」

『オッス！』

やがて、開始の合図がなる。審判が軽く試合での心がけを言った後に、叫んだ。

『両チーム礼！』

その声と同時に両チームからの声が響き渡る。

『おねがいします！』

そして試合が始まった。ジャンプボールをするために、両チームから1人ずつ選ばれた選手が前にサークル内へと歩み出る。

『おぉ～』

その瞬間、観客から歓声が沸いた。おそらく大山博司を見てだろう。朱雀高校にこんなにも大きな選手がいるとは思ってもいなかっただろうか。それに、博司と純也は朱雀高校にとって初のお披露目である。メンバーが大きく変わっていることにも驚いたのかもしれない。

審判からボールが上空へと放たれた。それに向かって大山博司と大田高校の選手がジャンプする。

パシッ！

やはりジャンプボールを征したのは博司であった。身長差が２０センチ近くあったため、当然の結果といえば当然である。

そのボールを長谷川亮がキャッチした。そしてゴールへとボール

を運ぶ。ディフェンスもまったくついてこれないほどのスピードであった。そしてそのまま敵を振り切り、先制のシュートを決めた。

『ワァァァァ』

そしてすぐさまディフェンスに戻った。朱雀のディフェンスはハーフコートマンツーマンである。特徴としては、敵からのファストブレイクを防ぎやすい、更には1対1が基本となるため能力の近い選手をディフェンスすることが出来るといったところ。比較的ゾーンや他のディフェンスと比べ理解もしやすい。純也や博司といった公式経験の少ない選手がいるためにこのディフェンスになるのは必然だったのかもしれない。ただ、ディフェンスを突破されるとカバーが大変だったり、ディフェンスが存在しない場所が簡単に出来たりと、ディフェンスにとっては精神的にも肉体的にもきついディフェンスなのだ。

また、白川第一高校や黒沢高校といった、どこからでも平気で点を取ってくるチームには、ゾーンディフェンスだとうまくディフェンスが機能しないことがあるため、あえて木ノ下薫はこのディフェンスを選択したのである。もちろん、博司が完全に対応しきれなかった、ということもあるのだが…。

相手が攻め込んでくる。そのドリブルを腰を落としながら亮は見ていた。そしてつっこんできたオフェンスを体で止める。薫はディフェンスの大切さを普段から部員に教えていたために、亮や小田原といったディフェンスがうまい選手が多いのも特徴かもしれない。

中には20分で退場してしまう純也のような選手もいるのだが…。そしてしびれを切らしたのか、オフェンスが無理な体勢からシュートを放った。

ボールはゴールに嫌われ、リングの外へと飛び出る。そのボールを狙い、数人が飛んだ。

ダンッ！

地面に足がつき、ボールを持っていたのは朱雀高校の　大山博司であった。普段からのリバウンド練習により、ディフェンスだけは見れるような感じになってきたのだ。

「じゅ…純也君！」

「おう！」

博司は情けなくそう言うと、前に走っていた純也にボールをパスした。ボールを受け取った純也はゴールに向かってドリブルをする。それに大田高校の選手がついていた。

「おいおい、そんなディフェンスじゃあ俺を防げねぇぜ！」

そう言って、得意の高速ターンムーブからのドリブルで相手を振り切った。相手はあわてた様子で純也についていく。

そのままゴールの手前に来た途端、青のユニフォームが宙に舞う。

そして、物凄い勢いでリングに向かってダンクシュートを放った。

ダァァンッ！

物凄い音がコートに鳴り響く。勢いのあまり純也の体がボード側へと浮くほどであった。

少しの静寂の後、歓声が沸き起こった。

『ウワァアアア！』

『何だアイツは！？』

『朱雀にあんなヤツいたかよ！？』

試合を観戦している他チームの部員はかなり驚いていたようだった。今の1プレーはそこまでインパクトのあるものだったのである。

そして純也がディフェンスへと戻る。すれ違い際に亮が純也に話しかけた。

「ケ…派手なデビューかましやがって」

「まぁな、お前のヘタレプレーなんぞ忘れ去られるくらいのダンクだったぜ」

「なんだと！？」

その様子をみた薫が叫ぶ。

「おい、今は試合に集中しろ！」

「す…すみません！」

「あ、すまんね」

そしてそのままディフェンスを再開する。会場がいまだにざわめいていた。きっと朱雀に突然現れたルーキー純也と博司だろう。薫がポジションを変更して出場する公式戦もこれが始めて、ということもあるかもしれない。

このとき誰もが感じていた。

――今年の朱雀は何かが違う。

その予想は正しかった。木ノ下薫はもちろん、永瀬勇希のカットイン、亮の地を這うようなドリブル、高速のクロスオーバー。更には不格好ながらも仕事をこなす博司のディフェンス。

そして、チームを確実に勢いづける純也の荒々しいオフェンスとディフェンス。

あっという間に朱雀に得点が追加されていく。もう今年の朱雀高校は大田高校のような普通の高校が相手に出来るチームではなくなっていた。

木ノ下薫と永瀬勇希が入学して、チームが中堅と呼ばれるようになり、そして更に純也や亮といった新たな風がチームに吹き込まれ、やがては強豪へと移り変わっていく。

そういった印象を見る人々に強く植え付けさせる試合だった。

気づけば１２７対４３というトリプルスコアに近い点差で一回戦を圧勝したのであった。

Ｎｏ．８４　派手なデビュー戦（後書き）

本番は二回戦からですね。

Ｎｏ．８５　主役は俺だ（前書き）

お知らせ：話数もだいぶ増えてきて、探しにくくなると考え、キャラの設定資料を他の小説に移しました。高校別にまとめてますので、キャラがわからなくなったときなどに是非、ご活用してみてください。作者のマイページからリンクが貼られています。

『１ｏｎ１　高校別設定資料』

Ｎｏ．８５　主役は俺だ

インターハイ予選第一回戦、朱雀高校は大田高校に圧勝した。そして現在控え室へと帰る真っ最中であった。

『おいおい、あいつじゃねえの？』

『ああ、あの６番の…』

『ヒソヒソ』

すれ違う他チームの人が純也を見てはヒソヒソと話をしていた。

「あぁ？　てめぇら何見てんだよ」

「こら、やめとけ」

睨み返す純也に木ノ下薫は止めに入った。睨まれた他チームの部員はコソコソとどこかへ消えていった。観客が少なかったとはいえ、先ほどの試合で若干有名人になったようだ。

「これで明日からの試合はマークがきつくなるだろうな」

副キャプテンの永瀬勇希がふとそう言った。それを聞いた純也は得意げな顔で言い放つ。

「へへ、上等だぜ！　少しは手ごたえが無いと俺がつまらねぇからな！ハハハ！」

「だまれ！　まずファール数４って言うのを何とかしろ」

天狗になる純也に、すかさず亮がツッコミを入れた。

「アレは相手が簡単に吹っ飛んだんだよ！　演技だ演技！！」

「まったく…」

その様子を薫は呆れた様子で見ているのであった。

――――――

――――――

――

――朱雀高校体育館。

会場から戻った部員たちは薫の前に集合する。そして、全員集まったのを確認してから薫が語り始めた。

「とりあえず、おつかれさん」

『おつかれさまーっす』

「今日はいい感じでスタートをきれたと思う。この調子で明日からも頑張っていこう」

『オッス！』

「まぁ、所々危なっかしいプレイが多く見られたが、自覚するとしてないとでは大きく違うからな。まだ5試合もあるので、気は抜けないぞ」

「う…うるせぇ」

純也はそのまま何も言えなくなってしまったようだ。強がってはいるが、やはり自分でもルール的に危なげなプレーは自覚しているらしい。それを見抜いた薫は特にこの話題には触れずに話を続けた。

「よし、明日も試合だ。今日はゆっくり休んでくれ。特に明日の試合はこの前に練習試合で戦った佐川商業だ。松岡や加藤もレベルアップしていると思う。気を引き締めていこう」

『オッス！』

「それじゃあ、解散だ。あと、純也と博司は終わったら残ってくれ」

『おつかれさんっした！』

挨拶が終わり、部員達が帰りの準備をしに部室へと移動する。呼ばれた純也と博司は薫の下へと向かった。

「なんだよ！　どうせまたファールがどーとかだろ？」

やれやれ、といった様子で純也は薫に言った。それに薫は落ち着いて答える。

「それについては後は本人次第だと思うからな。俺が今言いたいのは別だ。明日の試合、俺がエースの加藤を抑える。博司は松岡をマークだ。おそらく向こうも同じマッチアップだろう」

更に薫は続ける。

「予想ではお前をマークするのは6番の浅井四郎。特に目立たない普通の選手だ。言いたいことがわかるか?」

「ああ。よーくわかったぜ」

そして純也は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「つまり俺が主役っていうことだろ?」

少し考えた後、薫は答える。

「まぁ、そういうことだ。明日は点をとれるだけとれ」

「まかせろまかせろ! 明日は大船に乗った気分でいるんだな!」

体育館には純也の笑い声が鳴り響いていた。それを呆れた様子で薫が見ていたのは、言うまでも無い。

―――――――

―――――――

――

その頃、佐川商業にて。

「みんなの知ってる通り、次の試合は朱雀高校だ」

監督が選手たちに向かって言った。

「最近練習試合をして負けている相手だが、そんなに差があるとは思わない。あちらも新メンバーを加え、大幅に進化したようだがそれはこちらも同じことだ」

『はい！』

「松岡、加藤…そして武田！」

「はい！」

以前の練習試合では出場してなかった『武田』と言う選手が呼ばれた。

「明日の作戦では武田のディフェンス無しでは勝てない。ここ数日間で身につけたことを頑張って発揮してくれ！」

「はい！頑張ります！」

最後に監督は言った。

「作戦通りにいけば、最後に笑っているのは君たちだ！」

―――――――

―――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「フフフ」

「何よ、ニヤニヤして気持ち悪いわね」

朱雀高校から帰る途中の道で、突然久留美につっこまれる。

「明日は俺が主役なんだぜ！　ヒャハ！」

この感動は俺にしかわかるまい！

「はぁ…。そうやって調子に乗ってると痛い目にあうわよ？」

久留美が呆れ顔でこっちを見る。

「佐川商業だぜ？　前に一度勝ってるっつーの。楽勝楽勝」

「まったく…」

こんな調子でインターハイ予選初日は終わったのだった。やっぱ試合は楽しいなぁ。はやく試合がしたくて待ちきれねぇぜ。

No．86 ゾーン

――インターハイ予選二日目。

現在、朱雀高校対佐川商業の直前である。アップを終え、部員たちはベンチへと戻る。

そして、両チームからそれぞれメンバー表が渡される。

朱雀高校のスターティングメンバーは一回戦と同じ。そして佐川商業は…。

４番　松岡敬吾　Ｃ
５番　高橋竜　ＰＧ
８番　佐田満男　ＳＧ
１０番　加藤良助　ＳＦ
１５番　武田武　ＰＦ

相手ベンチのメンバーを見て、薫が驚いた。それを見た亮が周りに聞こえない声で薫に話しかけた。

「前と違いますね…。佐川のスタメン」

薫は不思議そうな顔で答える。

「ああ…。あの１５番は始めてみるな。一回戦でも見なかった」

１番疑問を抱いていたのは純也であった。

「おいおい薫よぉ。６番いねぇじゃねぇか！誰にマークすりゃあい

いんだよ？」

「そうだな…。新しく出てきた１５番、同じ１年だそうだ。身長差はあるが、抑えてくれるか？」

その言葉を聞いた純也は胸に握りこぶしを当て、勢いよく答えた。

「ったりめぇだ！　俺には身長差なんて関係ねぇ！　むしろ１年なんてザコじゃねぇのか？」

「よし、頼んだ。　身長が近い８番の佐田がいるんだが、ヤツは佐川の隠れエースと呼ばれているんだ。スリーを打たれたら厄介だと思う。彼には永瀬をあてる」

「了解した」

永瀬は軽く返事をした。純也が再び薫に言う。

「おいおい、そんな隠れエースこそ俺が抑えるべきじゃないのか？」

「まずはあの１５番を抑えてみてくれ」

「はいはい、冗談ですよ～っと」

どうやら薫は純也の扱いかたがわかってきたらしい。純也に言葉を返した後、薫はメンバー全員に向かって言った。

「よし、そろそろ試合開始だ！　気合入れていくぞ！」

『オッス！』

薫の言葉に部員全員が返事をした。そして審判の合図と共に、両チームのメンバーがセンターサークルで向かい合った。お互いよく知っているメンバー同士の対決だ。

両チームから選ばれた選手がサークル内で向かうあう。

青朱雀高校、大山博司と、白に赤いラインのユニフォームの佐川商業キャプテン、松岡敬吾である。松岡は博司よりもわずかに身長が低いのだが、センターとしての技術が優れていて、県内でも3本の指に入ると言われている。

加藤は自分をマークした薫に向かって言った。

「久しぶりだな、薫さんよ。前回はウチの監督に丁寧にも伝言くれちゃってよ」

そして不気味な笑みを浮かべて続けた。

「今日は絶対に俺たちが勝つ」

その言葉に薫はいたって冷静に答えた。

「ああ、全力でこい」

「くっ…」

その冷静な薫を見て加藤が一瞬不機嫌な顔をする。

やがて、審判から上空に向かってボールが放たれる。

パシッ！

ジャンプボールは松岡に軍配が上がったようだ。ボールを受け取った高橋竜がボールを運ぶ。それに長谷川亮がついていく。そのまま加藤にパスがまわされた。

加藤をマークしているのは朱雀高校のキャプテン木ノ下薫。隙のないディフェンスで常に加藤にプレッシャーをかけ続ける。

「くっ…」

そしてハイポストに入った松岡にボールがまわされる。

キュッ！

そのままターンをして一気にディフェンスの博司を抜き去りシュートを決めた。

『ワァァアア！』

佐川商業の観客席が盛り上がる。

「博司！　もっと腰を落とせ！」

「ふぁい！」

薫が博司に向かって叫んだ。情けなく博司が返事をする。

長谷川亮にボールが渡り、相手コートまでボールを運んだ。その

時、朱雀メンバー全員が驚いた。

「ゾーンだと…？」

長谷川亮はドリブルをしながらそう呟いた。てっきりマンツーマンで来ると思っていたからだ。敵の陣形は３－２。長身の松岡と新しく出場した１５番の武田をゴールしたに置き、残りの高橋、佐田、加藤を前に配置したもの。常に前方のオフェンス側にプレシャーをかけることが出来て、スリーポイントに対応しやすい陣形である。おそらくこれは薫対策だろう。佐川商業の部員が不気味に笑う。

「ち…。ふざけやがって。俺らをいつまでもワンマンだと思ってナメてると痛てーめにあうぞ」

亮はそう言って永瀬にボールをまわす。３－２はインサイドが手薄になるからだ。永瀬はそのままカットインをしてゴールに向かっていく。まさにその時であった。不意に前方の真ん中で陣形を組んでいる佐田が少し後ろに下がり、永瀬にプレッシャーをかけた。

「ちっ…」

永瀬はそのまま強引にシュートへ持っていく。

バシッ！

そのシュートを見事に松岡がブロックしたのであった。

ルーズボールを高橋が拾い、前方に出ていた加藤にパスをだす。

「っしゃぁ！　速攻！」

そのままゴールへと向かっていく。そこへすかさず薫がついていった。

「くっ…どんだけ戻りが速ぇんだよ！　バケモノが！」

薫のマークをかわしながら次第にゴールに近づいていく。そして一瞬ブレーキをかけた。

その一瞬のブレーキで隙を作りシュートを放つ。そのボールに薫の指先が少しだけ触れる。

パスッ！

無理な体勢から放たれた加藤のシュートは見事にリングに吸い込まれた。

『ウオォォォ』

『いいぞ加藤！！』

シュートを決めた加藤はそのままディフェンスへと戻る。そしてボールが亮へと渡される。

ボールをもらった亮は再びコートへとボールを運んだ。そしてドリブルをしながら考えた。

（なるほどな…。ウチをよく研究してやがる。ディフェンス力のある2人をゴール下に置き、インサイドが手薄になる陣形を克服したのか…。しかも博司はほとんどポストプレーが出来ない。決して朱雀をワンマンと見てたわけじゃないってことか…。だがな！）

「ゾーンはどこかに必ず空きが出来んだよ！」

そう言って、ゴール真横のコーナーのスリーポイントラインに立っていた薫にパスをだす。その時――。

キュキュキュ！

いつの間に薫付近までディフェンスが寄っていた。

「なるほどな…。そういうことか」

薫は何かを理解したように、素早く亮にボールをまわす。亮もどうやら異変に気づいたらしい。

「今度は２－３だと？」

今、一瞬ではあるが佐川の陣形が変化したのを見逃さなかった。

「これは少し厄介だな…」

亮はそう言って辺りを見渡した。

No．87　徹底攻略

亮は辺りを見渡していた。佐川商業のゾーンが普通のゾーンではないことをすでに気づいているのだろう

「これならどうだ…。純也！　あがれ！」

「おう！」

そう言って純也がハイポストでボールを受け取る。陣形はまだ変わっていない。純也はそのままリングの方を向き、シュートモーションに入った。

「なっ！？」

突然現れる松岡の壁に驚いてしまう。

（こりゃあ、博司なんてへでもねぇ…）

松岡を交わし、そのままレイアップをしようとしたときであった。

ドンッ！

松岡の影から現れた１５番に体ごとぶつかってしまった。その瞬間、審判の笛が鳴り響く。

『青６番、チャージング！』

「ちょっと！　今のは…」

「やめろ！　手をあげろ！」

熱くなった純也に薫がすぐに叫んだ。冷静になった純也はしぶしぶ手をあげる。

相手ボールとなってしまった。高橋がボールを運ぶ。そしてボールがエースの加藤に渡った。

加藤はそのままカットインし、シュートにいくと見せかけて佐田にパスをだす。

そしてそのまま佐田はスリーポイントを放った。

パスッ！

綺麗にリングに吸い込まれる。これで得点を７－０とした。リングから落ちてきたボールを拾い、エンドラインから薫が亮にパスを出す。

「どうやらだいぶ研究をされているみたいだな」

「ですね…」

純也は状況を理解していないのか、パスはまだか、まだかといった様子であった。亮はそのままボールを運ぶ。朱雀にしてはテンポの遅い試合となっていた。

ボールが何回かまわされ、永瀬にボールがまわった。そしてその

ままジャンプショットを放つ。

見事にリングに吸い込まれ、点差を5点とした。しかし、そのまま黙っている佐川商業ではなかった。

高橋により運ばれたボールが松岡へと渡される。そしてシュートモーションに入った。それにあわせて博司が飛ぶ。

「ざけんじゃねぇ！」

なんと純也も飛んでいたのだった。無理な体勢のブロックだったため、純也の体が松岡の体にぶつかってしまう。体勢を崩した松岡であったが、何とか指先だけでボールをリングに入れたのだった。

ピィィィイッ！

『バスケットカウンッ！　ワンスロー』

『ワァァアア！』

「ナイス松岡！」

加藤が松岡の胸の辺りを拳で軽く叩く。それに松岡は軽く答えた。

今、松岡がシュートモーションに入ったときに、純也が体ごと不当に妨げてしまったためにファールとなってしまったのだ。それでも松岡はシュートを決めたため、1本のフリースローが与えられた。もし、シュートを外してしまっていたら、2本のフリーローを与えられていたことになる。フリースローによる得点は1点のみとなるため、今回の松岡のプレーは成功すれば3点プレーとなるのだ。

そして、松岡は長身に似合わず、確実にフリースローを決めてき

たのだった。

『ワァァアアッ』

これでスコアが１０対２となった。

「へへ、お前のとこの１年はつかえねぇなぁ、ハハ」

「あぁ！？」

加藤が不意に薫に向かってそういった。それを聞いた純也が怒る。

「やめとけ、ここでキレたらヤツの思うツボだ」

「くそが…。ストリートならあんなヤツら…」

前回の練習試合でもそうだったように、加藤は相手を挑発するトラッシュトークを得意とするのだ。それをわかっている薫はかなり冷静な様子で純也に話しかける。

「わかったよ…」

そう言って試合が再開された。亮によって運ばれたボールが薫へと渡る。

キュキュキュ！

（俺に対する対応が異常に早いな…。つまり、確実にどこかが空いている）

そして薫は少し動き回った後に亮にパスを出す。そして叫んだ。

「打て！」

亮は薫の考えていることがわかっていたようで、その言葉を聞く前からすでにシュートモーションに入っていた。

そしてシュートが放たれる。一瞬入ったかのような感じではあったが、惜しくもリングに嫌われ、外に飛び出る。それに向かって一斉にリバウンドをする。

「うぉおお！」

純也が気合でボールを奪い取った。そしてそのままレイアップの動作に入った。

「バッ…その場で打てばいいだろ…」

亮が周りに聞こえない声で呟く。そして亮の悪い予感は的中してしまった。

ピィィィイ！

『青6番ファール』

『ワァアアア！』

無情にも審判の笛が鳴り響いていた。

その後の第一ピリオドはまったく状況がかわらず、純也を完全に押さえ込まれ、薫と永瀬と亮で反撃をするも、ペースは変わらず…。

そしてそのままの流れが続き、第1ピリオドは18対8という、朱雀にとっては驚くほどのロースコアで終了した。

朱雀の爆発力を期待していた観客たちも静まり返っているのであった。

Ｎｏ．８８　勝利のために

第一ピリオド終了後、朱雀高校ベンチでは、なんともいえない空気が漂っていた。

「くそがっ！」

そう言って純也が、かかとで地面を蹴った。やがて、薫が集合をかけ、みんなに向かって語り始める。

「俺と亮と永瀬は気づいてるだろうが、全員知ってないと厳しいだろうから説明する。時間が無いから良く聞いて欲しい」

薫が作戦版を取り出し、選手みんなに向かって見せる。

「わかってると思うが、佐川のディフェンスは３－２だ。前にいるオフェンスに常にプレッシャーをかける陣形だ。しかし、インサイドは手薄になる…はずなんだが」

そう言って薫は向こうのベンチを軽く見た後に、再び朱雀の部員に顔を向ける

「松岡と新しく入った武田が問題だ」

部員たちがうなずく。

「負担が増えると思うんだが、そのおかげでインサイドをしっかり守られてる」

その言葉を聞いた3年の小田原は薫に向かっていった。

「でも、ゾーンって言うのは、スリーに弱いところが出てくるよね？」

「それが無理なんですよ」

その言葉に亮が割って入った。部員たちの視線が寮に集中する。

「そのスリーを警戒してか、薫さんが９０度のスリーポイントラインに立ったときだけ、ゾーンの陣形が変わってるんですよ。今度は２－３にね」

『えぇぇ！？』

部員たちから驚きの声があがった。そして薫が亮の後に続いた。

「亮の言うとおりだ。今度は９０度からの攻撃に強い２－３へと陣形が変わる」

部員たちは不思議そうな顔で、薫の発する言葉を聞いていた。

「ここまで出来るのは、きっと松岡と武田のディフェンスをかなり信頼しているからだろうな。ポストプレーに関しては全滅させられている」

「ケッ…」

純也が不機嫌な顔をする。第一ピリオドに関しては、おそらく１番足を引っ張ってしまったと思っているからだろう。

「そこでだ」

今度は2年生の我利勉の方を振り向き、話しかけた。

「我利勉、純也と交代だ」

その言葉を聞いて純也が黙っている訳が無かった。

「お前ふざけんなっ！　確かに第一クォーターは活躍できなかったかもしんねーけど、次こそは絶対にいけるっつーの！」

更に薫の両肩を掴んで訴えかける。

「俺に得点を取れるだけ取れって言ってたじゃねぇか！　このままだと腹の虫がおさまんねぇんだよ！」

薫がしばらく何も言えなくなった。選手たちも静まり返る。

やがて、薫がゆっくりと口を開く。

「１０分で3ファール、得点ゼロ。　わかるか？　お前はこの試合完全に抑えられている。　だがな、出番はきっとくる。まだ出番が早かっただけだ。　わかってくれ…」

そして、薫がオフィシャルへと向かう。純也にすれ違い際に言った。

「勝つためだ…」

ベンチが静まり返る。

――試合に出場している者は、それと同時にみんなの想いも背負っているのだから…。

――俺の一瞬の判断で選手の3年間を台無しにすることだってあるのだから。

――わからないのは本当にしょうがないことなんだ。でも、いつか絶対にわかる。　背負うときが来たら必ず…。　それを理解するにはまだ少し早かっただけなんだよ。

――ごめんな…。わかってくれ…。

――ごめんな。

薫はあえてそのことは口には出さなかった。オフィシャルに向かう途中拳が強く握り締められていた。

純也はその場で立ち尽くす。そして我利勉に向かって言った。

「頼むぜ…。絶対に負けんじゃねぇぞ！」

「わ、わかった！」

純也も薫の目から少なからず何かを感じ取ったのだろう。その後はたまに地面をかかとで蹴ったりはするものの、部員たちが思っていたほど暴れもしなかった。おとなしく座った純也に向かって、久留美がタオルを差し出した。

「ほら、おつかれさん。　昨日は天狗になってたから、いい経験になったんじゃないの？」

「ちっ、くだらねぇ」

その様子をみた久留美は、軽く微笑みながら純也に言った。

「薫さんは普段からジュンに期待しているのよ。　今日だって決して残念になんか思ってないわ。　さっき『出番はきっと来る』って言ってたじゃない」

そして、軽いゲンコツのようなジェスチャーをし、笑いながら純也に言った。

「ここで落ちるなんてアンタらしくないわよ」

そう言って、ベンチへと戻っていった。

やがて審判からメンバーチェンジが告げられた。

――――――

―――

第二ピリオドが始まった。朱雀高校は純也と我利勉を交代した。永瀬を純也のポジションへ、そして我利勉は薫のポジションと交代となった。

薫は我利勉の近くまで行き、彼にしか聞こえない声でささやいた。

「俺がおとりになる。チャンスがあったらどんどん打て。博司と勇希、そして俺がリバウンドに行く」

「わかりました！」

我利勉は気合の入った返事をする。自分がどれだけ重要な役割なのか理解したからだろう。その時、朱雀高校ベンチから、人一倍大きな声援が聞こえた。

「亮！　テメーヘボるんじゃねぇぞ！　我利勉は積極的にいけよな！　薫はもっと活躍しやがれ！　永瀬の兄ちゃんいつものドライブはどうしたよ!?　博司はもっと跳べ！」

純也である。その声を聞いた亮がその場で言った。

「ち…、聞いてるこっちが恥ずかしくなる」

それを聞いた薫は亮に言った。

「ハハハ、これはあいつなりのエールだろ」

さらに永瀬も続いた。

「不器用なヤツだよな…」

『ピィィィィ！』

そして、第二ピリオド開始の笛が鳴り響いた。

Ｎｏ．８９　スリーポイント（前書き）

Ｎｏ．８９　スリーポイント

第二ピリオドの開始を告げる笛が鳴り響く。第一クォーター同様、朱雀高校の博司と佐川商業の松岡がセンターサークルで向かい合った。審判により上空へと投げられたボールに、２人一斉に跳びついた。

松岡が弾いたボールを、佐川商業の高橋がキャッチした。そして、リングに向かってドリブルで移動する。

「高橋！」

ポストに入った松岡に、高橋はパスをだす。それに博司がピタリとマークした。

「博司！　持ちこたえるんだ！」

亮が高橋をマークしながら、肩越しに博司を見てそう叫んだ。その言葉を聞いた博司は、腰を落とす。

不格好ながらもしつこい博司のディフェンスに、松岡は加藤へとパスを返した。そこに薫がマークをする。

キュキュ！

フェイントをかけ、中へと切り込んだ。そして、シュートを放つ。

ボールはリングに当たり、外に飛び出た。そのボールを松岡がリバウンドする。そして、そのままシュートを決めた。

『ワァアア！』

これで８－２０と点差は広がってしまった。薫は素早くボールを拾い、亮にパスを出す。そのままボールを運んでいき、セットのポジションになる。佐川商業のディフェンスは相変わらずゾーンのままだ。

ポストにあがった永瀬にパスをまわし、今度は９０度のスリーポイントラインに立った薫へボールが渡る。それに反応し、佐川のディフェンスは薫をマークする。

そして、そのままシュートモーションに入った。ディフェンスの武田がブロックのためジャンプする。

シュッ！

しかし、ボールはリングに放たれることは無く、我利勉にパスを出した。

パスを受け取った我利勉はスリーポイントシュートを放つ。

ゴンッ！

惜しくも外れたボールがリングの輪に当たりバウンドした。外にこぼれるボールを永瀬がリバウンドする。地面に着くと同時に亮にパスを出した。

パスを受け取った亮はすぐにスリーを放つ。

パスッ！

今度は綺麗にリングに吸い込まれたのであった。

「ナイスシュート！　さあ守るぞ！」

「はい！」

薫は亮にそう話しかけると、すぐにディフェンスに戻った。佐川商業のオフェンスが始まる。いつものように高橋が指令をだす。ポストに入った松岡にパスを出した。

そして、そのまま佐川の隠れエースの佐田にパスがまわる。そのままスリーポイントが放たれた。外れたボールを博司が奪い取る。

「博司！　こっちだ！」

亮が前方に走りながら言った。博司は慌ててパスをだす。敵にカットされそうになりながらも、なんとかボールを守りきる。そして薫にボールが渡った。速攻で走る薫に加藤が着いていく。

「絶対にとめてやるよ！」

薫は右手上げシュートモーションに入った。それにあわせて加藤も跳ぶ。

タイミングはドンピシャリだった。

しかし薫はボールを持っていた右腕をいったん引き下げ、リングを通過する。

「なっ！？」

そしてボールを左手に持ち替えバックショットを放った。

ボードを使い、確実にシュートを決める。

『ウォォオオ！』

歓声が沸き起こった。薫は表情1つ変えずにディフェンスに戻った。見事にかわされた加藤は悔しそうな表情だった。

やがて加藤はボールを拾い、高橋にパスを出した。

エンドラインからボールを貰った高橋がボールを運ぶ。

「気を抜くな！」

『オッス！』

薫の掛け声にメンバー全員が叫んだ。それだけで佐川にプレッシャーをかけるには十分なほどだった。しかし、黙っている佐川ではない。

「俺が決める！」

松岡がパスをくれ、とアピールする。高橋はすぐにパスを出した。

さすがはキャプテン、と思わせるような気合の入ったプレーで、博司と勇希をかわし、意地のシュートを決めた。そのまますぐにディフェンスに戻る。

朱雀高校もすぐにプレーを開始する。薫にボールが渡ったかと思うと、そのまま中へと切り込んだ。

シュッ！

ノールックで我利勉にパスがまわる。来る、と予感していたのかすぐにシュート体勢に入った。ディフェンスがブロックをしに跳んでいたのだが、わずかに我利勉のシュートの方が早かった。そして…。

パスッ！

『ワァァァア！』

観客の声援の中でも目立つくらい大きな声が朱雀高校ベンチから聞こえる。

「っしゃぁ！　でかしたぞメガネ！　４点プレーだぜ！」

純也である。言ってることは謎だったのだが、我利勉は特に深く考えずに軽くガッツポーズをして返した。再びディフェンスになり、朱雀高校の部員は一斉に腰を落とす。

『クッ…』

一瞬の気の緩みか、高橋のドリブルにできた隙を亮は見逃さなか

った。亮の差し出した手が高橋のボールに触れる。そして転がったルーズボールを拾い、亮はゴールに向かって一直線にドリブルをした。

「く…コイツ、はえぇ…」

高橋はドリブルをしている亮についていくのがやっとな状況だった。そしてゴール手前で突然レッグスルーをして、急ブレーキをかける。

「なにっ!?」

亮はすぐに、そのまま後方に飛びながらシュートを放った。亮が後ろへ跳んでいるため、高橋のブロックが遅れる。

パスッ!

身長差をまったく感じさせないプレーに会場からは歓声が沸いていた。

『ワァァアア!』

少しずつではあったが朱雀高校にゲームの流れがきているようだった。そしてその流れは佐川のディフェンスにも影響が出始める。

亮、我利勉のスリーを警戒するあまり、ゾーンの陣形が外に広がっていたのだった。そこへ容赦なく勇希と薫がカットインする。そして次第に佐川のゾーンがうまく機能しなくなっていったのである。

しかし相手はあの県内でも優秀なセンター松岡。俺が点を取る、

と言わんばかりにアピールをし、得点を次々に重ねる。その姿はまさに県内三大センターの名にふさわしい働きであった。

一進一退の攻防が続き、やがて第二ピリオド終了を告げるホイッスルが鳴り響いた。

３７対４２という、第一ピリオドのロースコアからは、とても予想ができないようなスコアで第二ピリオドを終えたのであった。

朱雀高校は5点リードされてはいるが、確実に流れを変えたピリオドだった。純也と我利勉を交代した作戦が見事に的中したと言える。

Ｎｏ．８９　スリーポイント（後書き）

あれれ？　と思う方もいらっしゃると思いますが、各ピリオドのゲームの始まり方が、新ルールの『オルタネイティング・ポゼション・ルール』と呼ばれるものではなく、旧ルールを使って書いています。これは私自身、公式で新ルールを使ってプレイした経験が無く、あまり慣れ親しんでいない、ということもあるのですが、決して今のルールを否定しているわけではなく、単に新ルールを混乱しないように上手に描写する力が私には無いと思ったからです（ただでさえ描写がヘタなのに　泣）。　混乱してしまった方、申し訳ございませんでした。

Ｎｏ．９０　キャプテンの姿

第二ピリオドが終了し、両チーム共控え室に移動する。そしてここは朱雀高校の控え室。薫が部員全員に向かって言った。

「よし、順調に点差を縮めることができたな。このペースで最後までいこう」

『オッス！』

そのまま椅子に腰をかけ、我利勉に向かって言った。

「よくやってくれた。我利勉のおかげでペースを掴むことができた」

その言葉を聞いた我利勉は照れくさそうに答える。

「はい…。でも、最後の方はほとんど入らなくなってましたけど…。ゴホッゴホッ」

極度の緊張と、ハイペースな試合展開から、かなり疲れている様子だった。しかし、元々スタミナが無い我利勉が、普段の何倍も頑張っていたのだ。それをわかっていた薫は再び我利勉にお礼し、今度は小田原君に向かって言った。

「よし、相手のディフェンスが崩れかかっている今がチャンスだ。小田原君、いつもの走るバスケで完全にペースを掴もう！　ディフェンスも期待しているぞ！」

「うん。わかった」

小田原君がうなずいた。どうやら後半は勝負に出るようだ。それを理解した部員たちは再び気合を入れる。

――――――

――――

――

一方、佐川商業控え室。

監督が座っている部員に向かって話しかける。

「よく前半リードで持ちこたえてくれた！」

前半フル活動をしていた松岡が、肩で息をしながら答える。

「はい…。朱雀のペースになると厄介でしたから。でもむこうのペースになりかけているのも事実だと思います」

更に続けた。

「最後の方は木ノ下にも普通にスリーを決められていました。もうゾーンだけでは彼を抑えることはできない…」

部員たちも気づいていた。後半はゾーンディフェンスがまったく機能していなかったことを。仮に機能していたとしても、木ノ下薫をそれだけで抑えられるとは思えなかった。

やがて、エースの加藤が監督に言った。

「監督！　後半はあたりましょう！　俺が絶対に木ノ下薫を抑えてみせます！」

「うむ…。そうだな…」

考える監督に向かって松岡が続いた。

「大丈夫です。オフェンスも俺を使ってくれ！　ディフェンスではゴール下は絶対に入れさせない！」

部員全員が監督を見る。最後は自分たちの力を信じて戦いたいのだろう。

「わかった。今までの練習を信じて戦おう！　後半はマンツーでいく」

『オッス！』

部員たちの返事が控え室に鳴り響く。

――――――

――――

――

『ピィイイ！』

後半戦開始の笛が鳴った。

前半同様、博司と松岡がセンターサークルで向かい合っていた。朱雀高校は我利勉と小田原君を交代、佐川商業はディフェンス要員で入っていた武田と、元々スタメンだった浅井四郎をを交代してきた。

これから何かが起こる。

観客もそんな予感がいているのかもしれない。極端に会場が静まり返った。

やがて審判によるジャンプボールが行われ、第三ピリオドがスタートした。ボールをキャッチした加藤はそのままリングに向かって一直線に進んだ。それに薫がマークしていく。そこへ佐川の浅井四郎がスクリーンをした。

その一瞬の隙で加藤がシュートモーションに入る。そして――。

「名門じゃねぇくせに調子にのんな！」

そう言って気合のシュートを決めた。

『ワァァアア！』

歓声が沸く。すぐに亮がエンドラインからボールをうけとり、ボールを運んだ。ディフェンスがマンツーマンに変更されているのに驚いた亮であったが、ディフェンスを軽々かわしていく。

そして切り込んでいく永瀬に向かってタイミングよくボールを出した。

「させるか！」

シュートモーションに入った永瀬に、松岡がブロックをする。永瀬はそのブロックを冷静に、空中でダブルクラッチでかわし、シュートを決めた。

点を入れられた佐川は、まったく怯まず、すぐさまボールを高橋に渡し、試合を再開する。ボールが何回かまわった後に、佐田にボールがまわる。そして、スリーポイントが放たれた。

スパッ！

リングにかすりもせずに吸い込まれた。あっという間にお互いに得点が積み重ねられていく。かなりハイペースな試合展開になっていた。

朱雀高校がリードすると思いきや、松岡、加藤、佐田の活躍によりわずかにリードしていく。

「うぉおお！」

加藤が再びディフェンスをかわし、シュートを決めていた。これで再び点差を5に広げる。

キュキュキュ！

亮があっという間にディフェンス2人を抜き去り、薫にパスをだす。早いモーション、高い打点から繰り出されるシュートは、佐川の戦意を一瞬で喪失させるほど綺麗に決まる。しかし、黙ってやられている佐川ではなかった。

「俺を使え！！　絶対に決める！」

松岡がポストでそう叫んだ。その言葉をきいた高橋は何の迷いも無くポストへパスを出す。

ボールをキャッチした松岡は博司のディフェンスを振り切り、シュートを決める。

『ワァァ！』

まさにチームを引っ張るも者の姿であった。そのまますぐにディフェンスを開始する。その姿をみて佐川の士気が高まっていった。松岡の働きが、チームの切れそうになる気力をつなぎ止めていたのだった。

負けじと薫がボールを貰う。４５度のスリーポイントラインからシュートモーションに入った。それに加藤が跳び付く。

しかしそれはフェイントで、そのまま中へと切り込んだ。ゴール付近にいた松岡が必死にカバーリングに入った。

ジャンプした薫は、左手でカバーをして松岡との距離を少しだけ作る。

そして、右手のボールを、肘をあまり曲げずに手首の力で松岡のブロックを超えるようにフックシュートを放った。

スパッ！

軽くループをしたボールがリングを綺麗に通過する。

松岡よりも１０センチも低い薫が、次々に佐川から得点してゆく。

それをみた観客が一斉に盛り上がっていた。

両チームのエース同士がぶつかり合う。

Ｎｏ．９１　魅力

朱雀高校対佐川商業の試合は第三ピリオドにかかわらず、ハイペースな戦いが繰り広げられていた。その中でも特に目立つのが、お互いのチームのキャプテン『木ノ下薫』と『松岡敬吾』である。

両チームのエースが次々に得点していき、それに触発された他メンバーも負けじとついていく。

『ウオォオオ！』

『いいぞぉおお！』

二回戦での戦いがこんなにも激しい戦いになるとは思ってもいなかったのだろう。観客はどちらのチームを応援するわけでもなく、ひたすら声援を送っていた。

そして…。

スパッ！

第三ピリオド終了間際、またしても木ノ下薫のスリーポイントがリングに突き刺さった。そのフォームは後半戦の疲れをまったく見せない完璧なフォームで、一瞬時間が止まったような錯覚にすら陥る。

これでスコアは６７－６７の同点となった。そしてお互いのメン

バーがベンチに戻る。

「松岡！　よくやった！　私はお前を誇りに思うぞ！」

佐川のベンチに帰ってきた松岡に、監督が興奮した様子で話しかける。しかし、松岡は開いたタオルを頭にかけ、顔をふせた状態でうなずくだけだった。肩から息をしていて、その様子は後半戦開始前とは比べ物にならない。

松岡だけではない。エースの加藤も、佐田も限界が近づいているようにも見えた。

このとき、選手全員に1つのシーンが思い浮かんでいた。

第三ピリオド終了間際に放った薫のスリーポイントだ。一切疲れを見せず、完璧なフォームで決めてきた。

――なぜ、あの場面で決めてくる。

メンバー全員がそんな顔をしていた。それと同時にこう思ったに違いない。

――薫はまだ力を残している。

佐川のメンバーは見えない力に押しつぶされそうになっていた。そこまで木ノ下薫のプレーが、相手にプレッシャーをかけ続けているのだ。

このとき、松岡がゆっくり顔を上げた。そして…。

「いくら強いとはいえ、木ノ下薫も同じ高校生だ。それに、ここまで1度もリードされずにやってこれたじゃないか…。まだいける…」

メンバー全員が松岡を向いた。

「俺たちは白川、黒沢、城清などの名門に声もかけられなかったようなヤツらの集まりだ。ベスト16に定着して何年になる？」

そして、メンバーを一通り見渡してから続ける。

「それがどうだ？　今の俺たちのプレーはあの木ノ下薫相手にも十分通用している。名門に入ったか、そうじゃないかなんて所詮は中学校のときの評価だ…。俺は、このチームが1番成長したチームだと思っている。自信を持って最後まで戦おう！」

――俺たちは強い。

松岡は最後にそう言い放ち、部員たちの返事が鳴り響く。

一方の朱雀高校ベンチでは、薫がメンバーの前に立ち話しかけていた。

「残り10分で同点まで追いついた。みんなよく頑張ってくれた！
だが喜ぶのはまだ早いぞ」

「喜んでるやつなんか誰もいねーよ」

純也がベンチの背もたれに肩をかけ、不機嫌な様子で返す。それを聞いた薫は笑った。

「はは、確かにそうだな。これで満足してないのならよかった」

それを聞いた亮が薫に向かって言った。

「そうですよ！　俺らの目標はずっと上なんですから！」

上、とはおそらく優勝のことだろう。メンバーたちもそれをわかっているようで、真剣な顔でうなずいた。そして、薫が急に真面目な顔になって話し始めた。

「まぁ、真面目な話をする。よく聞いてくれ」

ベンチにいる選手全員が薫の方を向いた。

「相手の松岡は強い選手だ。あんなにいい選手はめったにいない」

この試合での松岡の活躍を見てきた朱雀高校部員の中に、彼をヘタだと思っている選手など1人もいなかった。

「だが…」

その瞬間、部員たちが唾を飲む。そして薫が続けた。

「松岡のディフェンスに苦戦しているようなら、白川第一の御庭慶彦、永瀬朋希の2人からは絶対に得点することは出来ない」

御庭慶彦とは、県内唯一の2メートル越えの選手である。ポジション取りに非常に定評のある選手だ。そして永瀬朋希は最高到達点が３ｍ４０後半という白川のゴール下の守護神。

「残りの１０分、取れるだけ点を取るぞ！」

『オッス！』

一瞬静まり返ったベンチだったが、薫のセリフが逆に選手の気持ちに火をつけたようだ。そして純也に向かって言い放つ。

「純也、いくぞ」

そのセリフを聞いた純也は、背もたれにかけていた肩をゆっくり下ろし、不気味な笑みを浮かべながら言う。

「やっとかよ。こっちはアップが必要ねぇ感じに煮えたぎってんだからよ。危うくシケた試合見て冷めるとこだったぜ」

そう言って胸の前で拳をぶつかり合わせ、音を鳴らす。永瀬が薫の前に近づき、本人にしか聞こえないような声で呟いた。

「役者だな」

それを聞いた薫は何がなんだかわからない、といった様子で答えた。

「ん？　なにが？」

あまりの天然っぷりに永瀬が笑った。そしてまた薫にしか聞こえ

ない声で言う。

「クク…相変わらずだな。部員たちもそうだが、俺も弟の名前を出されて頑張らないわけにはいかないからな」

「あぁ、スマンスマン。別にそういうつもりじゃない」

こちらもまったく狙って言ってたわけではないようだ。永瀬も3年間一緒にやって来て、このバスケットバカがどんな性格なのかを理解していたため、すぐにベンチに戻った。

知らないうちに選手の心に火をつける。

自らのプレーで周りの選手を引っ張る。

そして説明するには難しいような魅力が彼にはあった。

薫についてきた者、彼に憧れて入部した者、諦めかけても薫に救われた者、変わるキッカケをもらった者、そして、薫を倒すために入部し続けている者――。

このメンバーが出来たのはまったくの偶然ではなかったのかもしれない。

そして、第四ピリオド開始を告げる笛が鳴った。

Ｎｏ．９２　成長する人間

ジャンプボールにより試合が始まる。最初にボールを手にしたのは佐川商業の加藤であった。

「くそ…、どきやがれっ！」

加藤が勢いでディフェンスをかわしていく。そして、レイアップシュートのモーションに入った。

「よし…」

その時、彼の手によって放たれたボールが何者かの手によりブロックされてしまった。

朱雀高校、木ノ下薫である。

彼はそのままドルブルでゴールへと向かっていった。加藤が必死についていくが、あっけなくかわされてしまう。そして、そのまま前を走っていた純也を見る。

「逆転のシュートだ。お前が決めてみろ！」

薫はそう呟くと、純也に向かって勢いよくパスをだした。純也はそのボールを軽々とキャッチする。

「まかせとけって」

そう言ってドリブルを開始し、ゴール付近までボールを運ぶ。そ

のままシュート体勢になった。

「させるか！」

浅井四郎が純也に抜かれ、カバーが松岡が入った。松岡に向かって純也が勢いよく向かっていく。それをみた亮が声をあげた。

「ア…アホ！　さっきもそれでやられたじゃねぇかよ！」

（よし、来た。こいつにはジャンプシュートが無い！　これでファール４つ目だ！）

松岡が自信満々で構えた。しかし純也はジャンプして体を９０度にひねり、体勢を低くした。そしてボールを膝よりも更に下にして、そこからすくい上げるようにレイアップを放った。

体勢を崩した純也はそのまま地面へと倒れるが、ボールは綺麗な弧を描いてリングに向かっていく。そして…。

スパッ！

『ウォオオオ』

そして純也が起き上がり、肩越しに松岡を見て言った。

「ワンパターンが何度も通じると思ってんじゃねぇよ」

そして、そのままディフェンスに戻った。残された松岡が悔しそうな顔をする。しかし、すぐに我に返り反撃を開始した。高橋にボールを渡し、そのまま敵コートへとボールを運んだ。パスをまわし、

再び松岡にボールがまわった。そのままリングの方を向き、シュート体勢に入った。

「うぉおお！」

先ほどの仕返し、とばかりに気合のこもったシュートを放った。しかし、突然現れた手によりブロックされてしまった。ブロックをしたのは博司でも永瀬でもない。

またしても朱雀高校６番、石川純也であった。２５センチも差のある松岡のボールを、まるで叩き割るかのように地面に叩きつけた。第一ピリオドで確かに沈めたはずの選手が、次々に佐川商業の大黒柱、松岡の心をへし折っていく。

まだいける、と必死に繋ぎ止めていた『何か』を音をたてて容赦なく粉々にしていった。

（こんなはずでは…）

亮から純也にボールが渡される。そのボールを勢いよくゴールに向かってドリブルで運んだ。

（俺たちはもっといけるはずなのに…）

必死に松岡は走るが、今までのピリオドでフル活動だったため足が思うように動かなかった。そして純也は誰にもパスをするわけでもなく、再びシュートの体勢に入った。

（こんなはずじゃ…）

ダァァァンッ！

そんな松岡の気持ちなど一切お構い無しに、純也がダンクを決めた。派手なダンクで会場中から歓声が沸いた。

松岡はスリーポイントライン付近で、そのダンクを見つめていた。

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊

『桜西中の松岡敬吾です！　中学校でセンターをしてました！　よろしくお願いします！』

随分と大きな新入部員を見て、バスケ部員たちからは驚きの声が上がった。照れくさかった。名門高校からまったく声がかかることが無い俺が唯一注目されること――。

当時の俺には身長くらいしかなかっただろう。高校1年で身長が１８０後半もあれば嫌でも目立つ。

この身長のおかげか、新チームになるとすぐに試合に使われた。高校のレベルのバスケにまったくついていける気がしない。

そんな俺だから、負け試合の責任もすべて俺に押し付けられた。

いや、実際俺のせいだったことが多い。
そんなことがあるとすぐにやめたくなった。
――変わりたかった。
バスケがうまくなりたかった。
そんな時、監督が変わり、現在の監督になった。やがて監督と話す機会があり、思い切って聞いてみた。
『俺、強くなれますか？』
監督は何かを思い出すかのように俺に向かっていった。
『人間が成長するタイミングというのは本当に人それぞれでね。小学校で上手と呼ばれていた子が中学校で埋もれてしまう、なんて話はよくあるな』
『それは中学校、高校も同じ。大学に行ってから開花する人もいるよ。私はそんな人を沢山みてきた』
『じゃあ、俺は…』
そんなことならずっと埋もれてる人間もいたはずだ。そんな俺に監督は続けて言った。
『ただし、成長する人間っていうのは、どこかで諦めずに努力している人間なんだな。これだけは確実だ』
『君の質問に答えるとするなら…』

――強く『なれる』

答えは単純だった。名門に入れなかったのも、うまいプレーが出来ないのも、自分のどこかで、何かのせいにしていたのかもしれない。確実にうまくなるなんて保障されてる人間は滅多にいない。

その後、俺はひたすらバスケに打ち込んだ。プレーにひたすら磨きをかけた。うまくなるかなんてわからない。でも俺は練習を繰り返した。

そして、気がつけば県内でも目立つセンターになっていた。

成長できた。確実に成長できた。

やがて、1つ下に加藤、佐田という心強い味方が加わり、更に上を目指せるチームとなっていた。

チームも成長しているんだ。

簡単に負けるわけが無い。

――――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊

「うおおお！」

松岡が気合でシュートを決めた。そして叫ぶ。

「戻れ！　まだ終わったわけじゃない！」

『おう！』

体に鞭を打つようにして走り回る。それを見た他のメンバーも必死についていく。

「っしゃぁ！　そうでなきゃ面白くねぇぜ！　かかってこいよ！」

純也がそう叫んだ。それを聞いた加藤も叫ぶ。

「上等だコラァ！　覚悟しやがれ！」

両チームの意地がぶつかり合っていた。

Ｎｏ．９３　決着

インターハイ予選の二回戦がこんなに熱い試合になるとは、誰が予想しただろうか。　観客の盛り上がりを見るだけで、どれほど見ごたえのある試合なのかがわかる。

「博司！　こっちだ！」

「う、うん！」

リバウンドをとった博司に亮が叫んだ。その言葉を聞いた博はすぐに亮にパスをだす。第４ピリオドであることをまったく感じさせないドリブルで佐川商業のディフェンスをかわして行き、そのまま薫にパスをまわす。

ディフェンスがいるにもかかわらず、高い打点からスリーポイントを放った。ディフェンスがまったく対応できないほどのスピードであった。

「リバンド！」

薫がそう叫び、攻守共にリバウンド体勢に入る。しかし、それも無意味だったようで、薫の放ったシュートは綺麗にリングに納まったのだ。

「くそ…」

松岡がすぐにエンドラインから高橋にボールを出す。そのまま味方コートまで行き、加藤にボールを出した。加藤が中へと切り込ん

でいく。

「調子にのるんじゃねぇ！」

そう叫び、レイアップシュートをする。加藤の手からボールが放たれた。

「なにっ！？」

またしても薫であった。加藤のシュートを完璧なタイミングでブロックしたのである。薫はそのままボールをキープすると、前を走る亮に向かってパスを出した。

そして、亮がスリーポイントライン付近に達し、今度はノールックで純也にボールをパスした。

助走をつけた純也がリングに向かってドリブルしていく。ディフェンスに来た浅井を軽々とかわし、そのままリングに向かってジャンプした。

「だっしゃぁああ！」

謎の叫び声と共に、リングが叩きつけられる凄まじい音が周囲に鳴り響いた。歓声が一斉に沸いた。

『うおぉおおお』

『なんてクレイジーなダンクをするやつだ！』

『アイツ本当にリング壊すんじゃねぇのか！？』

観客を魅了するプレー。

ダンクは他のシュートと同じで、2点しか入らないシュートだ。しかし、本当に同じ価値しかないのだろうか。いや、少なくとも今の純也のプレーは佐川の選手たちの気力を奪うには十分過ぎるプレーだった。

そして、佐川商業のオフェンスとなった。高橋がドリブルをしながら辺りを見渡す。

まさにその時、亮が一瞬の隙をつき高橋のボールをスティールした。これで今日の試合二度目である。そのまま物凄いスピードでゴールに向かっていった。

そして確実にレイアップシュートを決め、点差を7点に広げたのだった。

試合時間も残り5分をきっていた。点差が二桁になるのだけは避けたい佐川。心理的にも一桁と二桁の点差では、全然重みが違う。

「こっちだ！」

ポストに松岡があがり叫んだ。高橋は松岡にパスを出す。気合でそのまま振り替えり、シュート体勢に入ろうとしたその瞬間。

（な！？）

膝の力が急に抜けたように、松岡がバランスを崩した。その間に、永瀬がボールを奪う。

松岡はこの試合大活躍だった。それは、この会場の誰もが認めていた。自ら点をとり、チームの士気を高める。

しかし、少しずつではあるが、プレーの1つ1つが松岡の体に負担をかけていたのは事実だ。

大げさな例えだが、松岡1人で朱雀のメンバーを相手していたようなものなのだ。松岡がその場にしゃがみこむ。そんな松岡を一切お構い無しといった様子で朱雀高校のオフェンス陣が攻め続ける。そして再びボールが薫に渡った。その場からスリーポイントシュートを放つ。

佐川のディフェンスは、ただ呆然とボールを見つめていた。ここまでの流れで、木ノ下薫がシュートを外すイメージがなくなってしまっていたのだ。もちろん、スリーポイントを全部きめていたわけではない。

それほどの錯覚をおこさせるほどの完璧で綺麗なシュートだった。

そして、まるでこのような結果になることが最初から決まっていたかのように、ボールがリングに吸い込まれたのであった。

『タイムアウト!』

そして、審判の合図と共に松岡のメンバーチェンジが告げられたのであった。ゴール下で動けなくなり、しゃがみこんでいる松岡に加藤が歩み寄る。

「すまない…」

松岡が申し訳なさそうに加藤に言った。加藤は松岡の肩を首にかけ、ベンチに戻りながら返す。

「心配すんなって。まだ終わったわけじゃねぇ」

その言葉を聞いた松岡は軽く笑みを浮かべながら、

「そうだな…」

と言って、ベンチに向かって言った。その姿を見た観客が松岡に声援を送る。すでに試合が終わったかのような盛り上がりであった。

残り時間も4分と少しといったところ。松岡に代わって、一年の武田がメンバーに加わり試合が再開された。

その後の展開は誰もが予想していたような流れだった。松岡がいなくなった佐川は、オフェンス、ディフェンス共に戦力が低下してしまい、朱雀の一方的な展開になってしまったのだ。

加藤、佐田が粘るも、木ノ下薫や永瀬の厳しいチェックにより得点することができない。

そこに朱雀高校の容赦ないオフェンスにより、みるみるうちに得点を追加していく。佐川商業のメンバーも、必死についていこうとしたのだが1度流れにのった朱雀高校を止めることは出来なかった。

『試合終了！』

やがて、審判による試合終了が告げられた。

スコアは９７対７５。第３ピリオドまでの接戦が嘘のような点差である。会場からは両チームに熱い声援が送られていた。最後まで諦めずに戦った佐川はもちろん、今回も一回戦のような爆発力を見せてくれた朱雀高校に、感謝と同時にこれからの期待の意味も込められていることだろう。

両チームがセンターサークル付近で向き合った。礼が終わり、加藤が薫に歩み寄った。

「ち…、この先絶対に負けんじゃねぇぞ。あとそこのチビ！　来年は覚えてやがれ！」

チビとは純也のことである。加藤、佐田はまだ2年生であるため、まだまだ純也たちとは戦う機会があるのだ。

「ああ、いい勝負だったよ。ありがとう」

薫は笑顔で対応するが、純也が黙っているわけではない。

「来年だぁ？　いつでもかかってきやがれ！　場所なんてどこでもいいからよぉ」

熱くなる純也を無視して、薫は松岡に近づいて行った。そして、ベンチに座っている松岡に話しかける。

「いい試合だったよ。ありがとう」

松岡も嫌な顔1つせずに返事を返した。

「悔しいが完敗だよ。どんなに必死に引き離しても、君を中心にくらいついてきた。一体なにが君を支えてるんだ？」

薫は少しだけ考え、笑顔で松岡に言った。

「意地さ」

その言葉に松岡は驚いたようだ。

「驚いたな。試合でシュートを決めても表情一つ変えずに、常に冷静な君からそんな言葉が聞けるとは…」

特別な練習方法や、気持ちの持ち方などがあると思ったのだろう。それを聞いた薫は再び笑顔で答えた。

「俺はまだまださ。それに、機械じゃないんだし、練習したこと以上のことは出来ないしね」

その言葉を聞いた松岡は、何かに納得したような様子だった。そして、薫に向かって手を差し出し、握手を求める。薫はすぐにその手を握った。

「あとの４試合、絶対に勝ってくれよ！　君たちなら優勝も狙えるはずだ」

「ああ、頑張るよ」

そう言って薫はベンチの方に戻った。チームに指示をだし、観客に挨拶をする。

『ワァァァ！』

『次も頼むぞ！』

『永瀬く～ん！』

薫がいなくなり、松岡が監督に話しかけていた。

「監督、監督が昔、僕に言ってくれた言葉は本当だったんですね」

監督は何のことかすぐにわかったのだろう。笑顔でうなずいた。

「さっき木ノ下薫が言ってましたよね。練習したこと以上のことはできない、と」

チームにテキパキと指示を出している薫を遠くから見ながら松岡は続けた。

「彼も決して才能だけでやってるんじゃないんだな、って。僕はこれからもバスケを続けますよ」

その言葉を聞いた監督は笑顔で松岡に語りかけた。

「私もそう思う。木ノ下薫はまだまだ伸びるよ。そして、君もね」

そして佐川の選手がベンチに帰ってきた。笑顔でいる者、泣いている者とさまざまだった。松岡は選手たちに元気よく言った。

「よし、挨拶に行こう。お客さんも沢山応援してくれたんだ」

そんな松岡に加藤は言った。

「松岡！　来年は必ず勝つ！　俺と佐田、武田を中心に！　今までありがとな！」

加藤の隣では、佐田や武田が真剣な顔をしていた。それにつられて周りの1、2年生も頭を下げた。

「わかった。お前たちならきっといけるはずだ。ありがとう」

そう言って挨拶に向かった。まだ足が完全に動くわけでは無いようで、ゆっくり小走りで移動していた。

『松岡ぁあ！　感動したぞ！』

『またいつかそのプレーを見せてくれ！』

『来年も応援するぞ！』

その言葉を聞いて、松岡がその場で立ち尽くす。

「悔いは無い…はずなのに…」

松岡の目からは涙が溢れていた。それをみた他選手たちも共に涙していた。

「ありがと…ございました…」

『ありがとうございましたっ！』

その後、会場はしばらくの間声援が鳴り響いていたのだった。

―――――――

―――――

――

「あ～、危なかったなぁ」

控え室で純也がタオルを振り回しながら言った。それにすぐさま亮がツッコミをいれる。

「まったくだ。ヒヤヒヤさせやがって」

そこに薫もやってきた。

「まぁ、色々と良い経験になったんじゃないか？　明日から気をつければいい」

「これくらいのハンデをやったほうがいいかなーと思ってな。ははは！」

薫は再びやれやれ、といった様子で純也を見ていた。しかし、言いたいことは本人が1番わかっていると思ったので、深くはつっこまなかった。そして選手全員に向かって言った。

「よし、この調子で後の4試合も戦おう！」

『オッス！』

大会はまだ2回戦が終わったばかり。気を抜いてはいけない。選手たちもそれをわかっているようで、真剣な表情で返事をしたのだった。

Ｎｏ．９４　第三試合

インターハイ予選三日目。

朱雀高校の体育館でアップを終えた選手たちは、会場へと移動する。移動手段は稲川カップに行くときもお世話になったバスである。

「よし、みんないるな。では、運転手さん、今日もお願いします」

『おねがいしゃーっす』

木ノ下薫がメンバーの出席を確認した後、運転手さんに挨拶をする。運転手さんはそれに笑顔で答えていた。

今日勝てばベスト８進出となる。準々決勝からは来週になるので、今日見事に勝ち抜くことが出来れば選手たちには一週間の時間が与えられることになるのだ。

「今日の相手って強いのかよ？」

純也が前列に座る薫に話しかけた。薫は飲んでいたジュースのキャップを閉め、後ろを振り向いて答える。

「まぁ、ベスト１６だからな。それなりの力はあるだろう」

そして再び前を向いてから言った。

「しかし、昨日ほど苦戦することはない相手だ」

昨日、とは佐川商業戦である。昨日はまさに激戦だった。二回戦

とはいえ、ベスト8と言ってもおかしくはない試合だっただろう。

「昨日？　なら楽勝じゃねぇか」

純也はそう言って背もたれにグッタリと肩をおろした。

――――――

――――

――

今日でベスト8が決まる試合というだけあって、会場はかなり混雑していた。近くに貼られていたトーナメント表を見て、亮が呟いた。

「白川、黒沢、城清…。予想通りといえば予想通りなんですが…。白川の点差がひどいですね…」

一回戦156対22、二回戦133対38、3回戦144対49。白川第一高校は早くもベスト8進出を決めていた。黒沢高校も白川同様、すべて100点以上の得点でベスト8進出を決めている。

「それでも、途中から全部二軍なんだぜ」

永瀬が亮に言った。そのセリフから強豪校の選手層の厚さが伺える。そして薫がトーナメント表を見て選手たちに語りかける。

「城清は確実にベスト8を決めてくるだろうな。俺たちも一足先に決めていこう」

『オッス！』

薫の言葉に選手たちも続いた。

――――――

――――

――

『朱雀高校対藤岡高校の試合を始めます。礼！』

『おねがいします！』

選手たちがお互いに向き合って礼をした。朱雀高校は昨日と同じスターティングメンバーだ。博司がセンターサークルで相手と向き合う。相手の選手は１８０ｃｍ前半といったところだろう。審判の手により、ボールが上空へと放たれる。

パシィッ！

博司がボールを手で弾き、亮にボールが渡った。そのまま物凄いスピードでディフェンスをかわし、あっという間にシュートを決めたのだった。

「よし、ディフェンスだ！」

「はい！」

薫が亮に声をかけ、すぐにハーフコートマンツーマンに戻る。味方コートに入ってきたディフェンスを朱雀高校の選手たちが厳しくマークする。

『くっ』

ボールが何度かまわり、苦し紛れのシュートが放たれた。ボールはボードに当たり外に弾かれる。そのボールを永瀬がリバウンドした。そして、ドリブルをあまりせずに前を走る亮にパスを出す。

亮はボールをしっかりとキャッチして選手たちに声をかけた。

「1本大事にいこう！」

そのセリフを言ったそばから純也がハイポストへと上がった。そこへ純也よりも10センチほど大きい選手がマークする。

その時亮の周辺視野に青のユニフォームが映った。亮は純也の右方面を通過させるようにして鋭いパスを出した。純也はおいおい、と言った様子で通過したボールを振り返る。

なんと、そのボールを永瀬がタイミングよくキャッチし、そのままレイアップシュートを決めたのだ。

「ナイスパス」

永瀬が亮にそうささやくと、そのままディフェンスに戻った。

「ちぇ」

純也は不満げな顔をしつつも、亮のパスがあまりにも絶妙なパスだったために、実力を認めざるをえない、と言った様子だった。そして再び朱雀高校のディフェンスとなる。

ドリブルをしている相手に薫がマークする。フェイントを何度かかけてみるが、まったく通用しなかった。そして諦めた様子でパスをまわそうと辺りを見渡した瞬間―。

薫が一瞬の隙をついてスティールに成功したのだ。転がったボールをすぐに拾い上げゴールに向って行った。ディフェンスも必死に着いていくのだが、あっさりとかわされてしまう。

そしてそのままレイアップシュートを決めた。

薫はすぐにディフェンスに戻る。確実なプレーで次々に得点を積み重ねていく。本当にこれが三回戦の試合なのかも疑ってしまうような試合展開だった。朱雀高校の一方的な試合となっていた。

トップに上がった薫が亮にパスをだす。亮は自らゴールに向って切り込んだ。ゴール付近でカバーに入ったディフェンスが現れる。

亮は急に自分の後方にむかってノールックでパスを出した。

薫がそのボールをキャッチし、素早いモーションで、高い打点のスリーポイントを放った。

スパッ！

そのボールは綺麗に吸い込まれる。

『ワァァァ！』

『すげ～！』

あっという間に得点していく朱雀高校に大歓声が沸いた。その後も一方的な展開が続き、そのまま前半戦終了のブザーが鳴り響いた。

５６対２７という朱雀高校のダブルスコアで前半戦を終えたのだった。

Ｎｏ．９５　不気味な集団

ここは朱雀高校控え室。前半戦を終えたばかりにもかかわらず、選手たちはまだまだ元気そうな様子だった。

「後半戦もこの調子だな。気を抜かずに頑張ってくれ」

『オス！』

部員たちが返事をした。そして亮が口を開く。

「イヤでも気合が入りますよ。あんな高みの見物をされたらね」

この試合を観客席から静かに見つめている２つの集団がいた。１つは黒に赤のラインのユニフォーム、白川第一高校。もう１つは深緑のユニフォームの黒沢高校である。あまりにも有名なユニフォームのため、イヤでも目に付くのであった。

「奴らはもうベスト８だからな。随分と余裕そうな感じだったがな…」

永瀬の言葉を聞いた純也は嬉しそうに言った。

「まぁカズには決勝まで来てもらわないと困るからな。反対ブロックなのはめんどくせぇけど、最高の舞台じゃねぇか」

一人で盛り上がる純也に、木ノ下薫は周りに聞こえないような声で呟いた。

「白川…か」

そして、そのまま椅子に座った。

―――――――

―――――

――

その頃、観客席では例の黒の集団が不気味な様子でコートを見つめていた。そう、白川第一高校である。一般人から見ても、この集団からは何か不思議なオーラが感じられるほどであった。

その中の１人、背番号１３をつけた１年生レギュラー佐々木健之助がキャプテンの森村一樹に話しかける。彼は、各学年にキャプテンが存在するこの高校で、１年生キャプテンを務めている人物だ。

「いやー、木ノ下薫はヤバイっすね。特にスリーが信じられないほどの精度っす」

その言葉にすぐさま双子の弟の佐々木真之介がつっこんだ。

「そうだな。お前の１０倍すげーよ」

「なんだと！？　じゃあテメーは１１倍だ！」

森村一樹がその様子を軽く笑いながら、静かにうなずいてから答えた。

「だな。総合的に見ても、すでに高校生レベルではないと思う。五十嵐と同じくらいか？」

カズが隣に座っていた白川第一のエース五十嵐拓磨（いがらしたくま）に向かって言った。その言葉に、五十嵐は少し考える。

やがて、そっと口を開いた。

「ヤツとは小学校では敵チームだった。中学校では同じチームになって一緒に全国制覇をした。1対1では俺の方が多く勝ってる。だが、俺がヤツに本気で『勝った』と思った瞬間は1度もない」

その言葉を聞いた部員たちが驚きの声をあげる。

五十嵐は1年生の時から白川第一高校のエースナンバーの7番を背負ってきた人物だ。これは白川の歴史をみても五十嵐ただ1人だけなのである。もちろん、先輩たちの反感もあった。3年間名門でプレーしてきたのに、入学して間もない五十嵐が7番を取ってしまっては当然のことだっただろう。

しかし、入学1年目のインターハイで、周りが認めざるをえない事件が起こった。ベスト8を賭けて戦った強豪越前高校との試合で、なんと1人で50得点をたたき出してしまったのである。

この出来事がきっかけで、今では高校バスケをしている者で、彼の名前を知らないものはいない、というほどまでになっているのだ。

他にも数々の武勇伝が存在するのだが、これだけでも彼の実力がわかったかと思う。

そんな彼が先ほどのセリフを言ったのだ。部員たちも驚きを隠せないだろう。

そこへ、６の背番号をつけた御庭慶彦（おにわよしひこ）が五十嵐に向って言った。県内で唯一の２メートル越えの選手である。

「嘘つけ。たしか４３７戦２１８勝２１８敗１引き分けって中学のときのインタビュー雑誌で木ノ下が言ってたぞ。引き分けは時間切れ後に五十嵐が得点したんじゃなかったのか？」

「うるせーよ」

五十嵐が笑いながら御庭の頭を軽く叩いた。部員たちからは一斉に笑いが沸き起こる。

『ははは』

『細けぇなオイ』

御庭は体がでかく、髪型もスキンヘッドでいかにも怖そうな外見をしているが、実は優しい少年なのである。先ほどのセリフの通り、意外と頭もよく、将来は父親が経営する建築家業を継ぐために日々勉強しているのだ。ゲームや漫画も好きで、五十嵐とはゲーム仲間でもあった。

しばらくして、カズが腕を上空に向って突き上げ、背伸びをしながら言った。

「ん～……俺も１度は本気で戦ってみてぇ相手だなぁ」

それはおそらく木ノ下薫のことだろう。五十嵐がなにかを思い出したようにカズに向かって話しかけた。

「そういやぁ、あの6番って昔っからお前と一緒にバスケしてきたヤツだったっけ？」

「ああ。純也って名前なんだ。アイツとは小学校のときからだな。ジャンプ力は昔っから凄くてな。中学1年くらいのときにはすでにリングに手が届いてたと思う」

「おもしれーヤツだなぁ。永瀬、お前と同じくらい跳んでるんじゃねぇのか？」

五十嵐は2年生キャプテンの永瀬朋希の方を振り向いてから言った。朋希は朱雀高校の永瀬勇希の実の弟である。

「どうでしょう。でも、最高到達点は俺の方が上だと思いますね。身長差が２０センチ近くありますから」

彼は全国でも最高の到達点を誇る選手なのだ。リバウンドに関しては彼の右に出るものはいないだろう。再び御庭が五十嵐に話しかける。

「それにしても似てるよな」

「ん？」

五十嵐は手を後頭部に組んだまま大庭の方を見た。

「1年のときのお前のプレイにそっくりじゃないか。ポジションは違うけど」

「ああ、それなら俺も入学したときから思ってたよ」

カズもそう思っていたらしい。五十嵐は不思議そうに答えた。

「俺ってあんなんだったのか。成長したんだな」

再び部員たちから笑いが沸き起こったのであった。

――――――

――――

――

一方、黒沢高校部員たち。

「父さん、どうしたんだい？」

黒沢高校2年生ガードの進藤鉄也（しんどうてつや）がなにやら考えている監督に向かって話しかけた。監督の進藤力也は鉄也の父親である。

「いや、なんでもない」

「そう」

鉄也はそう言うと再び前を向いた。

（関東大会の時の朱雀とは明らかに違う。全体の動きもそうだが、特に長谷川亮。この短い間になにかあったのか？）

「朱雀高校は関東大会で圧勝しているとはいえ絶対に気を抜くな。よく見ておくようにな」

『オッス！』

監督の言葉に選手たちが続いた。

白川第一高校の観客席とは反対に、不気味に静まり返っている黒沢高校であった。

Ｎｏ．９６　城清再び！

インターハイ予選第三試合、朱雀高校対藤岡高校。朱雀高校が早くもダブルスコアで相手を引き離し前半戦を大きくリードしていた。そして、ハーフタイムも残りわずかとなり、後半戦が近づいてくる。

「よし、いくぞ！」

『オッス！』

控え室にて、キャプテンの木ノ下薫が選手たちに気合をかけた。そのまま控え室をあとにする。

朱雀高校が控え室から会場に姿を現すと同時に、再び観客席からは歓声が沸き起こる。観客席には白川第一高校と黒沢高校の選手たちの姿が見える。審判の笛が会場に鳴り響いた。選手たちはセンターサークルへと向かった。

後半戦の朱雀高校は、１１番の大山博司と７番の小田原真をメンバーチェンジしてのスタートとなった。このメンバーには、なにやら木ノ下薫の考えがあるそうだ。

前半とは違い、センターサークルの中に永瀬勇希が入る。白川第一の永瀬朋希の兄と言うだけあって彼ほどではないが、それなりにジャンプ力はあった。

審判の手からボールが放たれ、両選手が同時に跳ぶ。やはり永瀬の方が高かったらしく、ボールをサークルの外へ向かって弾いた。

そのボールを純也が取り、亮にボールを渡して走る。

攻守互いにセットのポジションになった。朱雀高校はセンターの

ポジションに小田原君が入っただけで、他は前半戦と同じポジションだ。

ハイポストに小田原が上がった。亮はすぐにパスをする。

そして小田原の手からアウトサイドの薫へとボールが渡った。シュートが放たれるが、わずかにリングに当たってしまい、ボールが外に出てしまった。

選手たちがリバウンドの体勢に入った。そしてボールが地面に向かって落下してゆく。

そのボールを手にしたのは小田原であった。そのまま亮にパスをまわした。

小田原君は3年間木ノ下薫、永瀬勇希と共に厳しい練習をしてきた人物だ。どのプレーでも、それなりにこなすことが出来る。その中でも特に目立つのがディフェンスであった。

高さはそこまでは無いのだが、基本をおさえている彼のプレーは部員たちからの信頼も厚かった。

小田原君が入ったことにより、オフェンスにスピードが加わり、自然と他の選手の運動量も増えた。朱雀高校の攻撃は前半戦よりも更に速い展開となった。

チームのゴール下を固め、ディフェンスを強化するスタイルが博司と言うなら、小田原のメンバー加えることは、オフェンスとディフェンス両方とも万能にこなすスタイルと言える。

そして第3、第4ピリオドも圧倒的差を見せつけ、朱雀高校はベスト8入りを果たしたのであった。

―――――――

「おつかれさーん」

「っしゃぁ、終わったぜ」

「おつかれー」

―――

控え室に朱雀高校の部員たちの声が鳴り響く。落ち着いた様子の部員に薫は言った。

「急で申し訳ないが、そろそろ次の対戦相手の試合が始まる。準備が出来たら見に行こう」

『オス！』

部員たちが返事をした後、亮が薫に話しかける。

「事実、ここからが本番みたいなもんですからね」

亮の声に気づいた薫は、軽くうなずき、返事をしてから答えた。

「ああ。ここからは、ほぼ確実に城清、黒沢、白川と戦うことになるだろう。これまでのようにはいかない」

現在、４つのブロックにそれぞれ分けられた前大会ベスト４の高校は、まるで当然かのように勝ち上がっている。恐らく城清も確実にベスト８入りを決めてくるだろう。そんなことを考えながら、朱雀高校部員たちは観客席へと移動したのであった。

―――――――

―――――

――

朱雀高校の部員たちが観客席に着くと、すでに城清高校の試合が始まっていた。応援団もそれなりにいる。城清高校は朱雀高校と同じく進学校で、伝統のデータバスケと組織的なディフェンスを武器に毎年のようにベスト４まで勝ち上がってくる高校だ。

「なんだ。強豪ってわりにはそんなにハデな試合じゃねぇな。トロくせぇ」

椅子に座ってつまらなそうな様子で発言する純也に、薫が真剣な顔で言った。

「その『トロくさい』という表現を使った時点で、すでに試合の流れは城清ペースという事だ」

「どういうことだよ？」

純也が訳がわからない、といった顔で薫に言葉を返した。

「確実なディフェンスで失点を最小限に抑える。少ない攻撃チャンスを確実にものにしていく。彼らの試合でハイペースになることはまずないだろう」

そして城清が試合をしているコートに目を移してから続けて言った。

「それに、今年の城清は違う。大蔵、杉山が加わりインサイドアウトサイド共に格段に強くなっている」

「へぇ…って」

純也が返事をしてコートに目をやった。そしてとある選手を目撃して驚いた。

「あの外人みたいなヤツってストバスの大会で戦ったヤツじゃねぇか！　それにあのぬけた顔したヤツとスキンヘッドのヤツ！」

「なんだって！？　彼らと戦ったときがあるのか？」

薫が驚いた顔を見せる。

「ああ、カズが最後に逆転シュートを決めて勝ったんだけどな」

「なるほどな…。白川第一の森村が出場していたのは話に聞いていたが、城清の選手も出場していたとはな」

「でもさ、結局俺らが勝ったんだぜ？　次の試合も大丈夫なんじゃねぇの？」

その言葉を聞いた我利勉が急に話に入ってきた。メガネを光らせて純也に言った。

「むしろ、白川第一の森村がいて1点差だった、ととらえるべきだよ。彼らの強さは個人個人の能力じゃないんだ。『城清』という5人チームが1つになって組織的に襲い掛かってくる」

「けっ、なんだか気にいらねぇな。頭のかてぇバスケかよ」

純也が再び、つまらなそうな顔をして肩を背もたれにかけた。薫は試合をずっと見つめながら小さめの声で言った。

「とにかく特殊なディフェンスなんだ。明日の練習で説明するから今はよく試合を見ておけ」

「はいはい…っと」

そう言って欠伸をした。そのとき、亮が独り言で呟く。

「これは…思ったより凄いな…」

ダルそうに返事をした純也とは反対に、真剣な顔で試合を見つめている他部員であった。

Ｎｏ．９７　夢のディフェンス

インターハイ予選前半は、朱雀高校部員が予想してた通り城清高校がベスト８を決め、いつもの面子が出揃った。城清は伝統のディフェンスに大蔵、杉山のオフェンス力が加わり去年よりも格段にレベルアップしているように思える。

―――――――

―――――

――

そして次の日。

ベスト８からの残り三戦は一週間後となるため、試合の翌日にもかかわらず朱雀高校体育館には選手たちの練習に励む声が響いていた。

「石川シューッッット！」

地面を強く蹴り純也が跳ぶ。そしてシュートが放たれた。

打点が高いには高いのだが、メチャクチャなフォームから繰り出されたボールはリングに当たるどころか、ボードのギリギリ上という、エアボール寸前の場所に当たった。それと同時に試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

ビィィィ！

選手たちがセンターサークルで向き合いながら礼をした。

『ありがとうございました！』

試合形式の練習が終わる。亮が純也に近づき、話しかける。

「少しは狙えよ、ヘタクソ」

「ああ？　テメーよりはマシだ猿助！」

はたから見れば喧嘩に見えるかもしれないが、朱雀高校では見慣れた光景になっていたために、特に誰も止めなかった。

「よし、集合だ」

『オス！』

純也と亮の口喧嘩をまったく気にもせずに薫は部員たちに集合をかける。試合形式の練習が終わったばかりでまだ肩から息している者もいた。薫は部員たちに座るように指示をしてから語り始める。

「昨日の試合を見て気づいてる人もいるだろうが、城清のディフェンスは今までの相手とは違う」

純也や博司を除く、スタメンや我利勉はその言葉に頷いていた。

「彼らのディフェンスは『マッチアップゾーン』と呼ばれるものだ」

その瞬間、部員たちがざわめいた。その中で特に表情も変えずに、真顔で薫を見ていた純也が問い詰める。

「なんだそりゃ？　それって佐川商業のディフェンスとは違うのか？」

純也の言葉に気づいた薫は、その方を振り向いて答えた。

「ああ、違うな。マッチアップゾーンは簡単に言えばマンツーマンとゾーンディフェンスを混ぜたディフェンスだ。」

さらに薫が続けた。

「ボールマンに対してはディフェンスが常にマンツーでつき、残りの４人でゾーンを作るというものだ」

「それって…ボックス・ワンとは…ち、違うんですか？」

博司が大きな体を精一杯縮めて発言する。一応ディフェンスの知識は少しあるらしい。薫は小さくなっている博司を見て軽く微笑みながら答えた。

「良い質問だ。ボックス・ワンは常に同じ人が指定された人にマンツーをしかけるよな？　しかし、マッチアップゾーンの方は、マッチアップする人がボールマン、オフェンスの位置に対応して常に入れ替わる。メリットと言えば…そうだな…」

薫が純也の方を向き言った。

「純也、ゾーンのメリットを言ってみろ」

いきなり話をふられた純也はあせった様子で答えた。

「はぁ？　そんなんわかるワケねーだろ。我利勉にでも聞いとけっつーの」

「じゃあ、お前が佐川のゾーンを相手にしてみてイライラしたところを言ってみろ」

そう言われた純也は少しの間考える。

「まずはあれだろ？　インサイドに入りづらくてむかつくな。そうなると後はリバウンドもとりにくいってことになるんじゃねーの？」

「その通りだ。リバウンドからの速攻も出しやすいよな。次はマンツーの良い所を…亮、あげてみてくれ」

亮は返事をした後にハキハキと話し始めた。

「常にオフェンスにプレッシャーを与えます。抜かれた後のカバーリングは大変ですが、その分簡単にシュートも打たれません」

「そうだな。アウトサイドからのシュートは打ちにくい。マッチアップゾーンはこの2つのディフェンスの良い所をとったディフェンスだ」

『えぇえええ！？』

一部の部員たちから驚きの声が上がる。そして純也が言った。

「そんな、都合のいいディフェンスがあってたまるか！　もっと現実みよーぜ」

純也の言葉を聞いた薫が部員全員に向かって言った。

「まさに夢のようなディフェンスだ。実際にプロでも使っていたりするしな」

再び博司が体を小さくしながら薫に質問した。

「あのぉ…そんなすごいディフェンスにどうやって攻めたらいいんでしょうか？」

その博司の質問に、薫はすぐさま答えた。

「何事も、相手のやろうとしていることの反対のことをやれば崩れるように出来ていると俺は思ってる。それはバスケだけじゃない」

そう言って更に薫は続けた。

「マッチアップゾーンには1つの合言葉みたいなものがあってな。それを『オン・ザ・ライン、アップ・ザ・ライン』と言うんだ。簡単に言えば、ボールを持っていないオフェンスを始めとして、ディフェンダーがボールマンとそれをマークしている人を一直線で結ぶことを言う」

薫は作戦版を動かしながら説明をする。部員たちはそれに必死についていく。

「こうなるとボールマンにプレッシャーが掛かり、ミスがおきやすくなると同時にパスコースも限定されてくるんだ」

純也が少しイラっとした様子で薫に向かって言った。

「だったら尚更、どうやって攻めりゃあいいんだよ」

「簡単な話だよ。相手がこの形を作ろうとしているならそれを作らせなければいい。つまり…」

薫は少し間をおいてから、再び話しはじめた。部員たちは唾をのんで次のセリフを待った。

「動き回ることだ。相手よりもずっと。特にドリブルをしているボールマンにはすぐにダブルチームがくる。ポストもな」

部員たちはあまりにも単純な答えが返ってきたため、唖然としていた。

「あと弱点と言えば…」

さらに薫は少し考えてから語り始めた。再び部員たちが唾を飲む。

「やっぱりいい。これは今言うべきじゃないな」

ドカッ！

部員たちが一瞬でコケた。すぐさま純也がツッコミを入れた。

「おいおい、もったいぶらねーで言えよな」

「いや、これは言っても言わなくてもかわらない。むしろ知らない方がチームにとっては得だと思う。というわけで練習再開するぞ！」

『オ、オス！』

そしていつものように夜遅くまで練習が続いたのであった。

No．98　弱気？

　他に誰もいない体育館にドリブルの音がなり響いた。やがて静寂に包まれると、今度はバスケットリングの網を叩き付けるような、バスケット選手たちには聞き慣れた特徴のある高い音が聞こる。
　それは、決して不快な音ではない。そして再びボールが地面を跳ねる音が聞こえる。
　その間隔は次第に狭くなっていき、音も弱まっていく。
　ほとんど間隔が無くなり、音も聞こえなくなったころ、ある人物の声がなり響いた。

『まだやってたんですか。杉山くん』

　杉山　と呼ばれた人物は声のした方を振り向いた。

「あぁ、キャプテンが。びっくりしたなや」

　特徴のある方言。ぼへらーっとした顔は何を考えているのかわからない。やがて、杉山に話しかけた人物が近寄る。

「いつも熱心ですね。もう自主練は終わったんですか？」

　そう言って眼鏡のズレを人指し指で押し上げる。

　このいかにも頭の良さそうな人物は、城清高校バスケット部の主将を務める近江隆志（おうみたかし）。城清のデータバスケの中心人物だ。杉山は近江に向かって言葉を返す。

「んです。さっきのでちょうど千本目が終わったどごろです。キャプテンは今から練習でもするんですか？」

「そうですねぇ…。先程、四回戦までの資料をまとめ終えて、少しだけ時間があったので軽く自主練をして帰ろうかなと思ったところです。」

杉山は、なるほど、と言って地面に転がったボールを拾いあげる。

「キャプテン。練習なら手づだおうが？」

「うーん…」

近江は少しの間だけ考えてから杉山に言った。

「じゃあ、少しだけお願いしましょうかね」

「うい」

そして練習が始まった。近江が杉山にパスを出してシュートを放つ。そしてその逆を繰り返す。

「キャプテンは相変わらずお手本みんたシュートだな」

「そうですかね？」

近江が恥ずかしそうな顔をした。

「僕らには特別に飛び抜けた身体能力を持った人はいないからね。ディフェンスで抑え、少ないチャンスを確実にものにしていく…」

更に続けた。

「まぁ、今年はキミや大蔵がいる分、いつもの城清とは違いますけどね」

そう言って笑った。その言葉を聞いた杉山が申し訳無さそうに言う。

「いやぁ、自分なんかまだまだだべ。もっと精度を上げねば通用しねど思う」

そしてシュートを放った。ボールはリングを綺麗に通過した。

「そう言いながら決めるのもさすがです」

そして近江もシュートを放つ。彼も綺麗に決める。

「そっちもな」

二人の笑い声がなり響いた。

『なぁーにやってんだぁ？』

再び体育館の入り口から声が聞こえた。近江、杉山の二人は声のした方に目をやる。

相手も二人だった。一人はスキンヘッドに鋭い目付きをし、片手に持ったタオルで汗を拭いていた。もう一人は１８０センチとまで

はいかないがそれなりに背が高くておとなしそうな顔をしている。近江は近寄ってくる二人に向かって言った。

「石塚くんに佐藤くんですか。試合後オフというのにまたウェイトやってたのですね」

そう言って苦笑いをした。石塚は、ちょっと待て！　と言ってから答える。

「コイツがウェイト手伝ってくれって言うからさ。ったく、この筋肉バカが」

筋肉バカと呼ばれた方はそれが嬉しかったのかシャツを脱ぎ初めて筋肉アピールをしはじめた。

「まぁまぁ、そう言うなよ」

ニッコリ笑いながら喋る。とても不気味な様子だった。

そんな佐藤を無視して、石塚は近江に向かって言った。

「そういやぁ、大蔵は？　近江のクラスだろ？」

「あぁ、彼なら…」

咳払いをしてから続きを語り始める。

「居残り…ではないでしょうか？」

その言葉に石塚は妙に納得した様子だった。

「アイツ、古典だけは苦手だもんな」

「ですね」

またまた苦笑いをする。大蔵とは以前純也たちがストリートバスケットの大会で戦ったことのある大型の選手だ。外国人とのハーフで運動神経が人並み以上に良かった。会話からもわかる通り古典が苦手なのだ。

「なぁ、次の相手についてどう思う？　今回で初のベスト8だったらしいが…」

近江は石塚からされた質問に、少しの間考えた。やがて語り出す。

「ここまで勝ち上がって来たというのも特に不思議ではないチームですね。なんせ有名な選手がいますから」

その言葉を聞いた石塚は、軽く眉間にシワを寄た。

「木ノ下薫か…。たしかにな」

中学からバスケットをしているもので彼の名を知らない者はいなかった。

「3試合の平均得点が27です」

「そ、それなら俺や大蔵の方が――」

石塚が慌てた様子で言い放ったが、そのセリフが終わる前に近江

が続ける。

「ただし、スリーポイント『だけ』を見た場合ですけどね。平均で毎試合9本決めてます。合計得点は先程の数値の倍近いですよ」

「！！」

その言葉を聞いた三人はもはや言葉も出なかった。

「彼がシューターに転向したとは言え、まだまだ万能に仕事をこなしています。外もあるし、そうかと思えばドライブして中もある。まさにシューティングガードの理想形ですね」

近江の容赦の無い言葉が三人を襲った。

「それに永瀬選手も動きの早い素晴らしい選手です。外を無くした木ノ下選手と思っていても良いでしょう。この二人がチームを引っ張っています」

「珍しく弱気か？」

「弱気？」

石塚の言葉を聞いて近江の動きがピタリと止まった。メガネを再び指で押し上げる。

「あくまでも分析の結果です。うちには伝統のディフェンスがあります。それに…」

近江が次の言葉を言おうとした瞬間――。

バァン！

勢いよく体育館の扉が開かれる。

「オーウッ！　もうミナサン来てマシタかー！」

大蔵がやってきた。どうやら居残りが終わったようだ。

「アレ！？　なんか暗いフンイキね！　ドーしたんですかー！」

近江が勢いに押されながらも答えた。

「い、いや…大丈夫ですよ。次の試合の打ち合わせをしていただけです」

「ソレならヨカタねー！」

そう言ってから大蔵はバッシュを履き始める。

石塚が近江の方を見た。

「さっきは何て言おうとしたんだ？」

「あ、あぁ、それに…」

一呼吸置いてから言った。

「そんな凄い選手たちにうちのディフェンスがどれだけ機能するか、楽しみではないですか」

その時、なぜかメガネが光ったような気がした。

「ふ、頼もしいやつだな」

石塚は笑いながら倉庫へボールを取りに歩き出した。

他の二人もそれに続いた。

Ｎｏ．９９　我利勉危機！？

「よし、集合だ！」

『オスッ！』

一通り練習して、クールダウンを終える。すると薫から部員全員に集合がかかった。

部員達が薫の周りに集まる。

「大会の後半戦まで後四日だ。そこで簡単な合宿をしようかと思う」

『え！？』

『合宿！？』

部員たちがざわめいた。このタイミングで合宿がくるとは思いもしなかったのだろう。

「合宿ってどこに行くんだ！？　ハワイか！？　沖縄か？　いいねぇっ！」

純也が騒ぎ始めた。呆れた様子で薫は純也に言った。

「お前はプロ野球か何かと勘違いしてないか？」

部員たちから笑いがおこった。純也は「え！？　違うの？」と言いながらキョロキョロしていた。薫が話を続ける。

「……学校だ。授業もあるしな。顧問の先生にも話をつけてある」

つまり、少しでも空いた時間を練習時間にしようと言う計画だ。

「やりましょう！！　課題は沢山あるんです！」

「ぼ、僕は野菜を持ってくるよ」

亮と博司が楽しそうに言った。彼らだけではない。他の部員もどこかそんな雰囲気だった。

ただ一人を除いては…。

「あの、キャプテン…」

我利勉が申し訳無さそうに手を上げた。

「どうした？」

「練習には参加できますが、泊まれるかどうかは保留でお願いします……」

薫は何か事情があると察し、この場では深くつっこまなかった。

「なんだなんだ？　みんな楽しそうにしちゃって。ガキだなぁ…はっは」

そう言いながらも一番嬉しそうな純也であった。

――――――――

―――

「実は…この前のテストの成績が…」

他の部員達がいなくなった体育館で我利勉と薫が会話をしていた。

「なるほどな…」

我利勉曰く、この前のテストで成績が少し落ちてしまい、親にバスケをやめるよう、言われているそうだ。

それでも我利勉の成績は学年でもかなり上位である。普段から我利勉が部活をしていることが気に入らない母親は少しでも成績が下がると、すぐに部活のせいにしていた。

それでも今までなんとかやって来たのだ。さすがの我利勉も今回の怒り方は普通ではないと感じたらしい。

「なんとかやってみます！僕だって朱雀高校バスケ部員ですから！最後まで一緒に戦いたい！」

我利勉は薫に言った。目には少し涙が浮かんでいた。薫は我利勉の目を見て、

「そうだな…。待っているぞ」

と肩に手を置いた。さすがに薫だけで解決できる問題では無かった。

やがて体育館の照明が落とされた。

――――――

――――

――

＊＊＊

「合宿だってさ。ガキみてぇだな」

学校からの帰り道を俺は久留美と二人で歩いていた。

「そんなこと言っちゃって……。本当は楽しみなんじゃないの？」

「ふん。くだらんな」

「もう…」

そう言って久留美は溜め息をついた。別にそんなに楽しみな訳じゃないからな。皆がやるっつってたから、しょうがなくだな…。

いや、でも部活とかやってなかったから合宿は初めてだ。

うん、だから少しだけ楽しみなんだな。うん、少しだけ。

そんなことを考えていたときだった。久留美が心配そうな声で言った。

「我利勉さん、どうしたのかな…」

「あー、なんか保留とか言ってたな」

そして久留美がこちらを見る。

「親になんとか無理を言ってバスケ部にいるって聞いたときがあるわ。なにかあったのかな…」

「それは初耳なんだが、イメージは出来るな。厳しそうな感じ」

ザマスザマス！　なんちって。

「だよね…」

そして久留美が下を向く。

「あのなぁ、小さい時からお前はそうだったが、他人の問題に首をつっこないほうがいいぜ？本人たちにしか解決出来ないこともあるかもしれないしな」

その言葉を聞いた久留美は俺の顔を覗き込んだ。

「フフ」

「な、なんだよ」

「そんなこと言って、一番心配してるのは誰かな～？」

「あーうるさいうるさい。はいはい」

そして、もう一度笑いながら前方を向いた。

＊＊＊

『あのなぁ、小さい時からお前はそうだったが――』

『あーうるさいうるさい。はいはい』

優君の時もそうだった。

私の時もそうだった。

私にはわかるんだ。

「フフ」

私は前を向いた。街灯の光に照らされ、道が幻想的に映る。

少しだけ昔を思い出した。

ジュンはもう忘れちゃったかもしれないけど、古びた一枚のカード、まだ持ってる。

さすがに、なんだか恥ずかしいから言わないけどね。

私に何かあったら約束通り、ちゃんと守ってね。

――私のメガトラマン

――――――

――――

――

「あはははは」

「いきなりなんだお前は。気持わりぃ」

No．100　合宿

――キーンコーンカーンコーン

鐘の音がその日の授業の終わりを告げる。

『急げ～』

『合宿だ！』

それと同時に一年生たちが勢い良く教室を跳び出した。

「ふっ、アイツらときたら…」

「あれ？　純也はいかないのか？　今日から合宿なんだろ？」

意外にゆっくりしていた純也に優が不思議そうに話しかけた。

「ああ、ボチボチ行きますかね」

そう言って体育館に向かった。

『歩くのはっや！』

――――――――

――――――

――

「全員集まったみたいだな」

『オスッ！』

集まった部活達に薫が話しかける。

「昨日も言ったように試合前日までの三日間、合宿を行うことになった。注意事項は…」

薫が使用できる部屋、時間、仕事担当の割り当て、その他注意事項を部員達に伝える。何も見ずにテキパキと指示を出しているのがさすが、といったところ。

「……まぁ、こんな感じだな」

『オスッ！』

部員達が楽しそうにしていた。いつもと同じ練習場所なのに、合宿と言うだけで随分と違うものである。

「では、各自準備に取り掛かってくれ」

薫がそう言うと、部員達は割り当てられた仕事に向かう。薫がマネージャー二人に近付いて封筒を渡す。

「部費だ。すまないが夕食の準備を頼む。買い出しは純也と亮にも頼んであるから、どんどん使ってやってくれ」

『うん。まかせて』

『はい！』

久留美と純麗の二人は笑顔で返事をした。薫と入れ替わるようにして、今度は博司が大きなダンボールを持ちながら、マネージャー二人に話しかけた。

「あの～……家から野菜持ってきたけど、どこに置けばいいでしょうか？」

「え、え～と、家庭科室に置いてきてもらえるかな？」

「はい」

博司は返事をすると大きなダンボールを軽々と持ち上げ、家庭科室に向かった。

「凄い力……」

「ですねぇ…」

そう言ってマネージャー二人は博司の後ろ姿を見つめていた。

―――――――

―――――

―――

「いやいや、ナスは必要だ！　お前は何もわかっちゃいない！」

「ああ？　んな真似できるか！」

スーパーの食料品売り場で純也と亮が言い争いをしていた。どうやら純也は亮がカレーにナスを入れると言ったのが気に入らなかったらしい。その様子を見た純麗が二人に言った。

「喧嘩しちゃだ～め。野菜は博司君が沢山持ってきたからこのメモに書いてるものだけ買ってきてもらえる？」

「もぅ、練習時間なくなっちゃうよ」

久留美も後に続いた。その様子を見た純也と亮は、

『はい！　了解しました！』

と、今までの喧嘩が嘘のように言葉をシンクロさせて返事をした。そのまま凄いスピードで、食料を探しにどこかに消える。

「クスクス」

「単純ね…」

呆れた様子の久留美であった。

―――――

―――――

――

買い出し組が学校に帰る頃には、使用場所の掃除、準備等終わったようで、ウォーミングアップに入っていた。純也達は急いで家庭科室に買い出しした物を運んだ。二日分は買い込んだのでそれなりの量になってしまった。これで明日からはすぐに練習ができる。

「しまうのは私たちがやるから、純也君と亮君は急いで練習に行って」

純麗に笑顔でそう言われると、

『はい！』

と、再び声をシンクロさせて体育館に向かったのだった。本当に仲が良いのか悪いのかわからない人達である。

――――――

――――

――

練習になると部員達の顔が一瞬でいつもの真剣な顔に戻る。準々決勝を四日後に控え、気合いが入るのは当然なのだが…。

薫が交代交代の一対一練習で、ディフェンスしてきた博司に言った。

「だいぶ上達したな。随分と中腰に慣れているみたいだが…」

「あ、農業でこんな姿勢は慣れてますので…」

農業もそうだが、日々のディフェンス練習で入部したての時に比べてだいぶ上達していた。

「ディフェンスは目や相手の予備動作を見て動いたりもするが、ほとんどが相手との読みあいだ。経験が物を言う場合もある。しかし、」

黙って聞いている博司に、薫は続ける。

「博司には身長や、その中腰を維持する力がある。スポーツの基本とも言えるその姿勢が出来ていれば、なんとかなるものだ。後はフットワークを意識してみるといい」

「は…ふぁい！」

博司が返事をした。やがて一対一が再開される。

薫は鮮やかに博司を抜き去り、シュートを決めたのだった。

――勝負に容赦のない男。

その名を『木ノ下薫』と言った。

No．101　姉さん

「今日のところはこれまでにしよう。飯の後は自由時間だ。各自十時までには風呂に入るように。明日は朝六時に体育館集合だ」

『オッス！』

ミーティングの最後に薫がこれからの日程を説明した。

「では、お疲れ様でした！」

『おつかれさんっしたっ！』

挨拶が終わると同時に部員達は家庭科室に急いだ。先頭はしっかりと純也がキープしている。
それを見て薫が叫んだ。

「ちゃんと手洗いとうがいをしろよー！」

『わかってますってー』

『はーい』

『どけどけぇぇ！』

やがて部員たちの姿が見えなくなる。薫と永瀬と小田原君だけが体育館に残る。
静まり帰った体育館で、薫が口を開いた。

「さて、俺たちも行こう」

「まるで子守りだな」

「元気の良い後輩だよね。はは」

永瀬と小田原がそう言うと、薫と並び家庭科室に向かったのだった。

――――――――

――――

――

「あっ、純也テメー肉ばっか取んじゃねぇ！」

「るせぇ！　俺が買った肉だ！　文句あんのかコラァ！」

予想通りと言うか何と言うか…。純也と亮による、カレーの具の取り合いが行われていた。

他の部員達は気にもせず、冷静に他に用意されてある鍋から皿に盛っていく。

そして喧嘩している二人以外の準備が整い、薫は手をあわせて言った。

「いただきます」

『いただきまーす！』

「ちょっと！　まだ俺盛ってねぇって！」

「てめぇのせいだ純也！」

「お前らを待っているとカレーが冷める」

　薫がカレーを食べながら冷静にいい放つ。それを見た純麗は皿にご飯を盛り、カレーをかけ、

「はいはい、おかわりは沢山あるから冷めないうちに食べてね～」

と、言った。

『は～い』

　すぐに二人の言葉がシンクロする。

「夫婦とやんちゃ兄弟だな」

　永瀬はそう呟くと静かにカレーを口に含んだ。

―――――――

―――――

―――

夕食が終わり、部員達はそれぞれ自由時間となった。
純麗、久留美の二人は、家庭科室で夕食の後片付けをしていた。
そこへキャプテンの薫が姿を現す。

「手伝うよ」

「え…でも、薫ちゃん疲れてるだろうし大丈夫よ」

純麗がそう言ったが薫は黙って鍋を洗い始めた。

「いや、ここまで来たらそんなに激しい練習はしないからな」

「じゃあ甘えちゃおうかな」

純麗は笑いながらそう言うと止めていた作業を再び開始する。

少しの間、無言の粗いものが続いた。やがて純麗が作業をしながら口を開いた。

「凄いね～。入部した頃は色々と不安だったけど、もうベスト8だよ。学校でも少しだけ話題になってるみたい」

「…そうだな」

薫は軽く返事をした。彼にとって目標はただ一つ『優勝』。純麗もそれが分かっているらしく、すぐに続けた。

「薫ちゃんは凄いよ。どんどん上に行っちゃうね…。なんか少しだけ寂しいな…」

「え？」

薫の作業していた手が止まった。

「じゃあ私、食器置いて来ますね」

久留美が空気を読んだのか、笑顔でそう言うと食器を持って家庭準備室に消えた。

「あは、気を使わせちゃったかしら」

「どうかしたのか？」

先程の純麗の横顔が寂しげに見えたのか、薫はそう問掛けていた。

「ううん。なんでもないよ」

「そうか」

純麗は言いたかった言葉を直前で飲み込んだ。薫はそのことについては深く聞いたりはしなかった。純麗がニッコリ笑って薫に言った。

「後の三試合頑張ってね。決勝にはきっと五十嵐君が待ってる」

「拓摩か…それは楽しみだ」

薫の表情が一気に明るくなった。それを見て純麗がまた寂しげ

な表情を見せる。もちろん、薫にはわからないように、だが。

「じゃあ、準備室に運んだらそのまま体育館に行くよ。夕食の準備ありがとうな。春風にも伝えておいてくれ」

「は～い。ありがとうね」

そして薫が家庭科室を出て行った。五十嵐の話をしたのだ。行き先は言わなくても純麗にはわかった。

入れ替わるようにして久留美が入ってくる。

「失礼しま～す」

何やら笑みを浮かべていた。純麗は「んもう」と笑う。

「どうして言うのやめちゃったんですか？」

「聞こえてたの？」

「す、少しだけ…」

準備室は隣にあるため聞こえるのは仕方がないだろう。

「好きなんですよね？　薫さんのこと」

「ん～」

純麗は目をつぶり、軽く微笑んだ。

「あの人、昔からあんな感じ。私たち幼馴染みだから小さいころは沢山遊んだわ」

答えにはなっていない。しかし久留美はすぐに何を言いたいのかがわかった。微笑みながら純麗は続ける。

「バスケット……バスケット。5歳から今までずーっとね。それしかないのかっ！　って言いたくなる時もあるわ。でも、そんな薫ちゃんを見てるのが好きだった」

「わかる……気がする」

「純也君ね？」

純麗はすぐに分かったようだ。久留美が慌てた様子で喋る。

「えっ、いや……う～」

久留美が何も言えなくなる。純麗はクスクスと笑い、話を続けた。

「さっき寂しい、って言ったのは、そんな薫ちゃんの成長を見てきたから。バスケも一緒に始めてね。だんだん遠くなってく感じがしたの。ただのわがままだね」

そう言って純麗が笑った。同じ女性から見てもハッとしてしまうような笑顔だった。

――――――

――

＊＊＊

『姉さんなにやってるの？　面白いの？』

姉さん、と呼ばれた人物。小学校高学年だった。

『おもしろいよ。最近スポーツクラブやってるんだ。中学校入ったらバスケ部に入ろうかと思ったの』

『スポーツクラブ？　バスケ？』

五才の少年と少女が理解するには少し難しかった。姉さん、と呼ばれた人物は少年の頭を撫でる。

『やってみる？　こうやって…』

『姉さん』がドリブルをした。地面に当たったボールが跳ね返ってくる。

『このまま走るのよ』

そしてドリブルをしながら走った。足にぶつかりボールが前に転がる。

『あわわわ』

『姉さん』は慌ててボールを取りに行った。

そして戻ってくる。少年にボールを手渡した。

少年はボールを地面に叩き付け、戻ってきたボールをキャッチする。そして「これでいいの？」と言いながら『姉さん』を見上げた。

『それを何度もやるのよ』

『姉さん』はそう言って、今度は少女にボールを渡した。

トントントン

少女はすぐにコツを掴んだようだ。少年はムッとして再びドリブルにチャレンジする。

トン…パシ…トン…パシ……コロコロ…

『上がってきたボールを叩くんじゃなくて、持ち上げるようにして……お…いい感じ』

―――――

―――

――

＊＊＊

「へぇ～、じゃあ薫さんの最初のライバルって純麗さんだったんですね～」

「フフ、そうね。薫ちゃん負けず嫌いだから。あ、こんなこともあったな～」

―――――――

―――――

―――

『お父さんがバスケットリング買ってくれたよ！』

『大きいね。なにに使うの？』

少年と少女が不思議そうに見ていた。姉さんはボールをドリブルする。

『こうやってね…』

そして勢いよくリングに向かって走った。

右方向からボールを両手で上に投げ、覚えたてのランニングシュートを決めた。

『は、入ったぁ～』

入った本人も驚いていた。少年は憧れるような目で姉さんを見ていた。

『なんか凄いね』

『リングにボールを沢山入ると勝ちなの』

ボールを少年に渡す。少年が思い出すようにして姉さんに言った。

『あ、そう言えば、姉さんこの前に僕にとらべりんぐって言ったよね。絶対にとらべりんぐにならない方法を発見したよ。姉さんも使うといいよ』

少年が得意気にそう言うと、ボールを一度地面につく。そして二歩あるく。それを繰り返した。

「とん……いち、に……とん……いち、に……とん……どう？すごいでしょ」

―――――

―――――

―――

―

『姉さん』は笑いながら少年の頭をクシャクシャに撫でた。

「あははは……薫さんにもそんな時代が…」

「その後に『ダブルドリブルというものがあるのよ』ってお姉さんに言われたときの薫ちゃんの顔、可愛かったなぁ…。ポカンとして『じゃあダブルドリブル』にならない方法考えてあげる、って」

「あはは、かわい～」

そして再び懐かしそうな目をして言った。

「だから……かな。成長する薫ちゃんを見てるのは凄い嬉しいんだけど、昔を思い出しちゃって…。涙もろくなったなぁ……はぁ歳だわ～」

そして久留美をギュッと抱き寄せた。どこか寂しそうな表情で涙を浮かべていた。でも笑顔だった。

「純麗先輩……綺麗です…」

純麗は笑みを浮かべ、「こらこら」と言って抱き締めていた手をほどいた。

「もちろん、薫ちゃんが上手になっていくのは嬉しいし、チームが勝ち上がる方が嬉しいわよ。　だから明日から三日間、私たちも一緒に頑張りましょう」

「は～い」

久留美が笑顔で言った。そして家庭科室に鍵をかけて職員室に向かったのだった。

Ｎｏ．１０２　犬猿の仲（前書き）

前回少し長かった分、今回は少し短めになりました。大会になると連続して試合になると思うので、もう少しだけ合宿編にお付き合い下さいませ。

懐かしいですねー合宿（遠い目）

Ｎｏ．１０２　犬猿の仲

夕食後の体育館にて。今日何度目かわからない純也と亮の喧嘩が勃発していた。

「さっきからなにかと俺につっかかって来やがって！　猿舞わしされてぇのか！」

「こっちのセリフだ負け犬亮！」

コートで睨みあっていた。他の部員は遠くから深刻にその様子を見て……

『よし次は俺オフェンスな』

『あ、やっべ！　外した！』

などはいなかった。二人の喧嘩がすでに日常の風景になっているのだ。みんなそれぞれ自主練習をしている。

そんな中、亮が言った。

「こんなこと繰り返しても意味がねぇ…。俺らはバスケットボールプレイヤーだ」

亮の言いたいことが分かったようで、純也は腕の骨を鳴らした。

「一対一で白黒つけようじゃねぇか！　ただやるのは面白くねぇ……」

不気味な笑みを浮かべながら純也が言った。

「負けた方は今日の夜に全員の前で全裸になって『三回まわってワン』だ！」

負けた方は勝った方に腹を抱えて笑われるうえに、この先ずっと三年間バカにされるに違いない。

「おもしれぇ……全裸だろうがなんだろうがやってやらぁ！　おい、必ずやれよ！」

「俺に勝ってから言うんだな！」

これは燃えない訳が無かった。意地とプライドにかけて。

『最初はグー、じゃんけんぽん、あいこでしょ、あいこで――』

喧嘩の時とジャンケンの時の温度差がなんだか妙にかわいらしかった。――――――

――――

――

その頃博司は、三年生たちに混ざって練習をしていた。

「リバウンドは一度しか跳ばないとは限らないぞ。キツイだろうが連続して跳ぶということを心がけろ」

「ふぁい！」

永瀬の言葉に博司が返事をした。永瀬は博司が入部するまでセンターをしていたために、教えることがあるみたいだ。

すぐ近くでは薫と小田原くんが一対一で汗を流していた。

「最初にブロックされた時に気付いたんだが、博司はリーチが長いよな。失礼な言い方になるがあまり跳んでないのにそれなりの高さがある」

「そ、そうですかね」

最初、とは博司と純也が初めて試合形式の練習に参加したときだ。

永瀬がシュートしたボールをリバウンドしてから博司は言った。

「将来性がある。このまま努力を続ければ二年後にはきっと良い選手になれるさ」

「が、頑張りますっ！」

以前永瀬は薫との会話でも言っていた通り、博司の日々の努力を認めていた。最近では何かと会話も増え口には出さないが、永瀬のお気に入りキャラとなっている。

やがて薫が体育館にいる部員達に向かって叫んだ。

「そろそろ銭湯に行かないと。早くしないと閉まるぞー」

その言葉を聞いた部員達はボールを片付け、薫についていった。

―――――――

―――――

―――

＊＊＊

くっ、亮の野郎…。また速くなってやがる…。亮が突っ込んできてボールを左右切り替える。

「くっ…」

低い…犬みてぇなドリブルしやがって！

そして亮がシュートモーションに入った。それにあわせて俺も跳んだ。

なにっ！？　フェイントかっ！

亮が後ろに倒れながらシュートを放った。ブロックが間に合わない！

スパッ！

「これで同点だ…はぁはぁ…次決めた方が勝ちだな…」

「風呂でみんな居なくなっちまったし、これで終わらせてやるよ！」

「ほざけっ！」

ヤバイ…風呂にも入りたい…。こうなったら…。

「あ、お前の後ろに幽霊」

「え！？……って」

亮は一度後ろを向き、素早く前方を向いた。

「んな古風な手に騙されるかぁ！……あれ」

亮の視野から純也が消えていた。そして――。

ドスッ！

亮が後ろを向いている間に、純也が軽く加速をつけ亮の頭の上を開脚して跳んでいたのだ。しかしジャンプ力が足りず純也のアレが亮の顔に激突した。

なんとかギリギリダンクを決める。

ガァァン！

リングにぶら下がった純也が叫んだ。

「うおーっ！　キン○マいてぇぇえ！」

そして起き上がった亮も叫んだ。

「テンメェェ！　降りてこい！　キタネェもんぶつけやがって！」

結局試合はドローとなった。この二人が仲良くするのは難しいかもしれない…。

こうして純也と亮は皆からの遅れを取り戻すために急いで銭湯に向かったのであった。

Ｎｏ．１０３　銭湯パニック（前書き）

下ネタ？　と言うほどかは分かりませんが、今回はそのような表現が沢山出てきます。
苦手な方はとばしても物語の進行的には問題が無いと思います（汗）

簡単に説明しますと、銭湯に入って合宿一日目終了という感じです。

Ｎｏ．１０３　銭湯パニック

「ひとまず休戦だ」

「おう！」

亮と純也は銭湯への道をひたすら走っていた。皆からはそれほど離されていたわけではない。彼らが急ぐのには訳があった。

やがて部員達の集団が見えてくる。しかし二人は彼らにペースをあわせることはなく、凄い勢いで　抜き去った。

そのまま銭湯まで走り、中へと入ったのだった。

中に入るとどこか懐かしいような雰囲気が漂っていた。独特の良い臭いがする。

お金を払い、すぐに脱衣所に移動する。そして凄いスピードで服を脱いだ。

そして扉を開ける。そこは貸し切り状態だった。

「っしゃあ！　俺の時代！」

「やっほう！」

二人はシャワーで軽く汗を流した。そして、

ザバァァン

お湯を体にかけると、浴槽に飛込んだ。※危険です。

「全部俺の風呂だああ！」

「俺なんか泳いじゃうもんね～」

二人はこれがしたかったらしい。なんとも幼い、こだわりである。

しかし、貸し切り状態の風呂は解放感があった。二人は先程の喧嘩が嘘のようにマッタリとした顔でお湯につかっていた。

突然、純也が怪しい笑みを浮かべた。

「なぁ、誰が一番デケェと思う？」

「くだらねぇ…」

亮は純也の誘いには乗らなかった。しかし純也は

「当てたら千円だ。賭けようぜ。それとも俺に負けるのが怖いのか？」

と亮を挑発する。

「いいだろう！　やってやるよ！」

亮が純也にうまく乗せられてしまった。純也が先に言う。

「俺は薫に賭けるぜ。ヤツは間違いねぇ！」

亮悩んだ末、答えをだした。

「俺は基本通り？　博司に賭ける！」

「オーケィ……では、頭でも洗って待つとしようか」

「……ああ」

純也と亮がシャワーの前に立った。その時――。

ガラガラガラ

他の一、二年に混じって博司が入ってきた。純也が叫んだ。

「あああぁぁっ！　テメェ男しかいねぇのにタオルで隠すんじゃねぇ！」

「わっ、ちょっと……な、何するのさ！」

純也が必死に博司のタオルを奪い取ろうとする。

「博司よ……他のヤツをみろ！　誰一人隠してないぞ！」

『そーだそーだ！』

『みっ・せっ・ろっ（はい！）みっ・せっ・ろっ（はい！）』

「ほっ、ほっといてよぉ…」

博司はひたすらガードを固めた。そこに永瀬と薫が入ってくる。

「ほらみろ！　これがこのお方達がモテる理由だ！　堂々としてらっしゃる！　恥じらい一つない！　さぁ脱げ！　恥じなど捨てろ！　振り回せ！」

純也の無理矢理な説得が博司を攻撃する。

「それじゃあただの変態だよお…」

「永瀬先生！　何か言ってやって下さいよっ！」

博司は助かると思ったらしい。しかし…

「まぁ本人の自由だろうが、なぜ男しかいないのに隠す必要があるんだ？」

予想外の言葉が永瀬から返ってくる。

「ほら！　永瀬大先生も、こうおっしゃっている。薫先生を見ろ！　シャワーが空くまでの間、腰に手をやって堂々と立ち話をしていらっしゃる！」

「そ、そんなこと言ったって…」

「さぁ博司の男を示せ！」

「え～……」

「そうか…無理言ってすまなかった……」

「あ、うん」

そして純也は後ろを向いた。博司が一瞬の隙を見せる。

「うっそだよ～ん」

ガバッ！

皆の視線が注目した。

――――――――

――――――

――

――

「な、なぁ元気だせよ！　男はハートだ！　き、気持が大事なんだ！」

「うぅ…」

純也が胸に手を当てて言った。博司は体育座りをして小さくなっていた。

「ほら、風呂上がりにガリガ〇君買ってやるから元気だせよ？　な？」

「うう…」

純也はヤレヤレ、と溜め息をつくと亮の近くまで行った。そして、

「どうやら俺の勝ちのようだな」

そしてニヤリと笑った。

「くっ……、なんか少しだけ可哀想じゃねぇか」

「風呂でタオルで隠すヤツは周りに狙われる。昔からの基本だ」

「くそっ！」

亮は悔しそうな顔をした。純也は再び博司の隣まで行った。

「特別だ。五百円までなら好きなもん買ってやろう」

すでに勝ち誇った顔をしていた。その時、風呂の扉がゆっくりと開かれた。やがて中から人が姿を現す。

皆の視線がそこに注目した。

「す、すみませんでしたぁぁあ！」

純也が土下座をした。周りの者も無意識に頭が下がっていた。

「え？　なになに？」

そこにはいつもの落ち着いた様子の小田原くんがいた。

――――――

――――

――

「いや～、まいったね。まさか小田原くんが…」

「ああ…」

他の人達は皆上がり、純也と亮は空いたシャワーで体や頭などを洗っていた。

その時、隣の風呂場から声が聞こえてきた。

『わぁ～、純麗さん！　貸し切りですよ！』

『本当ねぇ～』

純也と亮は互いに向き合って目を丸くした。そしてかたい握手

をかわす。なんと一時的で、うすっぺらい友情だろう。
純也達は耳を澄ませて体を洗っていた。
『はぁ～気持いい～。長い一日だったわねぇ～』
『合宿も意外とやることが多いですねぇ。まさか洗濯がこんなにかかるとは…』
純也達の心が痛んだ。
「なぁ亮…俺らって一体……」
「出よう…おかしくなる前に…」
そして二人はそのまま出ようとする。その時――。
『久留美ちゃんかわいっ』
『きゃ、もう…いきなり押さないでくださ～い』
『えいっ！　でもこれ欲しいんじゃないの？』
『ひゃっ…ほ、ほしいですけど……ぁ……つるつるする……あ、…と…だめです…とびだしてる……』
『あぁら、ごめんねぇ。こんなに出るなんて思わなかったからぁ』
――何を！？

――何が！？

「あぁぁぁあああっ！」

「俺は普通だぁぁっ！」

そう言って二人は浴槽の中に飛込んだ。

＊＊＊

「もう、純麗さん押しすぎですよ！　ちょっと押すだけで沢山出るシャンプーなんですから気を付けないと」

「ごめんね～。髪を下ろした久留美ちゃん可愛くってついつい」

「もぅ……」

こうして一日目の合宿は平和に？　幕を閉じたのだった。

Ｎｏ．１０４　考え方

全ての授業が終わり、合宿二日目の練習が始まった。部員達は駆け足で体育館へと急いだのだった。

―――――――

―――――

―――

他の部員よりも一足早く体育館にやってきた純也と亮はすぐに一対一を始めた。どうやら昨日の続きらしい。

「っしゃあっ！　ざまあみやがれっ！」

「くそっ…」

純也は亮のディフェンスをかわし、レイアップシュートを決めた。亮も悔しそうな表情を見せるが、すぐに気持を切り替えて、ボールをよこせ、と純也に言った。

「いつだって点は取れるんだ。すぐに取り返してやるからよ」

「てめぇなんぞ俺の殺人ブロックで叩き落としてやるぜ　※ただのブロックです」

亮の言葉に純也は余裕の笑顔を見せる。しかし、いつ亮が攻め

てきても対応出来るように、しっりとディフェンスの構えをしていた。

そんな二人に後からやってきた部員達から声がかかる。

そこには朱雀高校の強い個性達により、すっかり目立たなくなった二年の吉原と一年の遠藤、渡辺の三人がいた。

遠藤が亮を向いて真剣な顔で話しかける。

『なぁ、俺達も混ぜてくれよ。残りの三試合何が起こるかわからないし、俺達も一緒に戦いたいんだ』

大会を見てきて、自分達もやらなければ、という意識が出てきたようだ。

彼らも戦っているのだ。

『試合に出られるかわからないけど、応援でも練習の手助けでもいい。やれることはやっておきたい』

そう渡辺が言った。一対一も大事だが人数が増えると、よりさまざまな練習が出来るようになる。亮も彼らの気持とそのことを分かっていたため快く引き受けた。

『それに、俺はまだポイントガードを諦めた訳じゃないぜ。チャンスが来たら必ず取り返す！』

二年の吉原だった。彼は亮が入学してポジションを奪われてしまった人物だった。いつか絶対に取り返す、と日々練習に励んでいた。

『ええ、こちらも簡単には渡しませんよ』

亮がニッコリと笑って答えた。純也が口を開く。

「んー……五人か。あと一人いればなぁ……お？」

タイミングよくホームルームを終えた博司が体育館に入ってくる。

『おねがいします！』

入り口で頭を下げて挨拶をしていた博司を純也が呼んだ。

「おーい、練習始まるまでの間三対三でもやろうぜ！」

「あ、うん。ちょっと待ってて」

そう言って博司は更衣室に向かった。

――――――

――――

――

『サボるな！　走れ！』

「くっ……サボって……ねぇよ……」

純也が薫に気合いをかけられる。純也は走るペースを再び上げ

た。

そして終了を告げるブザーが鳴る。

いつもよりも厳しいフットワーク練習により、純也だけではなく他の部員達も肩から息をしていた。体力に自信のある純也でさえ休憩になると同時に座り込んでいた。他の部員も壁に寄りかかったり、コートに大の字になっている者もいた。

「ちっ、今日はえらくキツイじゃねえか」

呼吸を整えながら純也は近くを歩いていた薫に向かって言った。

薫はアッサリと「そうか？」と答え、ジュースをとりに行ってしまった。

その様子を見ていた久留美は隣にいた純麗に話しかけた。

「まだ半分もメニューを消化していないのに、いつもよりキツそうですね」

「うーん。昨日五十嵐君の話をしたからかなぁ」

そう言って純麗は苦笑いをした。薫は五十嵐とは中学時代の友達であり、良きライバルだった。気合いが入るのも無理はないだろう。

すべてのメニューが終り、部員達に薫から集合がかかる。

集まってきた部員はその場に倒れ込むようにして座った。

「とりあえず、おつかれさん」

『オ、オス！』

練習が相当キツかったようだ。薫はいつものようにこれからの日程を喋っていく。

「昨日と同じだ。飯の後は自由時間で、風呂は十時までに入ってくれ」

「オス！」

博司が小声で純也に言った。

「ぜ、絶対に純也君とはお風呂の時間は被らないようにする！」

「まぁまぁそんな事言わずに」

不気味に笑顔を作りながら純也は博司の肩に手をまわした。

「ううう」

博司は体育座りのまま、小さくなった。

そして薫は立ち上がった。それを見た部員も一緒に立ち上がる。

「お疲れ様でした！」

『おつかれさんっしたっ！』

そう叫んで頭を下げた。

そして部員達はダッシュで家庭科室に向かったのだった。

純也と亮のによる賑やかな夕食を終え、数名はそのまま体育館へと向かう。
そして各自自主練習が始まった。

ジャンプをして放たれたシュートがリングに当たり、外に弾き飛ばされる。

「ちっ…」

純也は顔をしかめると、外れたボールをダッシュで拾いダンクシュートを決めた。

「くそが！」

ダァァン！

凄い音が鳴り響いた。純也はリングから手を離し、転がったボールを拾いあげドリブルをした。

「入らねぇなぁ…」

そんなことを呟いていた純也に、薫が近寄る。

「どうだ？　調子は」

「ちっ…、見りゃあわかんだろ」

薫は軽く微笑むと、ジャンプをせずに腕だけでシュートした。

ボールは綺麗に吸い込まれる。

「純也。お前はシュートを打つときどんなことを考えている？」

「入れ、じゃねぇの？」

そう言って再びジャンプシュートを放つが外れてしまう。ボールを追い掛ける純也に薫は言った。

「考え方は人それぞれだろうが、俺の場合は『入れ』じゃなくて『入れるように打つ』という感じだな。体の一部の動きを意識したりしてな」

純也は訳の分からない様子だった。

「入れ、だとシュートが入っている映像と同時に、シュートを外している自分の姿も頭の中に浮かんでないか？」

純也は考え込んだ。薫は更に続けた。

「純也の得意シュート……例えば、レイアップやダンクを打つとき

に『入れ』って考えてるか？」

そこで純也はハッと気づいた。

「そう言えばダンクは……イメージが完全に出来上がってるな…。レイアップも、『ここから、こんな動きをすれば入る』…って次々に…」

「アドバイスになったかは分からないが、気持の持ち方、考え方だけでも結構違うものだ。意識は知らないうちに下意識…動きに繋がってしまうことがある。それは悪いこともだ」

試合でシュートを決めてもまったく表情を変えず、いつも冷静にプレーをする薫の秘密はこんな所にもあるかもしれない。

――〇分で終わる！

――〇点で逆転だ！

――やった！

――入った！

――だめだ足が動かない

――キツイ…

そんな考えを常に他にまわせているなら……。

もしかしたらその人は考え方だけでも、知らないうちに周りのプレイヤーよりも、少しだけ有利になっているのかもしれない。

Ｎｏ．１０５　不審人物

夕食後の自由時間。体育館で純也と薫がシューティングを続けていた。

そこへマネージャー二人がやって来る。純麗が薫に話しかける。

「薫ちゃん、部活で使うジュースがきれちゃってるみたい」

「なるほど…」

薫は少し考え言葉を返す。

「すまないが買い物頼めるか？」

「あ、私行って来ましょうか？　後片付けも終わってないし…」

久留美が薫に向かってそう言った。

「久留美ちゃん、いいの？」

「ええ」

純麗の問掛けに笑顔で答えた。しかし薫は悩ましげな様子だった。

「外が暗くなってるな…さすがにマネージャー一人に行かせるわけには…」

そこに純也がめんどくさそうに言う。

「しょうがねぇな。俺がついて行ってやるよ。やることが多いみてぇだしな」

銭湯でマネージャーの会話を聞いていた純也は無意識にそう言っていた。

「よし、では純也にお願いしよう」

「純也君よろしくねー」

「は～い」

純也は純麗にそう言われると鼻の下を伸ばしながら答えた。

「まったくもう…」

久留美は口を尖らせ、呆れた様子だった。

――――――――

――――

――

純也と久留美の二人は、近くのスーパーへの道を急いでいた。

辺りはそれなりに暗くなっている。

「あ～、閉店まで間に合うかなぁ」

「確か九時までだったはずだから余裕じゃねえの？」

「そっか…だよね」

久留美そう言って歩くスピードを落とした。そして星空を見上げて話しかける。

「ジュン、最近部活楽しそうだよね」

「そうかぁ？　無理矢理入部させられたんだぞ？」

「ううん、前よりも笑顔が増えたよ。昔みたいにね」

「昔か…」

昔とは優、カズと一緒に空き地のコートで毎日バスケットをしていた時だろう。

「不思議だよね～。もしかしたらまたカズ君と試合をするかもしれないなんて」

久留美が懐かしそうにそう言った。

「どんな縁だよ…ったく」

そう言って純也は頭を掻いた。その様子を見た久留美はクスクスと笑う。

その時だった。二人が細い道に入った時、ある少年グループに見られていることに気づいた。

「なんだアイツら？」

純也たちを見ながらなにやらコソコソと話をしていた。

「ジュン……ダメだからね」

久留美がそう言って目で訴えかけている。

「ああ、わかってるっつーの。夜になるとあんなヤツらが増えるからな。相手してらんねぇよ」

純也も最近まではあのような感じだったため、特に気にもせずにスルーしたのだった。

――――――

――――

――

＊＊

純也と久留美の二人が朱雀高校の門に入ったのを確認し、ある男がポケットから携帯電話を取り出した。

『もしもし？　やっと見つけました……はい……朱雀高校です…』

やがて会話が終わると、そのまま学校に背を向け闇の中に消えて行ったのだった。

――――――

――

就寝時間になった。部員達は枕投げでもしているかと思いきや――。

『ぐーぐーぐー……』

『すぴー……』

『ぐー……すぴー……むにゃ』

泥のように眠っていた。今日の練習がよほどキツかったらしい。合宿場に隙間なく敷かれた布団の上を部員達は転がりまわる。

暫くの間、いびき声が部屋を支配する。そこに突然ある人物が勢いよく扉をあけて叫んだ。

『失礼します！』

部員達はいきなりの大声に慌てた様子で目を覚ました。

そこには我利勉が険しい表情で立っていた。

「我利勉か…どうした急に？　帰ったんじゃなかったのか？」

薫が眠そうに言った。我利勉は親に合宿を反対され、部活が終わると同時に家に帰っていた。

「僕、今日から大会が終わるまで家に帰りません！」

部員達が驚いていた。

「僕だって戦いたいんです！　一緒合宿に参加させてください！」

なにやら決意している顔をしていた。薫は起き上がり、我利勉に話しかける。

「そうか……とりあえず今日は寝よう」

「はい、すみません」

薫にそう言われると我利勉は荷物を置いた。薫は今のところは我利勉の事情には特に触れなかった。

「っしゃあ！　でかしたぞメガネっ！　それでこそメガネだ！」

純也が突然意味不明に叫んだ。どうやら寝ぼけているようだ。亮が眠そうに純也に言った。

「ったく…寝ぼけてんじゃねぇよ……寝てるときくらい静かに――」

喋っている途中、亮の顔面に枕が当たった。純也は寝ていなが

らも亮の悪口に反応したらしかった。

「て、てめぇ…」

こうして部員全員を巻き込んだ枕投げが始まったのであった。

No.106 予感

朱雀高校体育館。早朝にもかかわらず、部員たちの練習する音が体育館の外まで響いていた。

「あっ…」

スリーメンの練習で博司が最後のレイアップシュートを外した。コートの端にいた薫が、反対側にいる博司に聞こえるような声で叫んだ。

『物には順序がある。　焦らなくていいし、ゆっくりでいい。ただ、同じ事の繰り返しだけにはなるな！　ずっと同じ場所にいる事になるからな！』

『ふぁい！』

それは当然ながら、決して反復練習を否定している言葉ではない。

――常に意識を持ってプレーを。

それを分かっていた博司は力の抜けたような声で返事をするとコートの周りを走り始めた。

博司に続いて他の部員たちも走り始める。

スリーメンで誰かがシュートを外すたびに全員が走る事になっていた。

「ご、ごめん」

博司が前を走っていた亮に言った。亮は前を向いて走りながら言った。

「あまり気にするなって。誰が見ても進歩はしてきてるんだ。そう思うなら次に活かせ」

博司は申し訳なさそうに返事を返す。そして亮がスピードを上げる。

『おっとごめんよ。小さすぎて気付かなかったよ。許してくれたまえ。ははは』

そこに純也がわざとらしく肩をぶつけ、猛ダッシュで追い越して行った。

「てめぇ！」

亮もスピードを更にあげ純也を追い掛けたのだった。

――――――――

――――

――

「ふぅ、ダリィぜ」

朝のホームルーム。純也は机の椅子に座るとそう言って背中を掛け、腕をブランとさせた。

「今日も随分と頑張ったみたいだな」

優が後ろを向いてそう純也に言った。

「いやー、まったく…ダルイったらありゃしねぇ」

「そうか？　最近随分と楽しそうに見えるが」

「ちっ、久留美と同じようなことを…」

純也はそう言って久留美を見た。隣の生徒と話をしながら軽く笑っていた。

突然、優が真面目な顔をした。

「ストバスの大会の時の決勝で当たったチームを覚えてるか？」

「ああ、ヤツラがどうした？」

以前ストバスの大会で戦ったケルベロスというチームの事だ。

「京介から聞いた話なんだが、どうやら奴らはお前を探しているらしい」

「へぇ…」

純也は興味無く返事をした。そして優に問掛ける。

「どうしてその話を京介が？」

「ああ、二日前に京介が町を歩いていたときに変なヤツラに絡まれたそうだ」

「ああ」

純也はすぐに展開が読めたらしい。続きをいい始めた。

「そんで京介に喧嘩売って返り討ちにされて理由を吐かされたんだろ？」

優が苦笑いをして「その通り！」と言って話を続ける。

「四人だったらしいが京介に怪我はなかったらしい」

「ヤツに喧嘩売るとは…。まだ馬鹿なヤツもいるもんだな。ここらで赤髪を知らないわけねーだろうに」

「それなんだよ。京介を知っていて喧嘩を売ったんだ。どうやら後ろに危ないヤツがついているらしい。そいつらは最後まで後ろの名前は出さなかったらしいがな」

「危ないヤツ？」

「ああ、今回は純也と京介にストバスの時の借りを返すのが目的だそうだ。誰か強いヤツにお願いしたんだろ」

純也は「だっせぇ」と、馬鹿にしたように笑った。

「何人束になろうが変わらねーよ。京介が居れば尚更だ」

その様子を優は心配そうに見つめる。

「部活やってて喧嘩はさすがにマズイだろ…。ただ何かあったら京介が俺を呼べって言っていた。注意してくれよ」

「へいへい」

純也はそう言うと窓の方を目をやった。合宿三日目の朝。今日も雲一つない快晴が広がっていた。

Ｎｏ．１０６　予感（後書き）

私が最初にバスケットボールに触ったのは五才くらいの時でした。
私には同い年の幼馴染みがいました。その幼馴染みのお姉さんは小学校でバスケットをしていて、たまたま練習を見ていた私と幼馴染みにドリブルを教えてくれました。

実はＮｏ．７８のお話は実際の経験を書いたものでした。
「ドリブルを一回ついて、二歩歩く…」
と、真剣にやっている幼馴染みを「すげー」といった様子で見ていたのを覚えています（笑）
７８はそんなことを思い出しながら、懐かしいなーと考えながら書きました。

この小説は僕の周りの人物やＮＢＡ選手、漫画の人物などをモデルにして書いています。
もちろん、木ノ下薫のモデルはその幼馴染みだったりします　。
そんな彼も、中学では有名な選手になり、高校ではチームを引っ張り、見事全国制覇をしました。
今では某有名団体で活躍しているみたいですね。

言うことがすばらしく、性格もまっすぐで人気者でした。私の憧れの人物第一号でした。もちろん今でもですが…（笑）

努力はなにかしら力になる　ということを証明していた気がします。小さな時から毎日のように外から『ダムダム』ボールのつく

音が聞こえていました。
１ｏｎ１もしましたが勝った記憶がまったくありません（笑）

この小説の人物はカズといった素晴らしいプレイヤーや博司のような初心者さん、更にあの純也のようなヤツまで、なにかしら『努力』を繰り返して上手になっています。一応テーマも（あったのか！？）そんな感じなイメージです。個人差はあるかもしれませんが、積み重ねてきたことは、なにかしら力になっていく…。

そんなことを少しだけでも感じとっていただけるような、そんな物語が書けているのなら、それだけで私は幸せです。（ギャグも多いですが！）

何様！といった感じですみません（汗）　＞（｜　｜；）＜あうここまで読んでいただき、本当に感謝しています（＊＾＾＊）

これからも、どうかこの『１ｏｎ１』をよろしくお願いいたします。

あ！　あと、文章力がなくてすみません（汗）　誤字も多いですね；見つけ次第修正していますが、大体は物語が終わったら後に修正していきたいと思います。

Ｎｏ．１０７　合宿最終日

合宿三日目。試合まで残すところ二日という事もあってか、五対五中心の、軽い調整のような練習が行われていた。

「おりゃぁあ！」

純也がディフェンスの我利勉をドリブルでかわし、そのまま地面を強く蹴ってリングに向かって跳んだ。

小田原くんがヘルプに来る。しかし純也は空中で体を横にして、ヘルプに来た小田原くんをかわす。

「石川トマホークッ！」

そのままリングの中心ををめがけてボールを叩き付けた。

ドシャンッ！

凄まじい音をたてて、リングが揺れる。

『よし、終りだ。集合してくれ』

『オッス！』

薫の呼び掛けで部員達が一ヶ所に集まった。

「これで合宿は終りだ。短い間だったがお疲れさん」

そして薫がこれからの日程について話し始めた。

「明後日からいよいよ大事な三戦になるが特に今言うことは無い。練習したことを全部出していこう」

『オッス！』

「今日で全員自宅に帰ることになるが、我利勉はどうするんだ？」

急に話しかけられた我利勉は焦っている様子だった。

「えーと…。勢い良く飛び出して来たので…。まだ決まってませんね…」

「…そうか」

そう言って薫は考える。その時、亮が薫に一つの提案をした。

「あの、俺一人暮らしなので俺の家に泊まりますか？」

「え？　いいのかい？」

驚く我利勉に亮は笑顔で「ええ」と返事をした。

「っしゃあ！　今日は全員で亮の家で鍋でもやろうぜ！　うっちあげ！！　はい！　うっちあげ！！　はい！」

一人でテンションの上がっていた純也に、亮が冷静につっこむ。

「全員入る訳ねーだろアホが」

四月に比べて一年生の数が半分以下になったとはいえ、それでも部員は16人いた。一人暮らしの亮のアパートには全員入りきるはずがない。

「ったく…本当につかえねぇなぁ…」

純也は、ヤレヤレ、といった仕草を見せた。

「常識的に考えろ馬鹿が！」

そんな二人をみて純麗が慌てた様子で言った。

「学校でも良いんじゃない？　合宿の予算余っちゃったし。薫ちゃん、どうかな？」

「まぁいいんじゃないか？　ただ、全員家に連絡いれろよ。一度帰ってもいい。一時間後に学校集合――」

『っしゃあ！』

薫がすべてを言う前に純也が更衣室にダッシュで向かった。それを見た他部員も純也の後を追った。

「元気ねぇ」

その様子を見ていた純麗が笑った。

「……買い出しは大丈夫そうだな…」

薫はそう呟き、更衣室に向かったのだった。

――――――

――――

――

着替が終り、ある者は自宅へ、ある者は準備、ある者は買い出しへと出かけていた。

薫の予測通り、買い出し部隊は純也と亮が自ら志願していた。どうしても好きな材料を入れないと気が済まないらしい。

静まりかえった体育館でマネージャーの二人が会話をしていた。

「久留美ちゃん、鍋の準備は薫ちゃんたちがやってくれるって言ってたし、私たちは残りの仕事終わらせよっか」

「はーい」

そして二人は洗濯をするものを集めた。集めたものを洗濯機のある部屋へと持っていき、洗剤を入れてスイッチを押した。全自動式の洗濯機が回り始める。

「さてと…、私は準備を手伝いに行くけど、久留美ちゃんはどうす

る？　家にはちゃんと連絡した？」

「あ、はい。お姉ちゃんしかいないので大丈夫です。私も準備しに行きますよ～」

「そっか」

純麗はニッコリと笑った。そして取り留めのない会話をしながら洗濯機のある部屋から体育館へと出た時だった。

「誰！？　アナタ達は！」

純麗が叫んだ。体育館の入り口から怪しいギザギザ模様のついたマスクをした集団が入ってきた。その中の一人が喋り始める。

『あれ？　練習してねぇじゃん』

そう言ってマネージャー二人に歩み寄って来る。その顔には真新しい喧嘩の傷が残されていた。

純麗が久留美の腕を両手で掴んでいた。力が込められる。

『まぁいいや。ちょっと聞きたいことあるんだけどさ。純也ってヤツいる？』

久留美が叫んだ。

「いないわよ！　勝手に入ってきて頭おかしいんじゃない！？」

強気な久留美を見て、その集団は笑った。その中の一人があることに気づく。

『あれ…お前もしかしてこの前純也と歩いてた女じゃねぇ？』

――しまった。あの時のグループか。

久留美はそう思ったと同時に言葉より先に純麗の手を握り、走り出していた。

『おっと行かせねぇよ』

すぐに逃げ道を塞がれる。　やがて集団の後ろの方から出てきた一人が久留美をにらみつけた。

『嘘はいけねぇな…。俺らはただ用事があるだけだぜ？』

「い、いないって言ってるじゃない！」

久留美が叫ぶ。久留美を掴んでいる純麗の手に力が込められる。

『よし…つれてけ…』

そう言って背中を向けた。残りのメンバーが久留美を連れていこうとする。

「やめてください！　久留美ちゃんがなにをしたって言うの！」

純麗が久留美の手を握るが、呆気なく離される。

「キャッ！」

『これでも大人しくしてやってんだ。頼むから怒らせねぇでくれよ…。純也ってヤツを呼べりゃあ、なにもしねぇから』

そして純麗の抵抗も虚しく、怪しい集団は久留美を連れて体育館を出て行ってしまった。

残された純麗はまだ残っている恐怖に身を震わせながら、薫たちのいる場所へと急いだ。

Ｎｏ．１０８　恐怖

「ちょっと！　離しなさいよ！」

久留美は自分を抑えている手を振りほどこうとするが、集団の前ではまったく無意味だった。

そしてそのまま無理矢理車に乗せられる。

エンジンがかかり、やがて窓に映る景色が流れ始めた。

久留美が激しく抗議するが、すべて無視をされる。

暫くして車が止まり、降ろされる。そこは久留美にとって見慣れた場所だった。

張り替えた張りの壁に真新しいバスケットリング。みんなでお金を出しあって買った照明。

ここは純也達が小さいこれからバスケットをしていたコートだった。

「こんなところにつれてきて……一体どうする気？　理由によっては許さないんだから！」

この思いでのある場所で何か変なことが起こるのが許せなかった。しかし、ある男が久留美の前に歩みより話しかける。

「どうもしねぇよ。お前が純也を呼んでくれたらな」

その男だけ、他と雰囲気が違っていた。どうやらこのグループのリーダーらしい。

「いやよ。絶対にいーや！」

久留美がそっぽを向いた。それを見た集団のリーダーがメンバーに命令を出す。

「携帯だ。そこから純也の番号を調べろ」

命令を聞いた他のメンバーが久留美の周りを囲んだ。

「ち、ちょっと！　ふざけないで！」

『うるせぇよ。早く貸しやがれ！』

その時、久留美のバックから一枚の古びたカードが出てきた。水を吸ってしまったらしく、ふやけていた雰囲気がある。大事にケースに入れられていた。

『ん？　なんだこれ』

『俺、これ知ってるわ。たしかメガトラマンじゃね？』

『懐かしいな！　ははは』

「だめ！　それだけはだめ！」

慌てた様子の久留美を見て一瞬静まりかえったメンバーだったが。

『凄い趣味でちゅねー！』

馬鹿にしたようにそう言うとカードを地面に捨てて携帯を探し始める。

そして、久留美の携帯を見つけたメンバーは、すぐに純也の連絡先を調べ始めた。

パシッ！

高い音が鳴り響いた。久留美がメンバーの頬を叩いていた。

「信じられない……最低…」

久留美は怒りで震えながらメンバーに言い放つ。

メンバーはニヤリと不気味に笑った。そして――。

パシィッ！

「――っ！？」

そのまま久留美の頬を平手で殴った。久留美は一瞬何が起こったか理解出来てないようだった。そしてゆっくりと頬に手を当てる。

「そんなにヤられてぇのか！？　次は平手じゃすませねぇからな！」

久留美は震えていた。先程とは違った感情で。

そんな久留美を無視してメンバーは携帯を調べ始める。

『お？　このジュン、ってヤツじゃねぇ？』

『いいから早くかけろよ』

――怖い…。

――怖いよ…。

――ジュン…。

＊＊＊

朱雀高校。家庭科室で鍋の準備をしていた薫のもとへ顔色を変えた純麗がやってくる。

「薫ちゃん！」

「ん？」

薫が声に気付き、後ろを振り向いた瞬間抱きつかれていた。

「ん？　ど、どうした？」

あまりにも急な展開に、薫は驚いている様子だった。しかし、震えている純麗を見てすぐに察した。

「久留美ちゃんが…」

降り始めの雨のように、ポツリ、ポツリと言葉が出てくる。

「それで……わた…し……こわくて…え……っと」

やがて何を言っているのかわからなくなる。薫は「もういい」と言って頭を撫でた。そして、

「他の部員達が来たら予定通り準備をしてくれ！　危ないから絶対に教室を出るな！」

そう言って純也を探しに勢い良く教室を飛び出した。

――――――――

――――

――

「てめぇ！　鍋っつったら糸コンだろ！」

「いいや、玉コンだ！　これだから馬鹿犬は困る」

買い出しに出かけた二人はスーパーで、いつものように食材の言い争いをしていた。
周りの人がチラチラと二人を見ている。そんな中純也の携帯が鳴った。
「あ？　なんだ久留美か」
そう言ってから電話に出た。さりげなくカゴに糸コンを入れようとしている亮を無言で阻止する。
「よう、久留美！　鍋っつったらやっぱり玉コンだよな！　……ん？　誰だお前？」
純也の表情が変わる。そのまま電話に対応する。
「ああ、わかった。場所は？」
そして電話をきった。真面目な顔をして亮を向く。
「買い出しはまかせた！　ちゃんと玉コン買えよなっ！」
「ちょっと、お前！　俺一人で持てる訳――」
亮が全部言い終わる前に純也は駆け出していた。
「ちっ…昔っから世話がやけるぜ」
少ししてから薫が亮の前に現れた。

「純也はどこだ!?」

「ど、どうしたんですか急に」

血相を変えてやってきた薫に、圧倒されつつも亮は答えた。

「先程久留美ちゃんから電話が来たらしくて、電話が終わると同時に勢い良くどっかに行きましたよ。まったく…どうやって食材を持って帰れば…」

「場所は!?」

「い、いや…わかりません」

「そうか…」

どこかに立ち去ろうとする薫を亮が呼び止める。

「どうかしたんですか?」

「実は春風が――」

薫の話を聞き終えると、亮も薫と一緒に走り出していた。

Ｎｏ．１０９　純也らしさ

そこは部屋中にアーティストのポスターが貼られていた。棚の上には７０年の代洋楽やら現在にいたるまでのＣＤが詰め込まれていた。

物は沢山あるがしっかりと整頓されている部屋である。

その部屋の中心に優は居た。イヤホンを耳につけ、そこからアンプに繋がっている。

赤色の左利き用のストラトキャスターを持ち、ギターソロを弾いていた。

７０年代らしさを感じさせる。

その絶妙なチョーキングは聞いている者を身震いさせる。

やがて演奏が終わりイヤホンから音が聞こえなくなる。

「ん？」

その時、初めて携帯が鳴っているのに気づいた。

「いつから鳴ってたんだよ…」

優はそう言ってから電話に出た。

「もしもーし」

走りながら電話をしているのだろう。息を荒くしながら相手は喋る。

「いきなりすまない。亮だ」

「ああ、亮くんか。どうしたんだい？」

「久留美ちゃんが怪しい集団に拉致られたらしい」

「な、なんだって?!」

優が部屋で跳び跳ねた。

「それを追い掛けて純也もどこかに行っちまった…。何か心当たりはないかな?」

優は考えた。怪しい集団と聞いて真っ先に思い浮かんだのは例の集団である。

「俺も探すよ。京介って知り合いがそこら辺詳しいから連絡取ってみる！」

「ありがとう！」

そう言って電話がきれた。優は外に出て、バイクにまたがると、京介の自宅へと急いだ。

―――――――

―――――

―――

＊＊＊

「ちっ…なんであのコートなんかに…」

純也は走っていた。そして商店街を抜けて裏路地へと入る。辺りは暗くなり、ほとんど人がいなかった。

壁に描かれたスプレーの落書きが奥に進むにつれて多くなってゆく。

そしてコートにたどり着いた。

「俺を呼び出すとはいい度胸じゃねぇか！」

そう言って顔を上げた。

目の前には十人と少しの人数。ストバスの時に見た集団だった。久留美が純也を見ていた。

「ジュン！」

純也は久留美に返事を返さずに集団の前に歩み寄る。

「お前らストバスの時の奴らだな。　一体なんのようだ？」

リーダーらしき人物が純也の前に立ち、話し始める。

「大会の時は色々と世話になったみたいだからな」

そしてニッコリと笑って話を続けた。

「そのお礼をしたくてな！」

そう言って純也のボディを殴った。不意をつかれて、純也の体が折れる。

「ぐっ…て、てめぇ」

純也が反撃をしようと上体を上げた瞬間――。

『キャア！』

久留美の叫び声が聞こえてくる。

「ちっ、きたねぇ…」

「わかってるな？　お前が手を出したらあの女がどうなるかわからないぞ？」

そして怪しい集団が笑った。純也は二人の男に腕をおさえられている久留美を見た。

「ジュン…」

「どこ見てんだよ！」

ガスッ！

純也の頭が横に崩れる。

『次は僕だよーん』

ふざけたように、そう言うとメンバーの一人が純也に飛び蹴りをかました。

倒れそうになる純也を起き上がらせ、腕を取って後ろから押さえ込んだ。

『ざまあみやがれ！』

そして純也の前に立ったメンバーが純也にボディをいれた。

リーダーらしき人物が煙草に火をつけその様子を見ながら言った。

『お前の高校、明後日から大事な試合らしいじゃん？　そりゃあ反撃できねぇよな。ははは』

その言葉を聞いた純也は自分を後ろから押さえている人物の手を簡単にふりほどく。

「言いてぇことはそれだけか？」

そして腕の骨を鳴らしながらリーダーに向けて言い放った。

「なんか俺が好きでバスケ部にいるみてぇな言い方しやがって…」

――今日でやめてやるよ！

そのセリフを言おうとした瞬間あるシーンが頭の中に思い浮かんだ。

純也が入院して自分が薫に言ったこと。

そして、なんでもない毎日の練習風景。

――俺がもしここで暴れたら。

――俺だけならいい。

――アイツらはどうなる。

――マネージャー達も…。

――久留美も…

「ちっ…」

純也は小さく舌打ちをすると、地面に座り、頭を下げて土下座をした。以前の純也なら先に手が出ていただろう。

「ジュ……ン…？」

久留美が何がなんだか分からない様子で純也を見ていた。

「すまなかった！　どうかカンベンしてくれねぇかな…」

そう言って頭を地面につける。一瞬相手は静まりかえる。しかし、

「カンベンならねぇなぁ。こっちはどんだけやられたと思ってんだ？」

そう言って笑いながら純也の顔面を横から蹴る。横に倒れそうになるが再び頭を下げる。

「すまない」

『ヒャハハハ、いきなり凄んだかと思えば土下座かよ』

『かっこいいねぇ』

―――――

―――

――

＊＊＊

目の前でジュンが集団に頭を下げている。

どうして？　ジュンが謝ることないのに。
大会の時だって相手からやってきたんじゃない。

『お前可愛いじゃん？』

『やべ、なんかムラムラしてきた』

『ばっかだなーお前。まぁ俺もだけどよ』

『ははははは』

悔しくて涙が出てくる。
腕をおさえられているから拭けない。
頬を伝わり地面に涙が落ちる。

なんでジュンが…。

ジュンのこんな姿見たくないよ。

ジュンは自分勝手に見えるけど本当は人想いで。
いつも自信に満ち溢れた顔をしていて…。

いつもめんどくさい、と言いながら心配してくれる。

ジュンを見ていた目線を地面に移した。涙がそのまま落ちてゆく。

もういいから…ね？

我慢しなくても、いいよ？

私はどうなってもいいや。

だってそんなのジュンらしくないもん。

そう思って私は顔を上げた。覚悟を決めた言葉を言い放とうとした瞬間――。

『ったく…ハデにやってんなぁ』

コートの入り口から聞き覚えのある言葉が聞こえた。みんなの視線が一点に集中した。

No.110 真実

『ハデにやってんなぁ』

全員がコートの入り口に現れた人物を見た。背は１８０センチほど。赤髪に、首元にはとあるバンドのチェーンを下げ、黒いジャケットを着ていたその人物は――。

「京介！　なんでここが！？」

純也が驚いた表情をみせた。

「いや、優が突然やって来てな。詳しくは後で友達の亮くんとやらに聞くんだな」

そう言っていつもの笑顔を見せた。

『自分から来るとはな。手間が省けた』

敵のリーダーが地面で煙草を消し、京介に歩み寄った。そして京介に殴りかかる。

パシィッ！

相手の拳を手で受け止めた。そして握った手に力を入れる。

『くっ…』

苦痛に顔が歪む。そして敵はもう片方の手で京介に殴りかかった。

パシ！

それも簡単に受け止められてしまう。そして再び力を入れた。

『ああ……ぁあああ』

京介が手を離した。敵は手を押さえ苦しんでいる。

そして京介は純也の隣に行き、頭を下げた。

「すまない」

敵のリーダーは一瞬何が起こっているのかわからない様子だった。

『へっ……最初からその態度で来いよな。ふざけやがって！』

そう言ってからまた京介に殴りかかった。

その瞬間――。

バシッ！

鈍い音が鳴った。敵リーダーが後ろに倒れこむ。

見事に京介のカウンターがヒットしていた。

『ぐはっ！』

倒れた男は頬を押さえながら叫ぶ。

『いいのか!?　バスケが出来なくなるんだぞ!?　それにあの女が…』

そう言って久留美の方を見た。

「やっほー」

そこにはいつの間にか優がいた。久留美を押さえていた人物が横で倒れている。優が久留美の横で呑気に手を振っていた。

京介は敵リーダーに歩み寄り胸ぐらを掴んだ。

「勘違いすんなよ。テメェみてぇなカスに頭を下げたんじゃねぇよ。」

そして掴んでいる手に力を入れる。

『ぐっ…』

「俺はこいつらのバスケ部どころか学校とも関係がねぇ。何が言いたいかわかるか？」

顔を近付けた。

「このくらいでカンベンしてやろうか？　って言ってんだよ」

『へ…くだらねぇ』

敵リーダーは脅えながらもそう言った。京介は一度笑ってから掴んでいた手を離す。

「立て」

『ふざけやがって…』

京介にそう言われたリーダーは地面に手をつき立ち上がった。そして構える。

京介が笑いながら口を開いた。

「良いことを教えてやろうか。そこでテメェに土下座してるヤツな…。俺、ソイツに一回負けてんだ。」

このセリフが何を意味しているか。敵リーダーも少し考えただけで分かったらしい。

『ふ、ぶざけやがって！』

純也は声を会話を聞いているだけで、ずっと頭を下げ続けていた。京介の言葉の意味を理解していた純也は、更に深く頭を下げた。

敵リーダーが京介に跳びかかる。

勝負は一撃で終わった。
次の瞬間敵が宙を舞っていた。
そしてそのまま地面に倒れた。
『く……そっ…。俺には強いバックがいるんだ……。そろそろ来るはず…だ』
そのセリフと同時に京介の肩に手が置かれる。
殺気を感じた京介は素早く右下に避けた。拳が空を切る。
『お前か？　俺の可愛い弟をいじめているヤツは』
「強いバックってお兄さんかよ。だせぇ」
京介は苦笑いをする。次の瞬間――。
「ぐっ」
『っく…』
京介の顔に拳が振り下ろされる。それと同時に京介は反射的に膝蹴りを繰り出していた。
勝負は互角だった。優も信じられない、といった様子で喧嘩を見ていた。

その時、純也の声が響いた。

「あれ……？　もしかして沖さん…？」

『ん？』

沖さん、と呼ばれた人物が喧嘩を止め、純也の方を見た。

「お……俺だよ！　純也だよ！　なんか聞き覚えのある声だと思ったら…」

そして沖さんは頭を上げた純也に歩み寄った。

『純也……なのか？』

「久しぶり！」

『おお！　純也だ！　でっかくなったなぁ！』

周りの人物がポカーンといった表情をしていた。

『そこにいるのは久留美ちゃんか？　やっぱり綺麗になったなぁ』

「お…お久しぶりです」

久留美は軽く頭を下げた。沖さんは昔このコートに居た人物だった。顔は物凄い怖いが、とても優しい人物なのだ。

『んで、見たところ赤い髪のヤツは純也の知り合いみたいだが…』

倒れていた弟を見る。

『なぜイジメられているから助けて、と言われ来てみたが純也がボロボロになって土下座をしてるんだ?』

『い、いや……それは……』

そして久留美の近くまで行き、顔を見る。

『薄暗くて見えないが顔が腫れてる。久留美ちゃんは純也の彼女だ』

「ちっ、違いますよ!」

久留美が慌てた様子で言った。それを見て沖さんが笑った。

再び弟の近くに歩み寄った。そして胸ぐらを掴む。

『あそこにいる優ってヤツも女を殴ったりするヤツじゃない。本当の事を言った方が良いぞ?』

やがて弟の口から真実が語られたのだった。

No. 111　ほぇ？

『すまなかった！　この通りだ！』

沖さんが純也達に向かって頭を下げた。純也が遠慮するように言った。

「い、いや…沖さんは悪くねぇよ」

「本当にすまない。こんなヤツでも大切な弟なんだ。昔から母子家庭だったもんだから、弟の事になるとついつい…」

沖さんは昔、純也に別れの言葉を告げるときに意味深なことを言っていた。どうやら今のセリフも関係ありそうだ。

「しかし、兄ちゃんに頼むなよ。呆れるぜ」

京介が呆れた様子で言った。

『兄さん…ヤのつく人だから…』

その言葉に空気が凍った。沖さんが弟の頭を叩く。

「アホかお前は。確かに知り合いにそっちのヤツはいるけど、俺はそんなんじゃねぇよ」

『だって事務所出入りしてた――』

「知り合いがいるからだアホが！」

ゲンコツをいれる。どうやらこの弟の勘違いだったらしい。

そしてその後も沖さんの丁寧な謝罪が続き、やっと落ち着いたようだった。

「へぇ…高校でバスケやってんのか。時間が空いたら見に行くぜ。なにぃ！？　カズもやってるだぁ！？」

このような会話が少しの間続いた。そして――。

「じゃあな。帰って弟の面倒を見るわ」

『まじかよ…』

弟の顔が青ざめる。昔、沖さんがキレてる現場を見たときのある純也はかなり同情していた。

そしてケルベロスと名乗っていた集団は沖さんによって強制的に解散させられた。なんとも情けない話である。これを見ていた京介もさすがに笑いしか起きなかったらしかった。

沖さんは最後まで純也達に頭を下げていた。

自分はあまり関係無いのに、そんな姿を見せられたら皆が許してやるのも無理はなかった。

そして純也が思い出したように叫んだ。

「やっべ！　鍋！」

「亮君に連絡しといた方がいいよ。まだ探しまわってるかも」

優が純也にそう言った。そしてすぐに純也、久留美の二人は学校に向かった。京介は眠いから帰る、とのことらしい。

「優、疲れたからバイクで送ってくれ」

「わかった」

優はそう言うと京介を後ろに乗せた。

「二人もよかったら打ち上げに来いよ」

純也の言葉に笑顔で返事をした。

「眠みぃからパスだわ。わりぃ」

「わかった。京介を送ったら向かうよ」

そう言ってバイクを走らせた。

残された純也と久留美の二人は学校への道を歩いていた。

「ジュン…大丈夫？」

久留美が心配そうに言った。

「あぁ、全く無傷だ。昔から頑丈なんだよ」

腫れてはいるが、特に骨などに異常は無いようだ。その場でピョンピョン跳ねたりしている。そして久留美の方を向き、話し掛けた。

「それより…お前こそ大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

久留美が笑顔を見せる。何か複雑な表情をしていた。

「私ね……ジュンが頭を下げたとき、いけないこと考えちゃってた…」

「ん？」

「もうね…頭なんか…下げなくてもいいからぶっとばしちゃえ～……って」

久留美が立ち止まる。純也は後ろを振り返った。

「本当……ダメだよね…ジュンがバスケ部のために頭を下げてたのに……私は……」

やがて久留美の目からは涙が溢れる。

「私は……部…の事…なんて頭の中から消えて……自分はどうなってもいいから……そう叫ぼうとしてた…マネージャー失格だね……あはは」

立ち止まる久留美に、純也が肩に手を置いた。
「部のため？　いやいや久留美さん」
久留美が顔を上げる。
そこにはいつもの自信に満ち溢れた顔をしている純也が居た。
「俺のためだ！　あんなキッツイ練習が無駄になると馬鹿みたいだからな！　はっはっは」
そして、恥ずかしそうな様子でさりげなく言った。
「や、約束だしな。ほら、これ落ちてたぞ。お前のじゃねぇの？」
純也から一枚のカードが差し出される。
古いメガトラマンのカード。
雨の日に久留美が純也にもらったカード。
水を吸って角がしわしわになっていた。久留美は笑顔でそのカードを受け取った。
「もう…忘れてるかと思ってた」
涙を指で拭きながら久留美がそう言った。
「さっき土下座してるときにたまたま目の前にあって思い出したんだよ！」
その様子を見て久留美が笑った。

久留美には、純也の嘘はすぐに分かる。

「ありがとう…」

「お、おう。なんか予定と比べて随分とカッコわりぃ助け方になったけどな」

「ううん」

久留美が目に手を当てて顔を横に振った。

＊＊＊

お母さんが亡くなった日

雨が沢山降っていた日

あのときからジュンはわたしのヒーローだったよ。

今日もありがとう。

ありがとう。私の――。

＊＊＊

純也達が学校に帰ると、すでに準備が整っていた。　優が京介を送った後にすぐに材料を買いに言ってくれたらしい。

純也の顔を見て驚いた薫だったが、久留美の必死の事情説明により理解してくれたようだ。

亮も置いてきぼりにされた文句の一つでも言ってやろうかと純也を待ち構えていたのだが、予想外の純也の姿に、

「や、やっぱ糸コンにしたわ。ごめん」

としか言えなかった。そしてまたいつもの喧嘩が始まる。

合宿の打ち上げ、ということもありみんな大騒ぎだった。

恐怖で震えていた純麗さんも久留美を見て安心したようで、すぐに笑顔になった。そして、打ち上げの間中ずっと久留美をぬいぐるみのように、手離すことは無かった。

こうして短い合宿が終了した。

明後日からは厳しい戦いになることだろう。

騒ぎながらも、どこか気合いの入った顔をしている部員達だった。

―――――
―――――
――

「よし、じゃあなーおやすみ」

「あ、うん」

家の前で挨拶を交す。何やら言いたげな顔をしている久留美がいた。

「怖くて眠れないのか？　一緒に寝てやろうか？」

純也が冗談混じりに言った。

久留美が顔を下げて純也の目の前に立った。そして、笑みを浮かべながら、

「いいんですかぁ～？」

と、挑発するように言った。

「じ、冗談――」

純也が言葉を返そうとした瞬間。

頬に何か温かな、そして柔らかな感触。

久留美はそのまま顔を離し、微笑みながら純也に言った。

「じゃあね。今日はありがとう。ちゃんと風邪ひかないようにしなさいよ」

いつもの久留美がいた。そして純也に背を向けるとそのまま自宅の中に入って行った。

残された純也はボーッとしていた。少ししてから、ようやく一言――。

「ほぇ？」

Ｎｏ．１１２　それぞれの想い

「ただいまー」

家に入り私は無意識にそう言っていた。奥の扉が開き、ある人物が姿を現す。

「あら、久留美ちゃん☆合宿は終わったの？」

特徴のある高い声。寝る前だったのか、ピンクの生地のパジャマを着て眠たそうな顔をしている。。悔しいけど私よりスタイルがいい。

……姉妹なのに。

「うん。色々あってさっき終わったとこ」

「そうなの～。うっかり明日までだと思って、そろそろ鍵を掛けようかと思ってたわ☆」

お姉ちゃんはベットに入ってから眠るまでのスピードが早い。あと少し家に帰るのが遅れていたら……。

そんなことを考えていたとき、お姉ちゃんが急に私の顔を覗きこんだ。

「久留美ちゃん……なにかあったの？」

少し腫れた頬を見て、真剣な顔で問いつめてくる。私はすぐに誤魔化した。

「あはは…さっきよそ見して歩いてたら電柱にぶつかっちゃって！」

「……そう。昔っからドジなんだから～この子は☆」

お姉ちゃんはそう言って近付けていた顔を私から離した。

アナタだけには言われたくない言葉だわ！

そして今度は意地悪そうな顔になる。

「あら～？　反対側のほっぺも赤いわよ～？」

「そ、それは…え～と…」

お姉ちゃんは「クスクス」と笑った。

「遅刻しないように早くお風呂に入って寝るのよ～☆」

「お姉ちゃんもねっ！」

「あらぁ意地悪ぅ」

お姉ちゃんは口を尖らせたあと、私に背を向けて部屋に移動する。

そんなに赤いかなぁ…。

私は頬に手を当てた。

私ったらなにやってんだろ…大会が近いのに！　あ～もぅ！

考えてもきりがないのでお風呂に向かった。

――――――――

――――――

――

＊＊＊

「行ってきや～っす」

『気を付けて行くのよ～』

そう言って玄関から出ると、後ろから母さんの声が聞こえた。

俺はそのまま家を出る。

「あら、今日も早いじゃない」

そしていつものように久留美が家の前に立っていた。

「お、おう。なんか朝になると目が覚めちまうんだよな。慣れって怖ぇ…」

「いいことじゃないの」

久留美は口に手を当てながら軽く笑った。

…あれ？　なんか変だな。

「ま、まぁ朝練に遅れると薫がうるせぇから行こうぜ」

「そうね」

そして俺たちはいつもの道を歩き出した。どうでもいいような世間話をしながら歩いてゆく。

…なんかおかしいぞ。

…妙に大人っぽい気がする。

俺は違和感を感じて久留美に問掛ける。

「なぁ、お前本当に久留美か？」

その言葉を聞いた久留美は呆れた表情になった。

「はぁ～？　ジュン……昨日頭叩かれておかしくなったんじゃない？　病院行く？」

いつもの久留美だった。なんだか急に安心したような気がする。

「いや、なんでもね～よ」

そしてまた歩き出した。再びどうでもいいような話が始まり、やがて昨日の話題になった。

「昨日は長かったなぁ」

「……そうね」

「アイツら沖さんに解散させられて…ププッ…だっせぇ」

「……うん」

久留美が次第に喋らなくなってきた。不思議に思い横を見る。

「ん？　どうした顔を赤くして。風邪か？　ばっかだなぁ俺に言ったくせ――」

「違うわよ！　馬鹿なこと言ってないで急ぐわよ」

久留美の歩くスピードがあがった。変なヤツだな。

歩いて十五分くらいの距離なので、すぐに学校にたどり着いた。久留美が裏門な前で立ち止まり、こちらを見ながら言った。

「えーっと……昨日は…色々と……あったけど……ゴニョゴニョ」

途中から何を言っているのかわからなくなった。それに気づいた久留美は「あーもう！」と言ってから咳払いをする。

「明日から三日間、いよいよ本番だね！　私もマネージャーとして出来ることは全部やるから、ジュンも頑張って！」

「まかせろって。俺もカズとの約束もあるしな。負けるわけにはいかねぇよ」

「そっか」

久留美がそう言って笑顔を見せる。

なんだ、わざわざそんなことが言いたかったのか。

そして俺たちは体育館に入った。

今日もいつものように練習が始まる。試合前、ということもあり、疲れを残さない程度だった。

やがて一日のメニューが終わり、部員たちはそれぞれの想いを胸に家へと帰る。

運命の三日間が始まろうとしていた。

No．113　チャンス

「いよいよだな」

アップを終えた朱雀高校部員たちは、控室で薫の周りに集まっていた。

「おそらく今までの戦いでは一番きつい戦いになるだろうが、やるだけのことはやってきた。名門とはいえ、同じ高校生だ。自信を持っていこう！」

『オッス！』

そして純麗の口からスターティングメンバーが発表される。

全ての選手が読みあげられ、選手たちの表情が気合いの入ったものに変わる。

「行くぞ！」

『オッス！』

選手たちは控室を後にした。

―――――

――

「さぁ、そろそろ時間ですよ」

城清高校の控室にて監督が部員たちに向かってそう言った。

「近江、表情が硬いぞ。珍しく緊張か？」

スキンヘットが特徴の７の背番号を背負った石塚哲平がキャプテンの近江に話し掛けた。近江は眼鏡のズレを人指し指で直してから口を開く。

「いや……ちょっと考え事をしていて…」

そして部員全員を見渡す。

「バスケットは団体競技です。今まで通りいきましょう。そして…初の優勝を目指して！」

『はい！』

この県では１２年連続で白川第一高校がインターハイ出場を決めていた。なので城清、黒沢といった名門校は打倒白川、と日々練習に励んでいるのである。

――今年がチャンスなんだ…。大蔵や杉山、泰助君や石塚君が揃った今年のチームこそが……

――チャンスなんだ！

――――――

――――

――

審判による礼で試合が始まる。さすがにベスト８の試合というだけあって、観客はいつもの倍以上だった。

『城清！　城清！』

『キャー永瀬くーん』

『朱雀応援してるぞ！』

『無名校なんかに負けるなよー』

応援団の数はやはり城清が多いようだ。今年のチームは特に期待されているようだ。

センターサークルに博司が入る。そして大蔵も同時に中へと入った。

「負けマセンヨ」

「こ、こっちこそ！」

大蔵の気合いの入った声に、博司が負けじと返した。

スターティングメンバーは…

朱雀高校

４番　木ノ下薫
５番　永瀬勇希
６番　石川純也
８番　長谷川亮
１１番　大山博司

城清高校

４番　近江隆志
５番　佐藤泰助
６番　大蔵・ソニン・裕康
７番　石塚哲平
９番　杉山健祐

お互いに今まで通りのメンバーでのスタートとなった。それぞれがマークをする。

「なんだ、思ったより小さいな。これはよかった。はっはっは」

佐藤泰助が純也の近くでそう呟き、笑う。

「あぁ？　すぐに泣かせてやるから待ってろ」

佐藤泰助の身長は１７８センチ。他のチームのパワーフォワード比べて決して大きい訳ではない。しかし、純也は更に下の１７０センチだった。泰助は今までの相手よりも小さくて驚いたのだろう。

審判の手からボールが上空へと放たれる。それに向かって博司と大蔵の二人が跳んだ。

パシッ！

博司の方が１０センチ上なのだが、勝負は互角だった。

二人によって弾かれたボールがサークルの外へとびだす。

「チャンスです」

ボールをキャッチしたのは城清のキャプテン近江だった。

ボールをすぐ前にいた石塚に出し、自ら走る。

石塚には薫がマークしていた。そのままゴール下に向かうと思いきや、

「杉山！」

反対サイドにいた杉山にパスを出した。そしてツーハンド気味

のデタラメなフォームから素早いシュートが放たれる。

選手たちはボールの行方を追っていた。

「リバウンドッ！」

薫が叫び、博司と純也、泰助、大蔵は陣を奪い合う。

『スパッ』

しかし、杉山の放ったシュートは綺麗にリングにおさまりこれがオープニングショットなった。

『ウワァァァッ！』

歓声が沸き起こる。城清が3点先取した。

「これは大きいです。ナイスシュートが！　戻ります！」

『おう！』

近江が指示を出すと城清のメンバーが味方コートに戻った。最初の得点は気持ち的にも大きい。

試合の様子を笹岡監督が笑顔で見ていた。

城清をここ数年で名門と呼ばれるまでにした名将である。監督の指示はまだ無い。

「やってくれますね」

「よし、いくぞ」

亮が薫からボールを貰う。そしてボールを運んだ。
城清メンバーが不気味な陣形で待ち構える。

「これがマッチアップゾーン…」

ドリブルをしていた亮にすぐさま近江が指示を出してマークをする。

「ディナイです！」

選手達が組織的に動いた。

（うおっ……マジでパスコースが少ねぇ…それなら！）

亮がフェイントをかけて近江をかわす。しかし近江も簡単には抜かせない。

「僕の取り柄はこれだけなんだ！　死んでも抜かせません！」

「亮！　こっちだ！」

亮は薫にパスを出した。
キュキュッ！

再び敵のディフェンスが不気味に動く。

（今だ！　純也！）

そのままローポストにいた純也にパスを出した。

「やぁ、君か。はっはっは」

「ちっ…」

純也に泰助がマークをする。

「泣きわめいてもしらねぇからな！」

そう言って純也は力を入れる。そして驚きの顔へと変わった。

（なっ、動かねぇ…）

「ん～？　どうしたんだい？　もっとドーンと来いドーンと！　はっはっは」

「てめぇ…」

相変わらず余裕な表情をみせる泰助に純也は苛立ちをみせる。

『純也っ！　ボケッとすんじゃねぇ！　動けって言われたろ！』

急に亮が叫んだ。

「なにっ！？」

純也は知らないうちに石塚とダブルチームされていた。

「コーナーにつめろ！」

「了解！　はっはっは」

そして純也は苦し紛れに突破しようとする。

ドンッ！

（しまった…、この気持ちわりぃやつ《泰助》の圧力に慣れちまってたから…）

純也は勢いで石塚を吹っ飛ばしていた。

ピィィイッ！

『ファウル青６番！』

『ウワァァァ！』

『ナイス！』

歓声が沸き起こった。

「くそがっ！」

純也はイライラした様子で手をあげた。

「まだ始まったばかりだ。焦るな」

「わかってるよ…」

薫の言葉に返事をする。異様なムードが漂っていた。

No．114　流れ

純也のファウルで城清ボールになった。杉山がコート内の近江にパスを出す。

「ゆっくり行ぐべ」

「ええ」

そしてそのままボールを運んだ。朱雀のメンバーがハーフからのマンツーマンで待ち構える。

（朱雀高校の注意するところはあの爆発力。のせたら危険ですね）

近江がそんなことを考えながらドリブルをしていた。

「ちっ、いつまでドリブルしてやがる…」

純也が杉山をマークしながら顔をしかめた。その時――。

シュッ！

鋭いパスが勢い良く杉山に向かっていく。

「ちっ！」

純也が慌てて距離をつめるが…。

（は、はぇぇ…）

純也が手を伸ばした頃には既にシュートが放たれた後だった。

ガンッ！

惜しくもボールがリングに当たり、外れてしまった。
しかし、すぐさま大蔵がリバウンドを拾う。
そして博司のマークをかわしてシュートを決めた。

「あんがど」

「イエイエ、どんどんウッテくだサーイ」

杉山が大蔵に声を掛け、すぐにディフェンスに戻る。
キャプテンの近江は純也に出来た一瞬の隙を見逃さなかった。
ディフェンスで守り、オフェンスの少ないチャンスを確実にモノにしていく…。
これが城清の伝統のバスケットだった。

「まずは一本！」

亮がそう叫んでドリブルをしながら辺りを見渡す。

（しかし、相手してみて初めて凄さがわかるな…）

亮は初めて体験する城清のディフェンスに少しだけ圧倒されていた。しかし、

（シュートがゾーン練習してるみたいに、ゴチャゴチャしてるだけに見えるのに…）

亮がフェイントをかけ、近江をドリブルでかわす。

（たいしたディフェンスだぜ！）

亮にヘルプが着く。一瞬だけディフェンスにスペースが出来上がる。

そのままノールックで勇希にパスを出した。

勇希はゴールに向かって切り込んでいく。

泰助がディフェンスに着こうとする。しかし、

キュッ

勇希はブレーキをかけ、ジャンプシュートを放った。

「なっ」

泰助はドリブルに備えていたため、驚いた表情を見せる。

パスッ

シュートはリングに綺麗に吸い込まれた。

『ワァァァッ』

「戻れ！」

その時、薫が叫んだ。

石塚、杉山、近江の3人が速攻に走っていた。

「今度は速攻かよっ」

亮がそう言って走る。純也、薫も着いて行く。

そして石塚が追い付かれるギリギリ前に、素早いドリブルからレイアップシュートを放った。

さすがは城清のポイントゲッターである。以前、ストリートバスケットの大会でも、あのカズでさえ、石塚の素早い動きに苦戦していた。

「よしよし、それでいい」

笹岡監督がベンチに座り、笑顔で試合を見ていた。

近江は常に試合の流れをみていた。少しでもチャンスがあったら攻める。他のメンバー達も同じ気持ちだった。

見事に城清のマッチアップゾーンが機能していた。朱雀のポストプレーに関しては見事に全滅させられていた。

薫、勇希のスリーポイント、ミドルシュートで反撃するも、城清の石塚、大蔵によるインサイドの得点により、再び引き離されてしまう。

そしてまた――。

スパッ！

早くも今日2本目となる杉山のスリーポイントが決まった。これで7対14と点差を再び7とした。第一ピリオドも残り四分を切っていた。

「さぁ守りましょう！」

『おう！』

近江が気合をかけ、城清が再びゾーンを組む。それに朱雀メンバー達が攻め入る。

朱雀はパスを回して次々に切り込む。それにあわせて城清のディフェンスも変化してゆく。

「純也！」

「おう！」

そして亮がチャンスとみたのか、純也にパスを出した。

（お前が得点出来れば流れが変わる！　マッチアップゾーンだからって逃げていたらダメなんだ！　頼むぜ！）

亮は一瞬の間、そんなことを考えていた。

「また君か～。運が悪いね。はっはっは」

「黙れ筋肉野郎！」

「そんなに誉めないでくれよ！　まいったなぁ～はっはっは」

泰助は笑っていた。お互いに動き回っていたために、まだダブルチームも来てないようだ。

――この一瞬で決めてやる！

純也は右へ体重を移動した。泰助もその様子をみてディフェンスをする。

そして次の瞬間、純也が左膝の力を抜き、倒れこむ力で重心ごと一気に左に移動し、ボールも左右切り替える。

「うおっ！？」

逆をつかれた泰助は慌てて逆側に体重を移す。

しかし純也の方がわずかに早かった。

そのまま加速をつけると勢い良くゴールに向かって行き、シュート体勢に入った。

「くそっ！」

（まだ流れは渡さない！）

ピィィイッ！

『ディフェンスファウル！　赤5番！』

No．115　まずは一本

「ハァ…ハァ…」

純也が肩から息をして、泰助を睨みつけた。

「フリースローだ。チャンスじゃないか」

「ちっ…」

笑顔で言った泰助に純也は舌うちをしてフリースローラインへ向かった。

「ナイスファール」

「ああ。まだ流れをやるわけにはいかないからな」

近付いてきて話しかけてきた近江に、泰助が笑顔で答える。

現在、薫、勇希に点をとられてはいるが、彼らを完全に抑えられると思っていない城清にとっては計算通りだった。

現在の流れで唯一突破口があるとすれば…。

純也の手からボールが放たれる。一本目はリングに当たりもせずにボードに当たって跳ね返ってきた。

「落ちていて狙え」

薫が純也の後ろから声をかけた。博司と勇希は純也からボールが放たれるタイミングをじっと見つめている。

シュッ！

やがて純也の手から二本目のシュートが放たれる。

ガンッ！

今度はリングに当たり、ボードが外にとびだす。

場所取りに勝った大蔵が豪快なモーションでリバウンドを拾った。そしてすぐに近江にパスを出し、反撃を開始する。

「一本ゆっくりいきましょう」

近江が片手を上げしそう叫んだ。そしていつものように、ゆっくりとしたオフェンスが始まる。

いくらかパスが回り、ハイポストに入った大蔵にパスが回る。

「博司！」

亮が叫んだ。博司が必死に大蔵をマークする。そして――。

シュッ！

シュートと思いきやアウトサイドに居た杉山にパスが回った。

マークしていた勇希がブロックに跳んだ。

「なっ！？」

勇希は驚いた表情を見せる。

――ジャンピングシュートだと！？

ツーハンド気味のシュートフォームから放たれたボールが、リングに向かってゆく。

「いくらなんでも入る訳…」

ゴール下で純也がスクリーンアウトをしながらそう呟いた。

スパッ！

会場が静まりかえった。そして、

『ウワァァッ！』

『さすがハンター杉田！』

『もう一本かましたれっ！』

朱雀高校がたまらずタイムアウトを取る。

「なんであんなシュートが…」

純也がベンチに座るなりそう言った。

「時間をギリギリまで使われてスリーとは……。これは効きますね……」

亮が薫に向かって言った。

「さすがは城清のディフェンスだな。完全にペースを握られている」

そう言ってメンバー全員を見渡した。そして純也を見る。

「1クォーターも残りわずかだ。最後に一本期待しているぞ」

「まかせろっつーの」

そして純也が手の骨を鳴らした。薫も流れを返る一番効果的な一本が、何であるかを分かっているのだろう。

「こちらの攻撃パターンが増えれば、相手も簡単にはいかなくなる。まずはディフェンスを崩すぞ。基本通りにパスを出したら動け」

『オッス！』

やがてタイムアウト終了を告げる笛が鳴った。

Ｎｏ．１１６　ハンター

名門、城清高校で二年生ながらレギュラーの座を勝ち取った男がいた。

杉山健祐、１７２センチ。ポジションはシューター。

彼、杉山健祐は十二歳の時から身長が伸びていない。

それは、少し、といった意味ではなく、言葉通りまったく伸びていないのである。

彼の出身地は高校バスケ界では王者的存在、全国優勝四十回以上を誇る秋田の名門校、稲川工業のある街だった。

そこは街全体がバスケムードで包まれていて、街のいたるところにバスケットリングが設置されていたり、駅にもバスケットリングが置かれ、電車の待ち時間にフリースローがうてるほどだった。

当然、街の子供達は幼い頃からバスケに接する機会が多く、技術的にも優れた人物が多く現れる。

杉山もそんな子供達の一人だった。

小学生で、すでに現在の身長があった彼は、チームの大黒柱として、東北大会優勝に貢献した。

特別に動けるわけでは無かったが、身長が１７２もあれば小学生ではかなり大きい方だ。地元の誰もが杉山の将来に期待に胸を膨らませていた。

中学になり、時は流れる。周りの人物が次々に背が伸びていく

中、杉山だけが昔のままだった。
やがて、自分達の代になり、新人戦を迎える。
杉山はレギュラーに選ばれていなかった。
この日本の、小学生の中で身長に頼っていた彼にとって、気づいた時には武器が無くなっていたのである。

そして三回戦、チームが惜しくも敗退し、控室に向かっている途中、大型の選手とすれ違った。
「あれは…南小の……。アイツ１５０ぐれしかながったはず……（１５０センチくらいしか無かったはず）」
そして、杉山はその時に気づいた。
――俺って最初っから身長っていう才能が無かったんだな。
まだ新人戦というのに、杉山は人目を気にせず泣いていた。それは、敗戦のショックからではない。
己の甘さ。うぬぼれていた自分。勝手に未来の自分を想像して、周りの評価に流され、知らないうちに手を抜いていたのだ。
――甘かった。
――……甘かった。

『どうが、お願いします！』

杉山は大勢の大人たちの前で土下座をしていた。大人たちは困りきった顔をしている。

ここは稲川バスケットボードクラブ。街の社会人の人々が趣味で集まり定期的に練習や試合をしている場所である。趣味、と言っても、ほとんどがこの地元で育った人物。バスケのレベルは現役を退いた今でも十分に高かった。

それから毎日のように杉山は、中学の練習が終わると真っ先にそのクラブに向かうことになる。

空いた時間はひたすらシューティング。

試合形式の練習でも、自分よりも大きい人と毎日マッチアップをすることになる。

センターをしていて気付かなかったが、杉山は遠くからゴールを狙う能力が周の人よりも優れていた。

そして彼は無意識のうちに進化を遂げたのだ。

――もっと速く！

――ディフェンスが来る前に！

――もっと正確に！

周りから見れば、一見みっともないようなシュートがだが、これは彼が必死に悩み、そして考えだした奇跡のシュートフォームだった。

ただひたすらうまくなりたいと願い、ダサい、カッコ悪い、と言われても諦めなかった者の姿なのだ。

――――――――

――――――

――

＊＊＊

スパッ！

『ワァァァァ！』

杉山がシュートを決めると同時に第1クォーター終了のブザーが鳴り響いた。

薫がスリーを決め、四点差まで迫っていたのだが、先程のシュートで再び7点差となってしまった。

「よーし、よくやったぞ！　杉山！」

監督がベンチに帰ってきた杉山に言った。

「気ぃ抜ぐど、あっと言う間に追い越さます」

「うむ。まぁ、座りなさい」

監督はそう言って、今度は近江に向かって話し掛ける。

「この調子だ。朱雀高校も本来の力を出せていないぞ」

近江が汗を拭きながら答える。

「ええ、ランニングゲームになるとこっちが不利ですからね。次からは不安要素を取り除きに行きますよ」

眼鏡が怪しく光る。近江の言う『不安要素』がなんであるかは、城清の他の部員達も感じとっていた。

No.117 感謝

「あと少しで流れを掴めたのに…」

亮がベンチに座るなり、そう呟いた。その言葉に、薫はタオルで汗を拭きながら答える。

「選手全員が自分たちで考え、それぞれ試合の流れを見ているな。さすがは城清だ。監督も今のところ、ほとんど指示を出していない」

朱雀高校のベンチが静まり返る。第一ピリオドはまったく朱雀らしい戦いをさせてもらえなかった。きっと、これまで城清に敗れ去ってきたチームのほとんどが、試合の最初から最後までこのような感じだったのだろう。

「これから俺たちがやることの確認だ」

部員全員が薫に注目した。

「メンバーはこのままで行く。博司、純也はゾーン相手にリバウンドを拾うのは大変かもしれないが、流れを掴むには絶対に大切なことだ。頑張ってくれ」

「おう」

「ふぁい！」

薫は他の2人を見つめ、更に続けた。

「上はとにかく切り込むことだ。ボールを下に落とせば中が空く時が必ず来る。チャンスだと思ったらどんどん行ってくれ。」

「ああ…」

「はい！」

永瀬と亮が返事を返す。それと同時に第二ピリオド開始の笛が鳴り響いた。両チームの選手たちがベンチから立ち上がりコートの中へと歩み寄る。そのとき、薫が前を向きながら隣にいた亮に呟いた。

「チャンスは作り出すものだ。」

「！？」

そう言って薫は亮から離れて行ってしまった。亮は一瞬固まってしまったが、薫の言葉を理解し、やがて我に返る。

第二ピリオドも博司と大蔵のジャンプボールにより試合が始まった。

審判の手から天井に向かってボールが放たれる。勢いをなくしたボールは、やがて重力により地面に向かってゆく。

しかし、それが地面に着くことは無い。

パシッ！

『うおぉお！』

『互角か！？』

観客が息をのむ。

博司と大蔵の指先が、ほぼ同時にボールをとらえた。方向の定まっていないボールがセンターサークルの外へと、とび出した。

「っしゃあ！」

そのボールを純也が拾い上げる。その様子を見た城清のメンバーはすぐに見方コートに戻り、ゾーンを組む。

（薫さんがさっき言っていた言葉…最初は理解できなかったが…）

亮が純也からボールを貰い、ドリブルをして辺りを見渡した。

（このゾーンの目的はパスとドリブルのコースを無くすこと。つまり俺に仕事をさせないって訳だ）

ドリブルを始めた亮に、石塚による厳しいチェックが入る。

（おもしれぇ！こんな状況で燃えないガードがいるかよっ！）

亮が相手の目を見てドリブルをして、左方向から突破を試みる。

亮は石塚の右足がわずかに動いたのを見逃さなかった。

そして亮は、クロスオーバーでボールを右手に切り替えた。

「！？」

一気に姿勢を落とす。

（コイツ…どんだけ低いんだよっ！）

石塚が慌てて上体を戻すが、亮が右側から一瞬で抜き去った。

切り込んですぐにカバーが入る。亮はノールックで０度のスリーポイントライン付近に居た薫にパスを出した。

それを読んでいた、とばかりに泰助がすぐさまディフェンスを開始する。

「はっはっは！　残念だ――」

泰助がセリフを言い終わる前に、薫がディフェンスの左肩スレスレにパスを出した。

ボールは勇希の手に渡った。そのままドリブルで中に切り込んでシュートを決めた。

『ワァァァ！』

これで１５対２０の五点差となった。城清がエンドラインからボールを出し、再びゲームが再開される。

「すまん」

石塚が申し訳なさそうに近江に言った。

「いえいえ、次に切り替えましょう。でも一線はなるべく気をつけてくださいね」

「わかった」

近江の言うとおり、このゾーンの攻略の鍵は、マンツーをしているディフェンスを、オフェンスが抜きさり、中に切り込むこと、なのだ。一線を抑えるか抑えられないかでだいぶ結果が変わってくる。

「ここで勢いづかせなければ大丈夫です」

そして近江がドリブルでボールを運ぶ。

「さっきの借り、かえしますよ」

亮が近江にディフェンスをする。近江は特に言葉には反応しなかった。

（あの石塚君が追いつけないスピードとは…これで1年生ですか…。あの6番といい、この8番といい…）

パスがいくつか回り、徐々に時間が過ぎてゆく。そして再び、ボールが近江の手に渡った。

「本当に感謝しますよ…」

近江がドリブルをしながら、いつものクセで特にずれていないメガネを触る。

――もう1年、早く生まれなかったことをね…！

近江が突然ボールをリングに向かってシュートをした。

「なっ！？」

その様子をみた亮が驚きの顔を見せた。

（シュート…？　にしては弾道が緩くない…。それに打点が低すぎる…まさか…！？）

そのボールを空中で大蔵がキャッチした。

「博司っ！」

亮が振り返り、叫んだときにはすでに遅かった。

ドォォォンッ！

リングが叩きつけられ、激しい音が周囲に鳴り響く。

大蔵がそのままボールをリングにねじ込んでいたのだった。

『うおぉぉおお！』

歓声が一気に沸いた。

「今年の城清は少し違いますよ」

近江が亮に向かってそう言い、ディフェンスに戻った。

Ｎｏ．１１８　厄介な相手

会場が静まり返っていた。やがて観客から一気に声援が沸き起こる。

『ウオォォオオッ！』

これは近江と大蔵の決めたアリウープによるものである。例年通りの城清なら、おそらくこのような攻撃パターンは無かっただろう。

「マジかよ…。ただ高く跳べるだけじゃないようだな…」

亮がエンドラインからボールをもらい、ドリブルをしながらそう呟いていた。

「１番オッケェェイッ！」

テリトリーに入ってきた亮を、石塚がすぐさまディフェンスをする。

「さっきはマグレだ。もうあのドリブルは通用しねぇ」

さきほど亮に抜かれたことを気にしているようだ。普段よりもさらに気合の入った顔になる。１メートルほど距離をとり、オフェンスに備える。

ボールが勇希に渡り、更に中へ入った博司へと渡った。

「うっ…」

立ち止まる博司に、城清の二人ががりのディフェンスが襲い掛かる。ボールを高くあげキープしていた博司だが、やがて薫に向かって苦し紛れにパスを出した。

パシッ！

そのボールを城清の４番、近江がカットした。

（やはり経験が浅いようだ。簡単な罠に引っ掛かってくれましたね）

近江がドリブルで味方コートへとボールを運ぶ。それにあわせて朱雀のメンバーがディフェンスをする。

「コッチデース」

大蔵が近江からパスをもらう。そして博司のディフェンスをドリブルで抜き去り、シュートモーションに入る。

「くっ…」

博司が懸命についていこうとしたが、大蔵が空中でボールの位置を入れ替える。そしてそのままシュートを決めたのだった。

――なっ！？

そのプレーを見た朱雀メンバーたちの顔色が変わった。そのプレーをみた城清高校の応援団のテンションは再び最高潮に達する。

「ダブルクラッチか…。　あのイメージとはかけ離れたプレーをするやつだな」

永瀬が腕で汗を拭きながら亮にそう呟いた。亮もあのプレーに衝撃をうけたようだった。

「普通にフォワードも出来そうな動きですね。人は見かけにはよらないものだ」

そして試合が再開される。朱雀高校のボールが次々にまわり始める。それにあわせて城清のディフェンスの陣形も形を変えてゆく。

「驚いたか？　あれが城清の大蔵だ」

石塚が亮をマークしながら話しかける。

「ええ。よくわかりましたよ」

亮が左右にフェイントをかけるが、石塚がそれにピタリとマークをしている。

「アイツは小さい頃海外にいたんだ。海外ではあの身長でフィワードは別に珍しいことじゃねぇ。大蔵もその一人てわけさ」

石塚がそう言って不気味に笑った。そして朱雀高校がボールをキープしたまま、時間だけが過ぎてゆく。

「ちっ」

亮が苦し紛れにスリーポイントを放つが、リングに嫌われ外にと

び出してしまった。

「リバウンッ！」

亮が叫んだ。やがては確実に落ちてくるボールを手に入れるために、数人がゴール下で激しいポジション争いをしていた。

「うっ…」

ボールが博司の方向に飛んでいった。だがしかし、大蔵が素早く回り込み、思いっきりジャンプする。博司も負けじとそれに合わせて跳ぶ。

――やった！

博司の方が若干有利のようだ。そして、博司自身もそのことを理解したようで、ボールをキャッチする動作に移る。

パシッ！

「えっ？！」

博司の安心したような顔が、一変して驚愕の顔となる。大蔵がわずかに指先で弾いたボールが外へととび出す。

「よくやったよ、はっはっは」

そのボールを城清のパワーフォワードの泰助がキャッチする。そしてノールックでスリーポイントラインにいた杉山にパスを出した。

杉山が得意の素早いいシュートモーションで、リングに向けてボールを放った。

「……」

すぐに薫がカバーに入った。ブロックするために伸ばした手の指先が、少しだけボールがかすめる。

薫によって、軌道を変えられたボールは、決して勢いを失うことは無く、リングへと向かってゆく。そして…。

パスッ！

辺りが静まり返っていた。やがて一気に歓声が沸き起こる。

『うおぉおおおおっ』

『すっぎやま！すっぎやま！おっ！』

これでもか、というほどメガホンを叩きつけた音が会場に鳴り響く。そしてすぐに城清のメンバー達は再び不気味なゾーンを展開していた。

「どうして…」

博司が驚きを隠せない様子だった。その様子をみた薫は博司に駆け寄り、話しかけた。

「チップアウトだな。ボールを拾おうとはせずに、外に向かって弾

く技術だ。これなら身長に差があっても、少しは埋めることが可能だ。」

跳ぶタイミングはほとんど同じだったはず。ボールを『掴もう』とした者と『弾こう』とした者の差なのか。心配そうな博司に薫は続けた。

「大丈夫だ。たった1つでいい。たった1つ、相手よりも勝っている部分があれば、勝敗はわからなくなる。それがスポーツだ」

そして薫がその場から去ろうとする。

「お前の生まれ持った才能、そして、練習してきた努力を信じろ」

その様子をみた亮は、先ほどの大蔵のプレーについて考え事をしていた。

（さっきのチップアウトは弾く先を考えたプレーだな。大蔵は本当に厄介な相手かもしれない）

そして朱雀高校のオフェンスが始まった。

No．119　得点

――マッチアップゾーン。

名前を聞いただけでは、どうも矛盾しているような気もする。それもそうだ。

マンツーマンとゾーンを合わせた、夢のようなディフェンスがマッチアップゾーンなのである。

しかし、その便利さゆえに、いくつかの弱点もあった。

――――――

――――

――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『石塚！　カバーが遅れてるぞ！』

『くっ…はいっ！』

城清高校の体育館からは、このような会話が毎日の様に聞こえてくる。

このディフェンスには何十とも言われるディフェンスパターンが存在する。

相手のポジション、ボールの位置、狙いなどにより常にディフェンスの陣型が変わるのだ。

この動きによって、相手のパスやドリブルコースを塞ぎ、更にはプレッシャーをかけ続けることが可能だ。このディフェンスがハマった時の効果は絶大で、酷いときは相手にやりたいことを何もさせないで終わるような時もある。

しかし、このディフェンスを操るには高校三年間という時間では短すぎた。特に能力的に飛び出た選手のいない城清は、ディフェンスの練習に、ほとんどの時間を費やしているのが毎年の現状であった。

なので、二年生でレギュラーの座を杉山が勝ち取ったことは、例年通りでいけば、非常に珍しいことだった。

並大抵の練習量では難しい。城清の選手でさえ、プロが操るディフェンスパターンの半分ほどしか操ることが出来なかった。

このディフェンスの弱点は、まさに習得するまでに時間がかかりすぎること、なのである。

――――――――

――――

――

（ディフェンス『だけ』のチーム…。この学校がそう言われ続けて何年経ったでしょうか）

近江がドリブルをしながら人指し指でメガネを触る。

（先輩たちは、いくら守っても自分達が点をとれずに試合に負けてしまうこともあった）

――当たり前ですよね。

近江が基本に忠実なドリブルで、亮にフェイントをかける。石塚へとパスを出し、そのまま中に入った大蔵にボールがまわった。

（中か？　外か？）

永瀬が泰助をマークをしながら、周りを見ていた。

大蔵の目線が外に居る杉山に移った。しかし、次の瞬間――。

シュッ！

大蔵が自分の右ななめ後ろにノールックでボールを放り投げた。

それを、タイミングよく切り込んできた近江がキャッチする。

そしてリングの方を振り向き、シュートモーションへと入った。

バックボードを使い、確実にシュートを決める。まさに銀行のように安定したバンクシュート。

（点を取らないと勝てない……。わかってますよ。そんなこと。）

ウワァァァッ！

「ちっ、相変わらず教科書から出てきたようなシュートを打ちやがって」

石塚が冗談混じりに近江に話し掛ける。近江は笑みを浮かべながらそれに答えていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この試合を城清のベンチから静かに見ている人物がいた。

この城清を名門と呼ばれるまでにした名将笹岡監督。

「良いチームだ」

ベンチに座り、静かにそう呟く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今では沢山の人に支持されてはいるが、監督に就任して間もない頃は、批判の声もあった。特に部活は息抜き程度にしか考えていない、普通の進学校で、そこまで力を入れる必要があるのか。マッチアップゾーンを完成させるには難しすぎないか。

監督についていけなくなり、部活を辞める者まで出てしまっては、さすがに非難の声があっても仕方がないだろう。

『僕たちは監督についていきますっ！』

チームの方向性に悩んでいた監督のもとへ、三人の選手の声から声がかかる。

緊張しながら叫んだのは近江だった。隣には石塚、佐藤が並んでいる。

『僕たちは監督の考えに共感しています！　今のディフェンスをやめないでください！』

監督の前に居るこの三人は、中学時代はレギュラーにも選ばれていなかった人たちだ。

しかし、監督はあまりにも真剣な目をしている三人に心を動かされる。

『わかった。君達を見て今後の方向性を考えるとするよ』

そう言って監督は微笑んだ。選手たちの顔は、より一層真剣なものとなっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（ディフェンス練習をこなし、個人のシュート練習も欠かさない。本当に良いチームになりましたね）

監督がコート上でプレイをする近江を見る。

「実力さ。なぁ、近江」

Ｎｏ．１２０　まさかの変速シュート

近江が見事にシュートを決め、城清メンバー達は再びディフェンスへと戻った。

「機械みたいな連中だな…」

亮がボールを運びながらそう呟いていた。点の入らない焦りからか、顔に流れ出る汗をリストバンドで拭く。

「亮！　こっちだ！」

薫が亮に向かって叫んだ。そしてボールをもらった薫はダブルチームを簡単にかわし、シュートを決める。

『ワァアアッ』

城清のディフェンスでも、木ノ下薫を完全に抑えることはできないようだ。それでも点差が５点以内に縮まることが無く、城清が逃げ切る形で第２ピリオドを終えたのだった。

「ちっ、うざってーディフェンスだぜ…」

純也が控え室の椅子に帰るなりそう言った。他のメンバーたちも、どうすればいいのか分からないような表情をしている。

「ったく…あんなのバスケじゃねーよ」

純也は更にそう続けた。そしてバッシュのかかとで地面を蹴る。

相手のディフェンスの凄さはわかるが、認めたくない、といった様子だった。

亮はその様子をみて特に言うことはなく、座りながら組んだ指を額付近に持っていき、真剣な顔つきで考え事をしているようだった。

控え室が静まり返る。沈黙に耐えられなくなったのか、椅子の背もたれに上体をあずけていた純也が、体を起こし薫に向かって言い放つ。

「なんか良い作戦でもねーのかよ？」

「ない」

あまりにも即答だったため、純也は若干驚いた表情を見せた。すかさず薫に言い返す。

「じゃあどうすればいいんだよ！　俺はこのまま試合に出ていいのか！？　完全に押さえ込まれてるんだぜ！？」

このセリフだけは言いたくなかったのだろう。純也にしては珍しい言葉だった。複雑な表情をしていた。そんな純也に、薫はいたって冷静に言葉を返した。

「あえて言うならば『我慢』だ。作戦はない。純也はこのまま第３ピリオドにも出場してもらう。」

「！？」

純也は驚いていた。

「はいはい、我慢ね…」

そして、軽く息を吐くと、再びダランと背もたれに上体をあずけていた。

――――――

――――

――

ここは城清の控え室。キャプテンの近江が、監督に向かって話しかけていた。

「監督、後半はどうしましょうか？」

その言葉を聞いた監督は、少しの間考えた。そして一人言のように呟き始めた。

「そうだな…リードしているとはいえ、いつ逆転されてもおかしくない点差だ。朱雀さんもこのまま黙っていることもないだろう…。」

そして、選手全員の顔を見てから、続きを語り始める。

「みんなが知っての通り、朱雀さんの怖いところは後半の爆発力だ。いかにウチが相手にペースを握らせないかで試合は決まってくるだろう。ここからは体力的にも、精神的にも辛い戦いになるだろう。今までやってきたことを出し切るつもりで戦おう！」

『オッス！』

選手たちの声が控え室中に鳴り響いた。

――――――

――――

――

第3ピリオドが始まろうとしていた。両チームの選手たちはセンターサークルの周りを囲むように並んでいた。

そして審判の手からボールが上空に放たれる。

パシッ！

勝負は互角だった。大蔵と博司が弾いたボールは、本人たちもどこへいくのかわからないまま、サークルの外へと飛び出した。

「さあ、いきましょう！」

ボールをキャッチしたのは城清のキャプテン、近江だった。特に速攻するわけでもなく、再びスローペースなオフェンスを展開する。

「ちっ…またかよ…」

純也はその様子をイライラしながら見ていた。

攻める気のないようにボールを回す。しかし、第1ピリオドでもそうだったように、少しでも気を抜くとガード陣からのスリーポイントや、石塚、大蔵からのドライブが来る。

朱雀メンバーも気を抜かないようにボールの行方を追っていた。

そして、ローポストに入った佐藤にボールがまわった。純也が中には入れさせまいと、ぴったりとくっついてマークをする。

「ははは！　君も運が悪いね！」

そう言って佐藤はドリブルをしながらジリジリとリングへ近づいてゆく。

「くっ…またかよ…」

純也も必死にこらえているようだった。そして次の瞬間――。

シュッ！

ボールが外に居た杉山へとわたる。そして杉山がいつものようにシュートモーションへと入った。早めのモーションに対応するために、永瀬がブロックをするために跳ぶ。

「なっ！？」

先ほどはツーハンド気味のジャンピングシュートだったのが、今度は綺麗なワンハンドのジャンプシュートへと変わっていた。永瀬のブロックとワンテンポずれる形でシュートを放つ。

そしてボールは薫のスリーポイントとはまた違った弧を描いてリングへと向かってゆく。

スパッ！

『ワァァアアア！』

会場が歓声に包まれた。

「ジャンピングシュートの弱点は打点が低いからブロックされやすいんだ。そんなごど、このシュートフォームと長ぐ付き合ってきた自分がよくわがってます。アナタの狙いは正しかったべ」

杉山は必死に不器用な標準語で永瀬にそう伝えると、すぐにディフェンスへと戻っていった。

No．121　700日

第3ピリオド開始3分、試合は相変わらずスローペースのままで、得点は先ほどの杉山のスリーポイント一本のみとなっていた。

博司と入れ替わるようにポストへ上がった純也にボール渡った。ディフェンスは佐藤。純也はこの試合、佐藤に完全に抑えられている。

（くそっ…こいつは力だけじゃねぇ…。ディフェンス能力だけを見ても、うちの小田原君か、それ以上だ…）

純也が舌打ちをした。その様子を佐藤が不気味な笑みを浮かべながら見ていた。そして純也に聞こえる声で言い放つ。

「ふはははは。一年なんかに簡単にやらせるわけないだろう」

「うるせぇ、黙ってろ！　たかが700日早く生まれただけじゃねぇか！」

激しい攻防の中、佐藤が言い返す。

「なら、その700日分の練習の成果を見せてあげよう」

純也は苦戦していた。いくらドリブルで抜こうとしても、佐藤を振り切ることができなかった。

――――――

――――
――

＊＊＊

2年前の城清体育館――。

「おつかれさまでしたっ！」

『おつかれさまでしたっ！』

今日もディフェンス中心の厳しい練習が終る。とは言っても、1年生の近江達のやることといえば、ボール拾いや声だしくらいで、最初の全体練習くらいしか練習らしい練習はしていなかった。

モップで床掃除をしながら、石塚と佐藤が近江に歩み寄った。そして石塚が話しかける。

「なぁ、今日もやるんだろ」

近江もメガネのズレを人差し指で直しながら答えた。

「そうですね。いきましょうか」

この会話を聞く限り、どうやら毎日の日課となっているようだ。彼らは一通りの掃除を終えると、すぐに学校をでて目的地へと向かう。

自転車で5分ほどしてたどり着いたのは、市営の体育館だった。彼らは毎日、学校での練習が終わるとこの場所で秘密特訓している

のである。

先輩から解放された彼らは、どこかリラックスをしながら楽しんで練習をしていた。佐藤が2人に向かって語りかける。

「なんか最近、バスケがすごく上手くなってきてる感じがするよね。ははは」

その言葉を聞いた近江が、佐藤の方を見ながら返事をする。

「まぁ、僕らは中学校時代はレギュラーにも選ばれていませんでしたからね。その分他の人よりは成長する部分が多いんですよ」

まだまだ気を抜かないようにしよう。近江が言った言葉にはそんな意味も込められていた。

「ちぇ、俺は監督に嫌われてただけだよ」

本気ではないが、石塚が怒ったように近江に言い放った。それをみた近江は、はは、と笑って流した。そして練習が続けられる。

「なぁ…その…」

シュートを決めた石塚が、急に声を低くして2人に話し始めた。

「まだ番号も貰ってない俺らが言うのもなんだけどさ…」

「はい？」

近江と佐藤が石塚に注目した。

「そ、その…俺たちで目指そうぜ！　イ…イ…あーやっぱだめだ！」

「インターハイ行こうよ！！」

「！？」

石塚が言えなかった言葉を佐藤が代わりに発言した。その顔はとても真剣で、冗談で言ってるようには思えない。

「ええ、僕は最初からそのつもりでしたけど？」

近江が真顔でアッサリ答える。思わずズッコケそうになる2人。どうやら拍子抜けしたようだった。

「お…お前ら、自分で何を言ってるのか分かってるのか！？　俺らの代には白川の五十嵐や黒沢の安倍、朱雀の木ノ下、その他にもバケモンがわんさか居る近年稀に見る黄金期と呼ばれてるんだぞ！？」

その言葉を聞いても特に驚いた様子も見せず、いつもの冷静な近江だった。

「バスケットは5人でやるスポーツです。それに、うちのゾーンを扱えるようになれば、十分に戦っていけると思います。僕は仲間を信じていますよ」

静まり返る2人に、近江が1つの提案をする。

「じゃあこうしましょう。どんなプレーも万能にこなすというのは当たり前として、その中でも『これだけは負けない』という能力を

伸ばすというのはどうでしょうか？」

「これだけは…負けない…」

石塚が考え込む。

「俺は…絶対に点の取り合いなら負けねぇ！　やられたら絶対にやりかえす！　チームのエースになってやる！」

「石塚君のドライブ力は凄いですからね。僕はどんなに苦しくなっても試合をコントロールできるように頑張ります。それと石塚君や味方へのアシスト能力もね」

その会話を聞いて、佐藤が不安そうな顔をしていた。

「俺はなにをすればいいんだろう…。これと言ってとりえも無いしなぁ」

落ち込んでいる佐藤に近江が微笑みながら言った。

「いや、佐藤君には十分にとりえはありますよ」

――――――

――

＊＊＊

「時間が無い！　いったんボールをあげろ！」

佐藤に苦戦する純也に亮が叫んだ。しかし純也は苦し紛れにシュートを放った。

ガンッ！

リングにあたって外にボールがとび出る。それと同時に佐藤と大蔵がスクリーンアウトした。

「このっ…どきやがれ！」

「残念でした。はっはっは」

純也がいくら押しても佐藤はビクともしない。そして落ちてきたボールを両手で掴みキープした。

「佐藤さん、ナイスプレー」

近江が佐藤からボールを貰いながら笑顔で言った。

「ありがとう。君が前に言ってくれたように、当たり負けだけはしないみたいだ。はははは」

（この2年間、ひたすら長所を伸ばしたんだ。一年なんかに負けてたまるかよ！）

そして城清のオフェンスが始まった。

No．122　近江…？

佐藤のリバウンドからオフェンスに切り替わる。近江がいつものように辺りを見渡しながらドリブルをしていた。

（簡単なことです。相手の攻撃回数を減らせば減らすほど、ディフェンスで抑えることが出来ているこっちが有利なはず。オフェンスも調子が良いし、点を取れない訳じゃない。しかし…）

近江が朱雀高校キャプテン、木ノ下薫の方へと目をやる。

（監督の言うとおり、彼がこのまま黙っているとは思えない。ディフェンスが機能しているはずなのに、朱雀の得点はほとんどが彼によるものだ）

近江が急にドリブルをして、左の方へと移動する。ディフェンスの亮もそれについてゆく。

トップから杉山がパスを求め、叫んだ。

それと同時に石塚が逆サイドから石塚が台形内に飛び込んで来る。

ボールを受け取ると同時に、体をずらしディフェンスに微妙なズレを作る。素早いドリブルで、そのまま一気にリングへと向かう。

「おりゃ！」

石塚がディフェンスをかわしてシュートを決めた。会場に歓声が響く。

（でも、取れるときに取っておきたい。うちのオフェンスを信じるんだ。弱気になることはない）

近江が心にそう言い聞かせた。これで点差は１０点に開いてしまった。

「亮、行くぞ！」

「はい！」

薫が亮に気合をかけた。亮がボールを運び、センターラインを過ぎる。朱雀高校のパスが回る度に城清のディフェンスの陣形が姿を変える。

キュキュキュッ！

亮がディフェンスの隙をつき、抜き去った。すぐにヘルプが来る。そして亮が微妙にフリーになった永瀬にパスを出した。そしてすぐにシュートモーションに入る。

「させるかっ！」

石塚が頑張って反応した。だが少し早く、ボールは反対側の薫の元へと渡っていた。

そして素早いモーションからジャンプシュートが放たれる。

スパッ！

あまりにもフォームが安定しすぎていて、何度もビデオを巻き戻して見返しているかのような錯覚に陥ってしまう。

「さあ、ディフェンスだ！」

まるで何事も無かったようにメンバーに声をかけると、すぐに味方コートへ戻り、ディフェンスを開始する。

城清も負けじと大蔵を使い、ゴール下を攻める。それに博司が慌ててついていく。

「マダマダネー！」

ボールを受け取り、一歩目で博司をかわした大蔵は、そのままレイアップシュートの体勢に入る。

パシッ！

「！？」

なんと、どこから現れたのか、薫が後ろから大蔵のボールを弾いた。ルーズボールを永瀬が拾い、そのまま亮に渡される。

朱雀は速攻を試みるも、城清の素早い戻りから防がれてしまう。

そして、そのまま薫にボールが渡った。

「いかせるかよ！」

石塚がディフェンスにつくも、素早いドリブルで抜き去ってしま

った。そして、カバーにはいった佐藤も難なく抜き去り、シュートを決めたのであった。

『ワァァアアア！』

『いいぞぉぉぉお！』

『タイムアウト！』

１０点差があっという間に5点差に縮まる。これには城清も、たまらずタイムアウトをとった。大蔵が独り言のように呟く。

「オウ…彼は海外でも通用するネ…。ビクリしたヨ」

選手たちがそれぞれのベンチへと帰る。城清の近江はベンチに座るなり監督に話しかけていた。

「はぁ…はぁ…。監督、やはり相手のペースに付き合わない方が良いのでしょうか？」

その言葉を聞いた監督は、少しの間考えた。そして選手に聞こえる声で語り始める。

「去年までのチームなら、ここで守れと指示していたことだろう…」

そう言って監督は笑みを浮かべ、力強い言葉で選手たちに言った。

「朱雀さんの勢いを見る限り、もう守るだけではとまらないだろう。攻める気持ちだけは絶対に負けてはいけないよ」

そして、プレーの細かい注意点などを支持してゆく。

（攻めろ、と言ってこの選手たちのディフェンスが雑になることは無いだろう。守り抜いて、更に攻める。今年はそれができるメンバーなんだ。びびっていたら、それがプレーに出てしまうからね）

監督が朱雀側のベンチに目をやった。薫がなにやらテキパキと指示を出しているようだった。

――――――

――――

――

ピィィッ！

『青6番、チャージング！』

「くそがっ！！！」

タイムアウト後の第3ピリオドも、攻守切り替えは若干早くなったものの、相変わらず城清のリードは保たれたままだった。そして純也が今日3つ目のファールをとられてしまった。

純也にぶつかって倒れていた近江が起き上がる。

「大丈夫か？」

佐藤が近江に近づき、心配そうに声をかけた。近江は大丈夫、と

言って純也の方へ近づいていった。

「ここは君のようなストリート出身の不良が居ていい場所じゃない」

ただでさえ機嫌の悪かった純也に追い討ちをかけるようなことを言ってしまったので、怒りが爆発したようだった。

「んだとコラァ！？」

手がでそうになる純也を薫が後ろから押さえる。近江は目を逸らさずに、純也に向かって続けた。

「今日君をこのコートから追い出してみせる」

「くっ…黙って言わせとけばこのクソ偽メガネくんがっ！！」

珍しい近江の姿を見たチームメイトは、とても心配しているようだ。

「ど、どうした近江。お前らしくないぞ」

「いや、なんでもありません」

石塚が話しかけるが、特になんでもないような素振りを見せた。近江を睨みつけていた純也の視界に薫が現れる。

「いいか？　プレーで返すんだ。残念ながらバスケットにはお前が望んでいるようなルールはない」

それは恐らく、純也がストバスでやっていたパンチ、キック、頭

突きその他のことだろう。

「追い出してみせるだぁ？　おもしれぇじゃねぇか！」

そして試合が再開された。

No．123　すまない

城清がいつもの遅めの試合を展開する。

「野郎…つまらねぇバスケしやがって」

純也は先ほどのこともあり、イライラした様子で近江を睨んでいた。近江は一瞬目が合ったが、特に気にした様子もなく試合をコントロールする。

ボールが佐藤に渡った。純也がそれにピッタリとマークした。

「どうだい？　あと少しで退場だ。怖いだろう？　はっはっは」

「うるせぇ！　ファールは慣れてんだよ！」

佐藤はドリブルをしながらリングとの距離を詰める。純也は強がってはいるが、強引にいけないようだった。佐藤がリングを振り向いてシュートをする。

一度ボールはバックボードにぶつかり、リングの中へと入ったのであった。

『ワァァァァ！』

シュートを決めるとすぐさま佐藤はディフェンスに戻る。

「ファール数が3と4では気持ち的にも違ってくるぞ。気をつけろ」

「わかってるよ」

薫が純也に一言告げてからオフェンスに向かう。先ほどのように返事をした純也であったが、その表情からはどこか怒りのようなものが見られた。

オフェンスになり、朱雀はコートの上の動きまわる。そしてパスが何度か渡った後に、ボールが純也の元へと渡る。

そこへ佐藤がすぐさまディフェンスを開始する。純也がフェイントを何度かかけ、抜き去ろうと試みるが、佐藤が必死にそれを抑えていた。

「ちっ…」

純也が舌打ちをする。その様子をみた亮は純也に向かって叫んだ。

（このパターンはダブルチームが来る！）

「いったん戻せ！」

亮はそう叫ぶが、純也の耳には全く入らないようだ。そして、得意の左右の素早い体重移動からのバックターンで佐藤を抜き去った。

「っしゃぁ！」

そのままリングに向かって跳んだ。

――――――

――――

――

＊＊＊

「おーい近江、こっちの洗濯もやっといてくれよー」

「ギャハハ、お前マネージャーだろ？」

「家から肉持って来いよ」

「ボール拾え」

（くっ）

――本当にくだらない。こんなやつらが同じチームにいるだなんて。

僕は毎日のように雑用を押付けられていた。おかげで自分の練習の時間も削られる。中学校に入り、僕が無口で気が弱いのを良いことに、コイツらは散々えばり散らしていた。

多少あつかましい方が、部活動も仕事も成功しやすいとは言うが、この場合はまさに悪い意味でその通りだ。中途半端な能力だが、他人の足を引っ張り、そして図々しいくらいの監督へのアピール力でレギュラーを勝ち取っている。大会では2回戦がいい所という結果を見れば、彼らがそんな人間ということは明らかだ。

『近江、今日はお前がガードだ。頑張れよ』

「は、はい！」

ある日突然監督は俺をスターディングメンバーに起用した。周りから驚きの声があがる。その中、いつもの不良たちは気に入らなかったようで、ずっと不機嫌な顔をしていた。

そして試合が始まる。３年生になってようやく出場した試合だった。

（なんでだよ…）

不良たちはボールを手にすると、考えもなしにリングにつっこんで自滅する。

（なぜ指示通りに動いてくれないんだよ！）

フリーになった近江にパスがこない。そして相変わらずＮＢＡの選手のプレーを真似したような似ても似つかないシュートで自滅を繰り返す。

（こんなのバスケじゃない…。ただの個人技だ）

そして、時折近江の方を勝ち誇ったような顔でチラチラと見てくる。

（つまらないバスケをしやがって）

コイツらがストリートバスケをやっていることは僕は知っている。イベントなどで素人相手に勝っていい気になってるような奴らだ。

試合は当然のように負けてしまった。当たり前だ。相手が組織的に攻めてくるのに、こっちが中途半端な能力で動きもバラバラでは勝てるはずがない。

翌日、監督は僕を職員室へと呼び出した。昨日の試合で怒られてしまうのかと思い、正直ウンザリしていた。

職員室に来た僕をみて、監督が頭を下げる。

「すまない」

「え…？」

僕は訳が分からなかった。そしてその出来事から数日後、監督はバスケの監督をやめてしまった。　その後、僕が中学で試合に出場することは無かった。

―――――――

―――――

―――

「おーい近江、お前どこの高校に行くんだ？」

「え、あ…城清だけど？」

不良たちが突然そんなことを聞いてきた。近くにいた別の人物が近江を馬鹿にしたように言い放つ。

「やめとけやめとけ、近江みたいなガリ勉は進学校に行くに決まってんだろうが」

「ははは、聞くだけ無駄だったな」

そう言って不良の集団はどこかへ行ってしまう。

「違うよ…」

僕は急に嬉しくなった。全身から笑いがこみ上げてくる。必死にこらえようとしたが、顔に出てしまう。

「ふふっ…」

そしてヘラヘラと去って行く不良たちの後ろ姿を見る。なぜが涙が出てきた。

――僕は『バスケット』をしにいくんだよ?

――――――

――――

――

＊＊＊

「ファール！！！」

観客がどよめいた。純也の目の前に、再び倒れている近江がいた。シュートモーションに入った純也の死角から近江が飛び出してきたのだ。

「ナイス近江！」

石塚が近江とハイタッチする。そして純也に近づいて一言、

「あと1つです」

そう、純也は罠にはまってしまったのだ。純也は悔しそうに地面を蹴る。それと同時に朱雀のタイムアウトで試合が止まった。

ベンチに帰るなり、薫が純也に言った。亮もそれに続く。

「挑発に乗りすぎだ。いったんベンチで頭を冷やせ。交代だ」

「なんのためのガードだよ！　俺が場所的にも1番見えてるんだ。無視するんじゃねぇ」

純也は深呼吸をして一言。

「ぜってぇ交代しねぇ！　これで冷静になったぜ。俺としたことが我を忘れていたようだな」

そして薫を睨んで一言。

「ここで交代すると一生恨むぜ、薫さんよぉ」

薫はため息をつく。そして間を空けて口を開いた。

「わかった。どうせあと1つだ。控えには小田原君がいる。好きにしろ」

「しゃあ！」

純也はガッツポーズを繰り出した。

――――――――

――――

――

この試合を観客席からずっと眺めている人物がいた。

「やはり私は間違っていたようだ」

その人物の目にはかすかに涙が浮かんでいる。

「近江、自分の居場所を見つけたな」

（すまなかった…）

Ｎｏ．１２３　すまない（後書き）

決してストリートをけなしている訳ではありません。誤解してしまった方、申し訳ございません。のちの展開に繋ぐためです。

Ｎｏ．１２４　認めたくないけれど

「モラッタデスヨー」

大蔵がリングを振り向いてシュートモーションに入る。それに合わせて博司が跳んだ。練習で繰り替えした動きだった。

「！？」

博司の手にボールが当たり、そのまま外に弾き飛ばされた。そのボールを選手たちが追いかける。

ボールを拾ったのは純也だった。そして亮にボールが渡される。

「うぉおおお！」

城清の選手が急いで戻る中、純也も大声をあげて全力で走る。そして朱雀のオフェンスが始まった。ボールが永瀬に渡り、そのまま純也へと渡る。

「うおぉおお！」

（コイツッ！？　懲りずにつっこんできやがった！？）

佐藤がディフェンスをしながら驚きの表情を見せる。またいつものようにフェイントをかけ、中へと切り込んだ。

「学習能力がないのかい？」

すぐに死角から石塚のカバーが入る。すると純也は左腕を使い、自分の背中を通すように、ノールックで亮にパスを出した。そして亮がそのままスリーポイントを放つ。

スパッ！

『ナイスシュートォオ！』

『うおぉおおお！』

亮が純也に聞こえる声で呟いた。

「俺にパスを出すとは珍しいじゃねぇかよ」

「るせぇ、外したら殺すぞ」

純也と亮がそう言ってハイタッチする。浮かれるわけでもなく、すぐにディフェンスを開始する。その様子を近江が冷静に見つめていた。

（パスを出した…？）

そして城清は大蔵のインサイドの攻めと思いきや、杉山にパスが回り、そのままスリーポイントを放った。

ガンッ！

ボールは惜しくもリングの輪にあたってしまったようだ。リバウンドを拾いに、数名の選手がボックスアウトをする。

「トラセマセーン！」

「ぼ…僕だって…！」

博司と大蔵のところへボールが落ちてきた。

「ダッシャアア！」

しかし、どこからか現れたのか、純也が二人を差し置いてボールをもぎ取った。そして前にいる薫にボールを投げつける。物凄いスピードでボールが向かっていった。

パシッ！

薫はいつものように、それを簡単にキャッチすると、敵コートに向かってドリブルをしてゆく。そして、反対側コートを走る亮にパスを出した。

（本命は木ノ下だろ？　ここはパスだ！）

ディフェンスをしていた石塚と杉山は同じようなことを考えていたようだ。亮がレイアップシュートのモーションに入った。そしてそのままリングを通り過ぎる。

「やはりなっ！」

石塚が木ノ下へとパスコースを完全に塞いでいた。しかし…

シュッ！

亮がフリースローラインの方へボールを放り投げる。それをどこからともなく現れた純也が加速をつけながらキャッチする。

「くらぇえぇ！　石川氷柱落しっ！（注：ただのダンクシュート）」

（だ…だせぇ…）

亮が呆れた様子で純也を見ていた。純也はそんな亮を見るわけも無く地面を蹴り、リングに向かって跳んだ。

「おりゃぁあああ！」

ガシャァアアン！

物凄い音が会場に鳴り響いた。バスケットコートが二面ある会場で試合を行っているため、当然隣のコートでも試合が行われているわけだが、その隣の観客でさえ思わず振り向いてしまうようなダンクシュートだった。

リングに純也の肘まで入る。その様子を見て会場全体が歓声をあげた。

『ウワァアア！』

『跳びすぎだろアイツ！？』

純也はリングから降りて雄叫びを上げながら胸を叩いた。

「おらぁかかってこいよ！」

歓声が大きくなる。試合を重ねるに連れて、一般人のファンも増えてきているようだった。

そんなプレーをみた城清だったが、ボールを手にした近江は相変わらず冷静な試合運びをしていた。

（ちっ、相変わらず御堅いバスケをやろうって訳ね…上等じゃねーか！）

純也がそんなことを考えながらディフェンスをしていた。ボールが再び佐藤に渡る。ファールを４つ抱えている純也は攻めるには好都合と判断したようだ。

「短い間だったね。楽しかったよ。ははは」

佐藤が多少強引に攻める。そしてフェイクをかけ、シュートモーションに入った。

バシィィ！

そのボールを純也が勢いよく叩いた。佐藤の手からボールが離れていたためファールにはならない。ボールを薫が拾い上げ、敵コートへ向かう。途中で純也がボールを受け取った。

「ここで終わらせてあげますよ」

「うるせぇな」

純也に直接近江がマッチアップした。激しい攻防が繰り返される。

「君はここに居てはいけないってことを教えてあげようか」

「うるせぇ、勝手に決めつけんじゃねぇ！」

純也が左右に振るが、近江がそれに合わせてついてゆく。

「単に認めたくないだけなんじゃねぇのか！？　テメェら以外のバスケをよ！！」

「……」

そして純也が、上体を低くして、一気に抜き去る姿勢をとった。

「ディフェンスだけじゃなくて頭まで固いみてぇだな！　俺のバスケットを見せてやるよ！」

「くだらない！」

近江が前に出てくると同時に、純也は素早く近江をかわした。

（コイツ…！？）

一瞬、近江の目に映る映像がスローモーションになる。そして次の瞬間純也は一気に抜き去った。

ダァァン！

そのままダンクシュートが炸裂した。

Ｎｏ．１２４　認めたくないけれど（後書き）

城清の後半は、もしかしたら多少書き直しするかもしれません。

No．125　マグレ？

ダァアアン！

再び会場に、リングが叩きつけられる鈍い音が鳴り響いていた。
それと同時に歓声も鳴り響く。

（これが、ヤツのバスケット…）

一瞬そう考え、立ち止まった近江だったが、すぐに持っていたボールをエンドラインからコートの中へとパスを出す。

その後の展開はまさに点の取り合いであった。城清が5点のリードを保っていると思いきや、純也、薫の活躍により同点に追いつかれる。

「くそおお！　大人しくしてろっつんだ！」

石塚のシュートが決まった。城清は乱戦になっても、石塚、大蔵の得点力、近江の冷静な試合運びにより、リードを許すことは無かった。

そして更に…。

スパッ！

杉山が再び点差を5点に広げるスリーポイントシュートを決めた。

『わぁあああああ』

『すっぎやまっ！　すっぎやまっ！　オッ！』

「はぁ…はぁ…」

肩から息をしている杉山と永瀬が目が合う。しかし杉山はそのまますぐにディフェンスに戻った。

「くっ…また止められなかったか…」

「さあ、すぐに行くぞ！」

永瀬は悔しそうな表情をした。しかし薫の一声により、すぐに我に返る。

亮も隙が出来たら遠慮なくパスを出していた。その攻撃を防ぐために、城清の部員達は必死に動き回る。

そして、薫にパスが回り、シュートモーションに入る。

「させるかっ！」

石塚が距離を詰めた。しかし薫はシュートはせずに、0度のポジションからリングの方向へ跳んでいた純也に鋭いパスを出す。

パシッ！

純也はそれを空中でいとも簡単に受け取る。大蔵が慌ててブロックに跳びつくが、純也が空中でかわし、レイアップシュートを決めた。

『うおぉおおお』

「あの6番が連携…」

近江はパスを受け取りながら呟いていた。そしてまたハイペースな試合展開になる。

「やられたままで終わるかよ！」

この試合、城清のキーマンになりつつある石塚が、スクリーンで薫を振り切った。

そして再びドライブシュートを試みる。

パシィッ！

「なにっ！？」

石塚が驚愕の顔になる。

完璧なタイミングでカバーに入った純也が、石塚をブロックしたのだ。そのボールを永瀬がキャッチする。

城清はすぐにディフェンスに戻る。そこへ朱雀の勢いあるオフェンスが容赦なく攻め立てる。

第3ピリオドも残りわずか。

「こっちだ！」

純也がローポスト付近でボールを受け取り、丁度ゴールに背を向けた状態になる。

「はっはっは、君はホント運が悪いねぇ」

第1ピリオドの時と同じように、泰助がすぐにマッチアップをする。

純也は重心を一度左足に移し、一気に右足に移動させる。

キュキュッ！

「おっと、その手にはのらないよ！」

泰助が自信に満ちた顔で純也のドリブルコースを塞いだ。しかし…。

純也は素早くゴールの方向へ向きを変え、その場で上空に向かってジャンプした。

「なんだと！？」

（決める！）

肘をリングに向かって固定させ、そのままワンハンドでボールをシュートする。

泰助だけではない、そのコートに居たプレイヤー、更には観客含め会場中が驚いているようだった。

スパッ

ボールがリングに吸い込まれた。

『……』

ビィイイイ！

そしてほぼ同時に第3ピリオド終了のブザーが鳴り響く。メンバーが目を丸くしながら純也を見ていた。それはまるで珍しいものを見るときのように。

「ナイスシュート」

薫は特になんとも無さげな様子で純也に近寄り、そう声を掛けた。そして背中を向け、そのままベンチに向かって歩き出した。

「ナ、ナイスシュート」

亮がそう言いながら拍手をする。それに他メンバーが続いた。

パチパチパチ

「なんかそれ、普通にバカにされるよりもムカつくんだが」

『オォオオオオ！』

『ナイスシュートオオ！』

観客もそれに続く。

「うるせーぶっ殺すぞ！！」

暴れ始める純也を冷静にベンチに引きずっていくメンバー達であった。

「まさかゴール下以外のシュートを持っていたとは…。やられたな」

石塚が城清のベンチに座り、近江にそう話しかけた。近江はなにやら考えていた様子だったが、やがて石塚の声に気がついた。

「いや、今大会でもジャンプシュートを決めたのは初めてですよ。偶然かもしれません。それよりも…」

（あの６番の動きが変わった途端、相手チームの連携が急に良くなった）

現在４４対４３で、城清が辛うじてリードしているのだが、先ほどの終盤での敵の動きを見る限り、近江はかなり不安だった。

「彼は危険だ…」

近江がそう呟いた。そして監督がメンバーが座っているベンチの前へと歩み出た。

「どうだ？　朱雀さんは強いか？」

監督は微笑んでいた。この名将の目には、一体どのような試合が繰り広げられているのか。そしてこの笑みは何を意味するのか。近江が呼吸を整えながら答える。

「正直、予想外でしたね。ここまでやるとは思いませんでした。」

何が予想外だったのか、近江はいえない様子だった。監督はそれを察していたようでそのまま頷いた。そして選手たちの目を見る。

「あの時と同じ目をしている」

『え？』

近江、石塚、佐藤の3人はなにやら理解していない様だった。

「私も驚いているよ。正直ここまでこのディフェンスを操ってくれたチームは初めてだ」

そして更に続けた。

「君たちの絆は絶対に負けていない。どこのどんなチームよりも深いはずだ。それは君たち自身が分かっているはずだ」

メンバー達はお互いの顔を見る。そして近江が真剣な目つきで監督に言い放った。

「監督、僕たちは勝ちますよ」

＊＊＊

近江、石塚、佐藤が私の方を見ている。あの時と同じ目だ。

そう、私がこのゾーンを諦めようとしていたときに、声を掛けてくれたときの目と同じだ。

私は監督失格だよ。本気でここまで出来るとは、心のどこかで信

じていなかった。選手たちは私を信じ、慕ってくれたというのに。

今までのチームが、このディフェンスをうまく扱えなかったのは私の責任かもしれないな。この選手たちは大事なことに気づかせてくれた。

申し訳なさと同時に愛しさもこみ上げてくる。自然と笑みがこぼれてしまっていた。

（さあ、最後まで見せてもらうとするよ。君たちならやれる）

＊＊＊

一方朱雀高校のベンチでは――。

「……」

いまだに薫以外のメンバーが目を丸して、純也を見続けていた。

「……」

「てめぇら、ワザとやってんだろ！」

純也は当然のように怒っていた。それを見た薫は落ち着いた様子で会話に入ってくる。

「練習の成果が出ていたな。良いシュートだった」

「へ、俺が本気をだしたらこんなもんよ」

その会話を見た亮も、さすがに観念ようで素直に純也を褒めた。

「ナイスシュートだったぜ」

「亮くんは随分と大人しいみたいですなー。はっはっは」

純也が態度をでかくして笑った。これは照れ隠しも含まれていることだろう。

「あーやめだやめだ！　褒めるとすぐに調子に乗りやがってこの猿野郎！」

「はっはっはー。今日もうちの犬がよく吠えますなー」

その会話を無視するように薫がみんなに話しかけた。

「よくここまで我慢して持ちこたえてくれた。ラストはこちらから仕掛けるぞ」

「そういえば我慢とか言ってたな。結局いい作戦があるのか？」

純也が聞き返した。薫はハーフタイムの時のように速攻で答える。

「無い。だが…」

薫の次の言葉を待ち、選手たちが唾を飲む。

「そろそろ城清のスタミナも切れてくるはずだ」

「そういうことでしたか…」

亮がなにやら納得している様子だった。そして口を開く。

「あちらは最初からずっとマッチアップゾーン。あんなに動き回ってたら、当然スタミナ消費も半端じゃないでしょうね」

「その通りだ。集中力も切れやすい。最後まで走り続けよう。競り負けないようにな」

『オッス！』

選手たちの声が鳴り響いていた。

Ｎｏ．１２７　危険な存在

「パスコースを塞げ！　スリーを打たせるな！」

近江が叫んでいた。第４ピリオドが始まり、ジャンプボールで朱雀高校がボールを手にする。そして城清はいつものようにゾーンを展開していた。

（ちっ…これじゃあ外はきつそうだぜ…）

亮がそんなことを考えながらドリブルをしていた。なかなか攻めることができないまま時間だけが流れる。やがて亮は僅かな隙を見つけたのか、中に向かってパスを出した。

パシィ！

そのボールを純也がタイミングよくキャッチする。

『通った！？』

その瞬間観客が息を呑んだ。しかし…。

「くそ…ここへきてこのディフェンスかよ…。エリートさんよぉ…」

純也がすぐにディフェンスに捕まってしまう。そして２４秒も残り僅かとなり、苦し紛れに放ったシュートを放った。

ガンッ！

「偶然は二度おきません」

近江がそう呟いた。大蔵がリバウンドを拾い近江へパスを出す。

「戻れっ！」

薫がそう叫んだ。近江もいけると判断したのか、素早い速攻を仕掛ける。近江から石塚へとパスが回り、そのままシュートモーションに入った。それにあわせて亮もブロックに入るが、上手くかわされてしまう。

『うわぁあああ』

『いっしづか！いっしづか！おっ！』

石塚のシュートにより、点差が3点に広がる。その後も名門城清の勢いは途切れることは無く、徐々にリードを広げたのだった。そして…。

スパッ！

『すっぎやまっ！　すっぎやまっ！　おっ！』

点差を8点に広げる。第4ピリオドも残り6分を切っていた。だが、そのままやられている朱雀ではなかった。薫を中心に反撃を開始する。

『ちっ！打てるもんなら打ってみやがれ！』

城清のディフェンスをかいくぐり、亮から薫へとパスが渡った。

そこへ石塚がピタリとマークする。だが薫は少しの間も置かず、すぐに中へと切り込んだ。

「ソウ簡単ニハ決めさせマセンヨー！」

大蔵がブロックに入るが、空中でかわしてシュートを決めた。

『うおぉおおお！』

「あたれっ！」

朱雀は第４ピリオドからオールコートマンツーに切り替えていた。ボールを手にした近江に、すぐさま亮がチェックを入れる。

亮のしつこいディフェンスに、近江は苦戦しているようだった。ボールを運び、そのまま石塚へとパスを出す。

ポストへ入った佐藤にパスが回り、純也がディフェンスをする。常に笑いながら、チームのムードメーカーになっていた佐藤だが、さすがにここまでくると余裕も無くなっているらしく、その表情からは笑顔が完全に消えてしまっている。

キュキュッ！

佐藤がフェイクをかけ純也が跳んだのを確認すると、そのままシュートを放った。

パシッ！

（なっ！？）

近江が驚いた表情を見せた。

純也は精一杯手を伸ばし、ボールを捕らえていたのだ。すぐに城清はディフェンスに戻った。

朱雀のオフェンスになり、亮がボールを運ぶ。パスが何度か回った後に、純也の手に渡った。近江がマッチアップとなる。

（くっ…）

近江が必死に純也を抑えていた。

（どうやら…僕は考えを改めなければならないようですね）

ディフェンスには自信のある近江が珍しく苦戦していた。純也が体重を右側に寄せ、右手にボールを移す。

（これは…泰助くんにみせたクロスオーバー…。その手には乗りませんよ！）

そして体重が左側へと移る。近江はそれを狙っていたかのようにドリブルコースを塞ごうとしていた。しかし…。

（なにっ！？）

純也がその裏をかき、近江の読みが外れる。純也がその隙を見逃すわけが無く、一瞬で抜き去ろうとした。近江も体重を完全に片方に移していなかったため、すぐさまこれに対応する。

2人の体が接触する。そして次の瞬間、会場に審判の笛の音が鳴り響いた。

ピィイイイ！

『どっちだ！？』

『これはキワドイぞ…』

選手はもちろん、会場中が審判の判定に注目していた。

審判が青のユニフォームを指差す。

『青6番っ！　5ファウル！！』

会場が静まり返った。これで純也は退場となる。

「くそっ…」

純也が悔しそうにコートを叩いた。他の選手も信じられないと言った様子でその光景を眺めていた。

（これは…やばいかもしれないな…）

亮が肩で息をしながらそんなことを考えていた。選手たちが立ち尽くす中、近江が純也の下へと歩み寄る。そして純也に手を差し伸べた。

「けっ…嫌味かよ…」

近江はそんなことを呟く純也に、特に言葉は返さず、肩で息をしながら手を差し出し続けた。純也が近江の手を握り、起き上がる。その光景を見て、会場から歓声が鳴り響いた。

『6番！うまかったぞ！』

『ナイスプレー！』

純也は近江が決して嫌味で手を差し伸べた訳ではないと察すると、悔しそうに口を開く。

「結局は宣言どおりかよ。むかつくぜ…」

「やられたのは僕の方さ…」

近江は誰にも聞こえない声でそう呟いた。石塚、佐藤が次々に声を掛けるが、どうやら悔しそうな様子の近江だった。

（この6番は僕らが思っていた以上に危険な存在だった。なぜもっと早く…）

その後、朱雀高校のタイムアウトにより両チームともベンチへと戻ったのであった。

No.128 勇気

試合時間は残り4分を切り、点差は6。

朱雀高校のベンチは静まり返っていた。純也が悔しそうな表情でベンチに腰をかけた。

「ちっ…すまねぇ…」

まだ納得してなさそうな様子だった。そしてタオルを手に取り汗をふく。

「いや、良くやったよ」

「同情はいらねぇぜ薫さんよ。俺はあんたに自信有り気に試合に出せと言ったんだ。それがこのザマだよ」

純也は近江の狙い通りになってしまったこと、そして、自分に対して怒りを露にしていた。そんな純也に薫から予想外の返事が返ってくる。

「いや、お前が頑張ってくれたから、後半勝負するための土俵が整った」

ほとんどのメンバーが、純也の抜けた今、オフェンスの勢いが落ちると思っていた。薫のそんな言葉に驚いた表情を見せていた。

「後半…ですか…」

我利勉が考え込む。後半、とは言っても、試合時間も残り僅か。純也が居るなら先ほどの勢いで逆転も出来たかもしれないが、正直今の現状ではどうなるかわからなかった。

「後半は小田原で行く。皆、俺についてきてくれ。必ずなんとかする」

薫が皆の顔をみてそう言った。それを見た永瀬が1度軽く笑い、口を開いた。

「ああ、3年間もついて来てやったんだ。あと少しくらい付き合ってやるさ」

更に小田原が続く。

「任せてよ。ずっと薫を追いかけてきたんだ。そういうのは得意だからさ」

「信頼してますよ。先輩」

そんな3年生達を亮が頼もしそうに見ていた。薫が亮の隣で肩から息をしていた博司に声をかける。

「博司、まだいけるか?」

「は、はいっ!」

博司が背筋をピンと伸ばして返事をしていた。

「博司、ここから先はディフェンスに集中してくれ。他はとにかく

走ることだ。いくぞ！」

『オッス！』

ゲーム後半にも関わらず、勢いのある返事が体育館に鳴り響いていた。

＊＊＊

城清高校のベンチでは、近江がいすに座り込むなり考え事をしていた。そこへ石塚が話しかける。

「どうしたんだ？ナイスファールだったぜ」

「ありがとう」

近江は短めに返事を返すと再び考え込んだ。その様子を見ていた監督が選手達に話しかける。

「ここから先が勝負だな。近江、お前の考えていることは決して間違いじゃない。できればもっと点差を広げておきたかった」

近江は考えていたことを読まれたようで、ハッとして監督の顔を見た。

「朱雀の強さは後半の爆発力だ。あの６番を止めたところで勢いは変わらないだろう」

近江が周りの選手達の様子を見る。いつも以上にスタミナを消費しているようだった。

「最後までゾーンでいかせてください！　俺達にはこの武器があるんです！」

近江が監督の言おうとしていることが分かったようだ。それに石塚、佐藤が続く。

「このディフェンスがあったからここまでこれたんだ。最後まで貫いてやるぜ」

「僕らなら今のディフェンスをしながらでも点を取れます！　心強い味方がいますから。最後まで抑えて見せますよ」

そう言って3人は杉山と大蔵を見る。照れくさそうに杉山が頭を掻いていた。

「よし、最後までしっかりと見せてもらうよ。ここから先が本当の勝負だ。決してリードしているなんて思ったらだめだ。最後まで全力で戦おう。君達ならやれる！」

『はい！』

そして監督が笑顔になり、石塚に話しかける。

「石塚、怖いか？」

「え？」

石塚はこの試合、珍しく大人しかった。ここまでの得点はほとんど杉山、大蔵、近江によるものだ。しかし、監督の先ほどの言葉に

は、更に違う意味が込められていたのだった。石塚はその意味を理解したようで、元気良く返事を返し、コートに出て行った。

――――――

――――

――

後半も残り４分。近江が指揮をとり、遅めの試合運びを試みるも、朱雀の激しいディフェンスにより、プレッシャーが掛かる。

城清が次々にパスを回してゆく。やが逆サイドから台形に切り込んだ石塚へと、近江からパスが出された。

そこへ薫がマークをする。

「くっ…」

石塚が苦しそうな表情を見せた。

――――――

――――

――

＋＋＋

『怖いか？　石塚』

「え？」

２年生の新チームになり、コート内で練習していた石塚に監督が声をかける。その表情には笑顔が浮かんでいた。

「何の話でしょうか？」

訳が分からなそうにしている石塚に、監督が続けた。

「フォワードにはさまざまな能力が要求される。スタミナ、スピードはもちろん、一瞬の判断力、高い得点力もね。私は更に１つ、必要な力があると思っているよ」

「更に必要な力…ですか」

監督は石塚から一度目をそらし、コート内で練習している選手に目をやる。やがて再び石塚の方を向き口を開いた。

「勇気…さ。中へ飛び込むとき、相手をかわすとき、そしてシュートを放つ時。それは他が思っているよりも想像以上に怖い。失敗したらどうしよう…そんな考えが頭の中を支配するのさ。当然判断力が鈍ってしまう。そして動きにも影響すると私は思っている」

石塚は怖そうな外見をして、普段は気の強そうな印象を周りに与えていたが、監督には本当の石塚が見えていた。石塚は高い技術を持ちながら、中学では選手に選ばれなかった。

理由は性格が災いして他の選手、監督に嫌われていたこと。そして、本当は臆病な性格で、試合に出ても大事な時にあと一歩が踏み出せずにいた。

「失敗したら周りの迷惑になる、とかそんなことを考えていないか？」

「そ…それは…」

石塚が驚いた表情を見せていた。そんな石塚を見て、監督が笑顔になり語りかける。

「大丈夫さ。今年は近江という良い判断力を持った選手がいる。彼が君にパスをした時は信頼している時さ。迷いなく行くといい。勇気を育てるんだ」

――――――

――――

――

＊＊＊

――怖いか？

（こ…怖くねぇ、怖くねぇ！）

石塚は自分をディフェンスする人物を見る。

木ノ下薫。中学でバスケをしていた者で、彼を知らない者はいなかった。そんな彼が石塚をマークしていた。

（木ノ下薫…能力、実績…誰もが認めるバケモンだ。怖くねぇヤツなんているわけがねぇ）

――怖いか？

（怖い…逃げ出したい…こんなやつに勝てるわけがない）

――怖いか？

（でも、この時のために俺は…『勇気』を育てたんだ！）

「うおぉおおお！」

（負けねぇ！　瞬発力なら絶対に負けねぇ！！　俺だって3年間、何もしてなかった訳じゃねぇんだ！）

近江からボールをもらった石塚は、一瞬で姿勢を低くしてゴールに向かった。それに薫がついていく。

（かわした！？　いや…まだだ！）

シュートモーションに入った石塚を薫がブロックする体勢に入った。

（くそぉおおお！）

石塚が精一杯手を伸ばして、間一髪薫のブロックよりも先にシュートを放った。あまり狙いを定めることが出来なかったため、本人も入るか分からない。

スパッ！

着地した石塚は一瞬前に転びそうになるが、すぐにゴールを振り返る。ボールはリングを通過して落ちて来た後だった。

『わぁあああああ』

『いっしづか！　いっしづか！　おっ！』

会場中が歓声に包まれた。その様子を監督が笑みを浮かべながら見ていた。

No．129　焦り

「行くぞ！」

「はい！」

石塚のシュートにより点差を8に広げられた朱雀高校だったが、気持ちを切り替え、すぐに反撃を開始する。

亮は後半にもかかわらず、素早いドリブルでディフェンスをかき回す。それに合わせて他の部員達も動き回っていた。

「持ちこたえるんだ！」

近江に合わせて、他のメンバーも次々とコート内を動き回る。すると亮が不意に自分の背中越しにパスを出した。

シュッ！

そのボールを朱雀高校キャプテン、木ノ下薫がキャッチをする。大分動き回った後だと言うのに、特に肩から息をしている訳でもなく、いつもの冷静な顔つきだった。

「くっ！」

急なパスにすぐさま近江が反応するも、ボールは薫の手に渡ってしまっていた。そして…。

スパッ！

素早いフォームから繰り出されたスリーポイントシュートが見事にリングに突き刺さった。すぐに近江はボールを拾い、エンドラインから杉山へとパスを出した。

残り3分。点差は5点。

時間を稼ごうとする城清に、朱雀が激しくディフェンスをする。杉山と近江はなんとかディフェンスをかわしながらボールを敵コートへと運んだ。

「ちっ！」

（ペースを落としてきやがった。時間も少ねぇ…）

亮が近江をマークしながらそんなことを考えていた。

「亮！気を抜くなよ！」

「オス！」

薫が亮に向かって叫ぶ。そう、城清は常に相手の隙を窺っていたのだった。少しでも気を抜いた途端に、序盤の純也のような展開になってしまう。

メンバー達はただ時間だけが過ぎていく展開に、苛立ちを感じ始めていた。そして城清のオフェンス時間も残り5秒。近江は杉山に素早いパスを出した。

（コイツはこの試合絶好調だ。そう来るだろうな…！）

永瀬が相手のシュートを警戒して距離を詰めていた。そして杉山のシュートモーションに合わせてブロックをする。

「なにっ！？」

しかし杉山はシュートはせずに、空中で石塚にボールを渡す。石塚も来るのが分かっていたようで、すぐにミドルシュートを放つ。ボールはリングの上で何度か跳ねた後、中へと吸い込まれていった。

『わぁあああ！』

『いいぞ！　石塚！！』

残り約2分30秒。

点差を7点に広げられた朱雀は急いで反撃を開始する。薫の支持通り、的確にコート内を動き回り、城清のディフェンスを掻き回す。そしてボールが永瀬に渡った。

素早いドライブで中へと切り込んだ。ディフェンスをしていた佐藤の足が一瞬フラついてしまう。永瀬はその隙を見逃さなかった。

すぐに佐藤を抜き去った永瀬は、先ほどのお返しと言わんばかりのシュートを決めたのであった。

そしてまた城清ペースのオフェンスが開始される。朱雀がきつく当たるが、城清のガード陣のキープ力により、なんとか城清ボールを維持する。そして残り時間は2分を切った。朱雀メンバー達の顔にも焦りの様子が窺える。時間をギリギリまで使った城清のオフェ

ンスだったが、最後は杉山で締めくくるため、ボールが彼の下へと渡る。

「くっ！」

ツーハンドの素早いフォームからシュートを放とうとしたが、それを読んでいた永瀬はすぐさま手を天井に向かって伸ばす。

永瀬の指先によって、軌道を変えられたボールは、そのままリングに向かって行く。

「リバウンドッ！」

手ごたえがあったのだろう、珍しく永瀬が叫んだ。このリバウンドが相手に奪われてしまったら、再び城清は時間を稼いでくるだろう。ボールは永瀬の予想通りリングの縁にぶつかり、勢い良く外に弾かれた。

ゴール下で待ち構えていた選手達がタイミングよくボールに向かって跳び付いた。

「博司！　取れるぞ！」

亮が叫んだ。ボールの跳ね返りが強かったため、予想よりも外へボールが来ていた。

「そう簡単にヤラセマセンヨー！！」

やや体勢が悪かった大蔵だが、指先を精一杯伸ばしてボールを触る。そのまま外へと弾いた。

「よし！　速攻だ！」

小田原がボールを手にしたのを見た薫はメンバー達にそう叫ぶ。城清のメンバーもすぐにディフェンスに戻った。

（くそっ、戻りが速いな…）

亮がドリブルをしながらリングに向かっていた。それに合わせて薫も走る。それに合わせて近江、石塚がマッチアップしていた。

亮がフリースローライン付近で薫を見る。そしてそのまま右にる薫にパスを出すモーションになった。それを見た近江はすぐに反応する。

しかし亮はパスはせずにボールを左手に移した。

「なにっ！？」

近江が驚きの表情を見せる。近江を振り切った亮はそのままシュートモーションへと入った。

パシッ！

「甘いんだよ！　この1年が！」

それをどこからともなく現れた佐藤がブロックしたのであった。そして再び攻守が切り替わる。

「さあ、落ち着いていこう」

近江が冷静に試合をコントロールする。残り時間は1分25秒。城清はこの5点差を守りきれば勝ちとなる。だが黙ってやられているだけの朱雀ではなかった。

青のユニフォームが不気味なプレッシャーを放っていた。

Ｎｏ．１３０　集中（前書き）

久々の更新です。マッタリマッタリ。でも話の内容はそんなはずもなく…（笑）

No. 130　集中

残り時間1分25秒。城清のオフェンス。

城清ペースのオフェンスに、朱雀の選手たちは焦りを感じ始めていた。しかし、薫の言った言葉を信じて、集中力は切れていない様子だった。

ボールが何度も選手たちの手に渡る。それに合わせて朱雀は厳しいチェックをする。

残り1分5秒。

オフェンスの残り時間が僅かとなった城清は、朱雀にトドメの一発をかますべく、杉山へとパスをした。

「この試合やられっぱなしなんでね。このままじゃ終われない」

すぐさま永瀬がディフェンスを開始する。珍しく闘志をむき出しにしているようだった。杉山はそんな永瀬の言葉に特に反応することなく、ドルブルしていた。

いや、もしかしたら表には出さないだけで、心のうちでは燃えていたのかもしれない。オフェンスの時間ギリギリまで粘った杉山は永瀬により厳しいチェックをかわし、シュートモーションに入った。

再び永瀬には手ごたえがあったようだ。リバウンドッ、と他の選手達に声をかける。

ボールは杉山にしては珍しく、一度ボードに当たってからリングに

ぶつかり、そのまま跳ね返ってきたのだった。

勢い良く外に跳んでいったため、やや外にいた永瀬がキャッチすることが出来た。少ない残り時間で5点を追う朱雀は、素早い速攻を繰り出した。

亮に渡ったボールが渡り、物凄いスピードで敵リングへと向かっていく。そしてボールは朱雀高校エース、木ノ下薫に渡った。

「くっ…！」

ディフェンスに来る石塚を急ブレーキでやり過ごし、薫はそのままスリーポイントシュートを放つ。

敵味方共にボールの行方を追っていた。

「リバウンッ！」

薫がそう叫んだ。

「…必要ねぇよ」

純也がベンチでそう呟いていた。その瞬間――。

スパッ！

ボールが網を激しく叩き付ける。

『わぁあああああ』

『いいぞおおお！』

残り1分を切っていた。点差は2点。どんなに城清が時間ギリギリに攻めたとしても、最低でも後1回は朱雀にオフェンスの番が回ってしまう。

朱雀はどうしても点をとらせるわけにはいかなかった。朱雀のディフェンスが激しくなる。

（まだ焦ったらダメだ。可能な限り朱雀のチャンスを潰す…！最後まで自分達のペースに付き合ってもらいますよ！！）

近江がズレたメガネを指で触りつつ周りを見ていた。

観客も息を呑んでこの試合を見ていた。

時間だけがゆっくりと流れ始める。

そして残り時間は35秒を過ぎた。

ボールはタイミング良く中に入ってきた人物、城清の信頼できる人物の1人、大蔵へと渡った。

そしてボールを受け取った大蔵はそのままリングに向かって一直線に走り出した。

「これで終わりデスヨ！！」

パシィィッ！！

『なっ！？』

会場の誰もが驚いていた。

Ｎｏ．１３１　フェイド・ア・ウェイ（前書き）

次回、いよいよ城清編が完結！でもまだ何かありそうです。

No．131　フェイド・ア・ウェイ

パシィイ！

ボールがはじかれる鈍い音が体育館中に鳴り響く。誰もがその光景を、信じられないといった様子で見ていた。

「え…」

なんと博司が、大蔵のシュートをタイミングよくブロックしたのである。本人が1番驚いているらしく、状況を把握するのに少しだけ間が空いてしまった。

「博司！」

亮が叫で我に返ったらしく、すぐさま亮にパスを出した。残り３０秒を切ってた。

点差はわずか2点。

急いで城清が自陣の守りを固める。

（ここを抑えれば勝てるんだ！）

城清のメンバーたちの心が1つになっていた。最後の力を振り絞り必死にディフェンスをする。

（くっ…なんて圧力だ。一線すらかわせねぇ…）

亮が必死にボールをキープしていた。永瀬がポストへと入り、亮からボールを受け取った。
しかし素早いディフェンスにより、あっという間に大蔵、佐藤の二人に囲まれてしまう。

永瀬は冷静だった。一度フェイントを掛けるとディフェンスの穴に向かってドリブルをする。

（引き付けるんだ…もっと！）

そして永瀬は外に『いるはず』の薫に向かってすぐさまパスを出す。

シュッ！

そこには確かに薫がいた。石塚もそのパスを読んでいたらしいが、僅かに手が届かずに薫へのパスを許してしまった。

「やっぱり最後はアンタだよなぁ…抑えてやるぜ！」

石塚が気合の入ったディフェンスでプレッシャーをかける。これで薫の得意とするスリーを封じる意味もあるらしい。シュートの隙を決して与えない。

薫が相手の目を見ながらドリブルをしていた。残り時間は２０秒も無い。必死に距離を詰めてくる石塚に対して、レッグスルーを１度入れた後、なんと薫は更に後ろへジャンプしたのだった。

「ナニィッ！？」

体を後ろに投げ出すようにして放つシュート。

しかしこのシュートを使うにしては距離が遠すぎる。

スリーポイントラインから1メートル以上も離れ、更には体を後ろに倒しているため腕の力に頼るしかない。石塚も慌てて手を伸ばすがボールはすでに薫の手から離れ、リングに向かっている最中だった。

ゆっくりとした時間が流れる。

ドクン…ドクン…。

会場中の…隣のコートの客席まで、薫のシュートに注目していた。

朱雀メンバーの脳裏に、先ほど薫が言った言葉が浮かぶ。

――皆、俺についてきてくれ。必ずなんとかする

薫の腕から放たれたボールが、重力に任せて落下を始める。薫は勢いのあまり後ろに倒れてしまったが、すぐに起き上がりいつもの言葉を叫んだ。

博司、大蔵、佐藤、永瀬の４人がボックスアウトをしてボールの行方を目で追っていた。

ドクン…ドクン…。

スパッ！

ボールはまるでこうなるのが決まっていたかのように吸い込まれていった。

会場中が静まり返った。隣のコートの観客まで口を手で覆って信じられない、といった様子で隣コートの試合を見ていた。

『わぁあああああああああああああ』

『なんだこれ…！すげぇえええ！』

『これ高校の試合だよな！？』

そして一気に会場が歓声に沸いた。同時に城清ベンチがタイムアウトを取る。

会場がどよめく中、選手達はベンチへと戻っていく。

「てめぇえ！こんなシュートを隠し持っていたのかよ！マグレ！！」

ベンチに帰るなり純也が薫を祝福していた。その言葉に亮が興奮した様子で返した。

「マグレじゃねぇよ。薫さんが全中の決勝戦、ラスト3秒で放ったシュートが今の『フェイド・ア・ウェイ』だ」

「中学生でスリーポイントラインからのフェイド・ア・ウェイとは…」

我利勉が信じられないといった様子でその話を聞いていた。現白川第一高校の監督が、現在のエース五十嵐よりも先に、実は薫に声を掛けていたというのは有名な話なのだ。その際、監督が1番薫の評価していた部分は『空間認識能力』と、とびぬけた『ボディーバランス』だった。

今のシュートは決して偶然ではなかったことが判る。

「試合はまだ終わってない」

薫が選手達に声を掛ける。そしてそのまま城清のベンチに目をやった。

彼らの目はまだ死んではいなかった…。

残り１５秒。スコアは５８対５７。

きっと何かが起こる。

会場中が息を呑んでこの試合を見守っていた。

Ｎｏ．１３２　届け…！

監督がベンチへ帰った選手達に声を掛ける。

「うむ、良い顔だ。」

そう言って選手たちの顔を１人ずつ覗き込む。そしてなにやら納得したように笑みを浮かべて続けた。

「もう私から言うことは何もない。残り１５秒、恐らく最後のチャンスだ。近江、頼んだぞ」

『はいっ！』

ベンチで休む選手たちに向かって近江が口を開く。

「ウチはどこからでも点を取れます。しかし、最後のチャンスだからと言って臆病になってしまっては、かえってミスに繋がるでしょう。いけると思ったときは積極的に狙っていってください」

「ああ、俺も同じ気持ちだぜ」

石塚が呼吸を整えながら近江に言った。それに佐藤が続く。

「なんたって僕らは信頼しあってる仲間だからね。１人のプレーは皆のモノ。誰も文句なんて言わないさ」

全員バスケ。これが城清の本当の強さなのだ。まだ点を取れる可能性は十分にある。

やがて審判が最後のタイムアウトの終わりを告げる合図を出す。両チームの選手たちはコートに戻っていった。

ハーフラインから試合が始まる。朱雀は相変わらずのマンツー。ここまで来たのだから死に物狂いでディフェンスをする。石塚もなかなかパスを出すことが出来ない。

「こっちです！」

近江が叫ぶと同時に、石塚から近江へとパスが回る。

「絶対に抜かせねぇ…」

亮が厳しいチェックで近江にプレッシャーをかける。近江はいつものように冷静な様子で、亮に反応することは無かった。

残り１０秒…。

近江がフェイントをかけて亮をかわそうとする。しかし亮も簡単には抜かせない。

キュキュキュッ！

地面を蹴る激しい音がコートに鳴り響く。

「こっち！」

佐藤が中に切り込んできた。近江は横に移動しながら佐藤の方に

目をやる。そして近江は僅かに開いた隙間から外にいる杉山にパスを回した。

杉山がすぐにシュートモーションに入る。永瀬も同時にブロックをしに行く。

杉山が地面を蹴りジャンプをする。

（先輩、後はたのみます）

しかし、杉山はシュートはフェイントだったようで、永瀬の横からパスを出し、石塚にすべてを託した。

（みんな同じ気持ちだったようですね。石塚君、信頼してますよ！）

近江がそう考えながら石塚を見ていた。

残り5秒。

石塚はボールを手にするなり、すぐに動き出していた。その顔にもう迷いは無い。

（近江…お前がいたから俺はここまで成長できた！）

ドリブルをして一気にリングに突き進む。3年間磨いた瞬発力であっという間にディフェンスをかわした。

（イラっとしたときもお前を見るだけで冷静になれたよ。いつもニヤニヤしやがって…佐藤！）

時がスローモーションで流れる。

（大蔵、杉山…よくこの学校に来てくれた。良い刺激になったぜ）

石塚が地面を蹴ってリングに向かってジャンプをした。それに合わせて後ろから薫も跳ぶ。

――――――

――――

――

＊＊＊

『そ、その…俺たちで目指そうぜ！　イ…イ…あーやっぱだめだ！』

『インターハイ行こうよ！！』

『ええ、僕は最初からそのつもりでしたけど？』

本当はな…自身が無かったんだ。怖くて…恥ずかしくて言えなか

ったんだけなんだ。中学時代、補欠の俺らがインターハイなんて口が裂けても言えねぇ。

最初は冗談だと思ってた。でも3年間一緒に練習して気づかされたんだ。

目標にしていいんだって。それは全然恥ずかしいことじゃないんだって。

――――――

――――

――

＊＊＊

「うおぉおおお！」

石塚がトップスピードのままジャンプする。今まで何千、何万回と繰り返したシュートを繰り出す。

ディフェンスが追いつく前に…とにかく速く！

（今ならハッキリ言える）

――俺たちで目指そうぜ！　インターハイ！

石塚の手から離れたボールはリングに向かって勢い良く向かって

いく。

――届けっ！

――届けぇえええええっ！

精一杯手を伸ばして放ったシュート。しかし前回とは違い石塚はしっかりとボールの行方を目で追っていた。

パシィッ！！

『なっ！？』

会場が静まり返る。石塚の後方から手を伸ばした薫が、見事にボールをブロックしていたのだった。

ビィイイイイ！

試合の終了を告げるブザーが鳴り響いた。

試合が終わったというのに声援が全くと言っていいほど聞こえなかった。近江がゴール下で地面に膝をついていた石塚に歩み寄る。

「なんでだよ…」

「石塚君…」

「なんでだよぉおおお！くそぉおお！」

そう叫びながらコートを何度も手で叩いた。やがて、叩くのをやめ、石塚はそのまま顔を上げずに近江に向かって何度も繰り返した。

「ぐ…ひぐっ…本当に…すまねぇ…」

「顔を上げて僕らを見てください」

近江の言葉に石塚は顔をあげてメンバー達を見る。

2年の杉山は目に涙を浮かべて必死に泣くのをこらえている様子だったが、驚いたことに他の3年生は笑みを浮かべて誇らしげな様

子だった。

「ここにいる誰が欠けても今日のような試合は出来なかった。もちろん石塚君もね」

そう言って近江が手を差し出す。石塚は近江の手を握るとフラっとしつつも、立ち上がった。

「なんか不思議な気持ちなんだよねー。やることを全部やれたって言うか…。なんだか仲間が凄い誇らしい気分なんだよ。全く悲しくないかといえば嘘になるけどね」

佐藤が笑顔で石塚に向かってそんな風に語りかけた。

「さあ、行きましょう」

近江が振り返ってセンターサークルに向かって走り出した。その瞬間、今まで抑えていた分の声援が一気に沸いた。

『じょ・うっ・せい！じょ・うっ・せい！じょ・うっ・せい！』

『石塚ぁああ！薫からとった1本、かっこよかったぞおお！』

『いつでも応援してるからなああ！』

センターサークルで向き合った両チームの選手たちは礼を終えると共に握手をかわした。

「今日は『僕ら』の負けです。この大会絶対に優勝してくださいね」

「ああ、ありがとう」

近江と薫が握手をかわす。純也が近江に歩み寄り、声を掛ける。

「今日の借りはいつか絶対に返させてもらうからな！次は覚悟しとけよ！」

「次…か、ふっ…」

近江が差し出した手を、純也はガッチリと掴んだ。

（気がついていないようですね。アナタが第3ピリオドのラストに放ったシュートが試合を決めたことを）

そして近江と他のメンバーはベンチで待つ監督の元へと歩いていったのだった。

――予想以上に6番にやられた。敗因はただ1つ、それだけです。

その後、暫くの間、会場中がこの試合の話題で沸いていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7820a/

1 on 1

2011年5月28日00時20分発行